富士見遺跡群

向吹張遺跡
岩之下遺跡
田中遺跡
寄居遺跡

昭和60・61年度県営圃場整備事業富士見
地区に係わる埋蔵文化財発掘調査報告書

1987

群馬県富士見村教育委員会

序　文

県営圃場整備事業に伴い昭和58年度の田中田遺跡に始まった埋蔵文化財の発掘調査は、本年度で4年目を迎えました。富士見村には古墳等の遺跡地が多く、永い文化の歴史がきざまれていますが、この一連の調査で、村の古代史の一端が解き明かされようとしています。

本年度は米野地区の向吹張、横室地区の岩之下、田中、寄居の4遺跡を調査しました。向吹張遺跡は縄文時代の遺跡として古くから知られていましたが、縄文時代から中・近世までにわたる、住居跡を中心とする多種多様な遺構を調査し、多量の遺物が出土しました。岩之下遺跡では、古墳時代から平安時代までの集落跡調査をしました。又、田中遺跡と寄居遺跡は、ごく小範囲の調査でしたが、それぞれ縄文時代と中・近世に属する、類例の少ない、貴重な遺跡であることが判明しました。その他、本年度の調査の成果には大きなものがあると考えております。

しかし、この一連の発掘調査が、開発という〝破壊〟を前提としたものであるということにも意を留めなければなりません。祖先が営々として築き上げた歴史的遺産は、歴史の究明と未来への糧とするときにのみ触れることができるのだと考えるからです。そのような思いで今回の調査を振り返えれば、歴史のベールはさらに厚くなったとさえ感じられます。

厚い歴史の空白を埋めるためには、今後さらに長い時間と労力が必要になると思いますが、みなさまの深い理解と協力のもとに取り組むつもりでおります。

最後に、この調査にあたりご協力をいただきました関係機関をはじめ、地元地権者の方々、調査に従事された各位に対して深甚なる感謝の念を表して序といたします。

昭和62年3月

富士見村教育委員会
教育長　鈴　木　清　茂

例　言

1．本書は県営圃場整備事業に伴い事前調査を行った向吹張遺跡、岩之下遺跡、田中遺跡、寄居遺跡の発掘調査報告書である。

2．遺跡の所在地は以下のおとりである。

向吹張遺跡	群馬県勢多郡富士見村米野字向吹張			
	〃	〃	〃	米野字尺神
岩之下遺跡	〃	〃	〃	横室字岩之下
田中遺跡	〃	〃	〃	横室字田中
寄居遺跡	〃	〃	〃	横室字寄居

3．発掘調査は、前橋土地改良事務所の委託により、群馬県教育委員会文化財保護課の指導を得て、富士見村教育委員会が行った。

4．調査期間は以下のとおりである。

寄居遺跡	昭和61年4月13日～同年4月26日
向吹張遺跡	昭和60年10月1日～同年10月14日（A区）
	昭和61年5月6日～同年7月19日（B～F区）
田中遺跡	昭和61年7月22日～同年7月30日
岩之下遺跡	昭和61年8月25日～同年9月26日

なお、発掘調査に引き続いて昭和62年3月31日まで整理・報告書作成作業を行った。

5．調査組織は以下のとおりである。

事務担当	富士見村教育委員会	教育長	鈴木清茂（昭和61年7月～）林己未治（～昭和61年7月）
	〃	社会教育課長	長谷川功（昭和61年度）船津幸弘（昭和60年度）
	〃	係長	狩野　透
	〃	主事	樺沢元治（調査兼務）
調査担当	〃	臨時職員	羽鳥政彦

6．本書の編集・作成は羽鳥が行い、樺沢が補佐した。

7．発掘調査および本書の作成にあたり下記の方々より御指導、御協力を得た。記して感謝の意を表したい。

（敬称略　順不同）

井上唯雄　西田健彦　柿沼恵介　右島和夫　大江正行　木津博明
桜岡正信　関根慎二　岩崎泰一　都丸　肇　中束彰子　青木静江
鈴木紀子

8．特に群馬県埋蔵文化財調査事業団の大江正行氏には、寄居遺跡出土中近世陶磁器類の観察表作成にあたり、多大なる御助力を承ったので重ねて感謝の意を表したい。

9．発掘調査作業参加者は以下のとおりである。　（○印は整理作業参加者）

○阿久沢しず子　石関とく　和泉沢三重子　榎原美代子　大川隆子　大友み江子
大友満雄　大友みや子　大野とみえ　金沢いそ子　金沢とみ子　金沢房子
金子君代　狩野輝子　狩野光江　○佐藤満子　○下田恵美子　竹内茂子

○田村節子　　都丸キク　　○中島順子　　中島たい子　　中島なか　　萩原シン子
○平沢小夜子

10. 出土遺物、資料類は一括して富士見村教育委員会に保管してある。

11. 発掘調査にあたって多大なる協力をいただいた地元の方々、および関係機関の方々に感謝いたします。

凡　例

1．遺構図方位記号は座標北を表している。

2．挿図縮尺は以下のとおりであるが、竪穴住居址以外はスケールを付したので参照していただきたい。

遺構	竪穴住居址	1/80	遺物	縄文完形、半完形土器	1/5
	炉・カマド	1/40		縄文土器拓影	1/3
	掘立柱建物址	1/80、1/120		石器	1/4
	土坑	1/40		土師器、須恵器など	1/4
	溝址	1/80、1/160		石臼	1/6

3．巻末の遺物写真の縮尺は統一していない。

4．向吹張遺跡は調査時点では字尺神を別遺跡として扱ったが、本報告書では一括して向吹張遺跡として報告しており、遺構番号も向吹張遺跡として通し番号を付している。

5．遺構図のうち、出土遺物および出土位置ドットに付けられた数字は遺物実測図の番号と一致する。

6．第2図は建設省国土地理院発行の2万5千分の1の地形図（渋川）を一部加筆して使用した。

目　次

序　文
例言・凡例
I　発掘調査の概要 …… 1
1　調査の経緯…… 3
2　調査の経過…… 3
3　調査地の位置と富士見村の遺跡…… 4
4　基本土層…… 8

II　向吹張遺跡 …… 9
1　遺跡の立地……11
2　発掘調査の方法……11
3　基本土層……11
4　検出された遺構と遺物……13
(1)　概　　要……13
(2)　縄文時代　前期……13
中期……24
(3)　奈良・平安時代　竪穴住居址……42
掘立柱建物址……50
溝址……51
土坑……51
(4)　中・近世……56

III　岩之下遺跡 ……59
1　遺跡の立地……61
2　発掘調査の方法……61
3　基本土層……62
4　検出された遺構と遺物……63
(1)　概　　要……63
(2)　縄文時代　土坑……63
遺構外出土遺物……65
(3)　古墳時代……66
(4)　奈良・平安時代　竪穴住居址……76
掘立柱建物址……85
ピット・土坑……87

IV　田中遺跡……95
1　遺跡の立地……97
2　発掘調査の方法……97
3　基本土層……97
4　検出された遺構と遺物……98
(1)　概　　要……98
(2)　竪穴住居址……98
(3)　配石遺構 ……101
(4)　土　　坑 ……103
(5)　そ の 他 ……104

V　寄居遺跡 ……105
1　遺跡の立地 ……107
2　発掘調査の方法 ……107
3　基本土層 ……107
4　検出された遺構と遺物 ……109
(1)　概　　要 ……109
(2)　溝　　址 ……109
(3)　遺構外出土遺物 ……114

VI　まとめにかえて ……115

挿図目次

〈向吹張遺跡〉

1 富士見村の位置……6
2 調査地の位置と周辺の遺跡……6
3 基本土層……8
4 調査の範囲と遺跡周辺の現況図……11
5 遺構配置図……12
6 J 1号住居址実測図……13
7 J 1号住居址出土遺物実測図(1)……14
8 〃 (2)……15
9 J 6号住居址実測図……16
10 J 6号住居址出土遺物実測図(1)……17
11 〃 (2)……18
12 〃 (3)……19
13 〃 (4)……20
14 J 10号住居址実測図、炉実測図……21
15 J 10号住居址出土遺物実測図……22
16 J 2号土坑実測図……23
17 J 2号土坑出土遺物実測図……23
18 J 7号住居址実測図……24
19 J 7号住居址出土遺物実測図……24
20 J 12号住居址実測図、炉実測図……25
21 J 12号住居址出土遺物実測図……25
22 J 8 A・B号住居址実測図、炉実測図……26
23 J 8 A号住居址出土遺物実測図(1)……27
24 〃 (2)……28
25 〃 (3)……29
26 〃 (4)……30
27 〃 (5)……31
28 J 8 B号住居址出土遺物実測図(1)……33
29 〃 (2)……34
30 J 9号住居址実測図、炉実測図……35
31 J 9号住居址出土遺物実測図(1)……36
32 〃 (2)……37
33 J 11号住居址実測図、炉実測図……38
34 J 11号住居址出土遺物実測図(1)……38
35 〃 (2)……39
36 J 13号住居址実測図、炉実測図……39
37 J 13号住居址出土遺物実測図……39
38 縄文土坑実測図……40
39 縄文土坑出土遺物実測図……41
40 1号住居址実測図……42
41 1号住居址出土遺物実測図……42
42 2号住居址実測図……43
43 2号住居址出土遺物実測図……43
44 8号住居址実測図……43
45 8号住居址出土遺物実測図……44
46 11号住居址実測図……44
47 11号住居址出土遺物実測図……44
48 13号住居址実測図……45
49 13号住居址出土遺物実測図……45
50 17B・C号住居址実測図……45
51 17B・C号住居址出土遺物実測図……46
52 18号住居址実測図……47
53 18号住居址出土遺物実測図……47
54 19号住居址実測図……47
55 21号住居址実測図……48
56 21号住居址出土遺物実測図……48
57 22号住居址実測図……48
58 22号住居址出土遺物実測図……49
59 23・24号住居址実測図……49
60 23・24号住居址出土遺物実測図……49
61 1号掘立柱建物址実測図……50
62 1号掘立周辺ピット出土遺物拓影……50
63 2・3号溝実測図……51
64 H 1号土坑実測図……51
65 2・3号溝、H 1号土坑出土遺物実測図……51
66 4・5号溝断面実測図……56
67 5号溝C区北半部実測図……56
68 5号溝C区南半部実測図……57
69 E区遺構外出土遺物実測図……58

〈岩之下遺跡〉

70 調査の範囲と遺跡周辺の現況図……61
71 遺構配置図……62
72 J 1～J 3号土坑実測図……64
73 J 2・3号土坑出土遺物実測図……64
74 遺構外出土遺物実測図……65
75 3号住居址実測図……66
76 3号住居址出土遺物実測図……67
77 6号住居址実測図……67
78 6号住居址出土遺物実測図……67
79 9B号住居址実測図……68
80 9B号住居址出土遺物実測図……68
81 15号住居址実測図、カマド実測図……69
82 15号住居址出土遺物実測図……70
83 19B号住居址実測図……71
84 19B号住居址出土遺物実測図……71
85 25号住居址実測図……72
86 25号住居址出土遺物実測図……72
87 1・2号住居址実測図……77
88 1・2号住居址出土遺物実測図……77
89 4号住居址実測図……78
90 4号住居址出土遺物実測図……78
91 5号住居址実測図……79
92 5号住居址出土遺物実測図……79
93 8号住居址実測図……79
94 8号住居址出土遺物実測図……80
95 9A号住居址実測図……80
96 9A号住居址出土遺物実測図……81
97 12号住居址実測図……82
98 12号住居址出土遺物実測図……82
99 14号住居址実測図……82
100 14号住居址出土遺物実測図……83
101 17号住居址実測図……83
102 17号住居址出土遺物実測図……84
103 19A号住居址実測図……84
104 19A号住居址出土遺物実測図……84
105 1号掘立柱建物址実測図……85
106 1号掘立柱建物址出土遺物実測図……86
107 2号掘立柱建物址実測図……86
108 土坑、ピット実測図……87
109 土坑、ピット、遺構外出土遺物実測図……88

〈田中遺跡〉

110 調査の範囲と遺跡周辺の現況図……97
111 遺構配置図……98
112 1号住居址実測図……98
113 1号住居址出土遺物実測図……99
114 2号住居址実測図……100
115 2号住居址出土遺物実測図(1)……100
116 〃 (2)……101
117 配石遺構実測図……101
118 1号配石遺構実測図……102
119 配石遺構周辺出土遺物実測図(1)……102
120 〃 (2)……103
121 土坑実測図……103
122 1号土坑出土遺物実測図……104
123 1号溝実測図……104

〈寄居遺跡〉

124 調査の範囲と遺跡周辺の現況図……107
125 遺構配置図……107
126 1，2A・B号溝実測図……108
127 1号溝出土遺物実測図……109
128 2A号溝出土遺物実測図……110
129 出土遺構不明遺物実測図……110
130 1，2A号溝出土砥石，石臼実測図……113
131 3号溝実測図……114
132 遺構外出土縄文土器実測図……114

〈まとめにかえて〉

133 向吹張遺跡遺構変遷図……115
134 岩之下遺跡遺構変遷図……116

写真図版

〈向吹張遺跡〉

PL1 1 A区全景
2 B区全景
3 B区北半部
4 C・D区全景
5 E区全景
6 F区全景
7 F区南半部（縄文時代遺構群）

PL2 1 J1号住居址全景
2 〃 遺物出土状態
3 J6号住居址全景
4 〃 礫出土状態
5 J10号住居址全景
6 〃 炉
7 J7号住居址全景
8 J12号住居址全景

PL3 1 J8A・B号住居址全景
2 J9号住居址全景
3 J8A・B、J9号住居址遺物出土状態
4 J8A号住居址 〃
5 〃 〃
6 〃 〃
7 〃 炉
8 J9号住居址 炉

PL4 1 J11号住居址
2 〃 炉
3 J13号住居址炉
4 〃 土層断面
5 J2号土坑
6 J10号土坑
7 J5号土坑
8 J11号土坑

PL5 1 1号住居址
2 2号住居址
3 8号住居址
4 11号住居址
5 13号住居址
6 11号住居址遺物近接
7 14号住居址
8 15号住居址

PL6 1 17C号住居址
2 〃 遺物出土状態
3 17B号住居址
4 〃 遺物出土状態
5 18号住居址
6 19号住居址
7 21号住居址
8 〃 遺物出土状態

PL7 1 22号住居址
2 〃 カマド
3 〃 遺物出土状態
4 23号住居址
5 24号住居址
6 1号掘立柱建物址
7 1号土坑
8 B区ピット

PL8 1 2・3号溝
2 3号溝円礫出土状態
3 4号溝
4 5号溝覆土上層ローム堆積状態
5 〃 北トレンチ土層堆積状態
6 〃 南トレンチ 〃
7 〃 北トレンチ 〃
8 〃 南トレンチ 〃

PL9 J6、J10号住居址出土遺物

PL10 J10、J7、J12、J8A号住居址出土遺物

PL11 J8A・B、J9号住居址出土遺物

PL12 J11住、J12住、J2土、J5土、J10土出土遺物及び遺構出土石器

PL13 奈良・平安時代、中・近世出土遺物

〈岩之下遺跡〉

PL14　1　北区西半部
　　2　中区全景

PL15　1　南区全景
　　2　J 2号土坑
　　3　J 3号土坑
　　4　3号住居址
　　5　〃　遺物出土状態

PL16　1　6号住居址
　　2　9B号住居址
　　3　15号住居址
　　4　9B号住居址貯蔵穴
　　5　15号住居址カマド
　　6　〃　〃
　　7　19B号住居址
　　8　〃　貯蔵穴

PL17　1　21号住居址
　　2　25号住居址
　　3　1・2号住居址
　　4　1号住居址カマド
　　5　4号住居址
　　6　〃　遺物出土状態
　　7　5号住居址
　　8　〃　遺物出土状態

PL18　1　8号住居址
　　2　〃　遺物近接
　　3　〃　遺物出土状態
　　4　〃　〃
　　5　9A号住居址
　　6　〃　遺物近接
　　7　10A号住居址
　　8　11・12号住居址

PL19　1　14号住居址
　　2　〃　カマド
　　3　16号住居址
　　4　17号住居址
　　5　19A号住居址
　　6　20号住居址
　　7　22号住居址
　　8　23号住居址

PL20　1　1号掘立柱建物址
　　2　2号掘立柱建物址

PL21　1　1号掘立柱穴掘方
　　2　〃　P_9、P_{12}
　　3　〃　P_{17}遺物出土状態
　　4　土坑（P62～P64）
　　5　ピット（P65）遺物出土状態
　　6　〃　（P67）　〃
　　7　北区東半部（隠れ谷）土層
　　8　作業風景

PL22　3、9B、15号住居址出土遺物

PL23　15、19B、1・2号住居址出土遺物

PL24　4・5・8号住居址出土遺物

PL25　9、14、16、19A号住居址、ピット、遺構外出土遺物

〈田中遺跡〉

PL26　1　田中遺跡全景
　　2　1号住居址
　　3　2号住居址
　　4　〃　遺物出土状態
　　5　1号配石遺構
　　6　6号配石遺構
　　7　2号土坑（集石）検出状況
　　8　1号土坑セクション

PL27　田中遺跡出土遺物

〈寄居遺跡〉

PL28　1　寄居遺跡全景
　　2　1号溝
　　3　〃　石積
　　4　〃　石臼出土状況
　　5　2A・B号溝
　　6　〃　石積
　　7　〃　〃
　　8　3号溝

PL29　1　1号溝出土土器
　　2　〃
　　3　2A号溝出土土器
　　4　〃
　　5　1号溝出土石臼（上臼上面）
　　6　〃　（上臼下面）
　　7　1・2A号溝出土石臼（下臼上面）
　　8　〃　（下臼下面）

Ⅰ　発掘調査の概要

1　調査の経緯

ここに報告する富士見遺跡群向吹張遺跡、岩之下遺跡、田中遺跡、寄居遺跡は、昭和58年から開始された県営圃場整備事業の第３・４年次事業の実施に伴なって発掘調査が行なわれた遺跡である。

昭和60年度の整備事業では、面的な工事は予定されていなかったが、61年度に事業の予定される地区の試掘調査及び先行調査、58・59年度の調査の整理・報告書作成作業を行なうこととなった。

昭和61年度の圃場整備事業は、58・59年度に引き続き横室地区、米野地区で予定されていた。試掘調査に先立ち遺物の散布調査を行なったところ、群馬県遺跡台帳記載の米野字尺神及び隣接する字向吹張で多量の遺物散布がみられた。

米野地区で予定されていた整備事業は、畑の構造改善であり、切り土がないことから幹線道路部分について試掘調査を行なった。その結果、字尺神、字向吹張で縄文時代、奈良・平安時代と思われる多数の遺構、遺物が検出された為、本調査を行なうこととなった。

昭和61年の初頭に前橋土地改良事務所から横室地区で整備事業の追加発注を行なう旨の連絡があり、関係者間で協議を行なった。事業対象地区内で遺跡台帳に記載されていたのは字田中だけであったが、地区内全域の遺物散布調査を行ない、工事計画と照らし合わせてさらに試堀調査を行なった。その結果、縄文時代の遺構が検出された字田中の幹線道路予定地と溝跡が検出され、寄居関連の遺構が予想される字寄居の道路部分、奈良・平安時代の遺構が検出された字岩之下の切り土部分について本調査を行なうこととなった。

2　調査の経過

昭和60年度の調査は10月１日から14日まで行なった。調査は予算の関係で向吹張遺跡の北端部（Ａ区）だけとし、古墳時代終末から奈良時代の竪穴住居址、及び平安時代と思われる溝址を調査した。

昭和61年度の調査は寄居遺跡から開始した。試掘調査に引き続いて表土剝ぎを行ない、４月13日から作業員を投入した。調査面積が小さく、遺構も溝址が４条だけだったこともあり、４月26日には調査を終えた。

寄居遺跡に続いて米野地区の向吹張遺跡の調査を行なった。表土剝ぎに続いて５月６日から作業員を動員し、調査区北側のＢ区から順次南へと調査を進めていった。本遺跡は道路部分の狭長な区域であり、排土用地が余り確保できなかった為に、非常に効率の悪い調査であった。又、調査後半では梅雨にたたられ、予定よりも大幅に遅れてしまったが、７月19日に調査を終了した。

向吹張遺跡の調査終了後、横室の岩之下遺跡へプレハブを移動し、器材の移送を行なった。

田中遺跡の調査は７月22日に開始した。連日猛暑が続く悪条件下の調査であったが、縄文時代を主体とする竪穴住居址、土坑、ピット、配石遺構等を検出・調査し、７月30日に終了した。

岩之下遺跡の調査は、調査地である畑に作物があった関係で８月18日より開始した。表土剝ぎに続いて作業員を本格的に投入できたのは25日からで、残暑の中調査を行なった。９月も雨が多く、調査の進行も捗くはなかったが、古墳時代から奈良、平安時代の竪穴住居址を主体とする多数の遺構、遺物の調査を行ない、９月26日には昭和61年度の発掘調査を全て終了した。

3　調査地の位置と富士見村の遺跡

富士見村は、前橋市の北方に接し、赤城山の南西部に位置している。標高は南端の約150mから赤城山頂の1828mまでで、標高450m前後の傾斜変換点を境として北東部の山岳地と南西部の裾野部分とに２分される。この裾野部分は、赤城山中腹から南西下する中小の河川により縦に分割され、丘陵性の狭長な台地を形成している。本年度の調査地は、本村の西南端にあり隣接する２つの台地上に位置している。

富士見村で本格的な発掘調査が行なわれるようになったのは昭和58年からであるが、それ以前にも個人的な遺物採集は各地で行なわれていた。又、富士見村誌作成の際には群大史学研究室による遺物の散布調査、古墳調査が行なわれ、群馬県遺跡台帳作成の時にも遺物の散布調査等が行なわれている。ここでは、これらの資料とこれまでの発掘調査をもとに、富士見村の遺跡について概観してみたい。

〈旧石器時代〉

現在までに調査された遺跡は、昭和59年に群馬県立歴史博物館によって試掘調査の行なわれた龍の口遺跡だけであり、遺物の性格から採集報告もされていない。しかし、隣接する北橘村、宮城村、前橋市などでも調査例が報告されており、富士見村にもさらに多くの遺跡が存在していると思われる。

〈縄文時代〉

富士見村で最も多くの遺跡地が報告されている時代であり、居住可能と思われる地域の多くで土器・石器等の遺物が採集されている。富士見村の東半部を流れる白川流域を除いて、前橋市と接する横室、原之郷、時沢など標高150m前後の地域から、傾斜変換点である標高400～450mの地域まで濃密に分布している。特に赤城山大洞でも早期の土器が採集されており着目される。

時期的にみると、赤城山南麓の一般的な傾向と同様に、前期と中期に遺跡数の最大値をもち、早期、後期晩期には極端に減少するようである。

これまでの調査では多寡の差はあるものの何れの遺跡でも該期の遺構、遺物が検出されている。

〈弥生時代〉

縄文時代の後、晩期と同様に遺跡数の少ない時代で、３カ所が報告されているだけである。しかし、58年に発掘調査を行なった田中田遺跡では、調査以前には全く予想されていなかったにもかかわらず、中期前半及び後期後半の遺物が多数出土しており、他にも遺跡の存在する可能性が高い。なお、本年度調査の向吹張遺跡（Ｆ区一宇尺神）は該期包蔵地とされていたが、調査では１点の土器片も出土していない。

〈古墳時代〉

上毛古墳綜覧記載の古墳は29基であるが、村誌によると約90基の存在が報告されている。現在ではこれらのうちの多くが既に平夷されてしまっているが、横室地区では比較的多く残っており、10基程が数えられる。

古墳の分布は白川沿いの時沢、小沢、西南に位置する横室、原之郷、北橘村に接する米野、山口の各地区に集中している。標高は150～250mの範囲に多いが、米野から山口にかけては約400m付近にまで分布してい

たようである。

遺物の散布状況は村誌によると時沢字清水、引田字高橋、横室字沢口の3カ所だけであり、時期不明の土師器出土とされる地域を含めても余り多くない。しかし、古墳の分布状況から考えると、さらに多くの集落址等の遺跡があると思われる。

これまでの調査では、横室の田中田遺跡、米野の窪谷戸遺跡があり、本年度調査では横室岩之下遺跡、米野向吹張遺跡で集落跡等が調査されている。

〈奈良、平安時代〉

村誌によると土師器の新式を出土する包蔵地として11カ所が記載されており、時期不明の土師器出土地の多くも該期に属すると思われる。両者合わせると25カ所となり縄文時代に次いで多い。

遺物の散布は標高150～450mまで比較的密に分布しており、縄文時代(前、中期)に近い状況を呈している。又、赤城山の地蔵岳南面（標高1370m）にも散布が認められており、興味深い。

本村の南端に位置する時沢は、『和名抄』にみる時沢郷の名残りとされており、周辺地域を含めて広くこの時代に農村集落が形成されていたとみられる。

これまでの調査では昭和59年度調査の米野窪谷戸遺跡、見眼遺跡で集落跡が検出されており、約70軒の竪穴住居址、溝址等が調査された。また本年度調査には米野の向吹張遺跡、横室の岩之下遺跡で、各20軒前後の集落跡を調査し、掘立柱建物址・溝址等も検出されている。

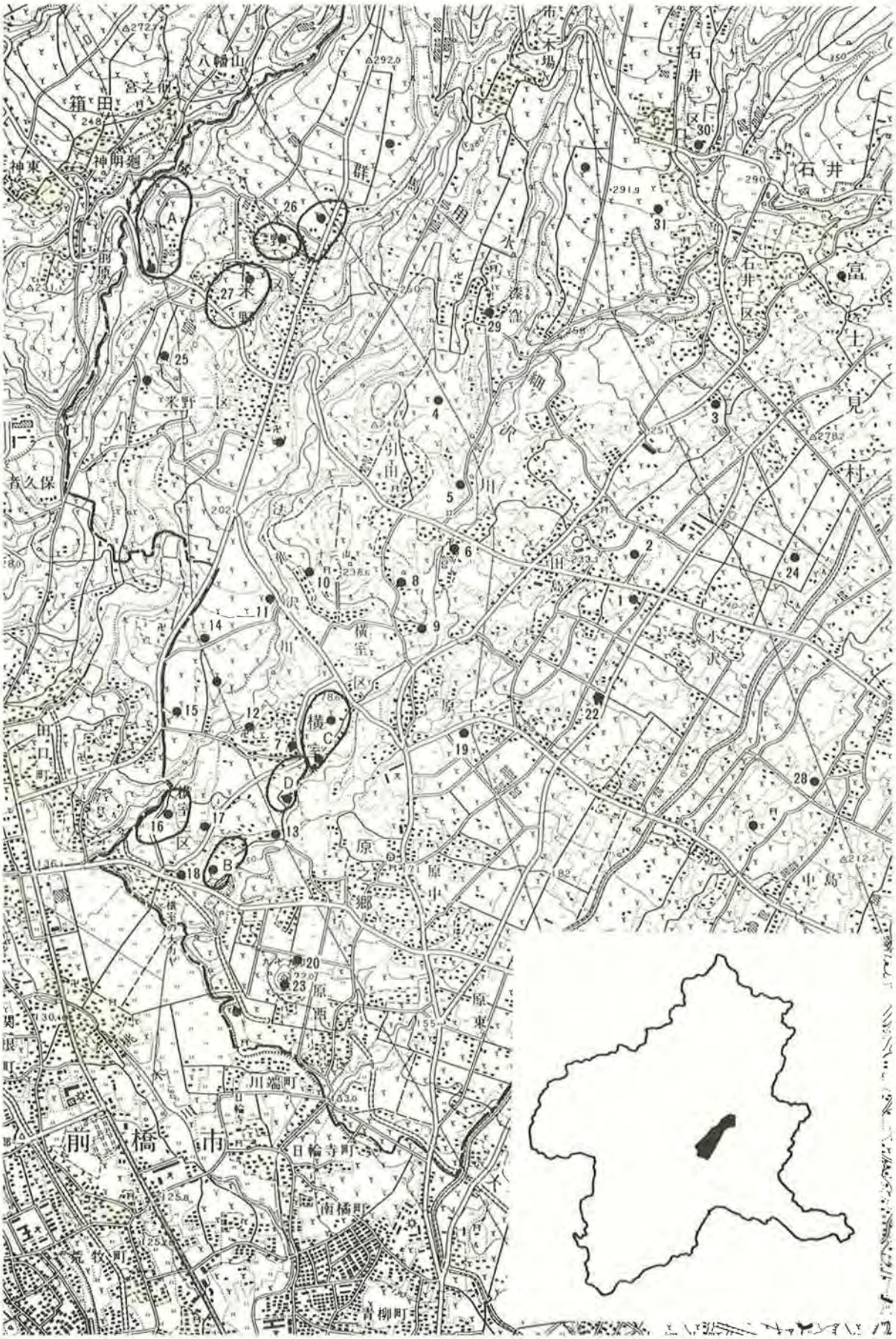
〈中、近世〉

群馬県遺跡台帳に記載された城館址は田島、金山、丸山、漆窪、岡の5カ所であるが、村内にはその他にも何カ所かの言い伝えがあり、明瞭な遺物散布がないため定かではないが、他にも該期の遺跡が多数存在するものと思われる。

これまでの調査では59年度の窪谷戸遺跡で溝（堀）址、竪穴住居状遺構、見眼遺跡で道路状遺構が調査され本年度調査では向吹張遺跡で、城館址に関連すると思われる溝（堀）址、屋敷巡りの溝（堀）址、横室の寄居遺跡で石積の溝址を調査している。

調査地周辺の遺跡一覧表（富士見村内）

番号	遺跡名	所在地	時代	種別	備考	群馬県遺跡台帳No
A	向吹張遺跡	富士見村米野字向吹張字尺神	縄文、古墳、奈良、平安、中近世	集落跡など	本報告書	2154
B	岩之下遺跡	〃　横室字岩之下	縄文、古墳、奈良、平安	集落跡など	〃	
C	田中遺跡	〃　横室字田中	縄文	住居址など	〃	2141
D	寄居遺跡	〃　横室字寄居	縄文、中近世	館址など	〃	
1	(鉄砲林)	〃　田島字鉄砲林	古墳	包蔵地		
2	(十二)	〃　田島字十二	縄文	包蔵地	散布多量	2118
3	(切蓋)	〃　田島字切蓋	縄文、古墳	包蔵地	散布やや多量、縄文中期、土師一新	2119



第1・2図　富士見村の位置、調査地の位置と周辺の遺跡

番号	遺　跡　名	所　在　地	時　代	種　別	備　考	群馬県遺跡台帳No.
4	(宿原)	富士見村引田字宿原その他	縄文、古墳	包蔵地	広範囲に散布多量縄文前、中、後期土師一新	2123
5	(三反田)	〃　引田字三反田	古墳	包蔵地		2124
6	(高橋)	〃　引田字高橋	古墳	包蔵地	縄文中期、土師一古	2126
7	横室古墳	〃　横室字中	古墳	墳墓	上毛古墳綜覧13号	2127
8	森山古墳	〃　横室字道上	古墳	墳墓	〃　6号	2128
9	道上古墳	〃　横室字道上	古墳	墳墓		2129
10	初室古墳	〃　横室字初室	古墳	墳墓	上毛古墳綜覧7号、群大調査　円墳	2130
11	庄司原古墳	〃　横室字上庄司原	古墳	墳墓	〃　9号　円墳	2131
12	陣場古墳	〃　横室字陣場	古墳	墳墓	〃　12号　円墳	2133
13	荒井古墳	〃　横室字寄居	古墳	墳墓	〃　14号　円墳	2134
14	(庄司原)	〃　横室字上庄司原 下庄司原	縄文、弥生、古墳	包蔵地	広範囲に散布多量、縄文中期、古墳群	2136
15	(陣場)	〃　横室字陣場	縄文	包蔵地	広範囲に散布多量、縄文前、中、後期	2137
16	田中田遺跡	〃　横室字田中田	縄文、古墳	集落跡など	昭和58年度調査、報告書既刊	
17	(田中田)	〃　横室字田中田	古墳	包蔵地	小範囲に散布少量	2139
18	(東沢口)	〃				
19	(鎌塚)	〃　原之郷字鎌塚	古墳	包蔵地	散布少量　土師一新	2143
20	(山ノ後)	〃　原之郷字山ノ後	弥生	包蔵地	小範囲に散布やや多量、土師一新	2147
21	金山城跡	〃　原之郷字岡	室町	城館跡		2149
22	鎌塚古墳	〃　原之郷字塚之上	古墳	墳墓	上毛古墳綜覧15号	2150
23	九十九山古墳	〃　原之郷	古墳	墳墓	〃　16号、群大調査 前方後円墳	2151
24	八幡古墳	〃　小沢字八幡	古墳	墳墓	円墳	
25	丸山城跡	〃　米野字丸山	室町	城館跡 (包蔵地)	散布やや多量　縄文後期？弥生	2153
26	見眼遺跡	〃　米野字見眼	縄文、奈良、平安、中近世	集落跡など	昭和59年度調査、報告書既刊	2155
27	窪谷戸遺跡	〃　米野字窪谷戸	縄文、(古墳)奈良、平安、中近世	集落跡など	〃	2156
28	(甚太夫)	〃　時沢字甚太夫	縄文	包蔵地	小範囲、散布多量　縄文中期	2170
29	漆窪城跡	〃　漆窪字上城	戦国	城館跡		2181
30	岡城跡	〃　石井字岡	室町	城館跡		2184
31	(下小原目)	〃　石井字下小原目	縄文	包蔵地	散布地　縄文中期	2196

註：群馬県遺跡台帳Ⅰ（東毛編）及び富士見村誌をもとに作成した。備考欄の時代細別は村誌による。
既調査地については調査結果に基づく。
包蔵地の遺跡名は便宜的に小字名をあてた。

4　基　本　土　層

各遺跡の土層堆積は、遺跡により、あるいは同一遺跡内でも耕作等による削平により異なった様相をみせるが、富士見村という限られた地域内における基本的な土層の堆積状況は大差がないと思われる。

ここでは、岩之下遺跡と向吹張遺跡で観察できた土層をもとに富士見村の基本的な土層として説明してみたい。

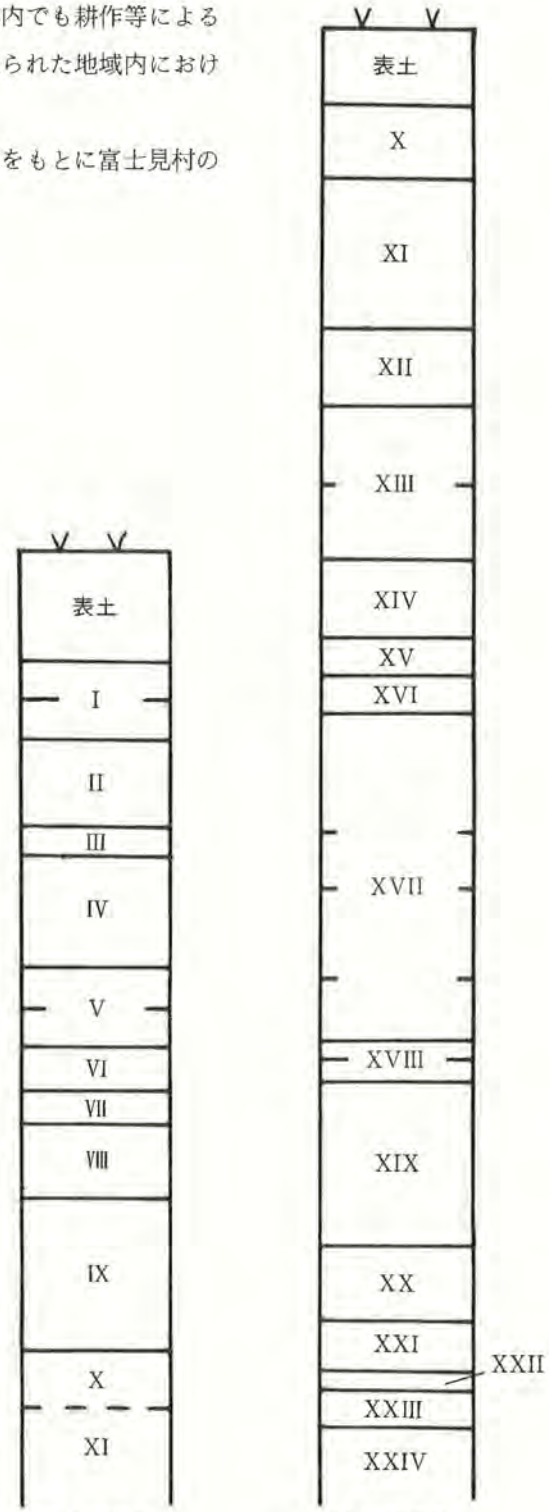
沖積土層―岩之下遺跡北区東半部の隠れ谷。

この隠れ谷の両端には奈良・平安時代以降と思われる削平の痕跡が認められ、自然な堆積状態とは言えないが、軽石、火山灰等が比較的良好な状態で堆積している。

洪積土層―向吹張遺跡Ｆ区とＣ・Ｄ区溝壁面。

Ｆ区はほぼ中位に土層観察用トレンチを設定した。Ｂ・Ｃ・Ｄ区は５号溝の壁面観察による。

表土	現耕作土。軽石を含む暗褐色土
Ⅰa	灰褐色土。鉄錆粒、FP、C小粒含む。
b	〃　aより黒味を増し、夾雑物多い。
Ⅱ	砂質黒褐色土。B軽石多、FP・C少量。
Ⅲ	B軽石純層。灰と軽石に分層可能。
Ⅳ	暗褐色（上層）～褐灰色土（下層）
Ⅴ	黒褐色土。FP、C、橙色粒・小プロ（FA?）各多量。
Ⅵ	暗褐色土。Ⅴに近いがFAを多量に含み黄色味が強い。（分層可）
Ⅶ	FA火山灰層。白色軽石含む。
Ⅷ	黒色土。C軽石を多量に含む。
Ⅸ	黒褐色土。夾雑物少なくきめ細か。黒味強い。
Ⅹ	褐色土。部分的に斑状を呈する。漸移層。
Ⅺ	明褐色土。ローム層
Ⅻ	S、P軽石層
XIII	明黄褐色ローム層。パミス含む。部分的に層状を呈す。
XIV	B、P軽石層。（純層）
XV	浅黄色ローム層。夾雑物少ない。
XVI	B、P軽石層。小粒で灰色灰を多量に含む。炭化物を多量に混入する。
XVII	浅黄橙色ローム層。軽石（白色）、黄色パミス含む。下層程黒味を増し分層可能。
XVIII	上：灰色軽石層 下：黄色粘質土層　部分的に堆積する。
XIX	浅黄橙ロームに赤味の強い橙色粒を多量に含み、全体的には橙色を呈する。粘性強く、灰色軽石少量含む。
XX	黄橙色ローム層。きめ細かく粘性強い。白色粒含む。
XXI	軽石層。粒子の粗細で６層に分層でき、互層をなす。
XXII	黄橙色土。粒子粗い。灰層か？
XXIII	浅黄色ローム。きめ細かくしまりある。
XXIV	軽石層。よごれた白色。八崎層か。



第３図　基本土層

II 向吹張遺跡

1　遺跡の立地

向吹張遺跡は、橘川と法華沢川に挟まれた丘陵性台地上に位置する。この台地は南方向に向かって比較的平坦な緩傾斜面となっているが、標高250m付近から微地形を形成し始める。東端の旧米野宿の乗る尾根状台地、59年度に調査を行なった窪谷戸遺跡の乗る台地、そして向吹張遺跡の位置する西端の舌状台地である。

向吹張遺跡の位置する舌状台地の北西は橘川に向かって急崖となっているが、東南側は沢状の低地となっており、台地の西寄りから比較的ゆるやかな斜面が続いている。南側は急激に橘川へと落ち込んでいる。

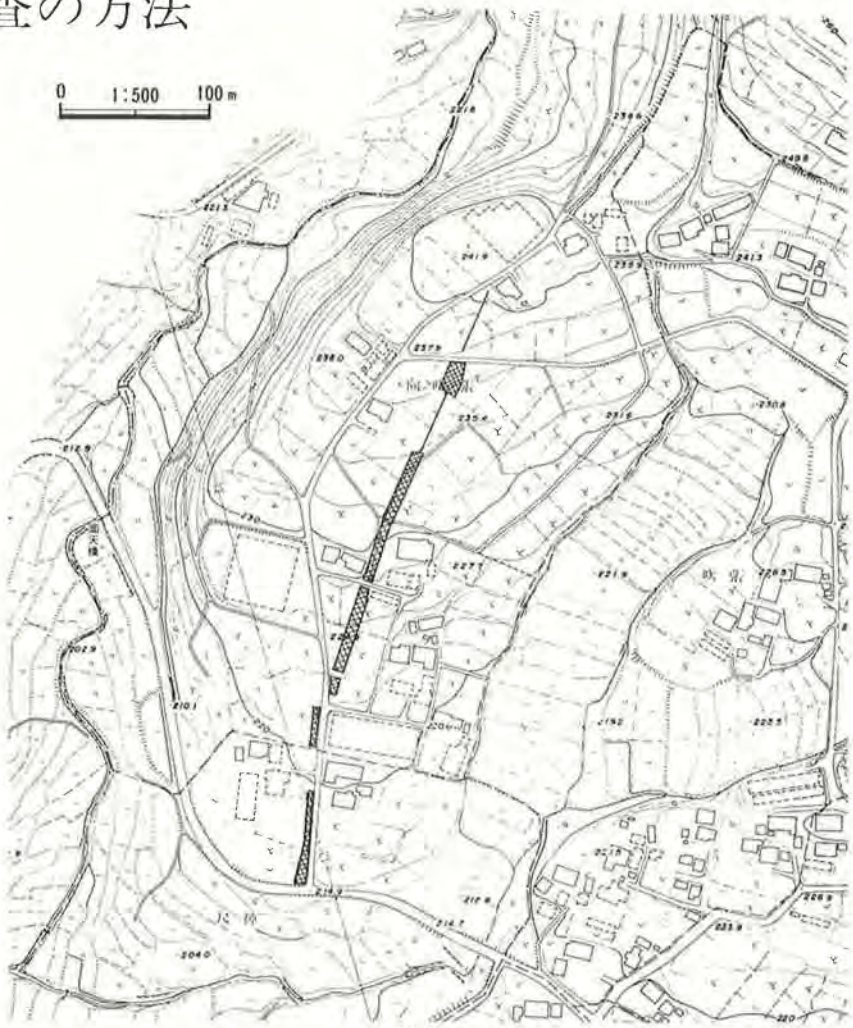
遺跡の占地状況は時代によってそれぞれ異なるが、全体的には台地のほぼ全面に広がっていると思われる。

標高は215～240mであり、調査地の現況は概ね桑園となっている。沢状低地は水田として利用されている。

2　発掘調査の方法

調査地は狭長な道路敷の範囲であり、現用道路等によって分断されている。そこで分断された各区域を中調査区として、北からA～F区と呼称した。

調査用杭の設定は、60年度調査のA区では調査区北西側の工事用杭を基準として5mメッシュを組み設定した。B～F区については工事用杭が重機によって動いたこと、又、調査区域が狭長で曲折していること等から、ほぼB～D区の路線に沿うよう任意に縦軸を設定した。

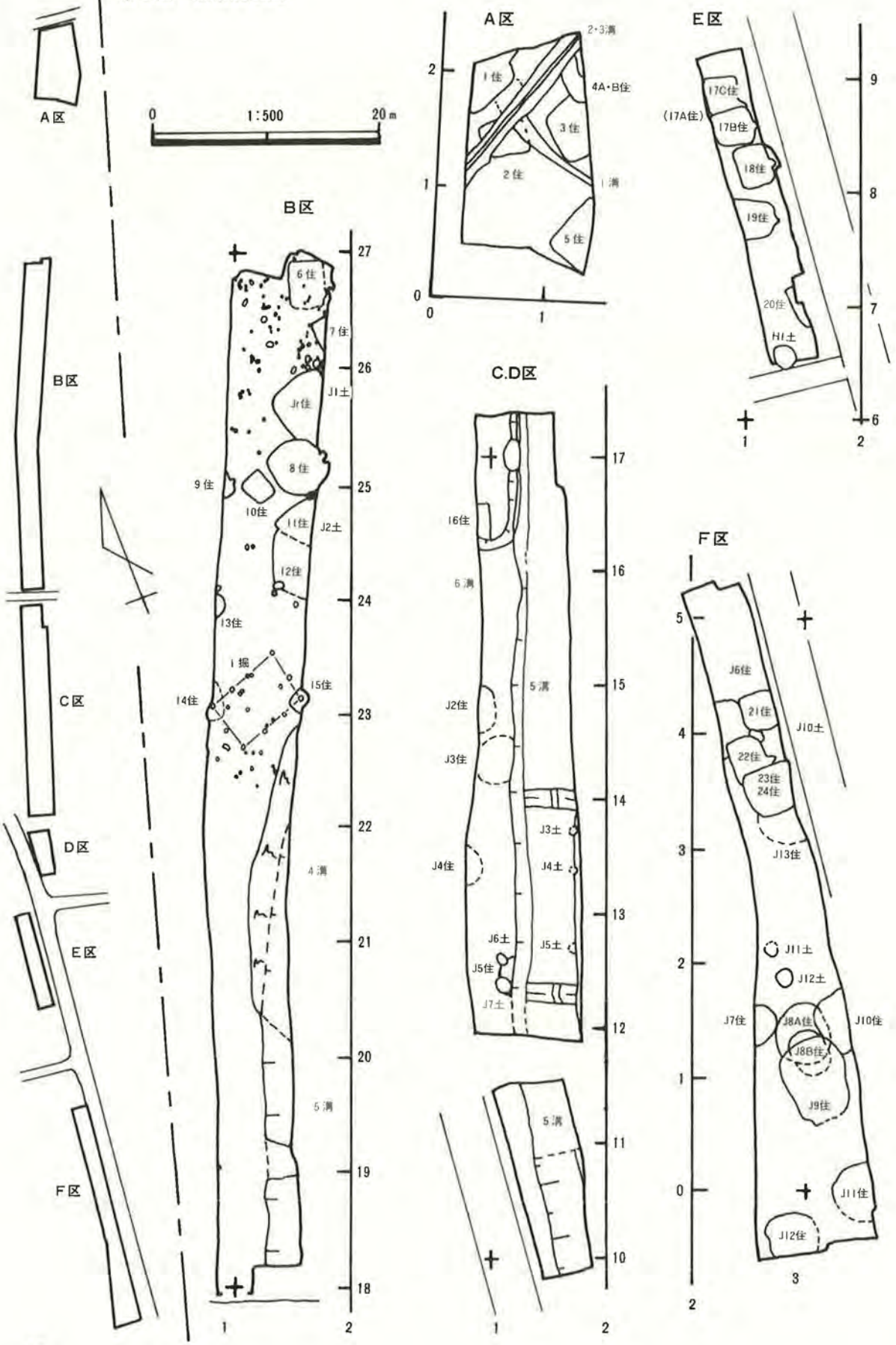


第4図　調査の範囲と遺跡周辺の現況図

3　基本土層

向吹張遺跡の洪積層の基本土層はⅠ－4で説明したが、各調査区ともほぼ同様と思われる。沖積層については、台地の為に余り発達しておらず、又、後世の耕作等により削平されている。表層直下にローム層が現れる地区が多い。しかし、E区では軽石混じりの黒褐色土(分層可)が表土ローム間に1m近く堆積している。

第５図　遺構配置図


A区
B区
C区
D区
E区
F区
0
1:500
20m
A区
2・3溝
1住
4A・B住
3住
2住
1溝
5住
B区
6住
7住
J1土
Jr住
8住
9住
10住
11住
J2土
12住
13住
1掘
14住
15住
4溝
5溝
C.D区
16住
6溝
5溝
J2住
J3住
J3土
J4住
J4土
J6土
J5土
J5住
J7土
5溝
E区
17C住
(17A住)
17B住
18住
19住
20住
H1土
F区
J6住
21住
J10土
22住
23住
24住
J13住
J11土
J12土
J7住
J8A住
J10住
J8B住
J9住
J11住
J12住

4　検出された遺構と遺物

(1) 概　　要

60・61年度を通じて検出された遺構、遺物は縄文時代から中近世にわたる。

縄文時代では、前期の竪穴住居址３軒、土坑２基がＢ区及びＦ区から検出された。中期は、竪穴住居址10軒と土坑８基がＣ区とＦ区に検出されている。遺物は、各遺構内出土のものの他にも各区から出土しているが、前期は量的には余り多くないが全調査区から出土している。中期はＣ区以南に出土しているが、遺構の検出されたＣ区・Ｆ区に集中している。(土坑の時期は推定を含む)

古墳時代終末～平安時代では、竪穴住居址27軒、掘立柱建物址１棟、溝３条、土坑・ピット多数を調査した。調査区域外への拡張調査を行なっていないことと、遺構、遺物の残存状態が悪い為、遺構の時期は不明なものも多いが、占地状況については以下の諸点があげられる。古墳時代の遺構、遺物はＡ区だけである。奈良時代はＡ・Ｂ・Ｅ・Ｆのほぼ調査区の全域から検出されている。平安時代前半も同様の占地状況を示している。平安時代後半と明確に判断される住居は検出されていないが、Ｂ区のピット中から羽釜が出土している。その他の遺構の時期は、性格上明確ではないが、溝がＡ区、掘立柱建物及び多数のピットがＢ区、土坑がＢ・Ｅ区から検出されている。なお、遺物はＣ・Ｄ区の溝中からも多量に出土している。

中・近世の遺構は、溝であり、Ｂ区南半からＤ区までの調査区の過半部を占めて検出された。遺構の調査範囲内からは該期の遺物があまり検出されていないが、中・近世のものと思われる。なお、溝の西側にあたるＥ区の遺構外から石臼、内耳土器等が出土している。

(2) 縄　文　時　代

―― 前　　期 ――

Ｊ１号住居址

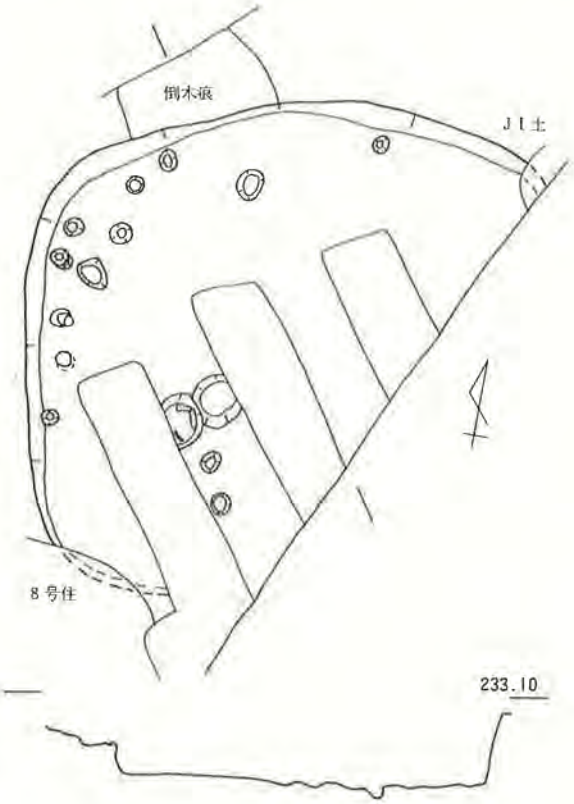
Ｂ区北寄りに位置する。縄文時代のＪ１号土坑、倒木痕と重複し、何れも住居より新しい。南東部は調査区域外であり、調査範囲内も後世の住居・ピット・耕作等の攪乱を受けている。

形状は判然としないが、隅丸長方形状を呈する可能性がある。但し、北壁は外側へ曲折している。

壁は比較的直に立ち上がっている。床は炉の周辺、特に北側は硬いが、他は軟弱である。

炉は西壁寄りに重複して２基検出された。何れも径50～60cmの楕円形を呈し、壁が焼土化していた。西側の炉は棒状の河原石２個を底部の東縁に据え、逆側に深鉢の大破片を埋込んで囲っていた。

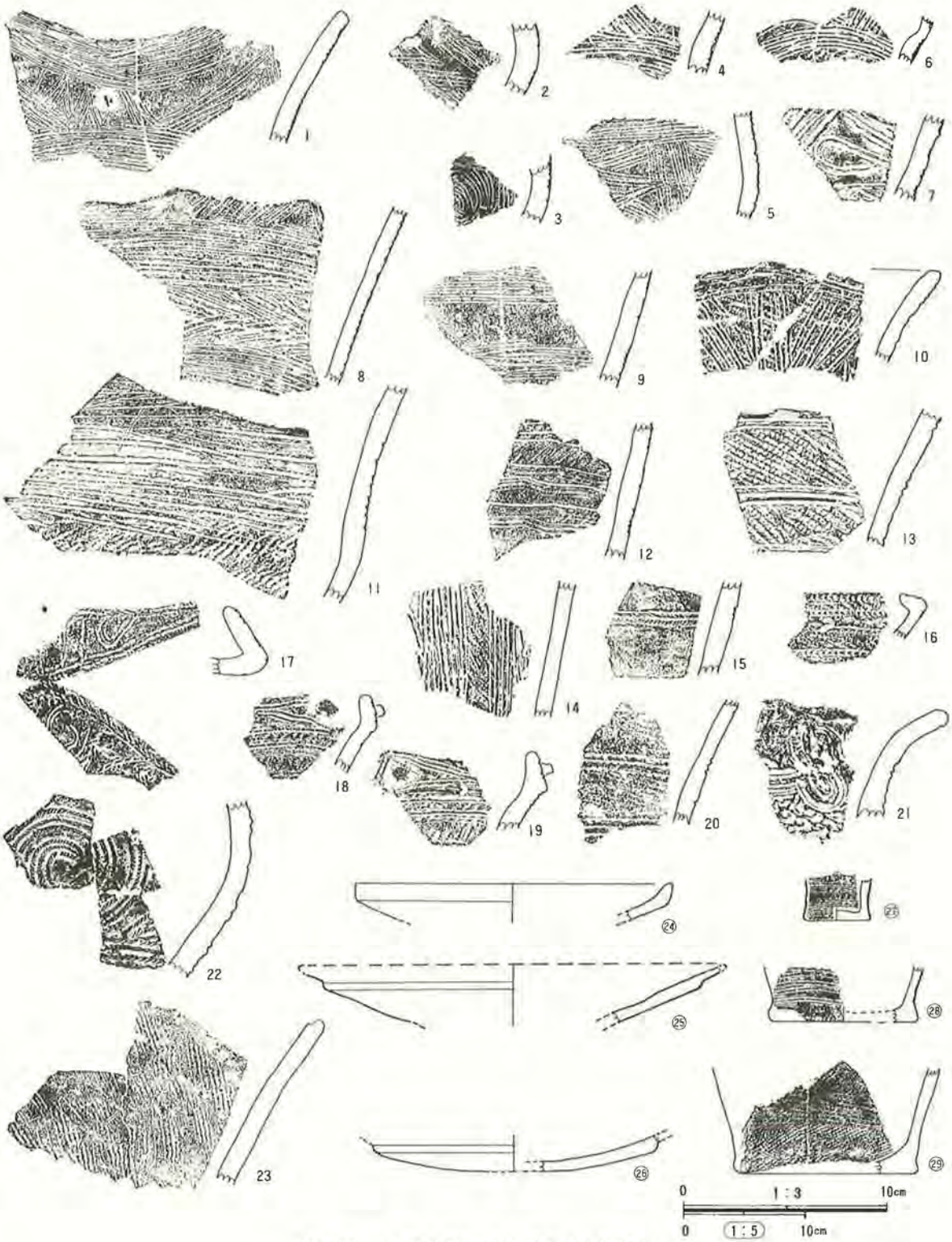
径15～25cmのピットが壁沿いに多数検出さ



第６図　Ｊ１号住居址実測図

れている。北壁東半部や西壁南端は判然としなかったが、壁柱穴の可能性がある。

遺物は大半が覆土中からの出土である。土器はほとんど破片で出土しており、全体の器形が判るものは無い。復元実測した浅鉢は、現代の耕作溝中から出土している。石器は北壁直下の覆土下層から磨製石斧転用の凹石、覆土から打製石斧、石匙等出土した。覆土中～下層から多量の炭化材が出土している。

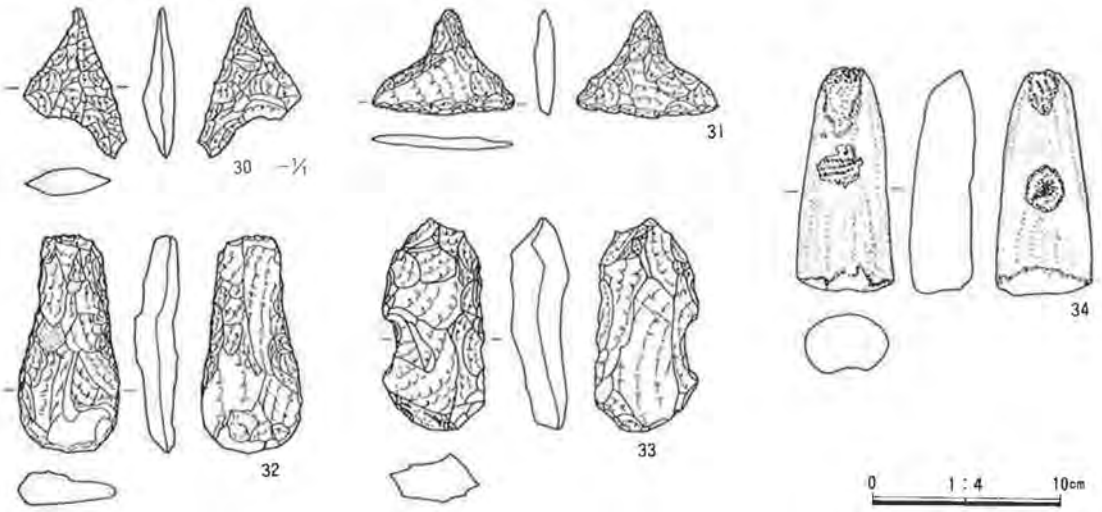


第７図　Ｊ１号住居址出土遺物実測図（１）

出土遺物

1～8は半截竹管による平行沈線で施文されている。1は4単位の波状口縁を呈すると思われる深鉢の口縁部である。2・3と4・5はそれぞれ同一個体である。6も含めて比較的小型の深鉢である。7は施文が他に比べて粗い。8は胴部の大破片であるが、矢羽根状の施文帯がある。9～14も平行沈線で施文されるが地文縄文を有する。10は口縁部に横位に沈線を巡らせ、以下に縦位、斜位の集合沈線を施文している。11は炉内出土片で、一旦半截竹管で浅く施文した後にヘラ状工具等で深く施文している。13は太目の工具で疎に施文している。14は縦位に施文している。地文は10・13がＲＬ、12・14がＬＲ横位施文である。9・11は不鮮明だが9がＬＲ、11がＬの可能性がある。15は半截竹管による平行沈線を横位に施文した後、沈線間に矢羽根状に刻み目列を施文している。16は口縁端が内折する器形で、口唇部、口縁部に横位の内側竹管による爪形文で施文している。地文はＬＲと思われる。18・19は同一個体で小波状を呈する小型深鉢の口縁部である。開き気味の胴部から口縁部が内折する。施文はＲＬ地文上に平行沈線で施文されるが、波頂部はＵもしくはＶ字形に切りこまれ、2山状を呈すると思われる。また、切り込みを挟んだ両側にボタン状貼付文が付される。17は口縁部が内傾する波状口縁の深鉢で、上半部が細い棒状工具による連続刺突で施文される。下半は、浅い平行沈線と刻み列で雑に施文されている。地文は無文である。20は横位の連続刺突文が施文される。地文はほとんど消されており判然としない。21は深鉢の片口部分で、胴部にはループ文、コンパス文が施文されている。22は矢羽根状の刻みを付した浮線文で渦文等施文される。地文無文である。23は波状口縁を呈する深鉢の口辺部片で、縄文地文だけが付される。原体はＬと思われる。24～26は浅鉢である。24は地文縄文がまばらに施文されるが不鮮明である。25・26は無文である。27～29は深鉢の底部である。27は完存し、わずかに上げ底状を呈する。地文ＲＬ上に平行沈線が施文される。28は無文上、29はＲＬ地文上に半截竹管による平行沈線が施文される。色調はにぶい赤褐色を呈するものが多いが、10・25はにぶい橙色である。9の内外面及び15・20の外面は黒褐色を呈する。胎土は21が繊維を含むが、他は砂粒、粗砂を含む。特に10は器面に露呈する程多量に含んでいる。焼成は全体的に良好である。

30～34は石器である。30は黒曜石製の石鏃で片側の逆刺と残側の先端を欠損している。31は黒色頁岩製の横型石匙である。32・33は黒色頁岩製の打製石斧で、32は刃部に明瞭な磨耗痕を残す。34は変輝緑岩製の乳棒状磨製石斧の柄部を凹石として転用したものである。



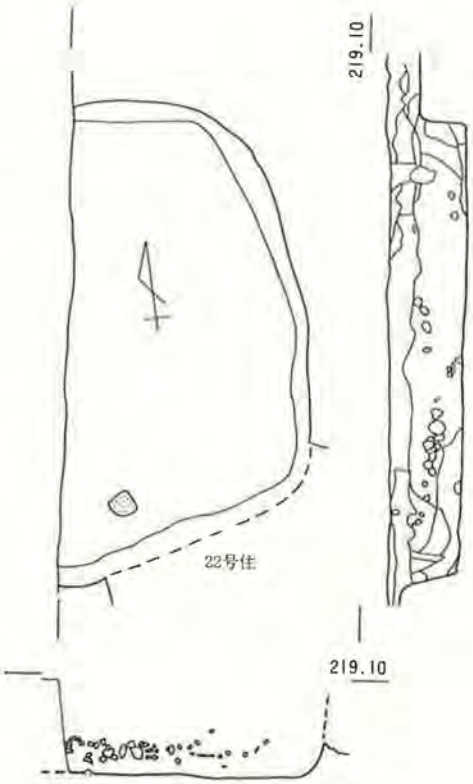
第8図　J1号住居址出土遺物実測図(2)

Ｊ６号住居址

Ｆ区北寄りに位置する。西半部は調査区域外である。南端部に奈良時代の22号住が重複する。

規模は東西3.1m以上×南北4.7mを測り、隅丸の方形もしくは長方形を呈すると思われる。壁高は40～60cmを測り直に立ち上がる。床は平担で、中央部は比較的硬かったが周縁は軟弱である。炉、柱穴等の施設は検出されなかった。

遺物は覆土中から多量に出土している。南壁上部から床面に向かってこぶし大の礫が層状に堆積しており、それに混入し、あるいは覆うように覆土下層から上層までが大小の土器破片によって埋められていた。床面からは数点の土器小片と礫が出土しただけであるが、南壁直下には平板な河原石が出土している。なお、北半部の覆土上層に中期の土器片と磨製石斧がまとまって出土しており、土坑等の遺構が重複していたものと思われる。



第９図　Ｊ６号住居址実測図

出土遺物

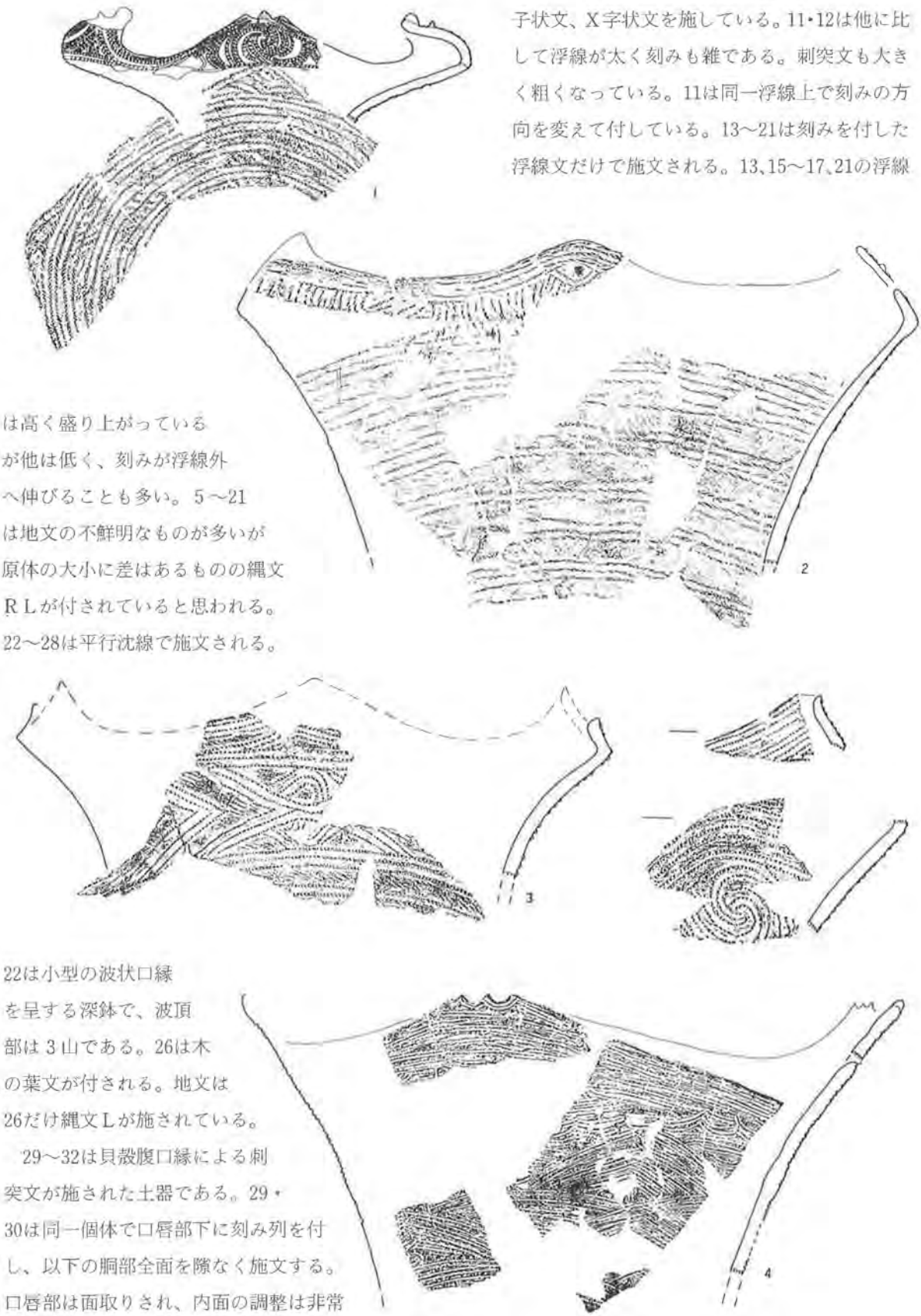
１は４単位の波状口縁を呈する深鉢で、波頂部はさらに３つの山を持つ。中央の山は粘土をつまみ出して貼付文状を呈している。さらにこの直下にも横長の貼付文を付している。文様は刻み列を付した浮線で渦巻文、平行線文等を施文する。胎土に粗砂を混入し、にぶい黄橙色を呈するが火熱を受けて黒褐色を呈する部分も多い。外面に煤、内面に炭化物が付着している。地文は縄文ＲＬが付される。２も４単位のゆるやかな波状口縁を持つ深鉢で、浮線文で施文されている。口縁に沿って５条を平行施文し、そこから屈曲部までを縦位に施文する。ただし、波底部下半は斜位に施文する。波頂部下には貼付文が付されている。胴部は３・４条を単位として横位に施文する。浮線は高く、刻みも粗く付されるが、胴部は磨耗している。胎土は粗砂と赤褐色粒を多く含みにぶい橙色を呈する。３は胴部から大きく開き口縁部で直に内折する波状口縁の深鉢であるが、波頂部は欠失する。施文は浮線文であるが刻み列ではなく、細い竹管状工具を用いて連続刺突(Ｃ字状)を付す。胎土は粗砂、灰色粒を多量に含み、金雲母も混入する。色調は赤褐色を呈する。２・３とも地文は不鮮明であるが、縄文ＲＬと思われる。４は胴部から口縁まで大きく開く深鉢で波頂部は３山を呈する。施文は半截竹管状工具を用いた平行沈線で強く、深く施される。胎土は細砂粒の他に細黒色粒、石英粗粒(径1～2㎜)が目立つ。色調は赤褐色を呈し、地文は無文である。

５～22は矢羽根状の刻みを付した浮線文で施文する土器片である。５～12は浮線間にさらに細い棒状工具を用いた連続刺突文が施してある。５・７、８・９は同一個体であり、10も８と同一個体の可能性がある 器形は何れも１に類似すると思われるが、８は９から推察すると波頂部と波底部の間が小波状を呈する可能性もある。５と８は器形、文様構成、大きさ等類似するが、全体的に５は８よりも粗雑な作りである。５・７の浮線は器体と胎土が異なり、器体の色調がにぶい赤褐色を呈するのに対し、浮線は黒褐色である。８・９は全体が浅黄橙～橙色を呈する。胎土は５・７は３に類似し多量の粗砂、灰色粒と少量の金雲母を含む。８・９は金雲母を同様に含むが、砂粒、赤褐色粒も少量含む。なお、８のボタン状貼付文上には２個１組の刺突文が横位に付されている。６は５・８よりも小型の深鉢と思われる。10は胴～頸部片で頸部に刻みを付さない浮線で梯

子状文、X字状文を施している。11・12は他に比して浮線が太く刻みも雑である。刺突文も大きく粗くなっている。11は同一浮線上で刻みの方向を変えて付している。13～21は刻みを付した浮線文だけで施文される。13、15～17、21の浮線は高く盛り上がっているが他は低く、刻みが浮線外へ伸びることも多い。5～21は地文の不鮮明なものが多いが原体の大小に差はあるものの縄文ＲＬが付されていると思われる。22～28は平行沈線で施文される。

22は小型の波状口縁を呈する深鉢で、波頂部は３山である。26は木の葉文が付される。地文は26だけ縄文Ｌが施されている。

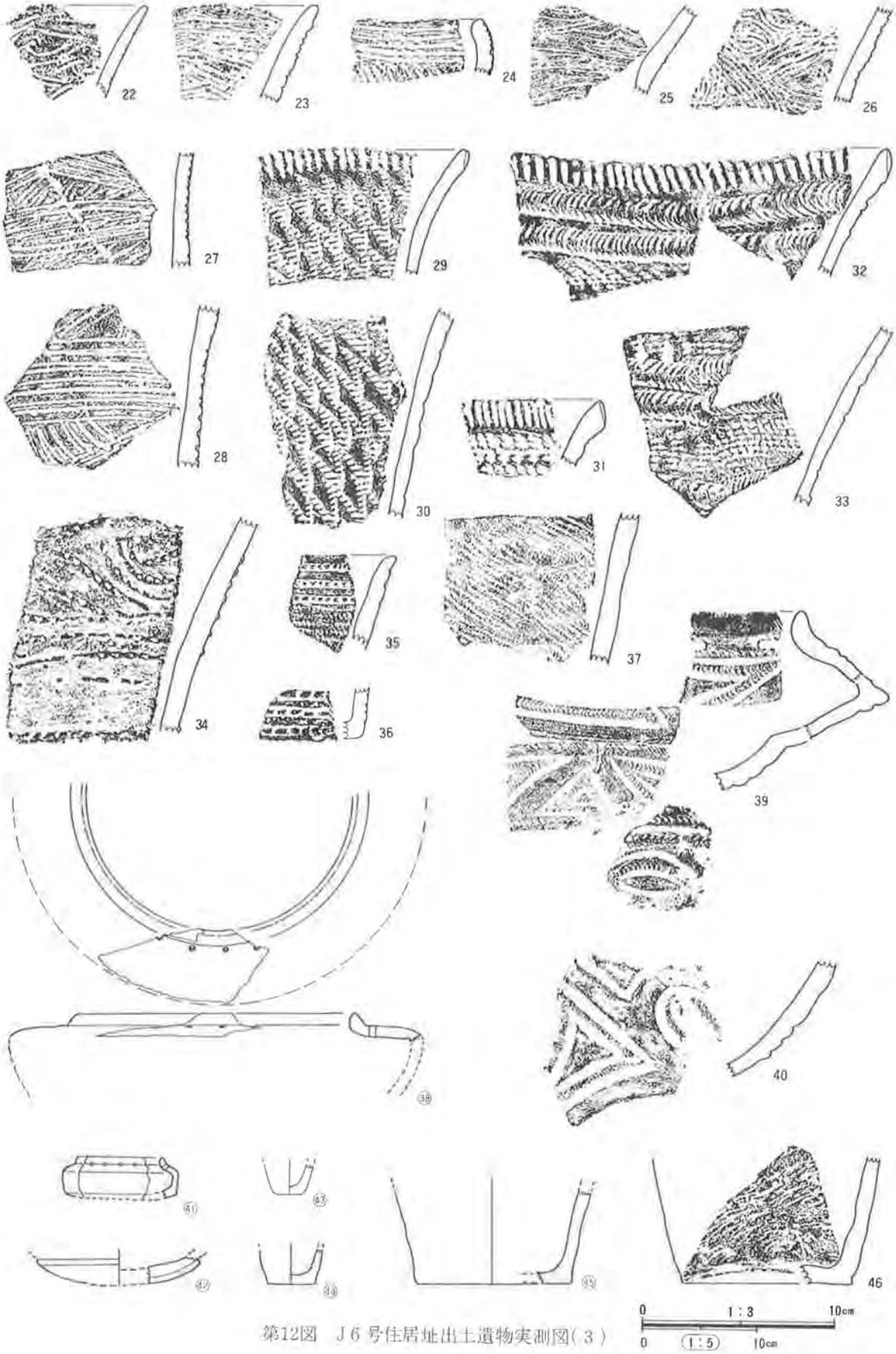
29～32は貝殻腹口縁による刺突文が施された土器である。29・30は同一個体で口唇部下に刻み列を付し、以下の胴部全面を隙なく施文する。口唇部は面取りされ、内面の調整は非常



第10図　Ｊ６号住居址出土遺物実測図（１）

第11図　J６号住居址出土遺物実測図(２)

0　1:3　10cm



第12図　J６号住居址出土遺物実測図（３）

に丁寧である。31は口唇部を肥厚させ、口唇下に棒状工具による刻み列を配し、以下に刺突文を付す。32・33も同一個体で刻み列以下に波状爪形文、具殻腹縁文を交互に施文している。

34は棒状工具による連続刺突を施した浮線で施文する。地文は縄文ＲＬ。35・36は内側竹管による爪形文が付される。37は縄文ＲＬだけが施される。

38～42は有孔浅鉢と思われる。38は無文である。39は沈線により三角文、木の葉文等が施文され、平行沈線間に爪形、区画外に爪形文、連続刺突文、刻み列等が付される。外面に赤色顔料が付着する。体部下面に火熱を受けている。40は39と同様な文様だが、沈線が深く、爪形は浅い。41はミニチュアで42は底部である。

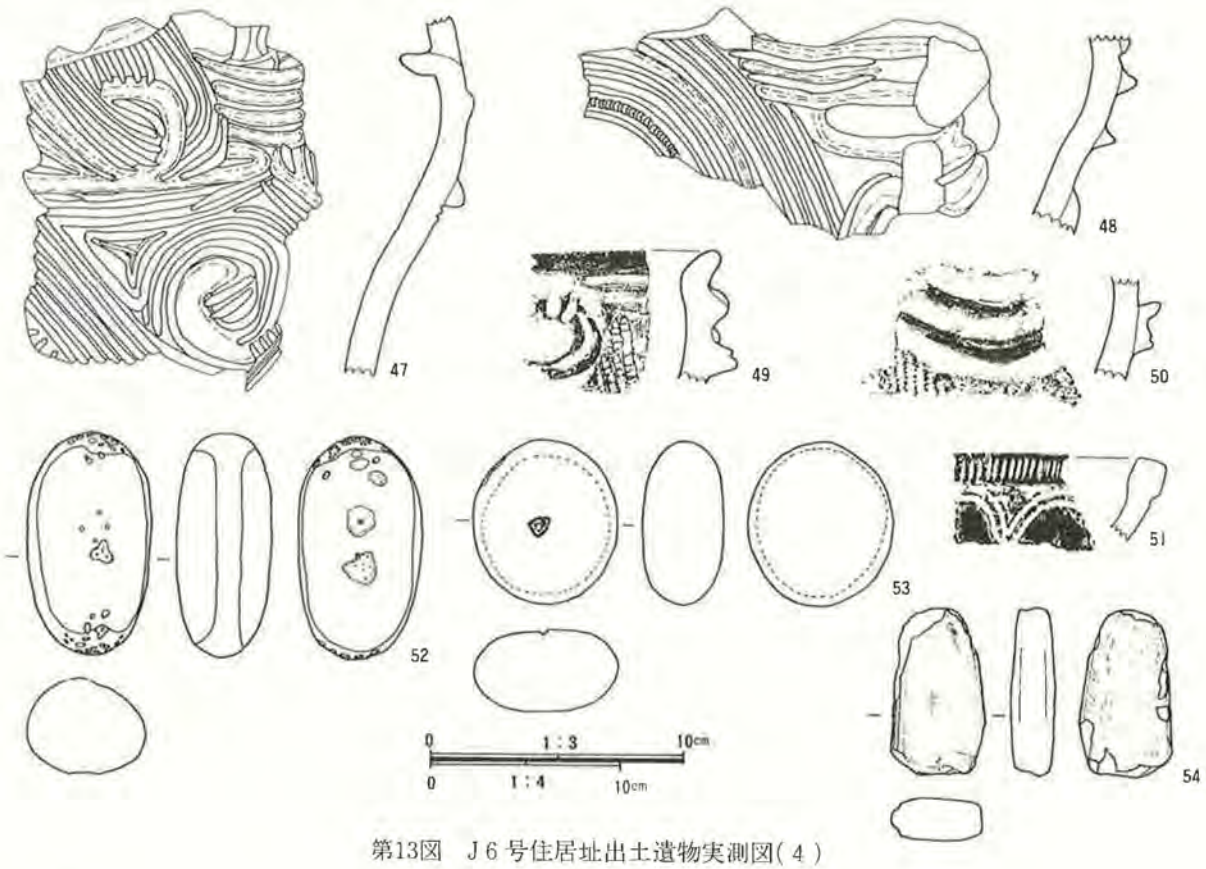
43～46は底部である。43・44はミニチュア土器で無文である。45は無文のように見えるが、ＬＲ縄文が施文されていた可能性もある。46は縄文Ｒが付されている。

47～51は重複する中期の遺構に属すると思われる遺物で、47・48は隆帯と半隆起線で施文されている。48は一部の沈線内にペン先状刺突文を付す。49・50は縄文ＬＲ上に隆帯を貼付する。51は平行沈線で施文する。

胎土は23・26・32・33・37・43・47が石英、15・36・48が石英粗粒、6・8・9・13・14・17・22・25・29・30・35・36・39・40・43・44・49・50が赤褐色粒、5・7・8・9・11・12・19・38・39・40・47が金雲母、37・43・46が角閃石、35・38が白色粒、5・7・46が灰色粒、５・22～28・41・42が粗砂を多量に含む。他は砂粒を含む。

色調は13・14・18・22・45がにぶい橙色(但し、18の上半部の浮線は淡黄橙)、11・29・30・31・35・39・43・44がにぶい赤褐色、36・37・38・46が赤褐色、20・21が灰褐色、8・9が浅黄橙～橙色、24・32・33・40が浅黄橙、34・41がにぶい黄橙色、17が橙色、12・15・19が明赤褐色、42が黒色を呈する。

52・53は凹石で何れも覆土中から出土した。石質は安山岩である。54は中期の土器片とほぼ同位置から出土した磨製石斧？で刃部、柄部を欠損する。石質は蛇文岩である。



第13図　Ｊ６号住居址出土遺物実測図(４)

J10号住居址

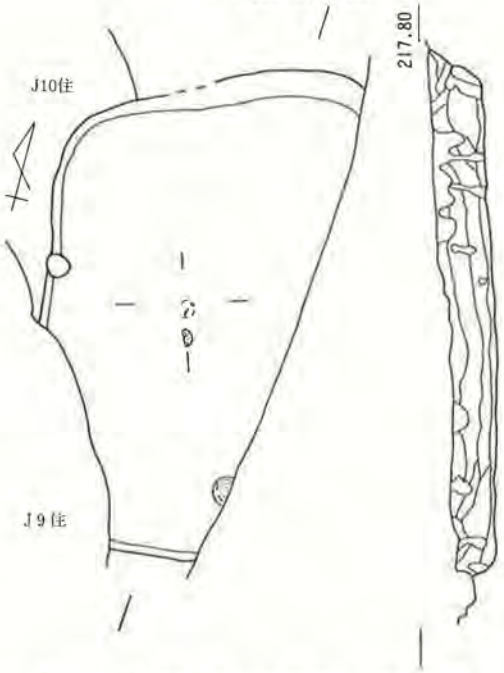
F区南半部東端に位置する。中期のJ8A号、J9号住と重複する。東側は道路により削平されている。

東西3.6m以上、南北4.9mを測り、不整の隅丸長方形を呈すると思われる。壁の立ち上がりは比較的急で、壁高は北壁で約55cmを測る。床は全体が軟弱である。

炉は住居の中央若干西寄りに付設されている。底部を欠失する深鉢を埋設して炉体としている。

柱穴、周溝等他の施設は検出されなかった。

遺物は炉体土器の他に、北東寄りの床面密着で1の深鉢が、南壁寄りの床上10cmから2の深鉢が出土している。石器は19・20が覆土中からの出土であり、J8A号住につく可能性もある。22は床面から出土した。床面、覆土中を含めて遺物の量は多くない。



第14図　J10号住居址実測図、炉実測図

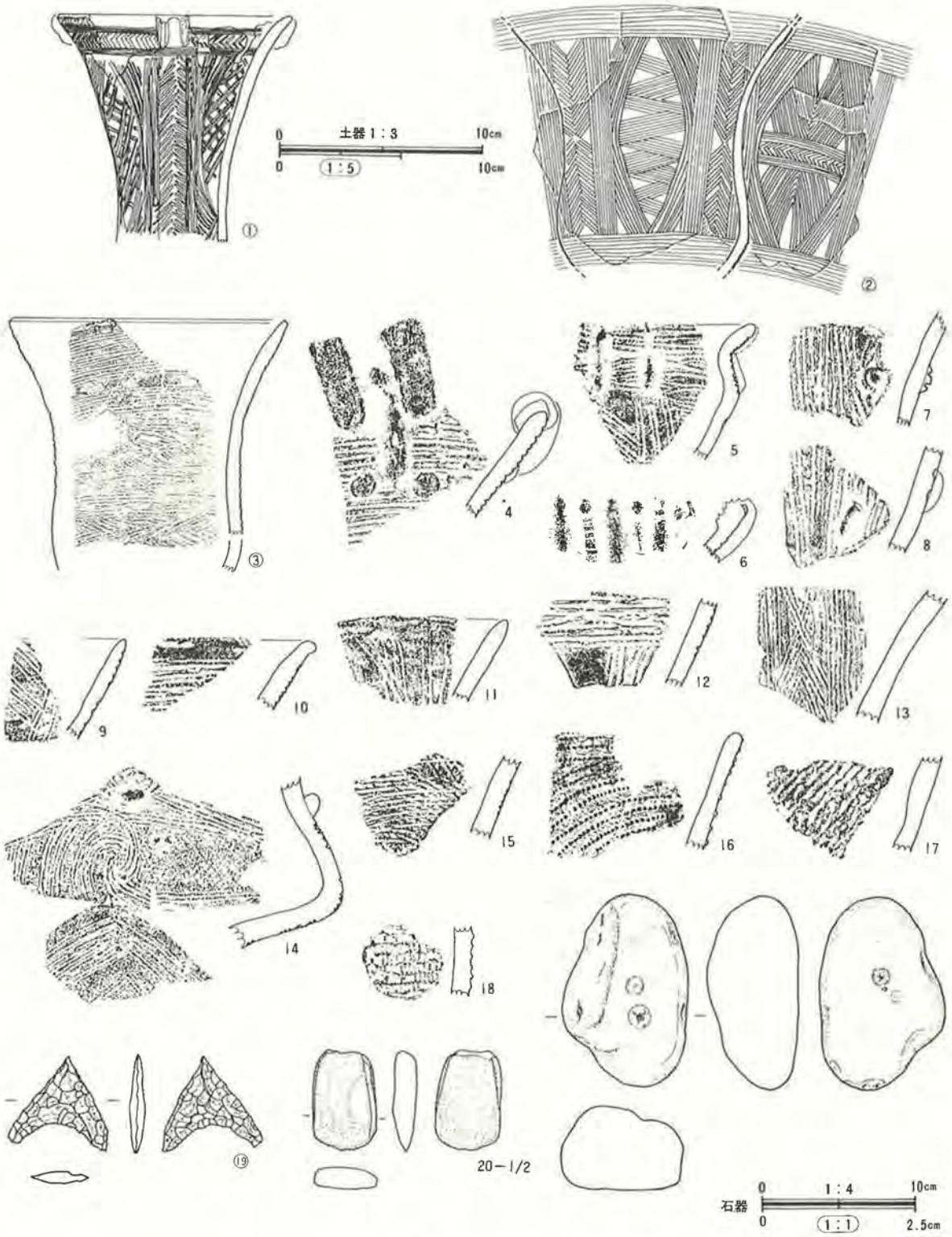
出土遺物

1は底部を欠失する小型の深鉢で、口唇直下に2個1対の貼付文を4単位配し、口縁部文様帯を画する横位の沈線帯を経て続く縦位の矢羽根状沈線帯とで器面を4分割している。口縁部文様帯は口唇直下に凹凸文、集合沈線帯横位の矢羽根状沈線帯を配す。胴部には器面を区画する矢羽根状沈線帯に縦位の施文帯を沿わせ、さらに弧状に施文することによりレンズ状区画を作出している。区画内には、平行沈線で斜格子状に施文している。胎土は細砂粒を少量含むだけで夾雑物が少なく、比較的脆い。色調は赤褐色を呈する。

2は口縁部、底部を欠失する深鉢で薄手の作りである。基本的な文様構成は1に類似するが、細部では異なる。施文は全て集合沈線によって施される。上下端の横位施文で文様帯が画され、上下で方向を変えた縦位の矢羽根状沈線帯で器面が4分割される。1と同様の施文によってレンズ状の区画が作出されるが、区画内の施文は区画ごとに変えており、表裏一対で同様に施文されると思われる。斜位の施文を方向を変えて交互にくり返す区画と、レンズ状区画に相対してX字形に弧状施文し、交差部に矢羽根状沈線を挟む横位施文帯を配する区画がある。胎土は粗砂を多量に含み色調はにぶい黄橙色を呈する。地文は縄文RLと思われる。胎土、焼成、色調、文様等はJ1号住の10に酷似する。胴部外面の上から¾程の範囲に煤、内面の下から⅓の範囲に炭化物が多量に付着している。

3は炉体土器で平口縁の深鉢である。口唇部は面取りしている。口唇直下は無文で以下に横位、斜位、矢羽根状の集合沈線で施文している。胎土は砂粒、粗砂、角閃石、石英等を含み明赤褐色を呈する。胴下半部の内・外面に煤が付着している。

4～15は平行沈線で施文される。4～8は集合沈線上にボタン状、棒状、有円刺突などの貼付文が付されている。9は斜位に施文される。10は3と同一個体か。11は粗く斜位、縦位に施文される。12は部分的にゆるやかな波状に重ねて施文する。13は集合沈線である。14・15は地文上に施文する。原体は不鮮明であるが縄文RLと思われる。14の波頂下に貼付文が付される。16は結節浮線文、17は原体不明である。18は土器片転用の円板でRLが施されている。胎土は5・12が小礫、4が粗砂、14・16・18が赤褐色粒を含む。18は繊維も



第15図　J10号住居址出土遺物実測図

多量に含んでいる。色調は5･6･13･14が暗赤褐色、4、7、11がにぶい橙色、8がにぶい赤褐色、9がにぶい褐色、10が明赤褐色、12･16･18が黒褐色、17がにぶい褐灰色を呈する。

19～21は石器である。19は黒曜石の石鏃である。20は蛇文岩製の小型磨製石斧であり両面とも丁寧に磨かれている。21は輝石安山岩製の凹石で火熱を受けている。

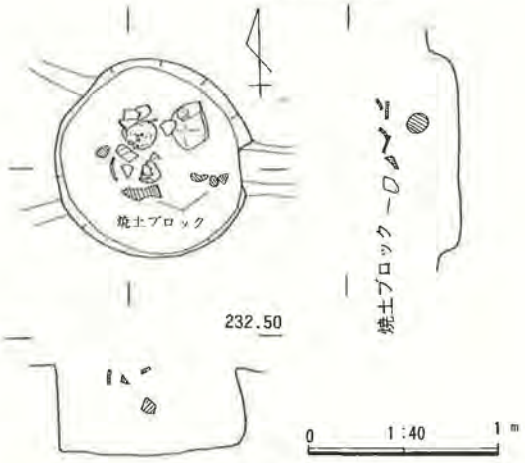
Ｊ２号土坑

Ｂ区北寄り、Ｊ１号住の南西約４ｍに位置する。奈良時代の８・11号住に南北の⅓づつ程を底面近くまで削平されている。

径約１ｍの円形を呈し、壁はほぼ直に立ち上がっている。底面は平担である。

覆土はロームを少量含むブロック状の褐色土、黒褐色土の混土で、上半部に多量のＳＰ軽石を混入する。

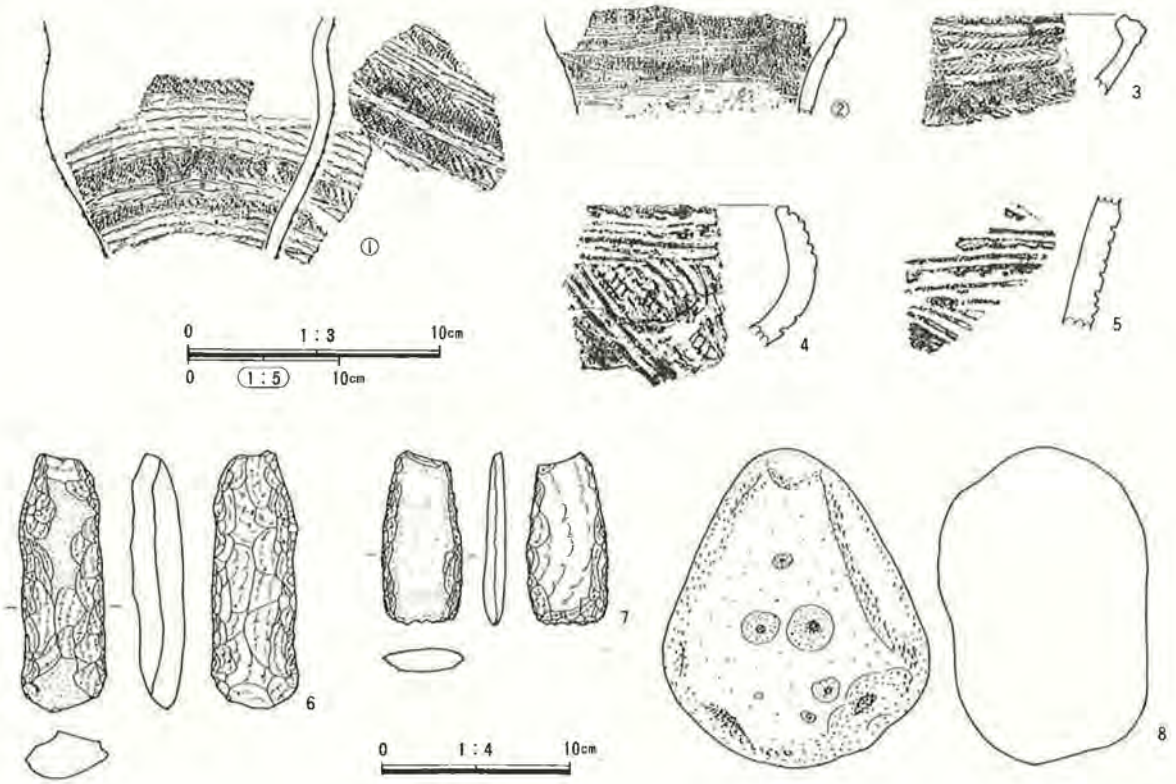
遺物は覆土中位に偏平な角礫と凹石が、また中～上層にかけて大小の土器破片が多量の焼土ブロックとともに出土している。



第16図　Ｊ２号土坑実測図

出土遺物

１は矢羽根状の刻みを付した浮線文を横位に施文するが、同一浮線上で方向を変えて変化を持たせている。地文は縄文ＲＬが施される。２は横位の平行沈線が粗く施される。地文は縄文ＲＬである。３は縄文ＲＬ上に横位、斜位の平行沈線が施文される。４は口縁端が内折する土器で刻みを付した浮線文で施文されるが、浮線が部分的に途切れ刻み列だけを付す部分もある。地文は不鮮明である。５は平行沈線が深く施文される。胎土は１～３は粗砂、白色粗粒を含み類似する。４は粗砂を多量に含む。５は細砂を含む。色調は1･5がにぶい橙色、2･3が赤褐色、４がにぶい黄橙色を呈する。６～８は石器である。6･7は打製石斧で何れも片面に自然面を残す。８は片面だけに敲打痕を残す。6･7は頁岩、８は輝石安山岩と思われる。



第17図　Ｊ２号土坑出土遺物実測図

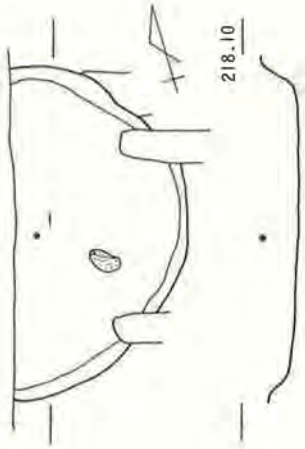
――中　　期――

Ｊ７号住居址

Ｆ区中頃に位置する。西半部は未調査である。Ｊ8A・B、9号住が東・東南に近接する。

径約3.6mで円形を呈すると思われる。壁はゆるやかに立ち上がり、壁高30cmを測る。床は平担であるが、住居の平面形をひとまわり小さくした様な円形に南に寄せて貼り床しており、重複もしくは拡張住居の可能性がある。柱穴、炉等の施設は検出されていない。

遺物は床面、覆土中から少量の土器片が出土しただけであるが、覆土上層のほぼ中央から深鉢が出土している。石器類は凹石１点と少量の剝片が出土した。南東寄りの床直で人頭大の河原石が出土している。

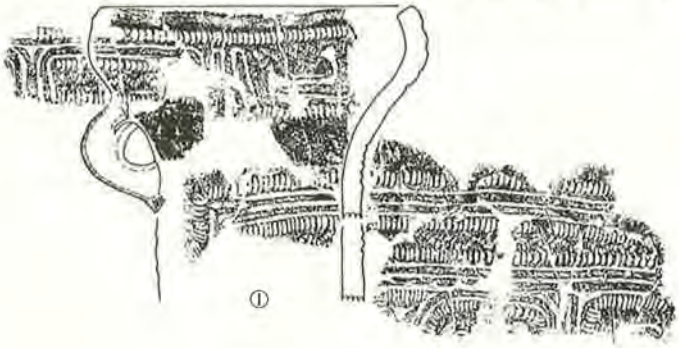


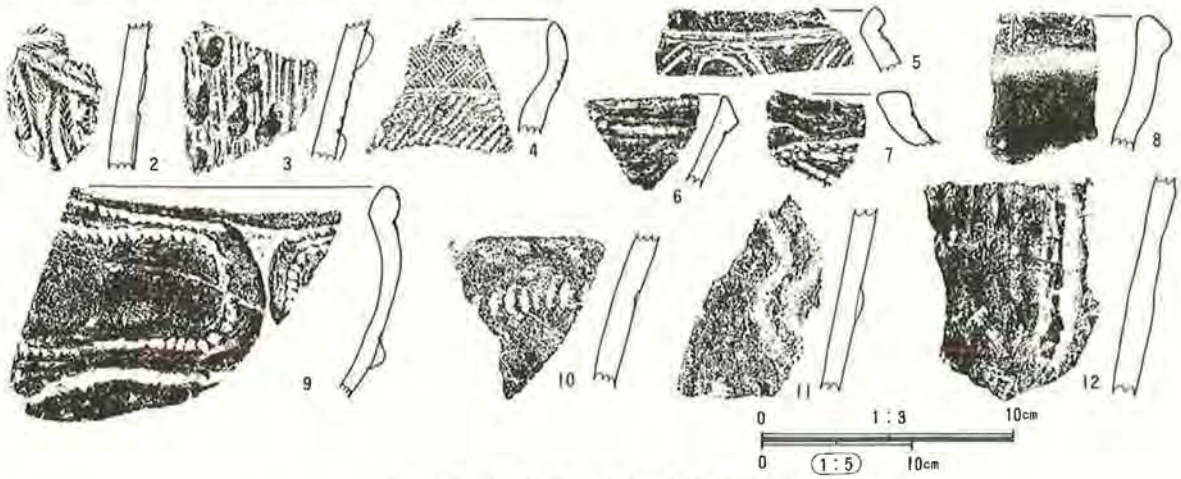
第18図　Ｊ７号住居址実測図

出土遺物

１は覆土上層から出土した深鉢で底部を欠失する。円筒状の胴部から口縁部が大きく開き内湾するキャリパー状の深鉢で、頸部の１カ所だけに橋状把手を貼付する。文様は半截竹管による平行沈線と押引き文で施文される。施文は４単位に横帯区画される。口縁部文様帯は平行沈線と角押文列によってさらに長方形等に区画され、区画内外に角押文、ペン先状工具による波状沈線文、クランク文、三叉状陰刻文等が施文される。頸部は無文帯で、胴部文様帯は上段が幅広角押文と平行沈線と波状角押文が把手部分で変化する以外は１巡する。下段は平行沈線と幅広角押文で楕円区画され内部を平行沈線で施文する。区画外に三叉状陰刻を施す部分もある。把手にも刻み列と隆帯間にはペン先文が施文される。胎土は粗砂、角閃石、石英赤褐色粒を含み、にぶい橙～赤褐色を呈す。

２は矢羽根状刻みを付した浮線が施文される。３は集合沈線上に貼付文が付される。４は口唇直下無文で以下に斜格子状に平行沈線が施文される。右下がりは密で左下りは疎である。胴部は縄文ＲＬである。5・7は





第19図　Ｊ７号住居址出土遺物実測図

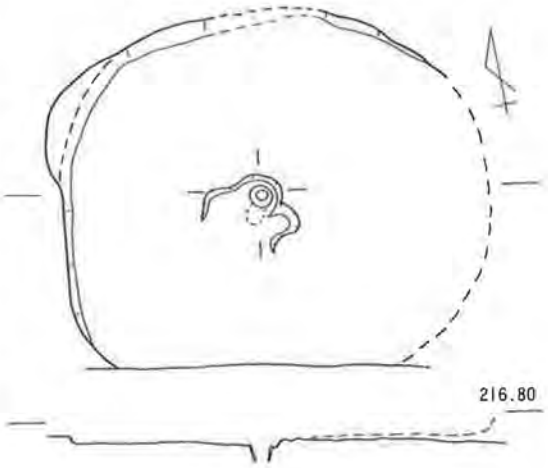
2列の押引き沈線で施文される。7は隆帯に沿う。6・9は同一個体で波状口縁を呈すると思われる。口唇直下に一条のペン先状刺突文を巡らせ隆帯で楕円区画し、隆帯に沿って区画内に一列の刺突文を施文する。8は無文で浅鉢の可能性がある。10は幅広爪形文が横位に施される。11・12は縦位に隆帯が付される。胎土は2が粗砂、3が粗砂と赤褐色粒、4が砂粒を含む。5～12は粗砂、白色粒、金雲母を多量に含む。色調は3が浅黄橙色、5・11・12が橙色、6・9がにぶい黄橙と黒褐色で、他は赤褐色を呈する。

J12号住居址

F区南端に位置する。後世の耕作により覆土の大半を削平され、特に南・東端は床面下まで削平されている。隅丸長方形、もしくは不正の円形状を呈すると思われる。壁の立ち上がりはゆるやかで、床面は炉の周辺が比較的良好に踏み固められていた。

炉は住居のほぼ中央に付設されている。口縁部と底部を欠失する深鉢を炉体として埋設しており、炉体土器を囲んで北西から南東にかけての床面が最大5cm程の段差で落ち窪んでいた。また、土器に接した南西床面は、径20cm程の円形に焼土化していた。

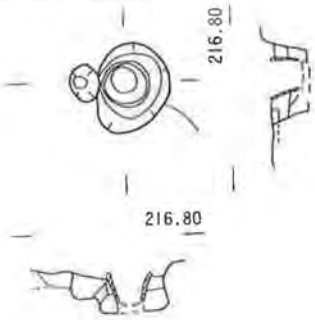
遺物は炉体土器の他には少量の土器片と剝片類が出土しただけである。



第20図　J12号住居址実測図、炉実測図

出土遺物

深鉢の胴部である。残存部の上段には鋸歯状の結節沈線とヒダ状指頭圧痕文を1周させ、以下を隆帯で4分割している。隆帯はC・C字状の下に瘤状に付し、∩字状と円形の隆帯が表裏1対づつ付される。さらに下段にも同様に付すと推察される。なお、∩字状隆帯の上には指頭圧痕文が連続して付されている。C・C字状隆帯の下に続く微隆起帯上に3区画だけ粗い刻み列が付され、長楕円の区画内には鋸歯状結節沈線文と連続刺突文が各々1区画づつに付され、他には付されない。以下の区画内にはヒダ状指頭圧痕文が3段付されている。胎土は粗砂、金雲母を含むが量は多くない。色調はにぶい黄橙～にぶい橙色を呈する。



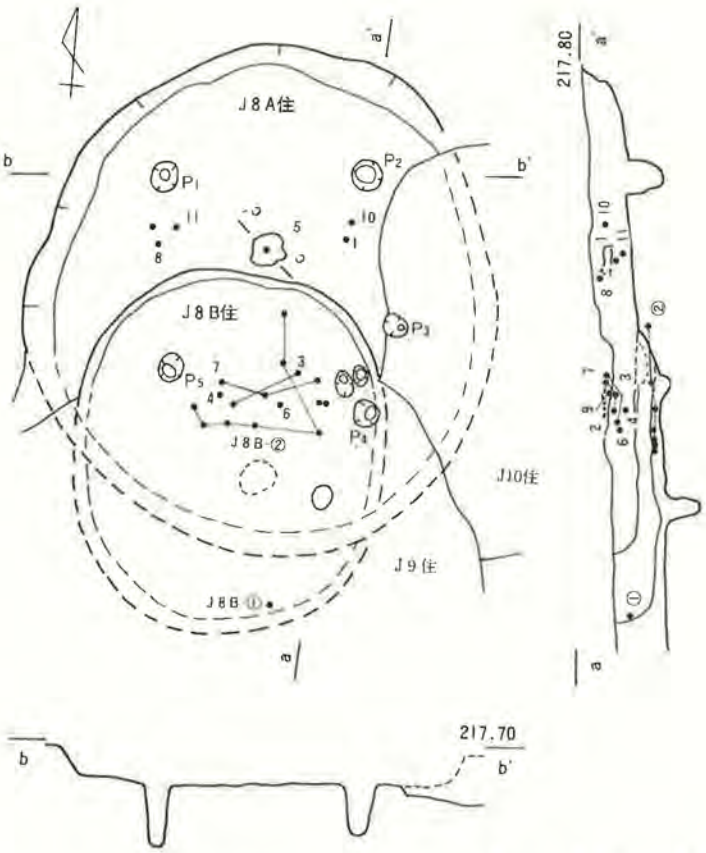
第21図　J12号住居址出土遺物実測図

Ｊ８Ａ・Ｂ号住居址

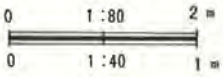
Ｆ区南半部中位に位置する重複住居である。他に前期のＪ10号住と中期のＪ９号住が重複しており中期の３軒の新旧関係は土層観察の結果 J9→J8B→J8A の順に新しくなると思われる。しかし、各住居の重複する部分に明瞭な壁、床等が確認されず時期的にも近接すると考えられる為、新旧関係の判断に多少の不安が残る。

J8A 号住は東西4.8m、南北5.2mを測り、若干南北に長い円形を呈する住居である。

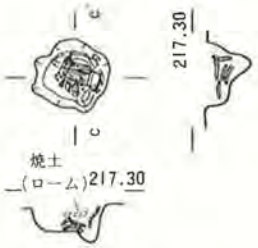
壁はなだらかに立ち上がり、壁高は30cm前後を測る。床は重複部分と同縁部を除いて良好に踏み固められていた。J8B 号住との重複部分では、部分的にではあるが、床状に固められたロームと黒褐色土の混土層の堆積が認められた。



第22図　Ｊ８Ａ・Ｂ号住居址実測図、炉実測図



ピットは他の住居との重複部分も含めて７本が検出されているが、壁に沿った４もしくは５本が主柱穴と思われる。径は何れも30cm前後で、深さは床面から55～70cmを測るが、P_3 だけは36cmと若干浅い。

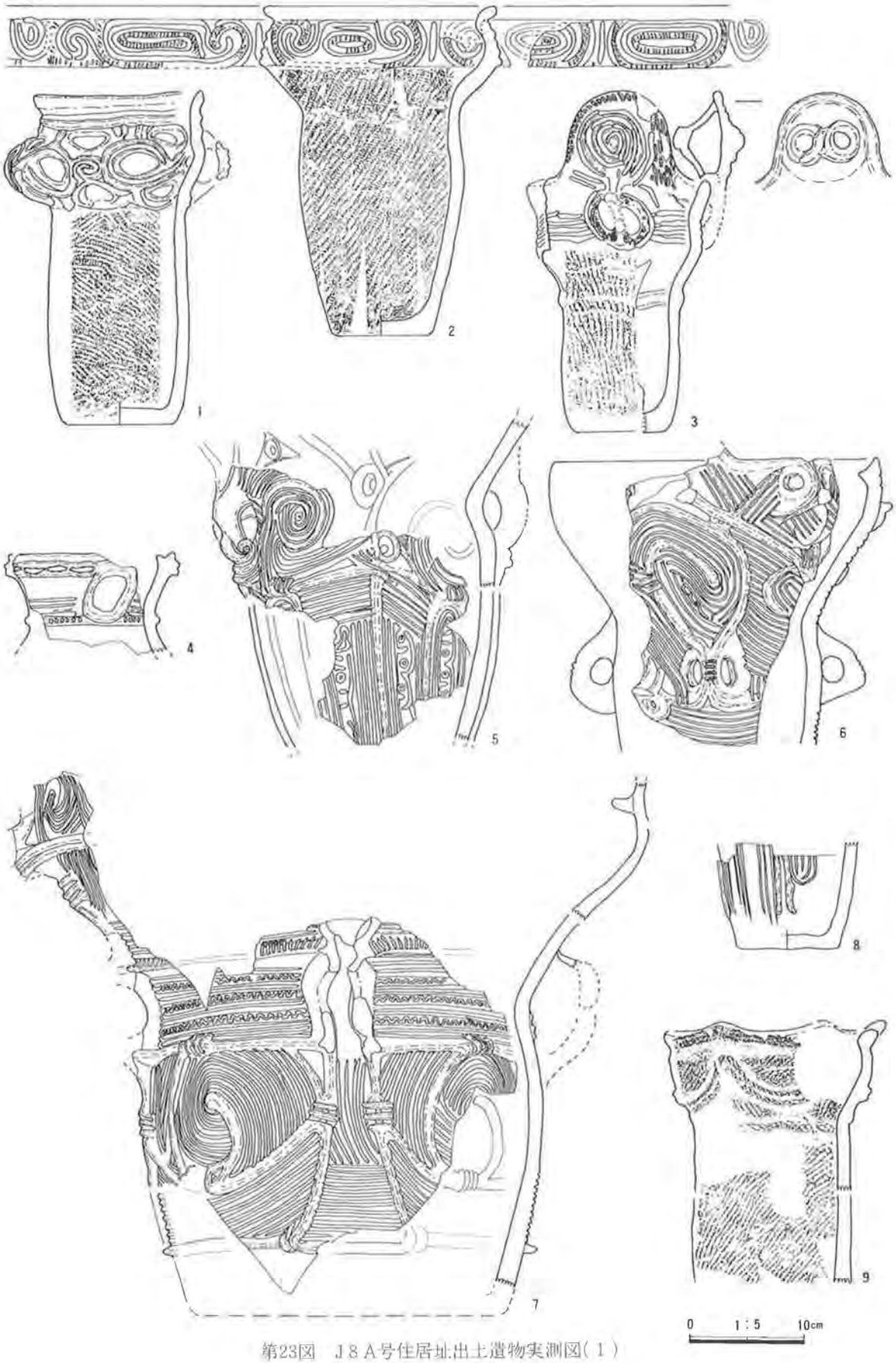


炉は住居の中央からわずかに北に寄って検出された。一辺約35cmの不整方形に床を掘り窪め、深鉢の胴上半部の½程で北西を囲い、下半部の破片を中央に伏せ、さらにその上をロームで覆って炉床としていた。石材は無かったが、掘り方から判断すると、部分的に石組を施していた可能性もある。

遺物は覆土中～上層から多量に出土している。完形、半完形の土器が、若干南寄りの中央部から出土し、P_1 寄り、P_2 寄りの２カ所にも少数分散して出土した。土器片、石器類は、覆土のほぼ全体から出土しているが、床面密着、直上のものは少なかった。

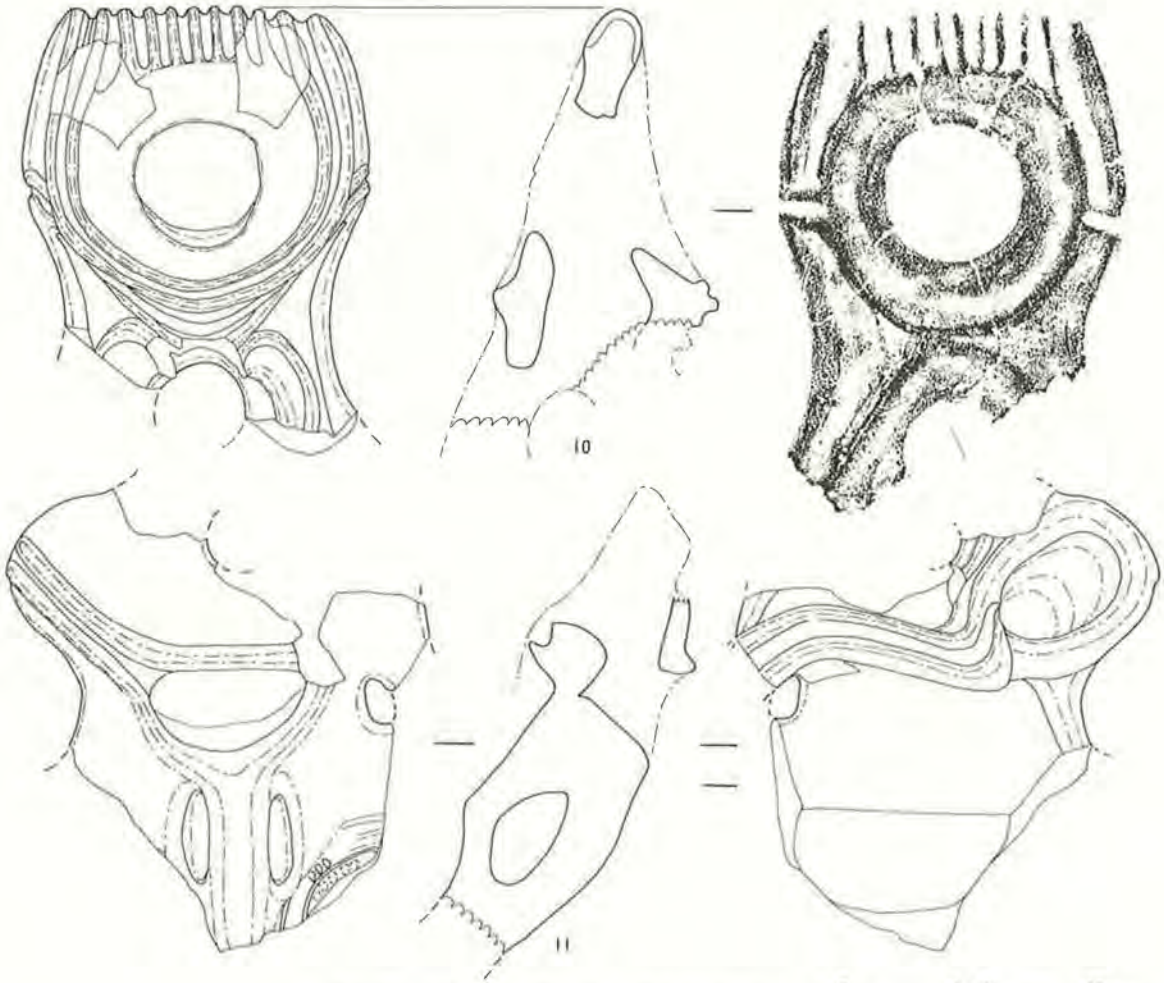
出土遺物

１はほぼ完形の深鉢である。全体的には円筒形を呈するが、文様帯の部分でわずかに張りを持ち、口縁部が短かく外反する。文様は透しを持った隆帯で施され、Ｘ字状もしくはＳ字状に７単位施文される。交差部の４カ所には隆帯で渦文が配されている。胴部の縄文は、器面を縦位にほぼ２分割して、縄文ＬＲが縦位と横位に分けて施文される。口縁部内外面は丁寧に磨かれているが、若干炭化物が付着する。胎土は白色粒、赤褐色粒を多量に含み、にぶい橙～暗赤褐色を呈する。

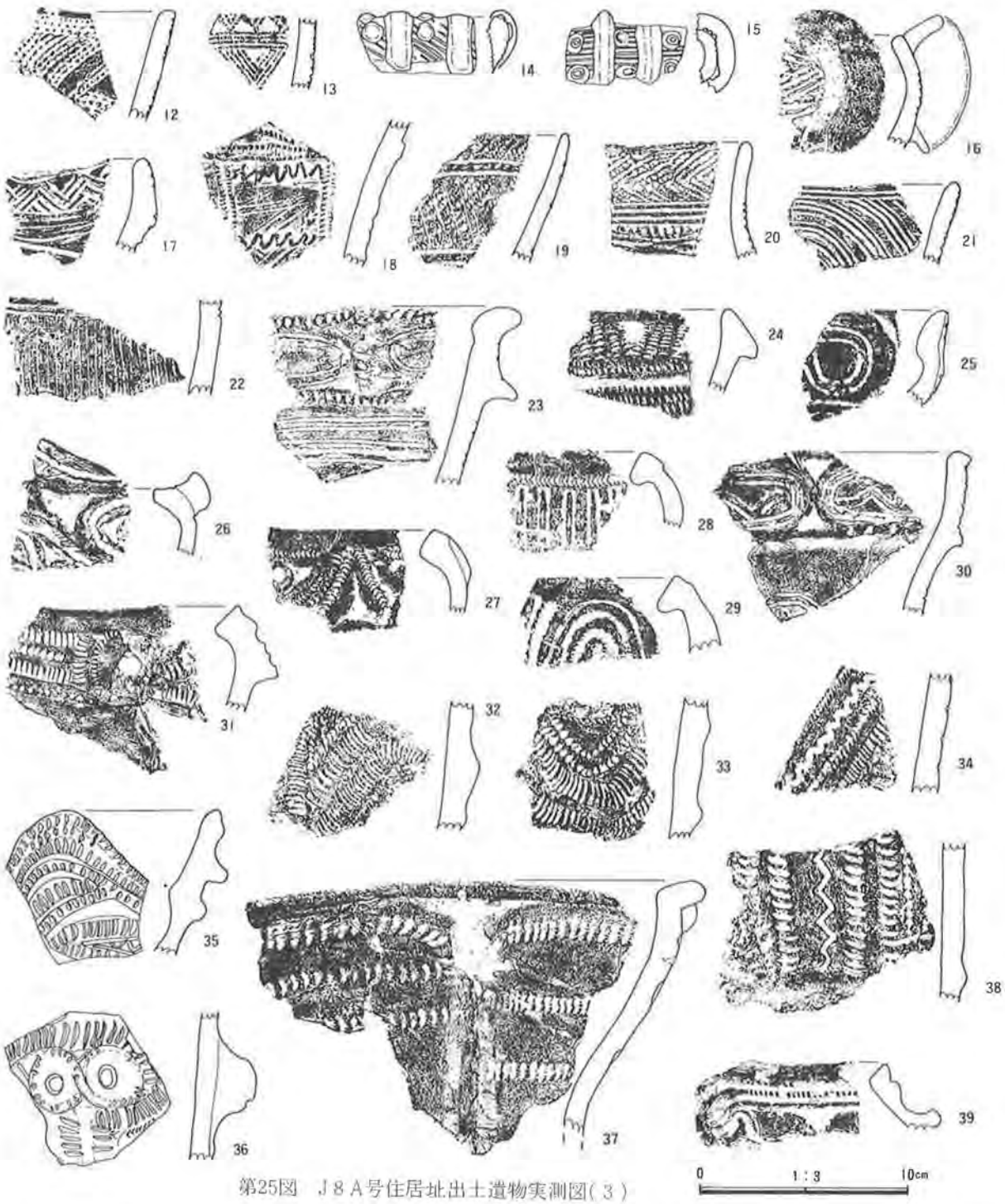


第23図　J８A号住居址出土遺物実測図（１）

2もほぼ完形の深鉢である。口縁部の文様は隆帯と沈線で楕円区画文、渦巻文等が施文され、隆帯と半隆起帯の一部に刻み列が付されている。胴部は縄文ＬＲが縦位に施文される。胎土は砂粒、白色粒を含み、にぶい橙色～極暗赤褐色を呈する。口縁部内面に炭化物が付着する。3は中空の大型把手を有する深鉢である。口縁部は幅の広い無文部下に4条の沈線が巡る。把手の前面は渦巻文で周縁に縄文を施文する。渦巻から隆帯が懸垂し、∞字状のモチーフを持つ半環状把手に続く。裏面にも円孔を縁どって隆帯の∞字状モチーフが描かれる。胴部には上段に隆帯が一巡し、把手部分も含めて縄文ＬＲが施文される。胎土は粗砂・白色粒を混入し、橙～にぶい赤褐色を呈する。口縁部内面に炭化物が付着する。4は口唇直下に幅広の断裂沈線を施し、沈線部分の隆帯を押圧した隆帯が一巡する。頸部にも幅広の刻み列を配した隆帯が一巡し、区画内に3条の平行沈線が沿う。区画内には縄文ＬＲが施文されている。円文上には把手がつくと思われる。胎土は砂粒、白色粒を含み赤褐色を呈する。5は炉内出土の深鉢である。器面は隆帯と把手によって縦位に4区画されさらに上下にも分割される。隆帯及び半截竹管を用いた平行沈線による半隆起線で施文される。上半は渦巻文、玉抱き三叉文、環状突起等が施文され、下半は∩字状の区画文を中央に配し、それぞれ施文される。隆帯の交差部には碍子状文が貼付される。胎土には砂粒・白色粒を含み、橙～暗赤褐色を呈する。胴部は火を受けて外面がヒビ割れている。6も隆帯と半隆起線で施文されるが、沈線は5・7に比べて浅く弱い。胴部の把手は比較的大きく、口縁部にも大小の把手が付くと思われる。胎土は砂粒・石英・白色粒を含み暗赤褐色を呈する。7の胴部は若干下へ伸びる可能性がある。文様帯は縦位の隆帯で4単位に区画され、さらに鍔

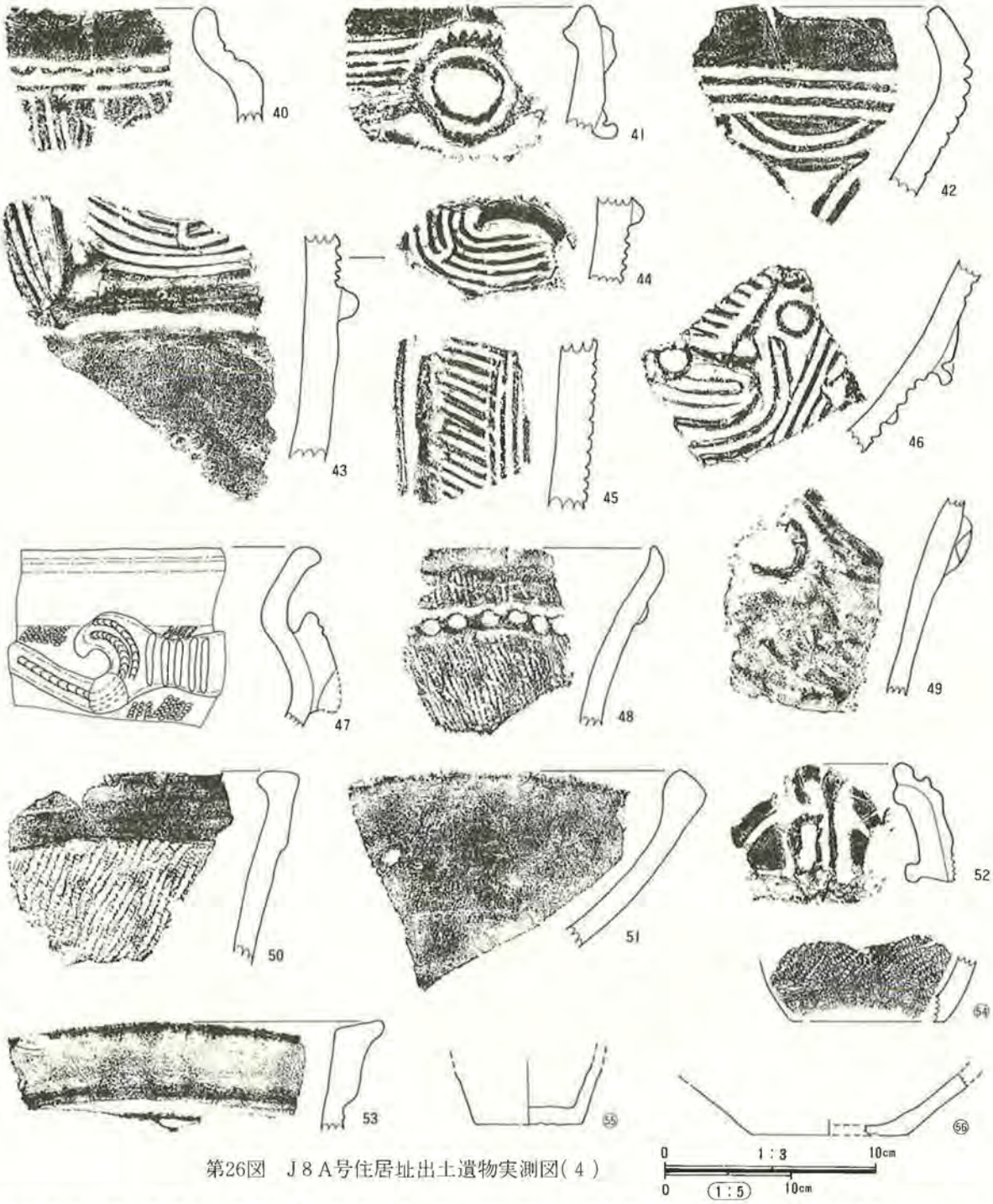


第24図　Ｊ８Ａ号住居址出土遺物実測図（２）



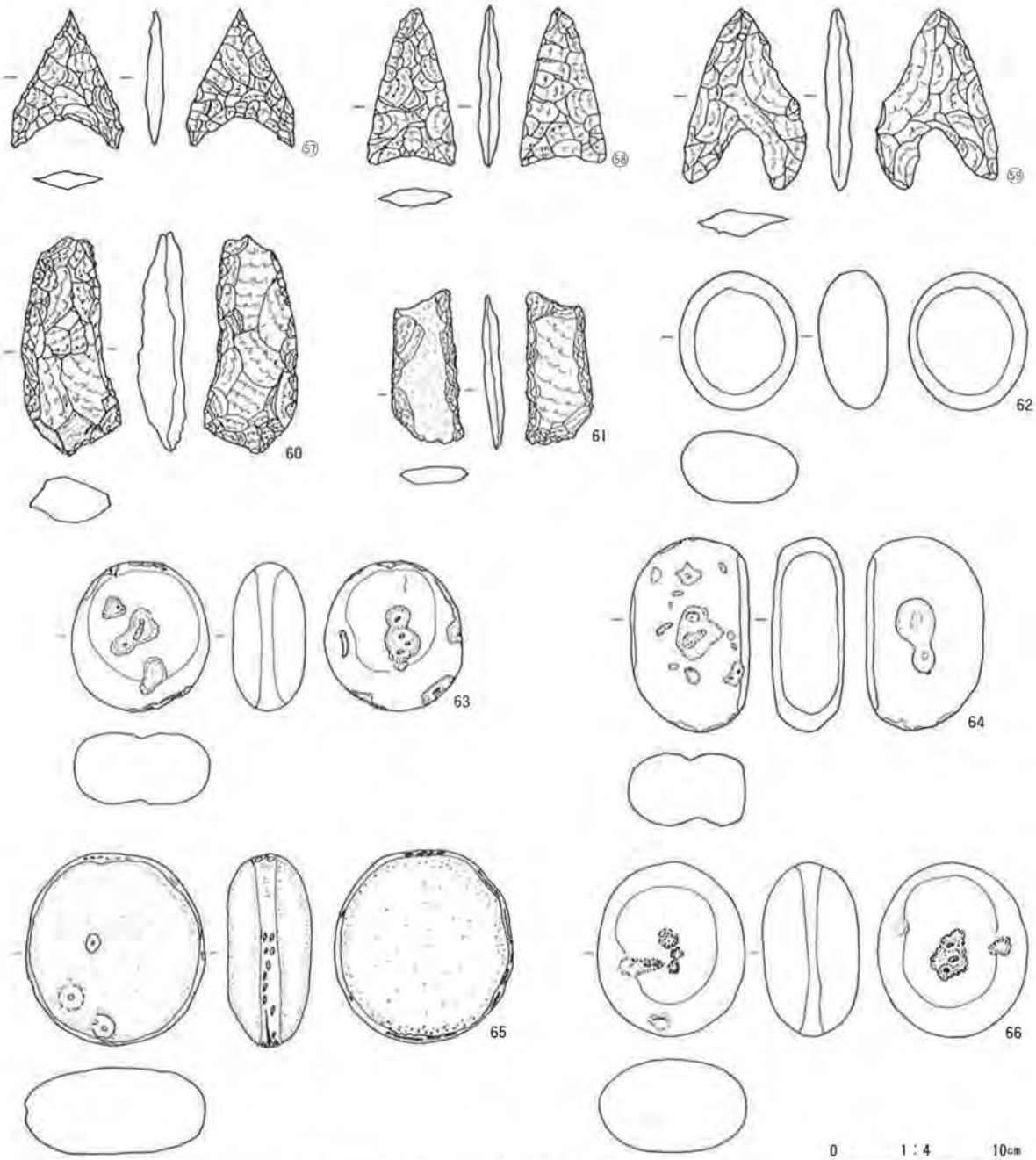
第25図　J８A号住居址出土遺物実測図(３)

状に高い横位の隆帯で、口縁部、頸部、胴部に３分割され上段の隆帯には縦位の平行沈線列が付される。口縁部文様帯は渦巻文、頸部文様帯は平行線文であるが、数本ごとに半隆起線に交互刺突を付す。胴部文様帯は渦巻文を主文様としている。隆帯の交差部には碍子状文が貼付される。胎土に砂粒、白色粒を含み、赤褐色～極暗赤褐色を呈する。８は２本１組の隆帯で縦位に４区画し、区画内を平行沈線で施文する。粗砂を多量に含み橙色を呈する。９は小波状口縁を呈し、口縁部と頸部に隆帯で施文される。隆帯上も含めて縄文ＲＬが施文される。胎土は粗砂を含み、橙～暗赤褐色を呈する。10、11は大型の把手である。10は隆帯、微隆起線で施文される。胎土に白色粒を多く含み、にぶい赤褐色を呈する。11は粗砂を少量含むだけで、暗赤褐色



第26図　J８A号住居址出土遺物実測図(４)

を呈する。内、外面とも丁寧に磨かれている。12・13は結節文で施文する。14～16は集合沈線上に貼付文。17は波状口縁で平行沈線。18は平行沈線の地文上にソーメン状浮線・刻みを付した浮線。19は地文縄文ＲＬ上に平行沈線で区画し、斜位の沈線を平行施文。20は羽状縄文に平行沈線。21は平行沈線。22は深い平行沈線で区画し、縦位の浅い平行沈線を充填する。23は刻みを付した隆帯で区画し、平行沈線で施文。24は縦・横位の爪形列と陰刻文。25～37は押引き文・連続刺突文を施文するもので、25は隆帯に結節沈線、26は隆帯、ペン先文・三叉文、27はそれに玉抱き三叉文が加わる。28・29は平行沈線とペン先文、30は隆帯文に刻みが付され、半截竹管による平行結節沈線を付す。31からはキャタピラ文が加わり、31は円環突起、34は鋸歯文、35は沈線、36はメガネ状突起が付される。37はキャタピラ文と幅広爪形文の中間的な施文、38は区画の中央



第27図　Ｊ８Ａ号住居址出土遺物実測図（５）

に鋸歯状沈線が施される。39は隆帯に爪形文を付し、平行沈線・三角陰刻を施す。胎土は25・29・34・38は金雲母、28は赤褐色粒を多量に含む。色調は25が赤色、39が橙色で他は赤褐色～暗赤褐色を呈する。

40は半隆起線・平行沈線・沈線で施文され上段に交互刺突文を配す。地文は不明瞭、41～46は半隆起線と隆帯で施文される。41は円文、42は連弧文・三叉文、46は円環突起・変型玉抱き三叉文が付される。胎土は41・43・44が赤褐色粒を含み、何れも砂粒を含む。42の口縁部内外面は赤色顔料が付着する。色調は何れも暗褐色を呈する。47は隆帯でＳ字文が施され、隆帯上に結節沈線が付される。地文は縄文ＲＬである。48は口縁下に押圧した隆帯が一条巡る。縄文Ｌが付されている。49は隆帯で施文する。50は鉢型もしくは浅鉢と思われ口縁無文帯下に縄文ＲＬが付される。51は浅鉢で赤色顔料が付着する。52は把手で隆帯と沈線で施文されている。53は無文の口縁部である。54～56は底部で54は縄文ＬＲが施され、55は無文、56は浅鉢の無文

の底部である。胎土は何れも砂粒もしくは粗砂を含み、49、51は金雲母、50は赤褐色粒、55、56は白色粒が目立つ。色調は45が赤色、54が浅黄橙、52、55、56がにぶい橙色の他は暗赤褐色を呈する。

57～66は石器である。57は黒曜石、58はチャート、59は黒色頁岩製の石鏃である。打製石斧は数多く出土しているが大半は欠損品である。60は砂岩、61は黒色頁岩製である。凹石、磨石も多数出土しており完形品だけ掲載する。62は輝緑岩で他は輝石安山岩である。

Ｊ８Ｂ号住は、Ｊ９号住との重複部分では明瞭な壁、床面を検出できなかった。壁はＪ９号住のローム、ロームブロックを多量に混入する覆土を黒褐色土、褐色土が切り込む状況から判断し、床面は土層断面の観察によっても判然としなかった為、住居のほぼ中央と推定される位置に検出されたレンズ状(上面平担、下面凸)に堆積するロームの焼土層を炉址と判断して調査を行なった。しかし、遺物の出土状態等から考えると床より焼土層の方が若干浮いていた可能性がある。

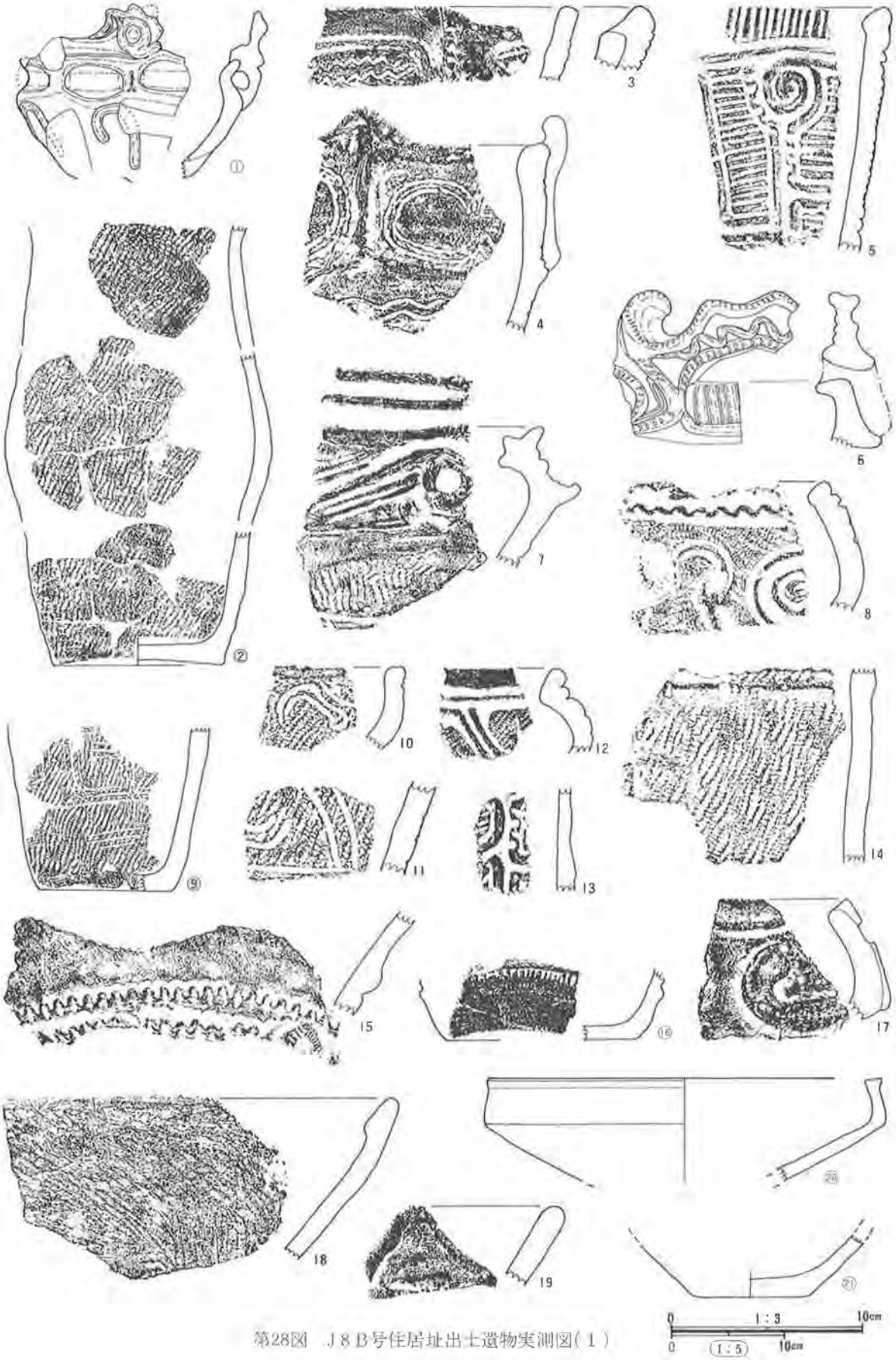
規模は東西3.2m、南北3.7m前後で楕円形を呈する可能性が強い。焼土層は中央部わずか東寄りに検出され、径40cmでほぼ円形を呈する。厚さは約５cmを測る。他の施設は検出されなかった。

遺物はＪ８Ａ号住の床面直下から覆土全体にわたって出土しているが、北半部の中央に集中して多数の土器片・石器類、南端部覆土中に人頭大を含む大小の礫が出土している。

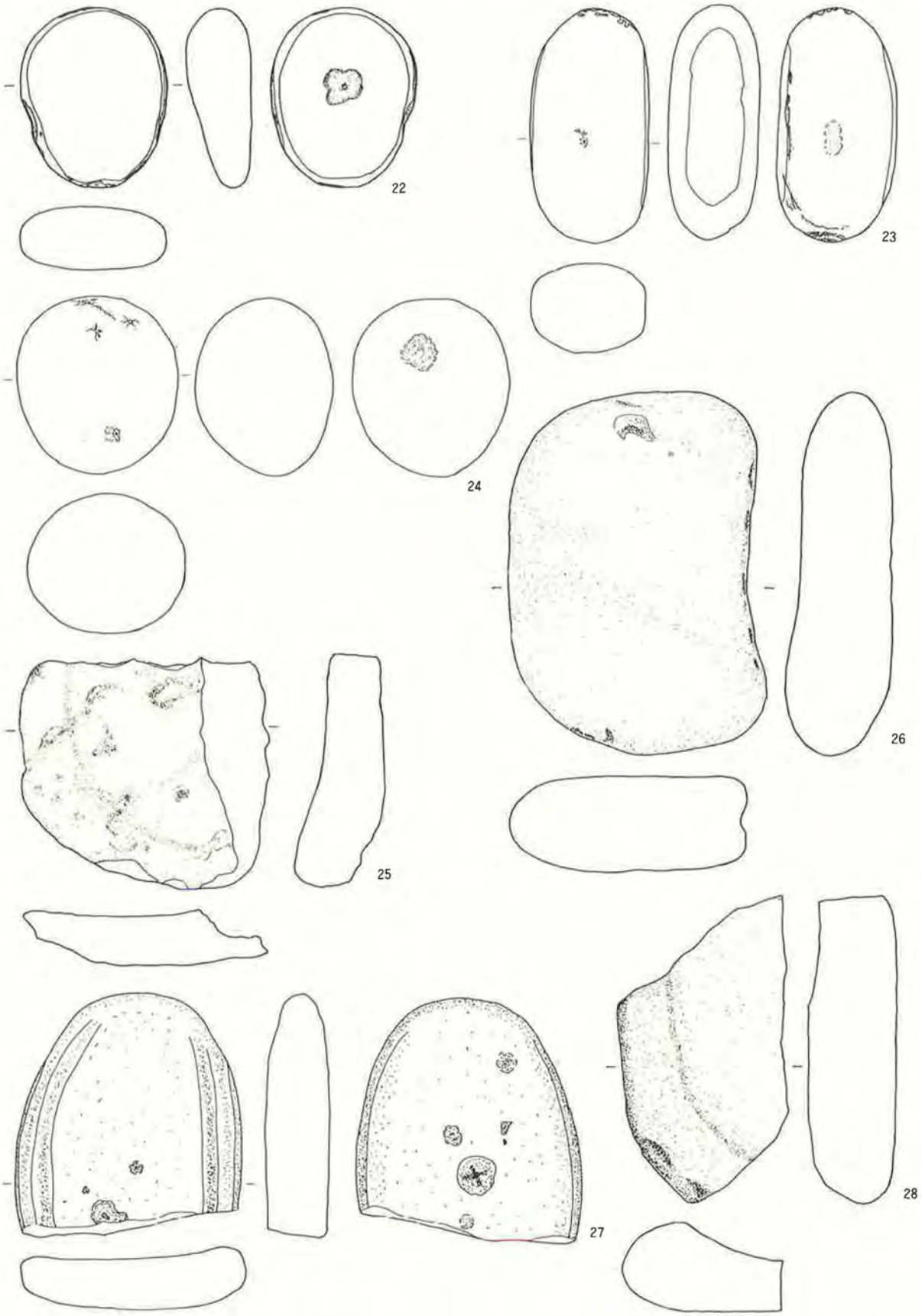
出土遺物

１は南端覆土中から出土した。器種は深鉢かどうか判然としない。口縁直下がくびれ、橋状の隆帯が付される。体部には蕨手状の低い隆帯が付される。口縁部には異形(形象？)把手が付される。地文は無文である。２は中位に張りを持つ深鉢で縄文ＲＬが施文される。北半部床面付近から出土した。３・４は小波状を呈する口縁部破片で、隆帯で区画し結節沈線・鋸歯状・波状沈線・ペン先文等が施される。５は半隆起線で区画文・渦巻文を施文し部分的に交互刺突を加える。区画内は平行沈線を充填する。６は口縁部・把手部でＪ９号住７と同一個体の可能性がある。口縁部を隆帯で区画し、縦位に半隆起線を並列させる。把手部はＳ字文を主モチーフとして隆帯で縁どり、刻みを付す。７は小波状もしくは把手が付くと思われる。鍔状隆帯で口縁部文様帯を区画し、区画内を隆帯で施文する。縄文はＲＬが付される。８は地文縄文ＲＬ上に半隆起線で施文する。口唇直下に交互刺突による鋸歯状半隆起線文、以下に円文、Ｓ字状文が付されると思われる。９は地文縄文ＬＲ上に平行沈線で区画文を施す。10・11は地文上に沈線、平行沈線が施文される。地文は10が縄文ＬＲ、11がＲＬである。12は口縁部を隆帯で肥厚させ、以下を半隆起線で区画する。区画内は縄文ＬＲ上に沈線で施文される。13は沈線で区画文等施文されている。14は頸部に微隆起帯を一巡させ縄文ＬＲを施文する。15は頸部に二段に隆帯を巡らせ、交互刺突を施こす。口縁部は無文で、胴部は隆帯で施文されると思われる。16は一条の隆起帯の下に刺突文が沿う。17～21は浅鉢で、17は幅広の隆帯で施文する。18～21は無文である。17～19には赤色顔料が付着する。胎土は砂粒の外に1･21が白色粒、2･11～13が赤褐色粒、３が片岩粒、4･16が金雲母、６～８が白色粒・赤褐色粒、９が石英大粒・白色粒、赤褐色粒、15が金雲母少・片岩多、18が片岩粒・赤褐色粒、20は赤褐色粒少量含むだけで混入物少ない。色調は１がにぶい黄橙～にぶい橙色、２がにぶい橙～暗赤褐色、3･10･15が暗赤褐色、4･8･17が橙色、５が橙～にぶい赤褐色、６が橙～極暗赤褐色、７が明赤褐色～暗赤褐色、９がにぶい赤褐～黒褐色、11が暗赤色、２が灰褐～暗赤褐色、13･16･18がにぶい橙色、19は浅黄橙～にぶい褐色、20は浅黄橙色で内面黒色処理、21は黒色を呈する。

22～24は磨石・凹石で、23は側面も磨耗により平担化している。25～28は石皿、台石で25・28の裏面にも凹みが認められる。25を除いて赤色顔料様の付着物がある。材質は23が花崗岩で他は安山岩である。



第28図　J８B号住居址出土遺物実測図（１）



第29図　J８B号住居址出土遺物実測図(２)

0　1：4　10cm

J９号住居址

東西5.6m×南北7.4mを測り、北半部が多角形状の不整な楕円形を呈する。壁高は0～60cmを測る。

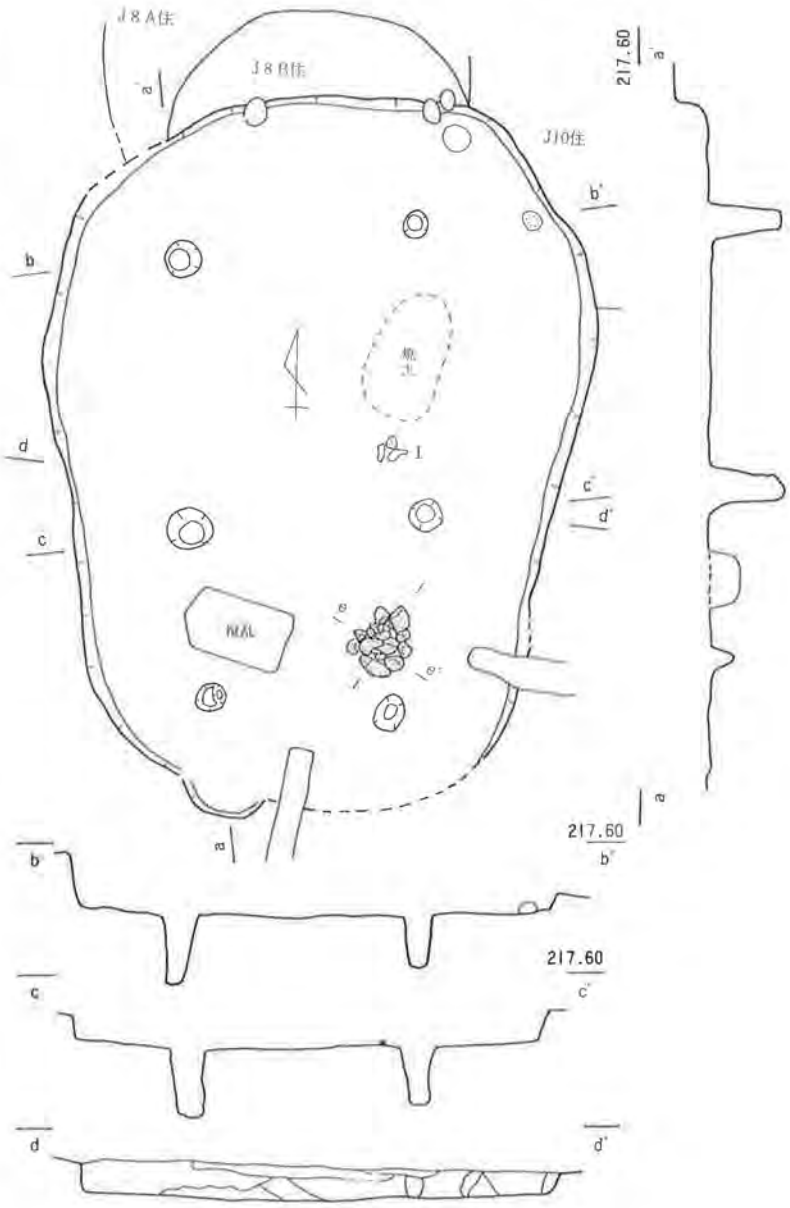
壁は直立気味に立ち上がり、上半で開く。床は比較的良好に検出できた。

覆土は中央部の床面から中位までは均質な褐色土が堆積していたが、大半は黄色ローム、ロームブロック主体の黄褐色土で覆われていた。

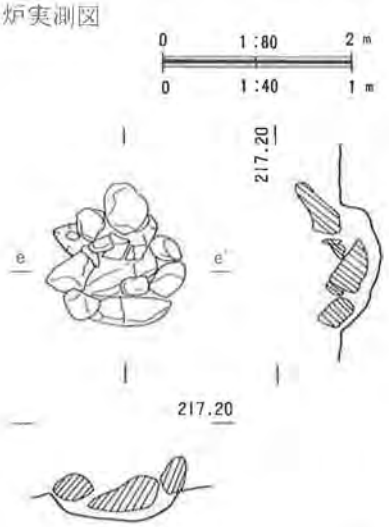
ピットは6カ所に検出されており主柱穴と思われる。北側の4本は深さ50～75cmと深いが、南側2本は35,40cmと浅くなる。南西柱穴の東に重複して径約60cm程のピットが検出されたが、本遺構に属するか判然としない。南壁西寄りの張り出し部分は、他の部分より若干高くなった南西端の床面から底面が続いており、関連する施設の可能性がある。

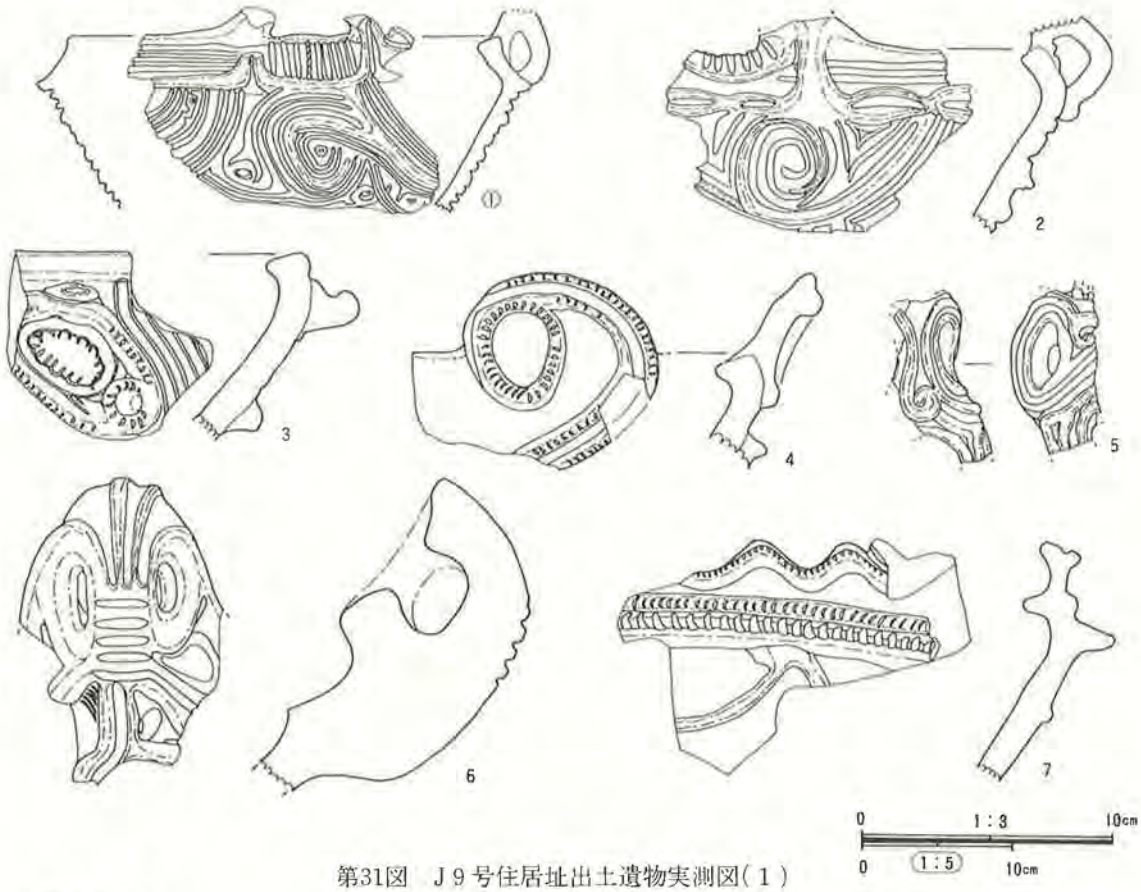
炉は北半部東寄りの床面が比較的広範囲に焼土化しており地床炉と思われるが、掘り込みは無かった。石組み遺構は位置的にみて本遺構の炉とするには不自然で、床を掘り込んではいるが、層位的にも全体的には浮いた感じがする。原位置を停めない礫は取り除いたが、検出面から浅く、耕作等の影響もあり焼土は検出されなかった。しかし、火熱を受けて脆くなった礫もあり、類例を知らないが形態的には炉と考えるのが妥当と思われる。他の遺構の重複も考えたが、検出できなかったため、本住居の炉の可能性も有るとだけしておきたい。

出土遺物の大半は覆土中から出土しているが、1は床面密着で地床炉の南から出土した。



第30図　J９号住居址実測図、炉実測図



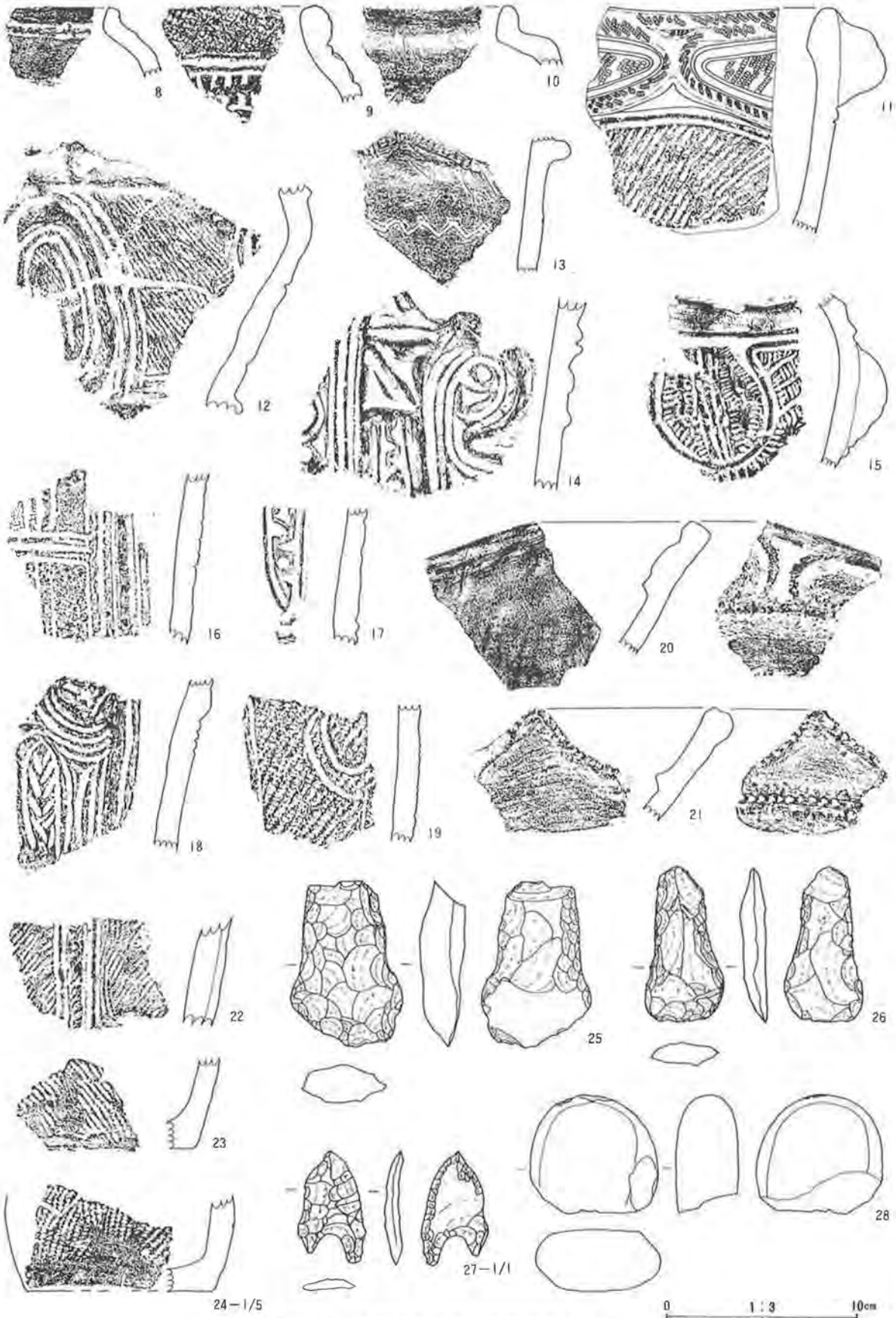


第31図　Ｊ９号住居址出土遺物実測図（１）

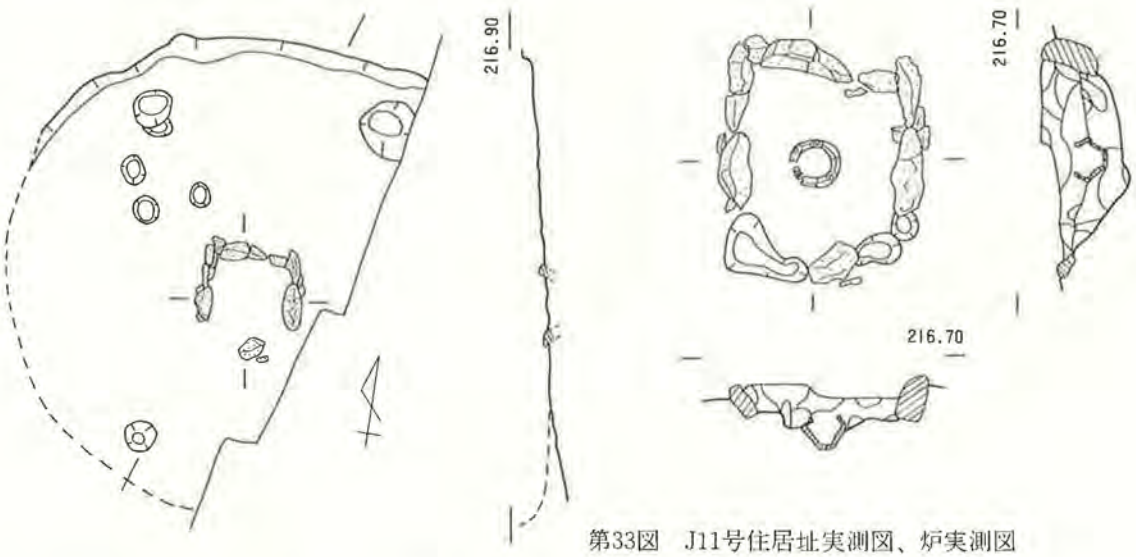
出土遺物

１は隆帯と半隆起線で渦巻文、変形玉抱き三叉文等が施文される。

口縁部に橋状の把手が付され、さらに上へ伸びると思われる。一部に刺突文も付されている。２は１と類似する若干小型の深鉢で三叉文、隆帯上の断裂沈線施文と沈線部分の押圧が加わる。内面に炭化物が付着する。３は刻みを付した隆帯、半截竹管による平行沈線・刺突文で施文される。４は把手部で隆帯に刻みが付される。５・６も把手で隆帯・半隆起線で施文される。６は実測図よりも立つ可能性がある。７はＪ８Ｂ住６と同一の個体と思われ、鍔状隆帯・隆帯・刻み目・半隆起線で施文される。８は口縁部を隆帯で肥厚させ刺突列が沿う。９は口縁の肥厚部に縄文ＬＲを施文し、以下を半隆起線で区画する。区画内は交互に鋭三角形の削り取りを行なう。10は無文である。11は隆帯と隆帯に沿う平行沈線で区画文を形成する。地文は縄文ＬＲで隆帯上にも付す。12は隆帯と平行沈線で楕円区画文を施文する。地文は縄文ＬＲで区画内、頸部には施文されない。13は刻みを付した隆帯と鋸歯状の沈線で施文される。14・17は同一個体で隆帯と半隆起線で区画文・三叉文・渦巻文等が施文される。15は隆帯及び半隆起線で区画する。頸部無文で、楕円区画内は瘤状に突出し、区画内外を沈線・平行沈線・爪形文・連続刺突文で施文する。16は隆帯で縦位区画し、縦位・横位に平行沈線で施文する。18は隆帯と沈線で区画し、矢羽根状沈線・三叉文等が施文される。19、24は地文上に沈線で施文する。地文は何れも縄文ＬＲである。20・21は浅鉢の波頂部で、20は外面無文で内面に隆帯で区画文を付す。赤色顔料が付着する。21は内外の口縁端部及び内面に隆帯が付され刻み列が施される。22は隆帯に平行沈線が沿う。地文は縄文ＬＲである。23は地文ＲＬ上を磨消する。胎土は砂粒の他に8･9･19･21は金雲母・赤褐色粒・長石・粗砂を多量に含む。7･15･16･24は赤褐色粒・白色粒、1･22は石英・白色粒、12は粗砂、白色粒、20は長石、18は粗砂、13･14は角閃石を含む。色調は1～4･7･ 11･13がにぶい赤褐色～極暗赤褐色、



第32図　J９号住居址出土遺物実測図（２）



第33図　J11号住居址実測図、炉実測図

5・6・10・12・15～20がにぶい橙～にぶい赤褐色、8・9が黒褐色、21・22がにぶい橙～橙色を呈する。

25～28は石器で25は黒色頁岩、26は砂岩？、27は黒曜石、28は輝石安山岩である。

Ｊ11号住居址

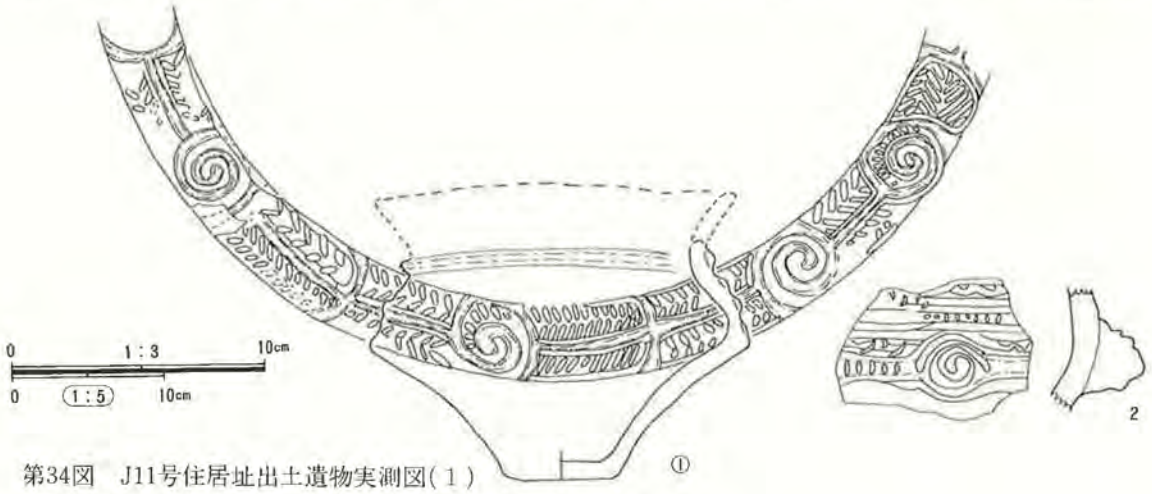
Ｆ区南端東側に位置する。東側の半分近くは村道により削平されており、南端も耕作により床面下まで削平されている。壁は北側だけがわずかに残存する。規模、形状等は不明であるが、径５m前後で円形状を呈すると思われる。床は攪乱を受けているものの比較的堅緻であった。主柱穴は壁際に位置しており、北側の２本が深さ50・55cm、南側の１本が40cmを測る。他のピットは10～15cmと浅い。

炉は扁平な山石を用いた石組炉で、外法は東西110cm、南北130cmで長方形を呈する。南辺の石組は攪乱と抜き取りにより中央の石だけ残存する。炉のほぼ中央には口縁部を欠損する浅鉢が埋設されていた。

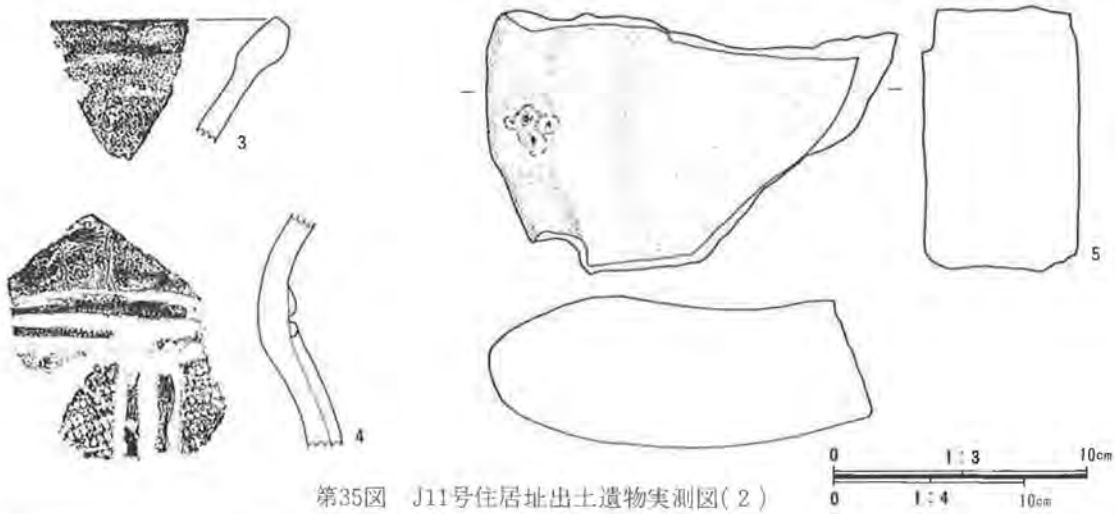
遺物は少量出土しただけであるが、炉の北側床面から数点の土器、石器が出土している。

出土遺物

１は炉内埋設浅鉢である。施文は隆帯で渦巻文、区画文を配し、区画内を沈線で施文している。２は口縁部文様帯を隆帯で区画し、沈線文、刺突文を施す。瘤状突起には渦巻文を付す。頸部は無文と思われる。３は浅鉢の口縁部で無文である。４は炉内浅鉢から出土した。２条の隆帯で胴部を区画する。地文は縄文ＬＲ



第34図　J11号住居址出土遺物実測図(１)



第35図　J11号住居址出土遺物実測図(２)

で頸部は無文である。胎土は砂粒の他に、１は白色粒・輝石・赤褐色粒、３は長石・赤褐色粒、９は白色粒を混入する。色調は１が黄橙～橙色、２がにぶい橙色、３が橙色、４が暗赤褐色を呈する。

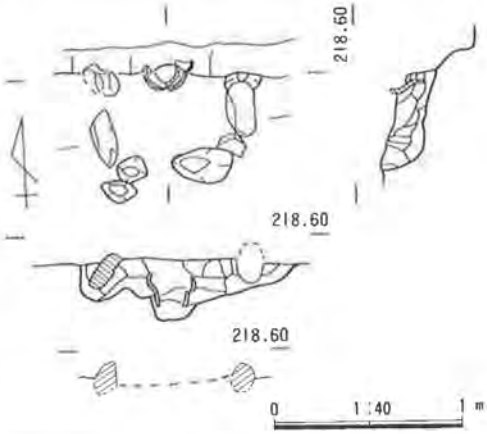
５は炉の北側床面密着で出土した石皿で、安山岩である。

Ｊ13号住居址

Ｆ区北半部南寄りに位置する。Ｆ区北半部は遺構検出面がロームまで達しておらず、調査時点で炉の周辺にロームブロックを混在する褐色土を認めたものの、地山の乱れと判断して精査を行なわなかった。後世の耕作あるいは調査時の表土剝ぎによって床面は削平されたものの掘り方の一部が残存していたものと推定される。炉の形態、遺物の時期等はＪ11号住に近似しており、柱穴等の施設が残存していた可能性がある。

炉は北半部を23・24号住によって削平されている。扁平な角礫を用いた石組炉で、南北に長い長方形を呈すると思われる。外法は東西85cmを測る。南側の石は抜き取られていた。内部に底部を欠損する深鉢が埋設されていた。

遺物は炉内埋甕以外に、周辺の遺構検出面及び23・24号住内から出土しており、本住居に帰属するものも含まれると思われる。炉内埋甕はキャリパー型の深鉢で、口縁部は隆帯と隆帯に沿う沈線で楕円区画文、渦巻文がそれぞれ６単位施文される。頸部は無文である。胴部は沈線で３単位に区画され、渦巻文等施文される。地文は縄文ＬＲである。胎土は白色粒を含み、にぶい橙色を呈する。



第36図　J13号住居址実測図、炉実測図

第37図
J13号住居址出土遺物実測図

土　坑

縄文時代の土坑は前期に属すると思われる２基を除いてＣ区、Ｆ区に10基検出されている。その全てに遺物が出土した訳ではないが、周辺の遺構、遺物の出土状況から何れも中期に属する可能性が強いと思われる。

Ｊ５号土坑

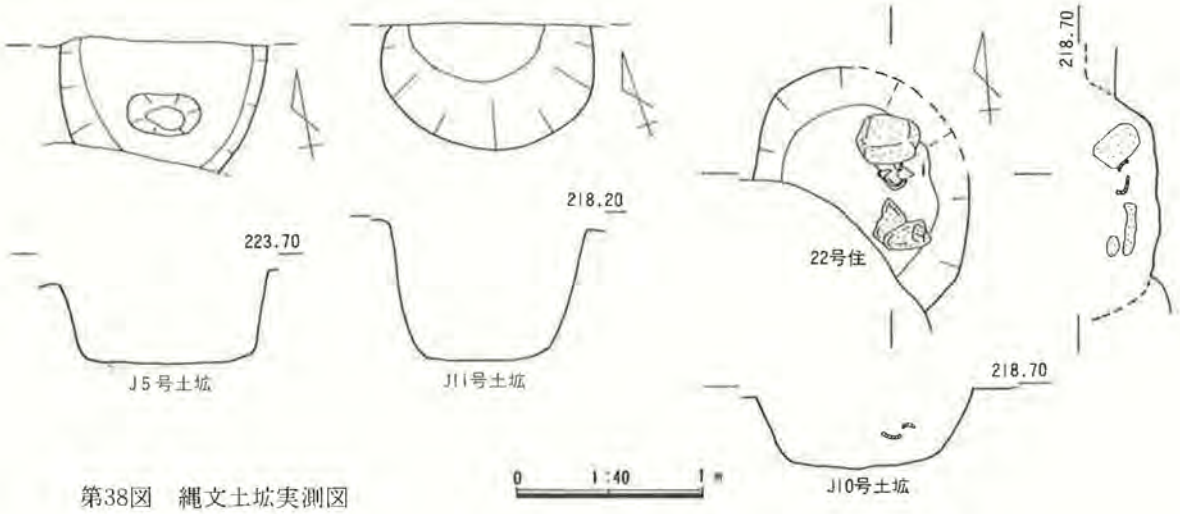
Ｃ区南端東側に位置する。中世の溝、現代の耕作により過半部を削平されている。径約１ｍで円形を呈すると思われる。底部は平担で直に立ち上がる。遺物は石皿の破片を含む一辺20cm程の角礫が３個、中央の底面密着で出土し、覆土中～上層にかけて大小の土器破片が出土した。

Ｊ11号土坑

Ｆ区中央部に位置する。北半部は現代の攪乱坑により削平されている。Ｊ５号土坑と同様に径１ｍ程で円形を呈すると思われるが、立ち上がりは幾分ゆるやかである。遺物は覆土全体に散在して打製石斧、磨製石斧、土器片が出土している。

Ｊ10号土坑

Ｆ区北半部東寄りに位置する。南西部を22号住に削平されている。長径1.4m×短径1.1mで南北に長い楕円形を呈する。壁の立ち上がりはゆるやかである。遺物は底面から若干浮き、土坑の中寄りに集中して大小の礫とほぼ完形の小型深鉢、土器片等が出土している。深鉢は大振りの礫に押し潰されるような状態で出土した。土坑墓の可能性があると思われる。



第38図　縄文土坑実測図

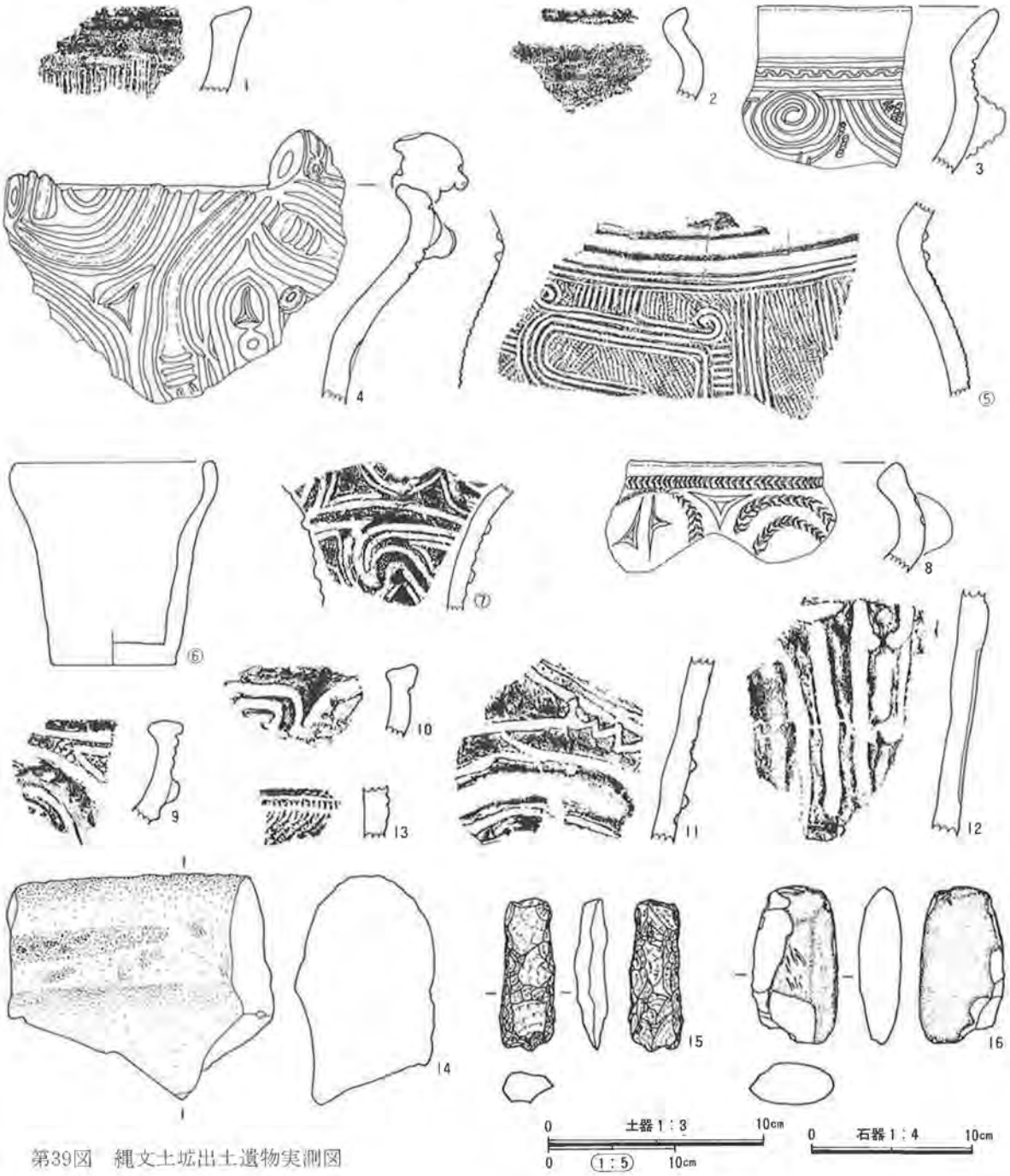
土坑出土遺物

１～５はＪ５号土坑出土遺物である。１は口縁直下無文で以下に櫛歯状工具による縦位の平行沈線が施文される。２は無文である。３は口縁部無文で、括れ部以下に半隆起線と沈線で施文する。横位の半隆起線は１本だけ交互刺突が施され鋸歯状に作出される。また瘤状隆帯を付し、渦巻文が付される。地文は縄文ＲＬである。４は隆帯と半隆起線で施文する。隆帯の所々を肥大させ碍子状に施文する。三叉文・円文等も刻される。口縁部には大小４個づつの把手が付されると思われる。５は頸部に隆帯を２条巡らせ、胴部の地文上に平行沈線で区画文、渦巻文等を施文する。地文は異束縄文と思われ、施文の方向を変えて変化を持たせている。一部分に結節部の見られる所もある。

６～13はＪ10号土坑出土遺物である。６は無文の小型深鉢で口縁部が内湾する。外面はナデ、内面はミガキが付される。７は隆帯と沈線で施文される。８は変形したペン先状工具による連続刺突で区画、施文する

瘤状突起上と区画間に三叉文が施文される。9は地文上に刻みを付した隆帯と沈線で施文する。10も隆帯と沈線で施文されるが、一部の沈線内にペン先状工具による連続刺突文が付される。11は横位の平行沈線下に縦位・横位の連続爪形刺突文が重ねて施される。地文は縄文ＬＲである。12は隆帯と沈線で区画文・鋸歯状文等が施文される。13は隆帯と幅広の沈線で施文される。胎土は1が白色粒、2が細砂少量、3が金雲母・角閃石多量、4が白色粒と赤褐色粒、5が赤褐色粒少量、8が粗砂少量、11が赤褐色粒を含み他は砂粒を含む。6は混入物がほとんど無い。色調は3がにぶい橙〜黒褐色、4が暗赤褐色、5が黒色、6がにぶい橙〜にぶい赤褐色で他はにぶい橙色を呈する。

14はＪ5号土坑出土の石皿で安山岩、15、16はＪ11号土坑出土の石斧で黒色頁岩、緑色岩類である。



第39図　縄文土坑出土遺物実測図

(3)　奈良・平安時代（古墳時代終末を含む）

1号住居址

A区北西端に位置する。北・西側は調査区域外となっている。南側に周溝を持つ住居状の遺構が重複するが、新旧関係は不明である。

東西約5.8m、南北3.6m以上を測り、深さは検出面から約50cmを測る。

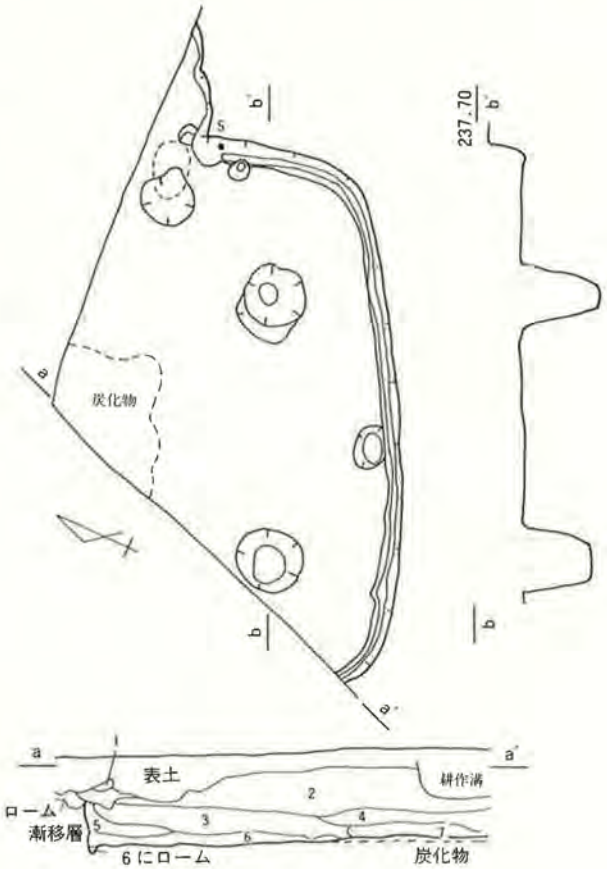
壁の立ち上がりは直で、床は全面が良好に踏み固められている。住居のほぼ中央の床面に炭化物が厚く堆積しており、壁際にも10cm弱の間層を挟んで堆積している。

壁周溝は幅、深さともに約10cm程のものが、カマド部分を除いて巡っている。

主住穴は南壁側の2本が検出され、何れも径64cm、深さ65cm前後を測るが、掘り方では主柱穴脇にも柱穴状を呈するものがあり、建て替えの可能性がある。南壁中央直下のピットの掘り込みは余り明確でないが、深さ約20cmを測る。

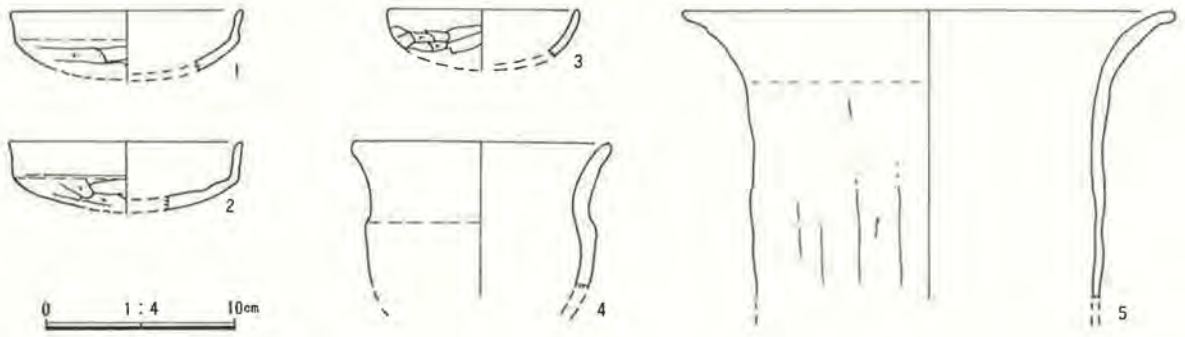
カマドは東壁に付設されている。粘土袖がわずかに残存し、前面に浅い掘り込みが認められた。燃焼部のほとんどは壁内に位置し、そこから緩傾斜で煙道が立ち上がる。煙道内にも多量のローム粘土が流れ込んでいる。

遺物は覆土中から少量出土しただけである。



土層注記
1.焼土。　2.砂質黒褐色土。　3.黒褐色土。軽石少量含む。
4.黒褐色土。ローム粒、パミス、軽石含む。　5.4に黒色土含む。
6.≒4ローム少量含む。　7.≒5ロームブロック含む。

第40図　1号住居址実測図



第41図　1号住居址出土遺物実測図

2号住居址

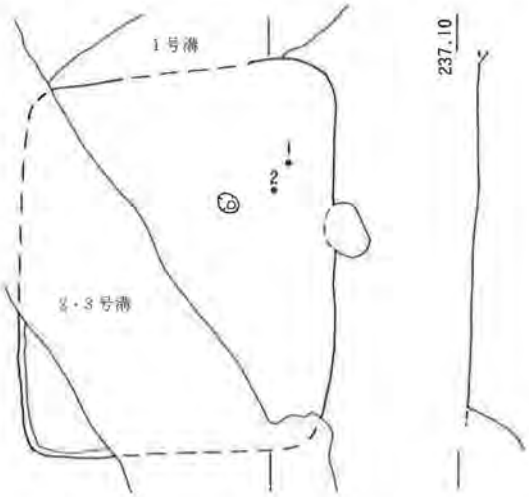
A区のほぼ中央に位置する。北西部は隅を除いて2、3号溝に、東側は1号溝に削平されている。

規模は東西3.9m、南北3.3mを測り東西に長い長方形プランを有する。壁高は北西隅で20cmを測る。壁の立

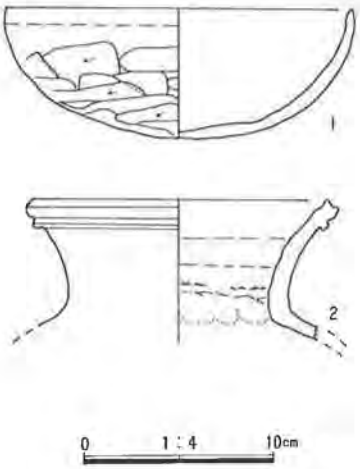
ち上がりは急で、床は良好に踏み固められていた。ピットは浅く、住居に伴うか判然としない。

東壁際の南寄り床面が焼土化しており、カマドが付設されていたと思われるが、袖、煙道等は残存していない。検出面から浅く、1号溝に削平されたこともあり、詳細は不明である。

遺物はカマド前面から南壁にかけて出土した。全て床面密着で出土したが少量である。



第42図　2号住居址実測図



第43図　2号住居址出土遺物実測図

8号住居址

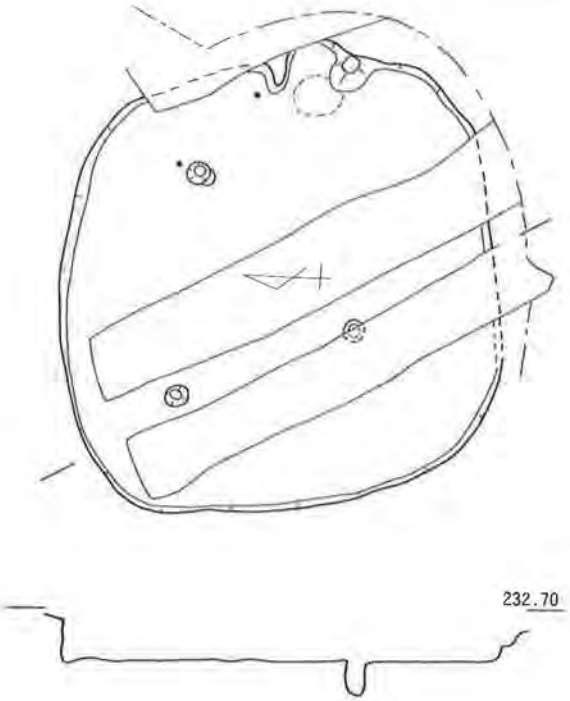
B区北半部中頃に位置する。縄文時代のJ1号住、J1号土坑と重複し、10、11号住と近接する。

東西、南北ともに約4.6mを測り、全体的に丸味を帯びた隅丸方形状を呈する。壁はほぼ直角に立ち上がり、壁高は西壁で約40cmを測る。攪乱の為に明確ではないが、南壁の中央に掘り方から続く比較的しまった土層の堆積が認められ、段状を呈しており、入口施設の可能性もある。

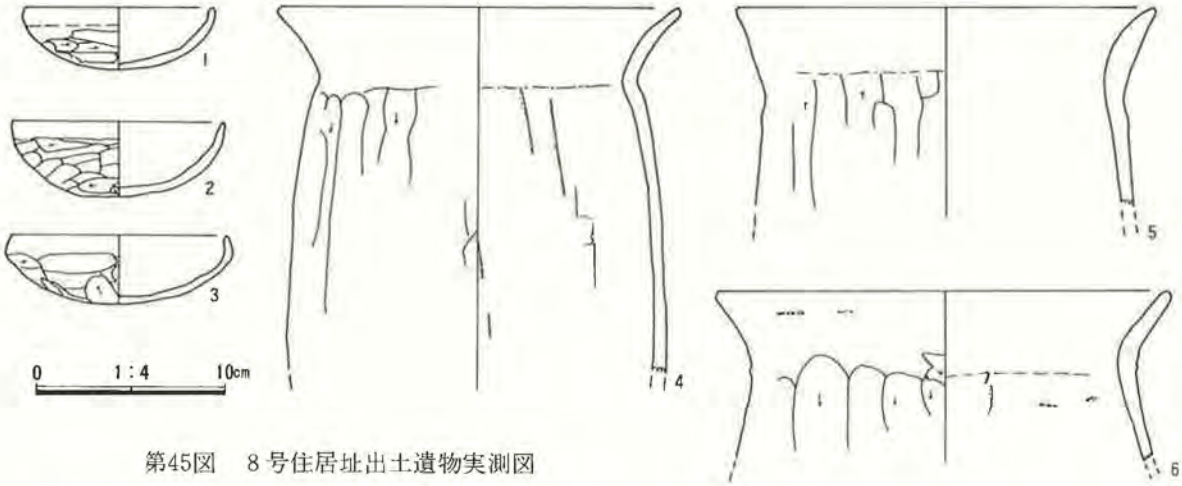
南東を除くほぼ対角線上の3カ所に主柱穴が検出されている。径25cm、深さ40～65cmを測る。

カマドは東壁のほぼ中央に付設されており、粘土袖が残存する。袖は検出面直下から斜柱状に残存し、床面では壁から35～40cmの長さを測る。袖内側と燃焼部は良好に焼けており、燃焼部幅50cm、長さ80cmを測る。煙道は耕作溝によって削平されているが、直に立ち上がると思われる。

遺物は主にカマド前面の床面から出土しているが量的には余り多くない。器種は、土師器の坏、甕がほとんどである。



第44図　8号住居址実測図



第45図　8号住居址出土遺物実測図

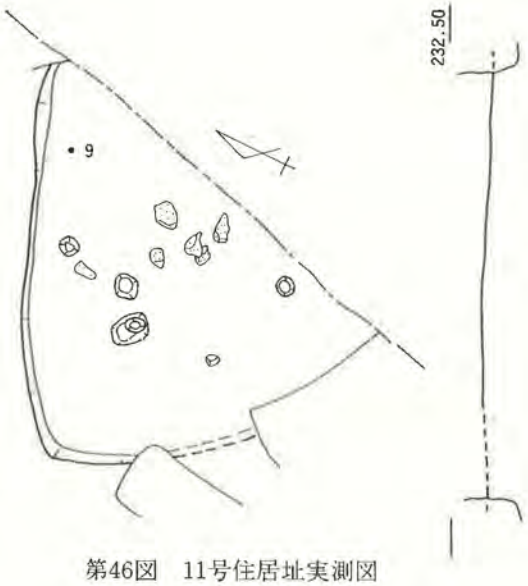
11号住居址

B区北半部のほぼ中央東側に位置する。東側の半分程は調査区域外である。8号住と近接し、12号住と重複するが新旧関係は不明である。

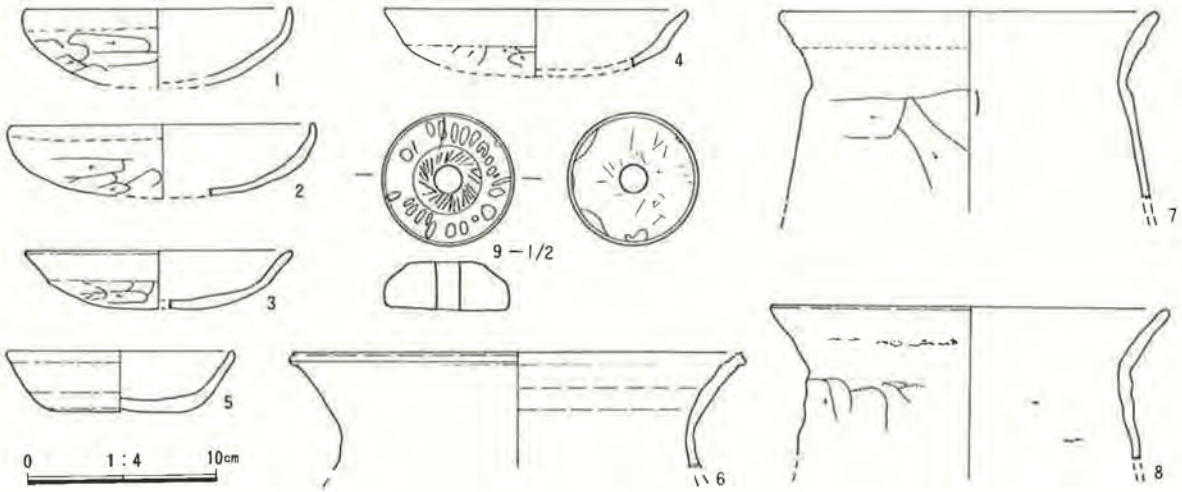
東西4.2m以上、南北3.6m以上の規模を測り、残存壁高は北壁で30cm程である。壁は直に立ち上がり、床は平担であるが、後世の攪乱等の影響もあり、余り硬くはなかった。

数基のピットが検出されたが、何れも浅く主柱穴と思われるものは無かった。

遺物は、北壁寄り東端に床から若干浮いた状態で、多量の小礫とともに石製紡錘車が出土した以外は、主に覆土中から土器片が出土しただけである。器種は土師器の坏、甕、須恵器の坏、甕等である。



第46図　11号住居址実測図

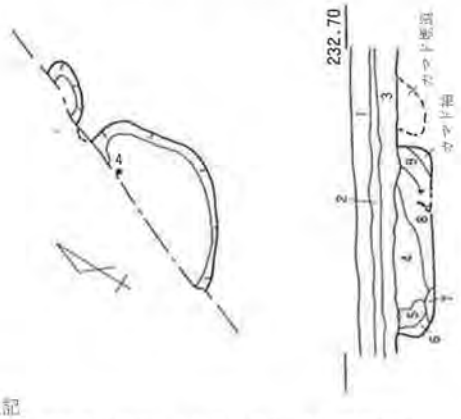


第47図　11号住居址出土遺物実測図

13号住居址

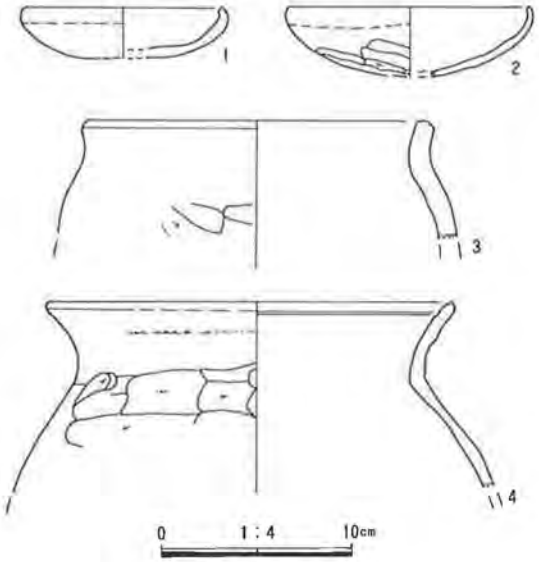
B区北半部南寄り西側に位置する。南東隅の一部とカマド煙道部だけの調査であり、詳細は不明である。深さ約40cmを測り、カマドは東壁に付設されている。詳細は不明であるが、粘土袖が残存すると思われる。

遺物はカマド袖の南に扁平な角礫が据えられ、その上に乗る状態で下半部を欠失する土師器の甕が出土しているが、他は覆土中から数点の土器片が出土しただけである。器種は土師器の坏、甕がある。



土層注記
1.表土。　2.砂質黒褐色土。　3.黒褐色土。軽石少量含む。
4.黒褐色土、ローム粒、パミス、軽石含む。　5.4に黒色土含む。　6.≒4ローム少量含む。　7.≒5ロームブロック含む。
8.4にローム粘土、焼土、炭化物。　9.8にローム粘土多量。

第48図　13号住居址実測図

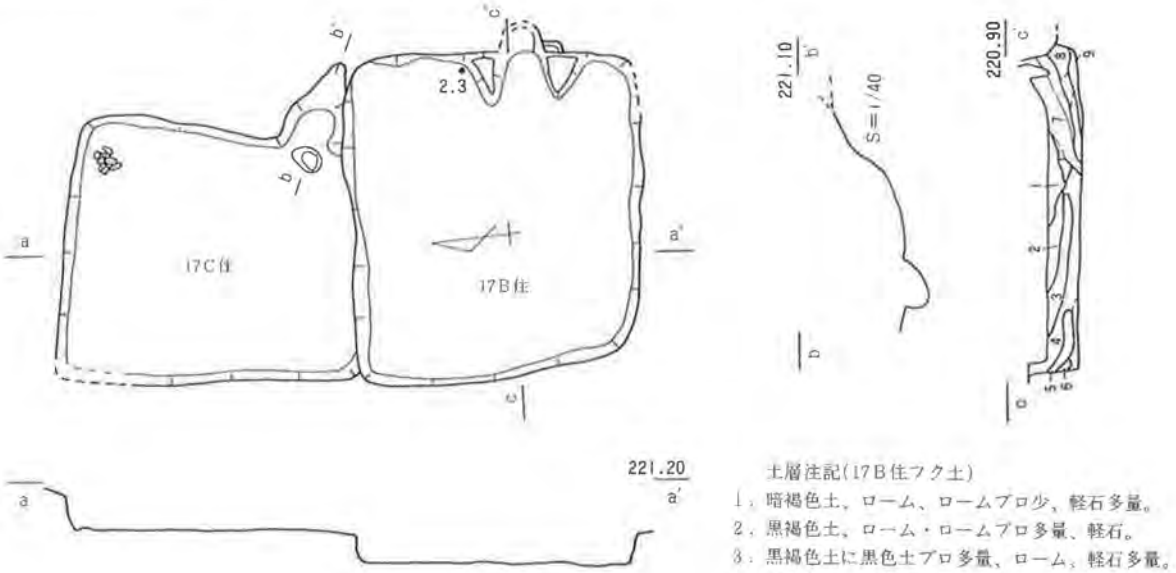


第49図　13号住居址出土遺物実測図

17B号住居址

E区北寄りに位置する。17A・C号住と重複し、18号住が南50cmに近接する。

東西3.4m、南北3.0mを測るわずかに縦長の長方形住居である。壁の立ち上がりは直で、壁高は北東隅で約70cmを測る。床面は平坦で、良好に踏み固められていた。



土層注記(17B住フク土)
1．暗褐色土、ローム、ロームブロ少、軽石多量。
2．黒褐色土、ローム・ロームブロ多量、軽石。
3．黒褐色土に黒色土ブロ多量、ローム、軽石多量。
4．黒褐色土、黒色土少量、ローム、軽石少。
5．4に黒色土ブロ多量。　6．ソフトローム。
7．ローム、ロームブロ多量、焼土粒・ブロ小量。
8．7に焼土多量。　9．炭化物、灰、焼土層。

第50図　17B・C号住居址実測図

カマドは東壁南寄りに付設され、粘土袖が残存する。袖の長さは40cm・50cmを測り、燃焼部は壁内に位置する。煙道は急角度で立ち上がり、壁外へ伸びる。カマド以外の施設は検出されなかった。

遺物は北袖脇に東壁、床と密着して土師器の坏、甕が、覆土中からは土師器の坏、甕、須恵器の蓋等の小片が少量出土した。

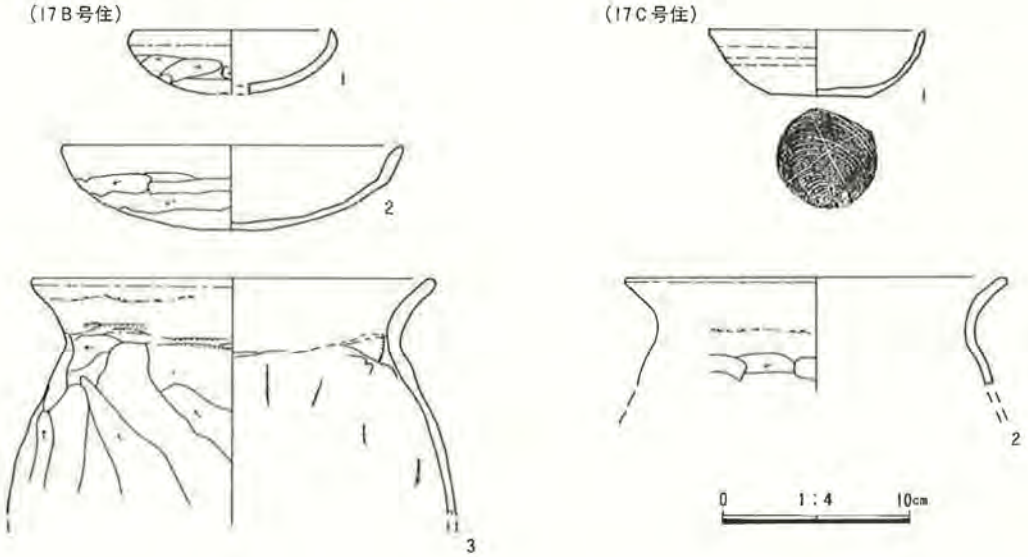
17C号住居址

17B号住の北壁上に乗る状態で検出された。重複部分は検出面から浅く、断面観察からは新旧関係が判然としなかったが、遺物、遺構形状等から17B号住より新しいと思われる。又、覆土中に17A号住の床面が検出されており、17A号住が最も新しいと思われる。

東西2.7m、南北3.2m強を測る。北壁が南壁より30cm程度長いと思われ、台形状の長方形を呈する。壁は直に立ち上がり、北壁で約40cmを測る。床面は堅緻であったが、17B号住との重複部分では軟弱であった。

カマドは東壁南端に付設されており、燃焼部が壁外に位置する形態である。焚口に小ピット(径24cm、深さ15cm)があり、燃焼部は60×50cm程の規模を測る。煙道はさらに30cm程伸びている。

遺物は北東隅の床面に長さ10cm前後の細長い河原石が8個まとまって出土した。土器は少量で、カマド、覆土中から土師器甕・須恵器坏等が出土している。



第51図　17B・C号住居址出土遺物実測図

18号住居址

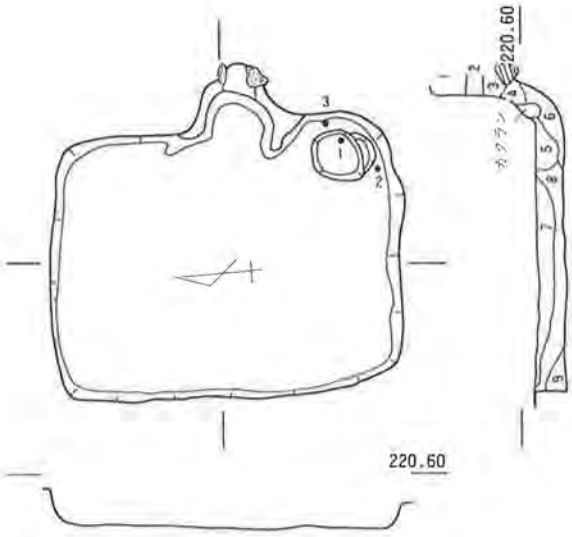
E区中頃に位置する。17B号、19号住と近接するが、重複はない。

東西2.75m、南北3.65mの規模を有し、隅丸長方形を呈する。壁は直に立ち上がり、壁高約30cmを測る。床は平担で良好に踏み固められている。

カマドは東壁のほぼ中央に付設されており、粘土袖が残存する。燃焼部は壁外へ伸び、煙道の両脇は平板な礫で補強されていた。南袖は約40cm残存するが、北袖はほとんど崩落している。燃焼部下端で約30cm壁外へ伸び、そこから煙道が急角度で立ち上がる。

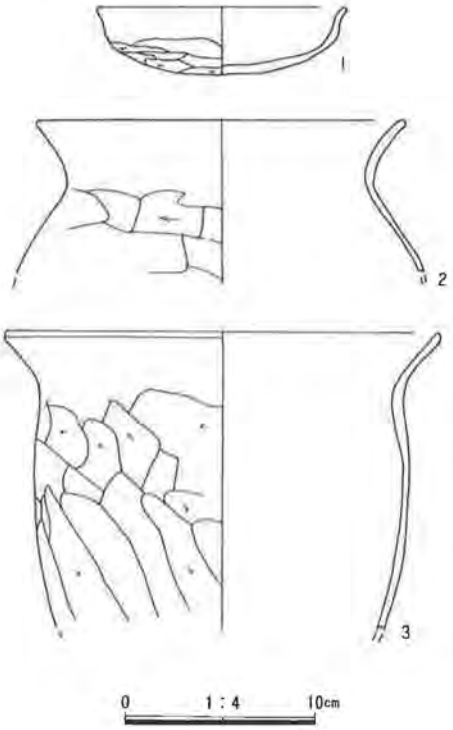
南東隅に径65×55cm、深さ約10cmのピットが検出されており、貯蔵穴の可能性がある。

遺物は貯蔵穴周辺から少量の土師器の坏、甕等が出土した。



土層注記
1～3は黒褐色土で軽石(FP)を少量含む。　4.5は黒褐色土ローム、焼土粒を少量含む。　6はロームと焼土、褐色土層。
7～9は暗褐色土で、ローム、ロームブロ、軽石(少)を含む。

第52図　18号住居址実測図



第53図　18号住居址出土遺物実測図

19号住居址

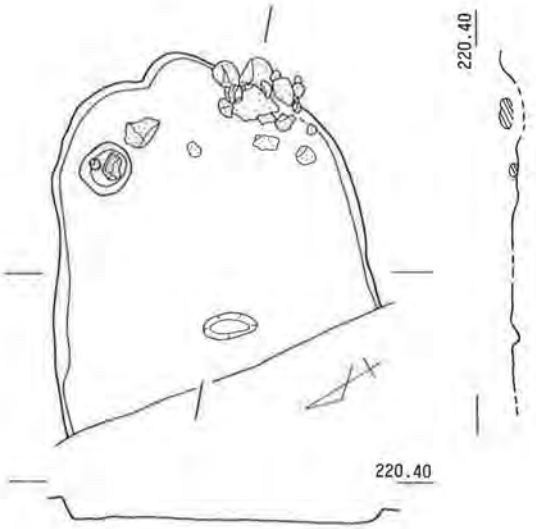
E区中頃に位置する。西端は調査区域外である。木根等の影響を受け、遺構の形状に不明な点がある。

東西3.6m以上、南北3.3m程を測るが、西方へ行くに従い幅が広がるような形状を呈している。東西に長い隅丸の長方形状を呈すると思われる。東壁の半円形の張り出しは、攪乱の可能性がある。壁は傾斜をもって立ち上がり、床は比較的軟弱である。

カマドは東壁南端に大小の礫を用いて構築されていたが、大半の礫が崩落していた。

北東隅に検出されたピットは上面に薄い貼り床状の土層堆積が認められており、貯蔵穴だった可能性もある。

遺物は、ピット内、覆土中から少量の土器片が出土しただけである。



第54図　19号住居址実測図

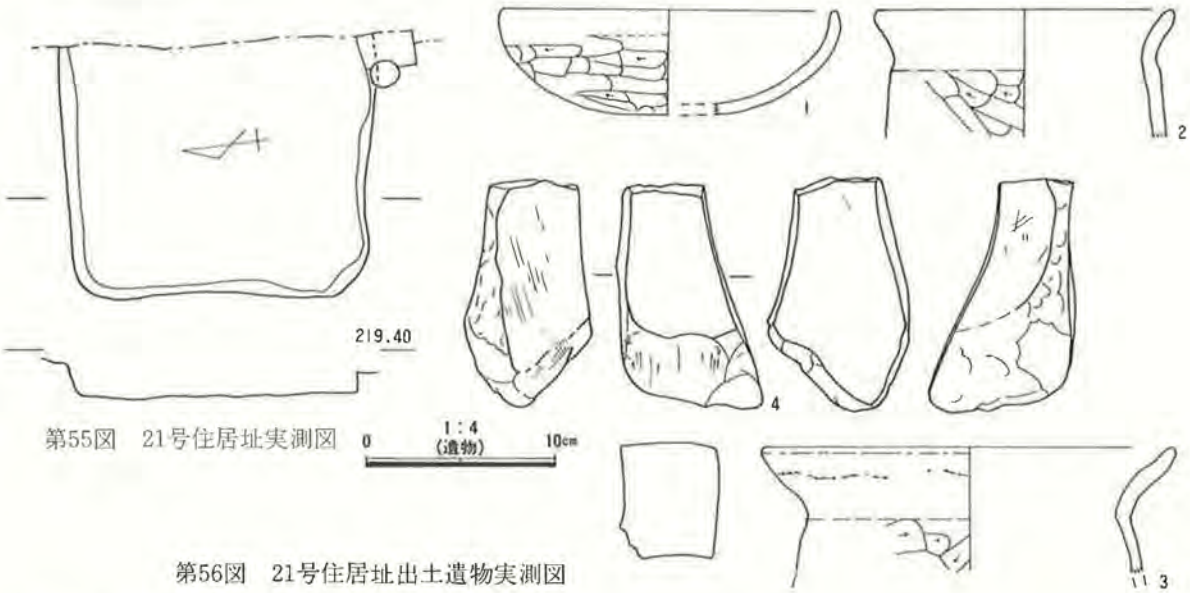
21号住居址

F区北半部に位置する。22～24号住が南に近接する。東側は道路下である。

東西2.65m、南北3.20mを測る。壁高は40cm前後である。壁は直に立ち上がる。床はあまり硬くない。

柱穴、周溝、カマド等の施設は検出されなかった。

遺物は床面下から土師器の坏が、覆土中から土器片、砥石が出土している。



第55図　21号住居址実測図

第56図　21号住居址出土遺物実測図

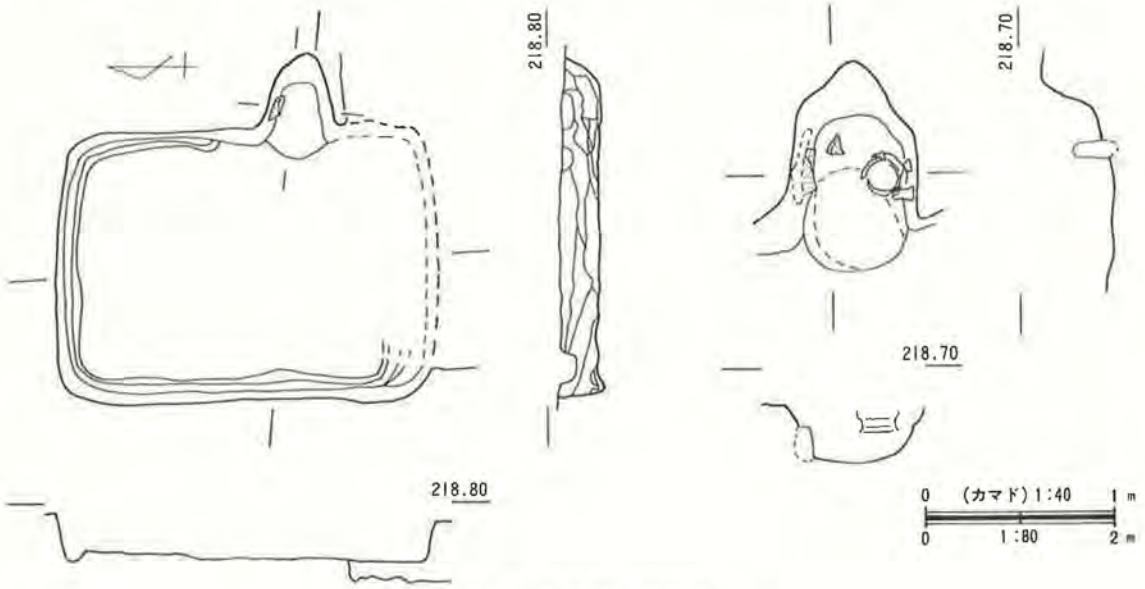
22号住居址

F区北半部に位置する。J 6号住、24号住と重複し、23号住も重複する可能性がある。21号住が北東に近接する。24号住より新しく、23号住との新旧関係は不明である。

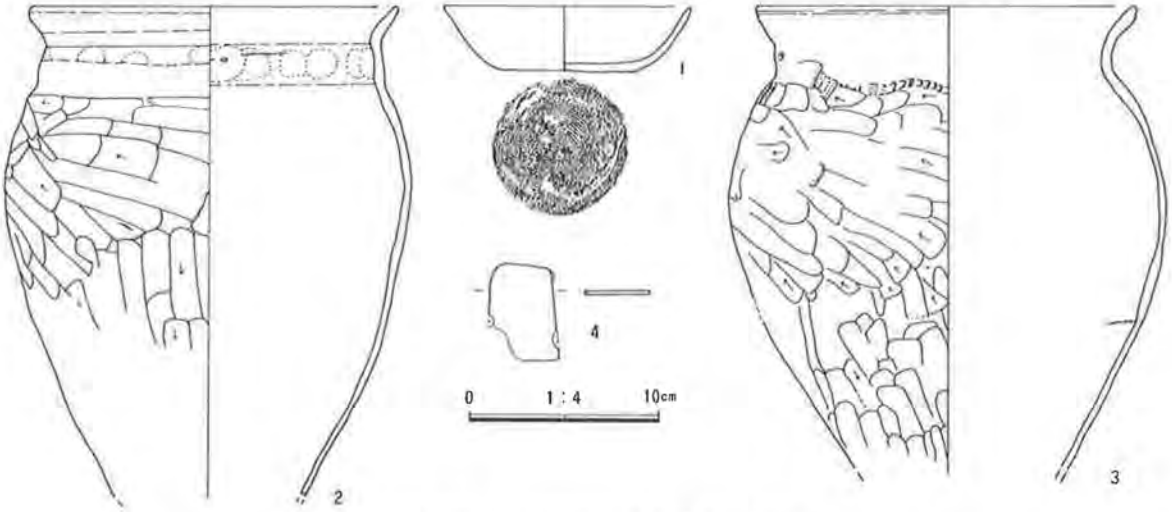
東西3.90m×南北2.85mを測り、南北に長い長方形を呈する。壁は直に立ち上がり、45cm前後の深さを有する。床面は非常に堅緻で、南半部では数枚の重なりが認められた。24号住との重複部分は余り硬くない。24号住との重複部分とカマド部分を除いて壁周溝が検出されており、幅、深さともに約10cmを測るが、南西隅では壁直下よりも内側に検出されており、壁の崩落、掘り過ぎ等の可能性もある。

カマドは東壁南寄りに付設されている。燃焼部が壁外に位置する形態であり、掘り方は方形状を呈する。燃焼部の北壁は平板な角礫で補強されており、北東隅に棒状の支脚石が立てられていた。又、南壁寄りの覆土中位に土師器の甕が逆位で出土している。燃焼部は80×60cm程の規模でさらに煙道が伸びている。

遺物は他にカマド南脇の東壁に密着して須恵器坏が、ほぼ中央の床面に土師器の甕が出土している。



第57図　22号住居址実測図



第58図　22号住居址出土遺物実測図

23・24号住居址

F区北半部南寄りに位置する。重複する2軒の住居であるが、23号住は24号住の覆土中に全体が構築されており、不明な点が多い。

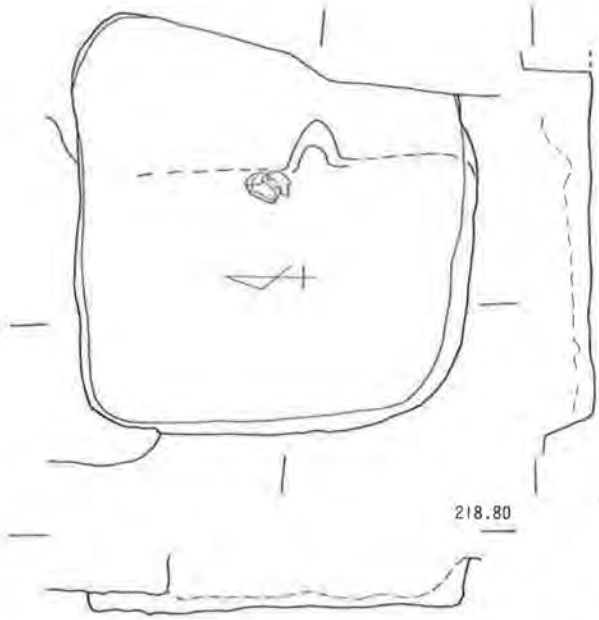
23号住は床、壁とも明瞭には検出されていないが、24号住の東側覆土上層にローム、ロームブロックが層状に堆積しており、23号住構築時に東壁の補強に用いた可能性がある。

カマドは東壁南寄りに付設されており焼土、灰等が検出されたが、規模、形状等不明である。

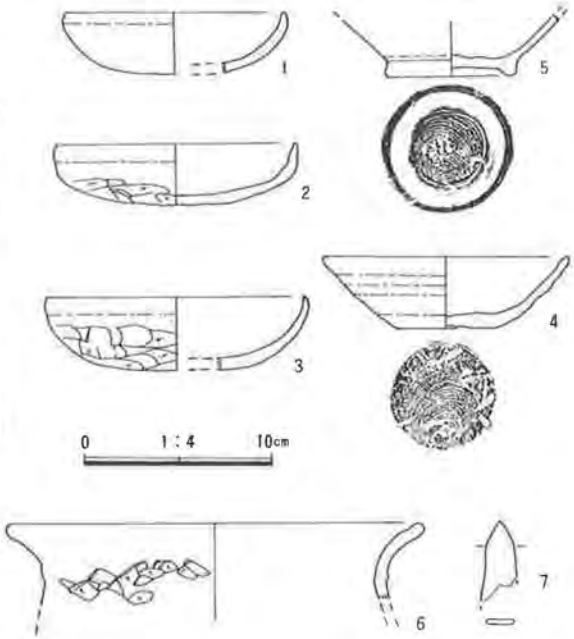
24号住は東西4.40m前後、南北4.20mを測り隅丸方形を呈すると思われる。東端は道路下に伸びている。壁は直に立ち上がるが、南壁東半部は崩落が激しい。壁高約50cmを測る。床は非常に堅緻である。

東端部の床面に焼土、炭化物、灰が検出されており、東壁にカマドが付設されているものと思われる。

遺物は覆土中から比較的多く出土したが、小破片がほとんどで、遺構への帰属が明確なものはなかった。



第59図　23・24号住居址実測図



第60図　23・24号住居址出土遺物実測図

1号掘立柱建物址

B区中頃、調査区内では竪穴住居址群の南端に位置する。14、15号住と重複し、15号住→1号掘立→14号住の新旧関係が確認されている。

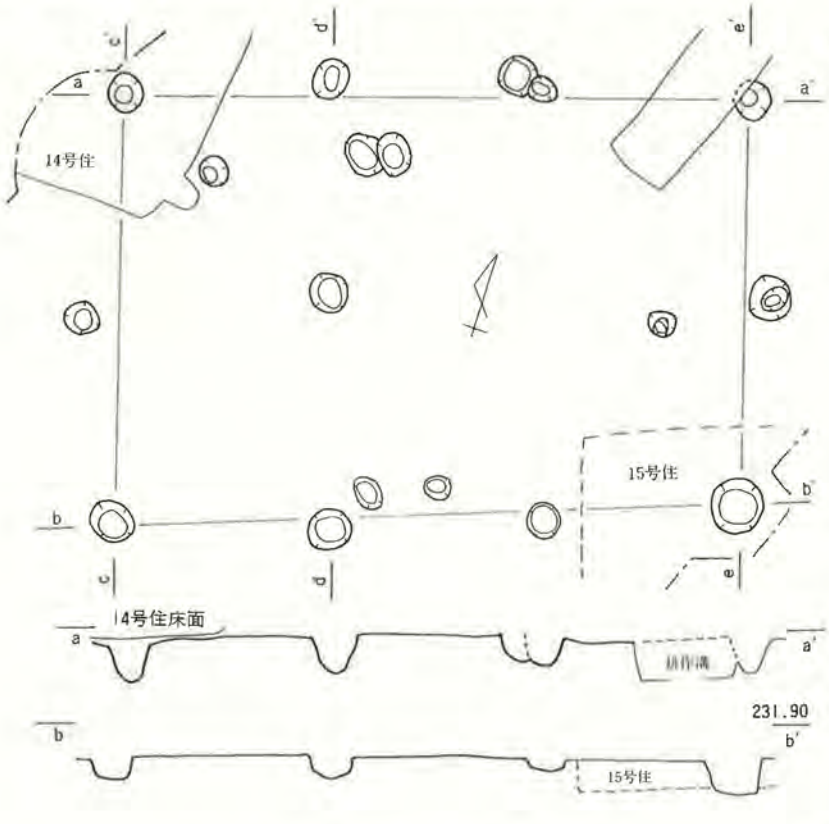
東西6.60m、南北は西辺で4.56mを測り、桁行3間、梁行2間の東西に長い建物であるが、梁行は西辺が東辺よりも約30cm長い。又、各辺の間柱は、四隅の柱穴の心々を結んだ線よりも何れも外側にずれて位置している。P_2 と P_{10} のほぼ中間にも同規模の柱穴が認められており、総柱の建物の可能性もある。

柱穴は径40～50cmを測り、円形を呈するものが多い。深さは傾斜地の為もあり12～40cmである。柱間距離は2.2～2.3m、7.5尺前後でほぼ等間隔に配置されている。覆土は軽石を含む砂質の黒色土である。

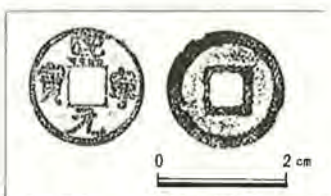
遺構の時期は、柱穴内から出土した遺物がほとんど無く、又、重複する竪穴住居もごく一部分の調査であり良好な遺物の出土が無い為明確にできないが、15号住は覆土等から出土した数点の土器片から奈良時代(前半？)の可能性が強い。14号住は検出面から浅く、形状・施設等不明であり、遺物も出土していない為に時期も判然としないが、床は5cm前後貼り床され良好に踏み固められており、比較的長期間の使用を伺せる。この床下から検出された P_1 の覆土はしまっており、床が窪んでいないことから、掘立廃絶後ある程度の時間を経て14号住が構築されたものと思われる。

遺跡内からは遺構の重複関係や廃絶サイクルに関する良好なデータが得られていないため、掘立の時期を奈良時代後半から平安時代の間という広い幅でとらえておきたい。

なお、掘立周辺から同様の覆土を有する多数のピットが検出されており、そのうちの1基から古銭が出土しているので参考までに紹介したい。このピットは掘立の西側約2.5mに位置し、径30cm、深さ70cmを測る。古銭はこのピットの覆土中位から数点の土器小片とともに出土している。



第61図　1号掘立柱建物址実測図



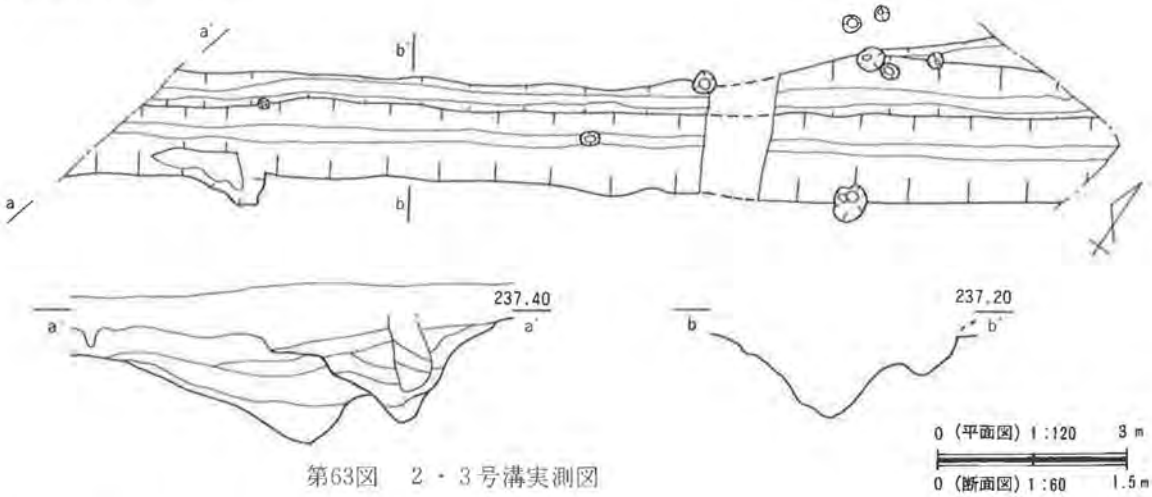
第62図　1号掘立周辺ピット出土遺物拓影

2・3号溝

A区に位置する。重複する2条の溝であるが、走向が全く同様であり、掘り替えを行ったものと思われる。2号、4A・B号住と重複し何れよりも新しい。1号住が近接する。

走向は地形に沿って東西方向を示し、長さ16m程の範囲を調査した。断面形は何れもV字状を呈する。2号溝は上端幅80cm、深さ40cm前後を測る。3号溝は上端幅140cm、深さ70cm前後を測り、2号溝との底面の比高差約30cmである。覆土は何れも軽石混じりの黒褐色土であるが、3号溝は全体的にロームを少量混入して赤味を帯び粘性を有していた。2号溝は黒色に近く砂質であった。

遺物は3号溝の東半部上層から多量の扁平な円礫が出土したが、土器は少量破片が出土しただけである。土器片の時期は奈良時代に属するものが多かったが土師質高台付椀も出土しており、遺構の時期は平安時代後半に属すると思われる。



第63図　2・3号溝実測図

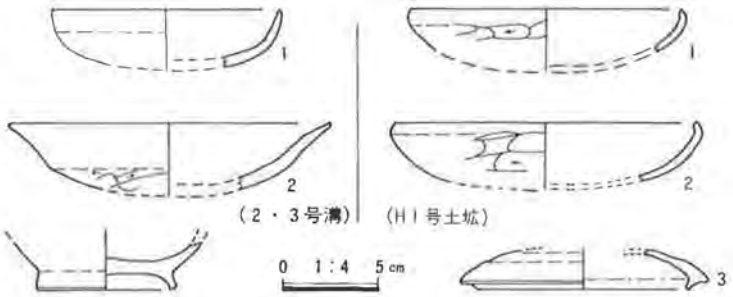
H1号土坑

E区南端に位置する。奈良時代の20号住が北東に、平安時代の19号住が北方に近接している。

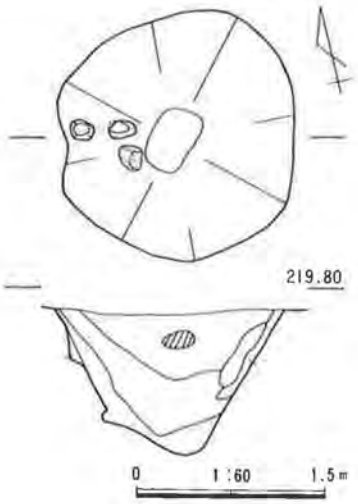
径約1.8mでほぼ円形を呈する。深さは検出面から1.1mを測り、断面形はV字状を呈する。西壁には浅いピットが2基穿れている。覆土は軽石混じりの黒褐色土で、下層には粘質白色ロームが流れ込んでいた。

遺物は覆土の中、上層から大振りな河原石、小石が出土したが、土器は覆土中から少量の破片が出土しただけである。

遺構の時期は判然としないが、覆土、遺物等から奈良時代に属する可能性が強いと思われる。



第65図　2・3号溝、H1号土坑出土遺物実測図



第64図　H1号土坑実測図

平安時代出土遺物観察表

番号	器種	出土位置 残存状態	法量(cm)	胎土・色調	器形・成・整形の特徴	備考
1号住居址						
1	坏 (土師器)	フク土 破片	口：(12.2)	砂粒、赤褐色粒、 橙色	体部から稜を経て口縁部が外反ぎみにほぼ直立する。体部外面ヘラケズリ、他はヨコナデ。	
2	坏 (土師器)	フク土 破片	口：(12.1)	赤褐色粒少量 にぶい赤褐色	稜は丸味をもち、口縁部はわずか外傾する。 体部外面ヘラケズリ、他はヨコナデ。	夾雑物ごく少ない。
3	坏 (土師器)	フク土 破片	口：(10.1)	細砂粒少量 橙色	稜はわずかで、口縁部は内湾して立つ。 体部外面ヘラケズリ、他はヨコナデ。	
4	小型甕 (土師器)	フク土 破片	口：(13.6)	砂粒多量 にぶい赤橙色	口縁部は幅広くゆるやかに外反する。 胴部内面ナデ、他は剥落の為不鮮明。	
5	長胴甕 (土師器)	カマド袖脇 (床上14cm) ¼	口：26.0 胴：18.8	砂粒、赤褐色粒 灰褐色	筒形の胴部から口縁部が大きく外反する。 口縁部：内外面ヨコナデ、胴部：外面縦ヘラケズリ、内面横方向ナデ。	胴部外面に多量に焼土が付着する。
2号住居址						
1	埦 (土師器)	南壁寄り床直 ½強	口：18.4 高：6.8	砂粒 にぶい橙色	全体的に丸味を帯びる。内面：ヨコナデ、外面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ。	口縁部内面に剥落目立つ。
2	甕 (須恵器)	南壁寄り床直ほぼ完存	口：16.4	黒色粒 灰色	口縁部は外反し、口唇下に隆帯が貼付される。胴部内面ナデ、頸部内面ユビオサエ痕、他は内外面とも回転ナデ。	内面の数ヵ所に接合痕が残る。
8号住居址						
1	坏 (土師器)	カマド袖北床直 ½	口：10.0 高：3.2	砂粒 橙色	口縁部が短かく立つ。 体部外面ヘラケズリ、他はヨコナデ。	外面に火を受けた痕がある。
2	坏 (土師器)	カマド前面床直 一部欠損	口：11.1 高：3.9	細砂粒、粗砂少 にぶい橙色	深い体部から口縁部が短かく立つ。 体部外面ヘラケズリ(体部外面も器面は滑らかで、ケズリの稜は不明瞭である。)：他はヨコナデ、ナデ。	外面に煤付着。 体部外面上半部のケズリは波打つ。
3	坏 (土師器)	北東柱穴脇床直 ½	口：11.3 高：3.6	砂粒、小礫 橙色	口縁部は短かく内傾する。 体部外面ヘラケズリ、他はヨコナデ。	体部外面に火熱を受ける。
4	甕 (土師器)	南壁際ノク土 ¼弱	口：(21.2)	粗砂、小礫多 にぶい赤褐色	張りの少ない胴部から口縁部が外反する。 口縁部：内外面ともナデ、胴部：外面縦ヘラケズリ（後下半部ナデ？）内面横方向ナデ。	内外面に煤付着。
5	甕 (土師器)	西側柱穴間床直 ⅙	口：(22.0)	粗砂、白色粒多 赤褐色粒 にぶい橙色。	張りのない胴部から口縁部が肥厚し、わずかに外反する。口縁部内外面ヨコナデ、胴部外面縦ヘラケズリ、内面横方向ナデ。	
6	甕 (土師器)	西側柱穴間床直 ⅙	口：(24.0)	砂粒、黒色微粒、 橙色	張りの少ない胴部から口縁部が外反する。 口縁部内外面ヨコナデ、胴部外面縦ヘラケズリ。 内面ナデ。	
11号住居址(1)						
1	坏 (土師器)	フク土 ⅕	口：(14.2)	砂粒 にぶい橙色	外面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ。 内面：口縁部ヨコナデ、体部ヨコナデ。	体部内面に砂粒脱痕あり。

番号	器種	出土位置 残存状態	法量(cm)	胎土・色調	器形・成・整形の特徴	備考
11号住居址(2)						
2	坏 (土師器)	フク土 ⅙	口：(16.2)	粗砂 橙色	外面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ。 内面：口縁部ヨコナデ、体部ヨコナデ、ナデ。	体部外面荒れている。
3	坏 (土師器)	フク土 ⅙	口：(14.0)	砂粒、黒色鉱物 にぶい橙色	この種の坏では小型で口縁部は短かく外反する。 体部は外面ヘラケズリ、他はヨコナデ。	体部外面に黒斑
4	坏 (土師器)	フク土 破片	口：(16.0)	砂粒、赤褐色粒 橙色	外面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ。 内面：口縁部、体部ともヨコナデ。	
5	坏 (須恵器)	床上5cm ¼	口：12.0 低：6.8 高：3.2	白色粒多、黒色粒含む。 灰色	口縁部直線的に開く。 右回転ロクロ成形。底部回転ヘラケズリ後ナデ、底部周縁ヘラ調整。他は回転ナデ。	
6	甕 (須恵器)	フク土 ⅙	口：(24.0)	白色粒多、黒色粒含む 灰色	口唇部に沈線が一条入る。 口縁部：内外面とも回転ナデ。 頸部：内外面ともナデか？	自然釉付着（内外面）
7	甕 (土師器)	床上5cm ⅕	口：(21.0)	細砂粒、白色粒 にぶい橙色	張りのない肩部から口縁部が外傾する。 口縁部：内外面ともヨコナデ。胴部：外面縦方向ヘラケズリ、内面ナデ。	口縁部外面中位に接合痕が認められる。
8	甕 (土師器)	床上5cm ¼	口：20.0	細砂粒 橙色	胴部はわずかに膨みを持つ、口縁部は肩部の段を経てわずかに外傾する。口縁部内外面ヨコナデ。 胴部：外面横、斜方向ヘラケズリ、内面ナデ。	口縁部事位に内外面とも接合痕が認められる。
14号住居址						
1	坏 (土師器)	フク土 ⅙	口：(11.0)	砂粒少量 にぶい褐色	比較的浅い体部から口縁部が短かく内湾する。 体部外面ヘラケズリ、他はヨコナデ。	内外面とも砂粒脱痕が多い。黒斑
2	坏 (土師器)	フク土 ⅓	口：13.0	砂粒 橙色	口縁部は内湾気味に短かく立つ。 体部外面：上半部ナデ、下半部ヘラケズリ。他はヨコナデ。	体部外面上半部粘土のめくれが目立つ
3	甕 (土師器)	フク土 破片	口：(18.4)	細砂粒、黒色鉱物、赤褐色粒、浅黄橙色	器壁厚く、口縁部が短かく外傾する。 外面：口縁部ヨコナデ、体郎ヘラケズリ後ナデ？ 内面：口縁部、胴部ともヨコナデ。	口縁部内面に煤付着する。
4	甕 (土師器)	床直の礫に乗る。 口縁完存、胴部½	口：21.6	砂粒多、粗砂少 赤褐色粒含む。 にぶい橙色	丸味を帯びた胴部から口縁部がゆるやかに外反。 外面：口縁部ヨコナデ、胴部（肩部）横ヘラケズリ。 内面：口縁部ヨコナデ、胴部ヨコナデ。	特に口縁部内面は荒れている。
17b号住居址						
1	坏 (土師器)	フク土 ⅓	口：11.0 高：(3.3)	砂粒、赤褐色粒 にぶい橙色	丸味を帯びた深めの体部から口縁部が短かく内湾。体部外面ヘラケズリ、他はヨコナデ。	内面に砂粒脱痕。外面に黒色付着物。
2	坏 (土師器)	北袖脇床直 ¾	口：18.0 高：4.4	細砂粒、小礫少 橙色	扁平ではあるが丸味のある体部から口縁部がわずかに外反気味に開く。 体部外面ヘラケズリ、他はヨコナデ。	口縁部外面に黒斑内、外面にタール状付着物
3	甕 (土師器)	北袖脇床直 ⅗	口：21.4	砂粒 にぶい橙色	丸味を帯びた口縁部が外傾。 外面：口縁部ヨコナデ、胴部上半横・斜ヘラケズリ。 内面：口縁部ヨコナデ、胴部ナデ。	口縁部外面上半に接合痕。内外面に煤付着。

番号	器　種	出土位置 残存状態	法　量(cm)	胎土・色調	器形・成・整形の特徴	備　　考
17C号住居址						
1	坏 (土師器)	カマド、フク土 ¾	口：11.4 底：5.2 高：3.4	粗砂少、白色粒、(黒色粒)オリーブ黒色	小さな底部から体部が内湾して立ち上がる。右回転ロクロ成形。底部回転糸切り無調整。他は内外面とも回転ナデ。	底部に「×」印の線刻
2	甕 (土師器)	カマド 破片	口：(20.2)	砂粒 にぶい橙色	器壁薄く、口縁部は比較的強めに外反する。 外面：口縁部ヨコナデ、胴部（肩部）横ヘラケズリ。 内面：口縁部ヨコナデ、胴部ヨコナデ、胴部ナデ。	口縁部下半に接合痕
18号住居址						
1	坏 (土師器)	貯蔵穴 ½	口：13.0 高：3.5	砂粒、粗砂粒 にぶい赤褐色	浅い体部から口縁部が直立気味に外反する。 外面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ。 内面：口縁部ヨコナデ、体部ヨコナデ、ナデ。	内、外面にタール状付着物
2	甕 (土師器)	床直 ¼	口：19.4	砂粒、赤褐色粒 橙色	胴部は丸みを持ち口縁部は外反する。 外面：口縁部ヨコナデ、胴部（肩部）横ヘラケズリ。 内面：口縁部ヨコナデ、胴部ナデ。	肩部に焼成後の円孔があるが、意識的かどうかは不明
3	甕 (土師器)	床直 ¼	口：23.0	砂粒、白色粒 にぶい橙色～橙色	胴部は上半で張りを持ち、口縁部は内湾気味に外傾。 外面：口縁部ヨコナデ、胴部横・斜ヘラケズリ。 内面：口縁部ヨコナデ、胴部ナデ、横ナデ。	割れてから火を受けている。
21号住居址						
1	坏 (土師器)	床下土坑 ¼	口：18.0 高：(5.4)	砂粒、 にぶい橙色	深い体部から丸味に沿って口縁が立つ。 体部外面ヘラケズリ、他はヨコナデ。	
2	甕 (土師器)	フク土 ⅙	口：(16.0)	砂粒、石英 にぶい橙色	器厚はほぼ一定で、張りのない胴部から口縁部が外傾する。外面：口縁部ヨコナデ。外面：口縁部ヨコナデ、胴部斜ヘラケズリ。内面：口縁部ヨコナデ、胴部ナデ。	
3	甕 (土師器)	フク土 ¼	口：22.0	砂粒、赤褐色粒 にぶい橙色。	口縁部は下半が外反し、上半は内湾する。 外面：口縁部はヨコナデ、胴部横・斜ヘラケズリ。 内面：口縁部ヨコナデ、胴部ナデ。	口縁部外面上半に接合痕が目立つ。
22号住居址						
1	坏 (須恵器)	カマド南脇壁面密着。一部欠損	口：12.9 底：7.0 高：3.4	白色粒、黒色粒 灰色	体部が内湾しながら立ち上がり、口縁部でわずかに外反する。右回転ロクロの成形。底部回転糸切り未調整。他は回転ナデ。	器形全体が歪んでいる。黒色鉱物の発泡がみられる。
2	甕 (土師器)	カマド 一部欠損	口：19.5 胴：21.5	砂粒、赤褐色粒 橙色	口縁部下半は内湾ぎみにほぼ直立し、上半は段を経て内湾気味に外傾する。外面：口縁部ヨコナデ胴部上半横・斜ヘラケズリ、下半縦ヘラケズリ。内面：口縁部下半と頸部はユビオサエ、口縁部ヨコナデ、胴部ナデ。	口縁部外面に黒色付着物。
3	甕 (土師器)	西壁寄り床直 口縁部完存 胴部¾	口：20.0 胴：22.8	砂粒、赤褐色粒 黒色粗粒 橙色	2に比して肩部に張り、丸味を持つ、口縁部下半はわずかに外傾し、上半が内湾ぎみに開く。 外面：口縁部ヨコナデ、胴部上半横・斜、下半縦ヘラケズリ。内面：口縁部ヨコナデ、胴部ナデ、口縁部内面のヨコナデはハケメ状を呈する。	口唇直下外面に沈線が一条巡る。上端のヘラケズリは波打つ。胴部外面下半に煤

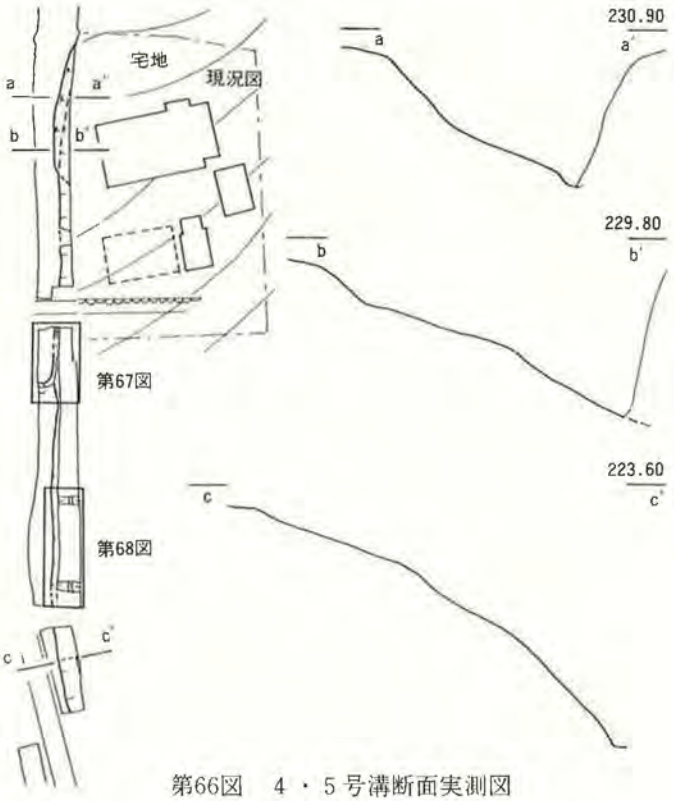
番号	器　種	出土位置 残存状態	法　量(cm)	胎土・色調	器形・成・整形の特徴	備　　考
23・24号住居址						
1	坏 (土師器)	フク土 ¼	口：12.0	砂粒 にぶい橙色	外面：口縁部ヨコナデ、体部周縁ナデ、体部ヘラケズリ。内面：ヨコナデ。	
2	坏 (土師器)	フク土 ½	口：13.0 高：3.2	砂粒、橙色	浅い体部から口縁部が内湾して立つ。外面：口縁部ヨコナデ、体部周縁ナデ、体部ヘラケズリ。(ケズリは波打つ) 内面：ヨコナデ。	
3	坏 (土師器)	フク土 ⅓	口：14.0	砂粒、黒色粒 橙色	外面：口縁部ヨコナデ、体部周縁ナデ、体部ヘラケズリ。内面：ヨコナデ。	体部外面に黒斑
4	坏 (須恵器)	フク土 ⅚	口：13.0 底：5.2 高：3.8	砂粒、白色粒とも少量 灰黄褐色	小さな底部から口縁が内湾気味に開く。 左回転ロクロ成整形、回転糸切り後調整か？。他は回転ナデ。	半還元炎焼成 外面に煤付着
5	高台付椀 (須恵器)	フク土 底部完存 体部一部	高台：6.9	粗砂、白色粒 灰色	高台接地面は平らで、わずかに外側が上がる。左回転ロクロ成形。回転糸切り後高台貼付、後接合部回転ナデ。体部内外面回転ナデ。	
6	甕 (土師器)	フク土 ¼	口：22.0	砂粒	口縁部は下半で外反し、上半で内湾気味に開く。 口縁部内外面ヨコナデ、胴部外面ヘラケズリ。	頸部外面にヘラ痕が目立つ。
2、3号溝						
1	坏 (土師器)	フク土 ¼	口：12.2	砂粒 にぶい橙色	外面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ、体部周縁ナデ。内面は剝落しており不鮮明。	
2	坏 (土師器)	フク土 破片	口：(17.0)	砂粒、粗砂 橙色	口縁部は幅広く、外反する。 体部外面ヘラケズリ。他はヨコナデ。	
3	高台付椀 (須恵器)	フク土 底部～体下部	底：7.4	粗砂少量 灰色	右回転ロクロ成整形。底部回転糸切り後付高台、後周縁回転ナデ。他は内外面回転ナデ。	
1号掘立周辺ピット						
	古　銭	フク土中位	熙寧元寳（熙寧元年1068年鋳造）　磨耗しているが残存状態は良好			
H 1号土坑						
1	坏 (土師器)	フク土 破片	口：(14.0)	砂粒 にぶい橙色	口縁部は短かくほぼ直立する。 体部外面ヘラケズリ。他はヨコナデ。	
2	坏 (土師器)	フク土 破片	口：(16.0)	砂粒 橙色	口縁部は短かく内傾する。 体部外面ヘラケズリ。他はヨコナデ。	
3	蓋 (須恵器)	フク土 破片	口：(13.0)	砂粒、黒色粒 灰色	小型で器高は高めである。かえりを有する。右回転ロクロ成形。天井部外面回転ヘラケズリ。他は回転ナデ、切り離し技法不明。	

(4) 中　近　世

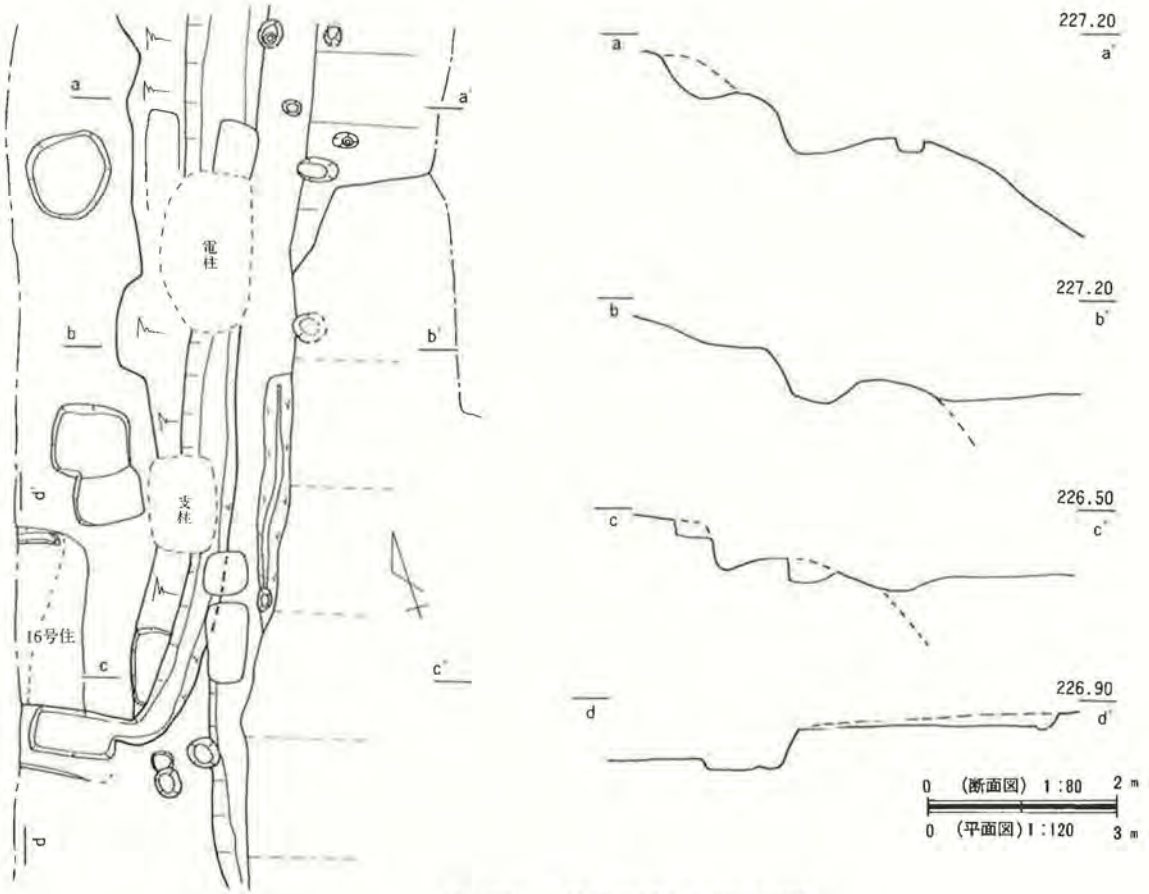
4 号 溝

B区南半部北寄りに位置する。西側の一部分を調査しただけで詳細は不明である。

調査区域内に東側の立ち上がりは検出されていない為、溝と呼称するのは正確でないが、(溝)の東側は傾斜面を切り崩して宅地としており、この宅地側から土層断面を観察すると約30cmの表土下にロームが傾斜なりに認められ、(溝)の掘り込みは宅地よりも西側で立ち上がると推定される。また、調査以前にはこの宅地の西側(4号溝上)から北側にかけては竹林となっており、4号溝の延長線上に弧を描いてわずかな窪みが認められたこと等により宅地の周囲(西～北側)を巡る溝(堀)と判断した。



第66図　4・5号溝断面実測図



第67図　5号溝C区北半部実測図

5号溝と南側で重複し、5号溝よりも新しい。B区南端の5号溝上には1m前後のロームを主体とする土層の堆積が認められ、4号溝掘削時の排土を用いて5号溝上層の窒みを埋めた可能性がある。

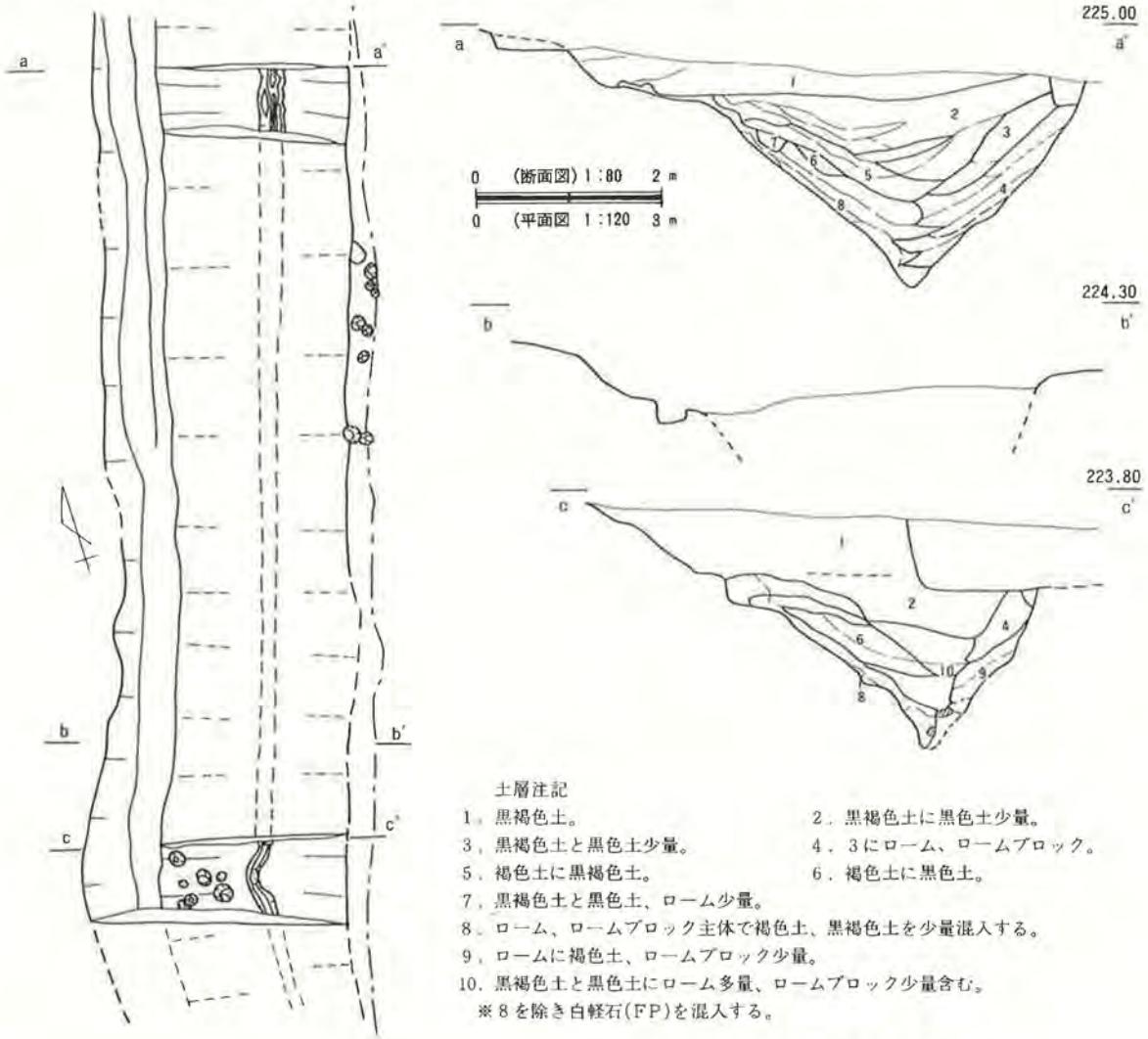
遺物の出土がなく、伝承等も無い為、明確な時期は不明であるが、近世の構築と思われる。

5 号 溝

調査区域にほぼ沿うようにB、C、D区に検出された。C区南半部を除き西側だけの調査である。

調査区域内で長さ130mを測り、さらに南北とも区域外に伸びている。幅は東側の状況が明確ではないが、C区南半部では検出面で約5.5m、深さは西側上端から約2.5mを測る。なお、西側に中段が設けられる部分があり、中段での上幅約4m、深さ約2mを測る。上面の削平程度に差があり、断定はできないが、現状で中段が認められるのはC区西側だけである。中段には小ピット、小溝が穿れており、流水痕等と思われる。全体的には北から南へ下るに従って上幅、深さが漸増するような傾向が認められる。D区北端での上端幅は西半で4mを測る。なお、C区南端部で東側へ走向を変えている。断面形はV字形で底部はさらに狭い幅で箱状に深掘りされており、西側よりも東側が急傾斜で立ち上がっている。

東側壁面はトレンチ部分の調査だけなので不明であるが、西側壁面には多数の柱穴が穿れている。径20～30cmの規模を有するものが多く、垂直もしくは内傾して掘られている。



土層注記
1．黒褐色土。
2．黒褐色土に黒色土少量。
3，黒褐色土と黒色土少量。
4．3にローム、ロームブロック。
5．褐色土に黒褐色土。
6．褐色土に黒色土。
7，黒褐色土と黒色土、ローム少量。
8．ローム、ロームブロック主体で褐色土、黒褐色土を少量混入する。
9，ロームに褐色土、ロームブロック少量。
10．黒褐色土と黒色土にローム多量、ロームブロック少量含む。
※8を除き白軽石(FP)を混入する。

第68図　5号溝C区南半部実測図

覆土は下層にローム主体の褐色土、黄褐色土層が主に西側から流れ込み、中位に黒色土を混入する黒褐色土が、上層に黒褐色土が堆積している。底位には少量ながら砂層も認められる。

6 号 溝(及び周辺)

C区北端に位置する。5号溝の中段に位置し、途中で西へ方向を変えている。5号溝と関連する遺構と思われ、部分的には20cm程の深さ(中段から)を測るものの、溝と呼称するのは適切でないかもしれない。

南西端の長方形の掘り込みが遺構と関連するかどうか判然としないが、溝を境にして南北で段差を生じている。北側(16号住覆土部分)は削平されていると思われるか、現状で比高差約30cmを測る。

5・6号溝及び関連する遺構からは多量の遺物が出土しているが、大半は縄文土器、石器、土師器片であり、他には覆土上層から数点の内耳土器、擂鉢の小片と古銭が出土しただけである。

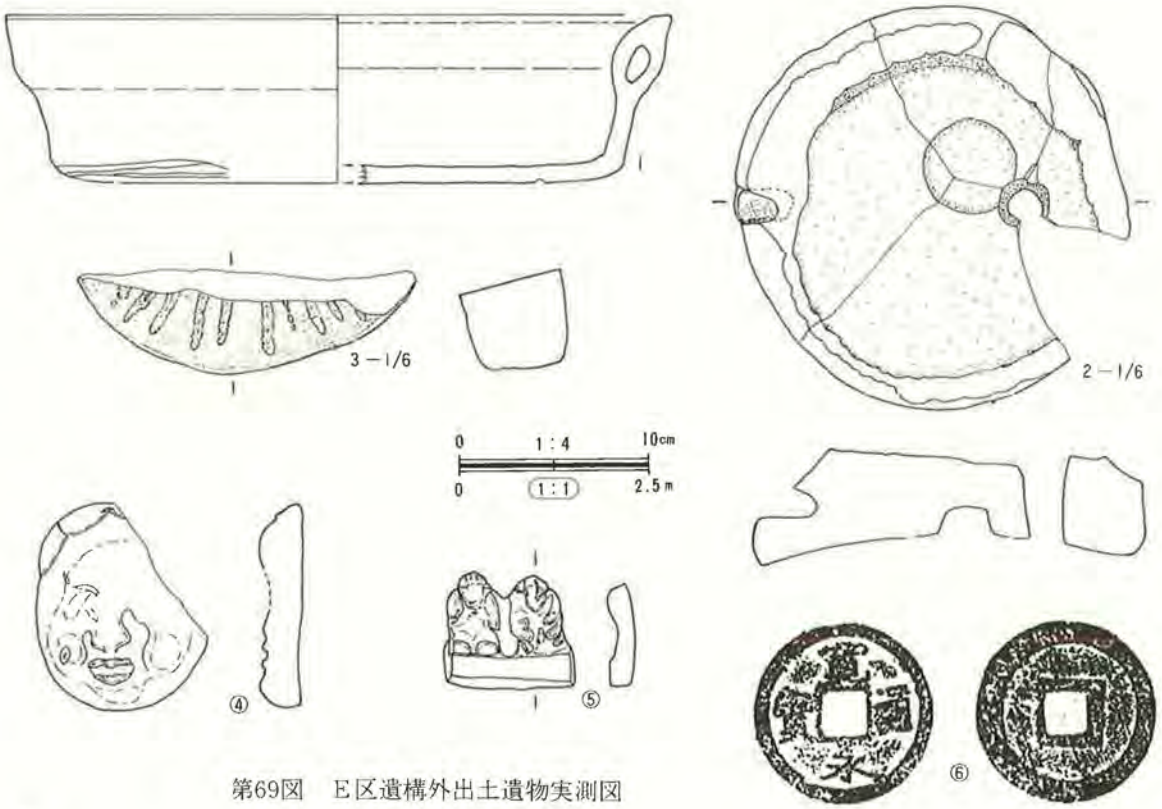
遺構の時期は良好な遺物の出土が無い為判然としないが、形状等から中世の構築と思われ、性格は城館址に関連する堀跡と思われる。ただし、遺跡の周辺には城館址の存在を推測させる痕跡は全く無く、地元での言い伝え、古文書等も残っていない。

なお、参考までに溝の西側に位置するE区北端の包含層中から出土した内耳鍋と石臼の実測図を掲載しておく。これらは表土面下約50cmから一括して出土したものであるが、遺構は検出されなかった。

1は内耳土器で径35cm、高さ8.8cmを測り、約1/6が残存する。体、口縁部と底部内面は回転ナデしており底部外面周縁はヘラ調整している。色調はにぶい褐色で焼成は良好である。

2・3は一対の石臼と思われる。上臼は径約30cmを測り、上縁部は欠損している。石材は安山岩である。

また、遺構外出土の近世に属すると思われる遺物も紹介しておきたい。4・5はE区包含層から出土した土製品である。4はおかめを形どったもので目の部分を削り取られている。5は恵比寿・大黒天と思われる。何れも橙色を呈している。6は5号溝上層(耕作溝中?)から出土した寛永通宝である。



第69図　E区遺構外出土遺物実測図

III 岩之下遺跡

1　遺跡の立地

岩之下遺跡は西の法華沢川と東の細ケ沢川とに挾まれた台地上に位置する。この台地は南西に向かって緩傾斜しており、中央から両河川に向かってもゆるやかに傾斜している。台地の東寄りには沢状の低地が台地を縦走しており、岩之下遺跡はこの沢状低地と細ケ沢川に挾まれた細長い低台地上に位置する。

昭和58年度に調査を行なった田中田遺跡から約200m南方に位置する。

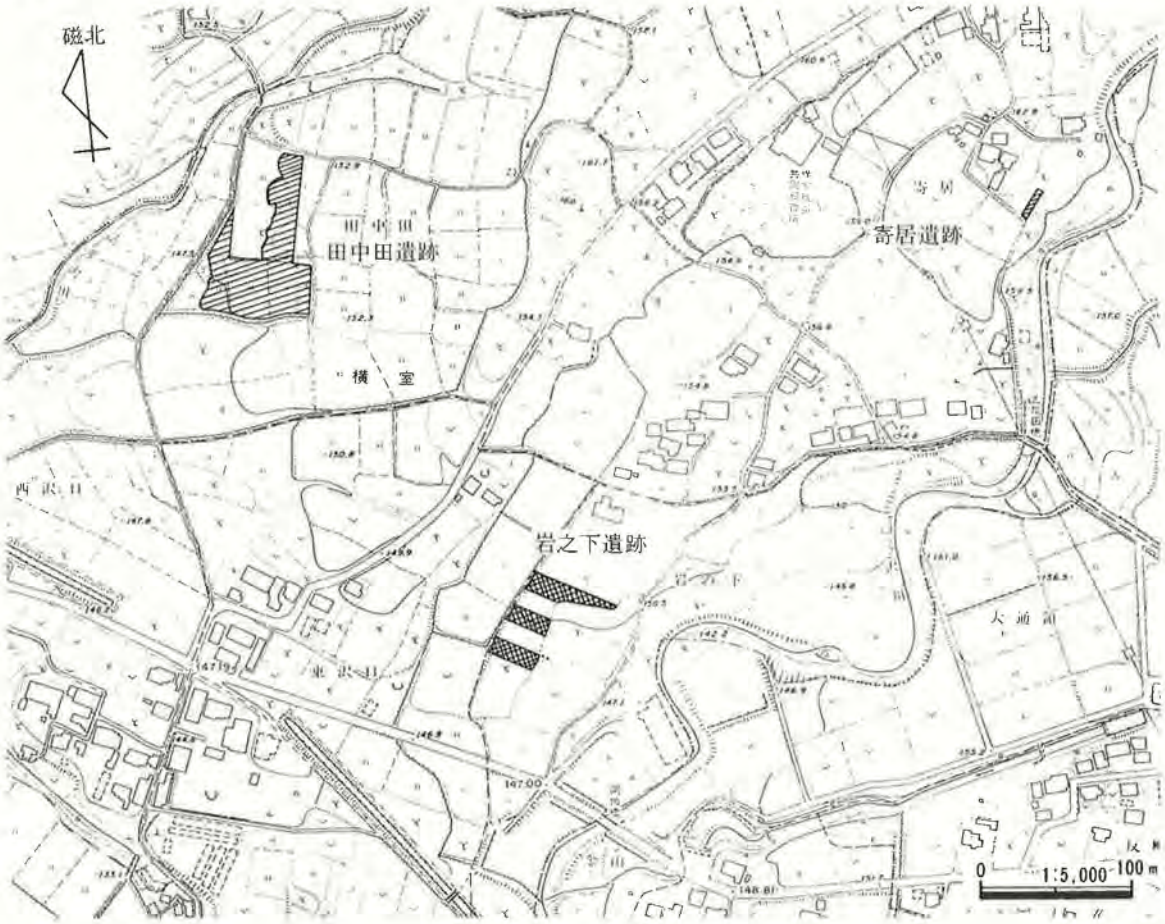
遺跡の乗る低台地の現況は桑畑で、沢状低地と低台地の途切れる南側は水田として利用されている。

細ケ沢川から約８m、北西沢状低地からは１～２mの比高差を測る。標高は調査範囲内で148～150mである。

2　発掘調査の方法

調査は全面発掘を行なった。調査区域は３カ所に分かれる為、北側から順に北区、中区、南区と呼称した。調査区全域を重機によって表土剝ぎを行ない、北区から順次南へと調査を進めた。

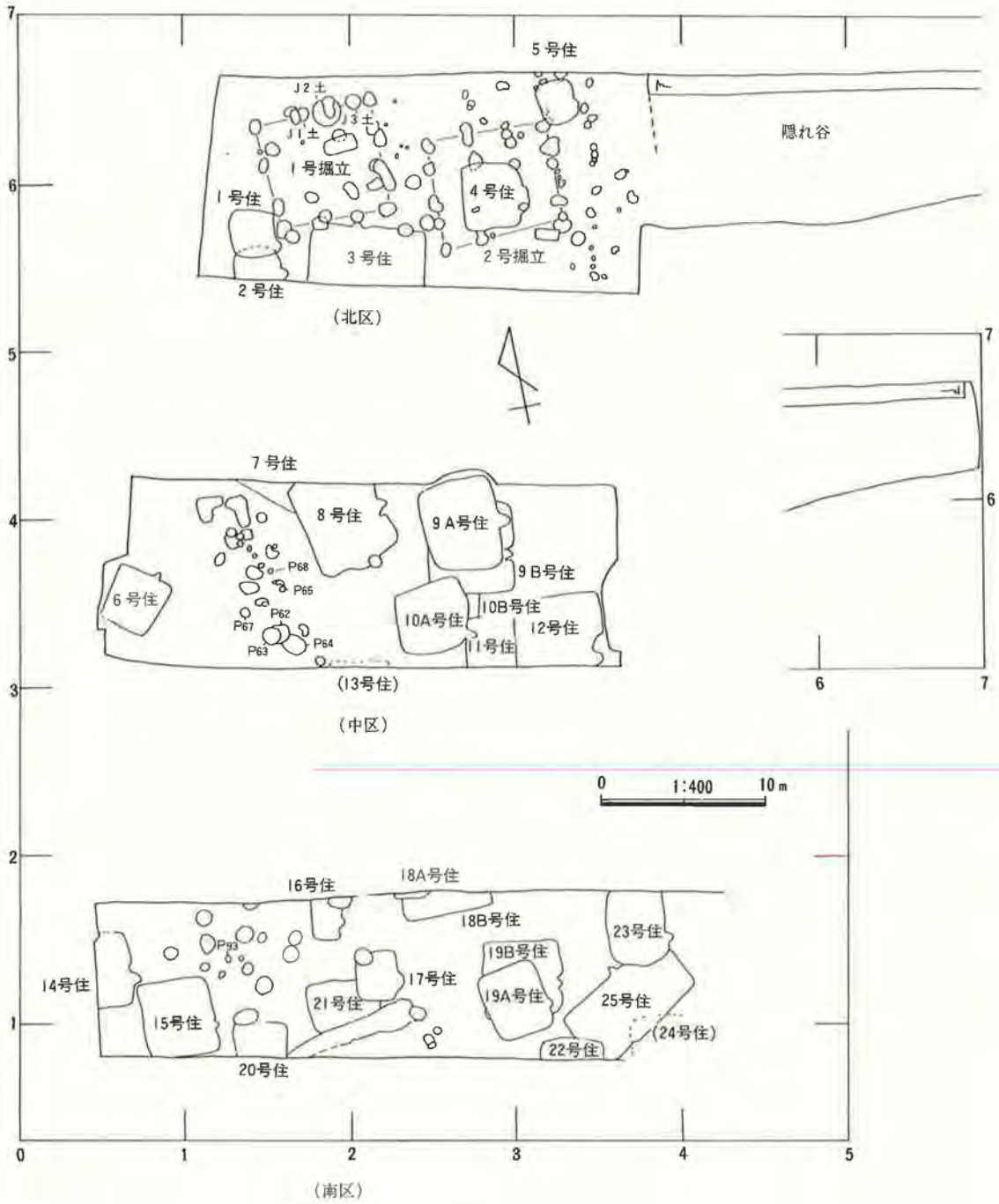
グリッドは、調査区北端の東西に位置する工事用の杭を主に測量用の便を考慮して平行移動し、東西軸を設定した。この東西軸を基準に調査区全域を覆う形で10mメッシュを組んで杭を打ち、南東杭で呼称した。



第70図　調査の範囲と遺跡周辺の現況図

3　基　本　土　層

岩之下遺跡の基本土層はⅠ－3で説明した通りであるが、台地上の土層堆積状況は基本土層と大きく異なっている。低台地で桑畑として利用されていたために削平が進み、最も浅い所では20cm程の表土下にすぐロームが現れる。ローム上面までの深さは台地の西端近くが最も浅く、東へ行くに従って漸次深さを増す。隠れ谷の西側では表土下に軽石を多量に混入する黒褐色土と褐色土などの堆積が確認できる。



第71図　遺構配置図

4　検出された遺構と遺物

(1) 概　　要

岩之下遺跡で検出された遺構は竪穴住居址、掘立柱建物址、土坑、ピットであり、時期は縄文時代、古墳時代、奈良・平安時代である。

縄文時代の遺構で明確なものは土坑だけであるが、一部分の調査で止った縄文時代の掘り込みの中には竪穴住居址の可能性を持つものもあり、集落の存在も予想される。該期の遺物は量的には多くないが、調査区のほぼ全域から出土しており、多少の偏在性が認められる。北区の土坑周辺、中区の中央部北寄り、南区の北東部分である。遺物の時期は前期前・後半、中期初頭、中期後半で、大半は前期後半に属する。

古墳時代の遺構は竪穴住居址だけである。9軒（推定1軒を含む）が調査区全域から検出されているが、南側へ下る程密度が濃くなる。また、調査区域外に位置するものと30cm未満の検出の為に調査を行なわなかった該期の住居が2軒確認されている。（覆土中にＦＡ火山灰の純層堆積が認められた。）時期的な細別は後期に属するものが大半を占める。遺物はほとんど土師器で、須恵器は甕の破片が数点出土しただけである。

奈良・平安時代の遺構は竪穴住居址、掘立柱建物址、土坑、ピットである。遺構の時期を①奈良時代～平安時代前半と②平安時代後半とに2分すると、①期の竪穴住居址は6軒（推定1軒を含む）が中区と南区から検出され、台地の東半部寄りに偏する傾向が伺える。掘立柱建物址は北区に2棟が検出された。該期に属すると推定される土坑、ピットは北区の掘立周辺と中区の西側に集中して検出され、掘立の東・北側のピットは柵列の可能性がある。遺物は竪穴住居址を中心に土師器坏・甕・台付小型甕、須恵器坏・高台付埦・蓋大甕、鉄製品などが出土している。又、中区のピット、土坑中からも多数の遺物が出土している。

②期の竪穴住居址は9軒（推定1軒を含む）が調査区全域から検出されており、中区に少なく、南区の西寄りに多い。該期に属すると思われる土坑、ピットは各区とも西寄りに多数が検出されている。遺物は竪穴住居址を中心として羽釜、須恵器高台付埦、灰釉皿・高台付埦、土師器坏、鉄製品等が出土している。

(2) 縄　文　時　代

縄文時代の遺構は土坑だけであり、3基が集中して北区の北西寄りに位置する。

Ｊ1号土坑

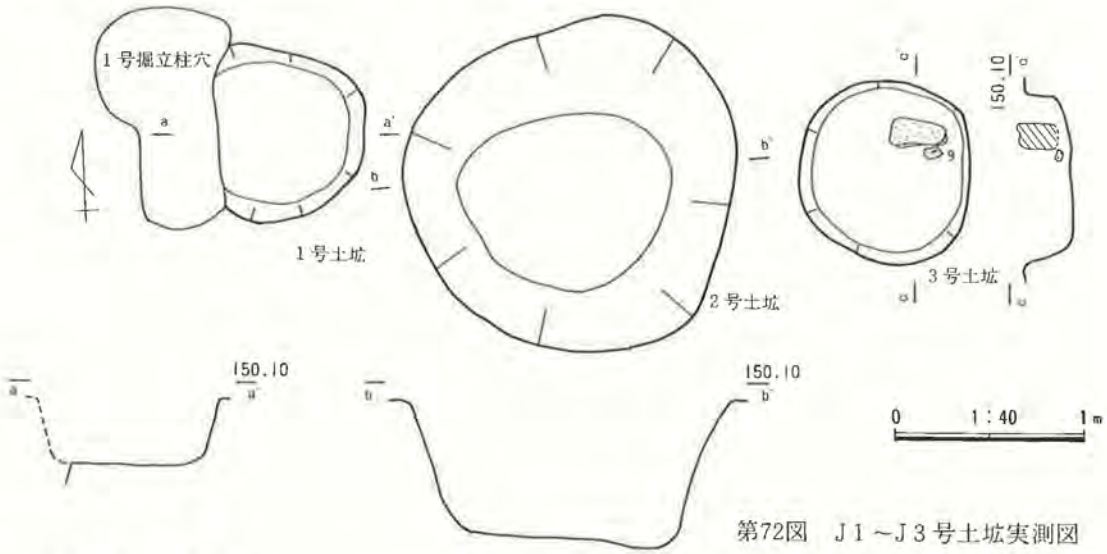
径90cmで円形を呈する。西半部を1号掘立の柱穴により削平されている。深さ約35cmを測り、底面は平坦である。覆土はロームを含む褐色土の単一層である。遺物は出土していない。

Ｊ2号土坑

土坑群の中央に位置する。1号掘立と重複する。径1.7m、深さ80cmを測り、ほぼ円形状を呈する。覆土は黒褐色土と褐色土を主体として埋没しており、周縁へ行くに従ってロームを多く混入する。遺物の量は多くないが、上～中層から土器片が、中～下層から拳大の礫が数点出土している。

Ｊ3号土坑

土坑群の東端に位置する。径約1mで円形を呈する。深さ約25cmを測り、底面は平坦で、直に立ち上がる。遺物は北寄りの底面から若干浮いて細長い角礫があり、その南側に接して凹石が1点出土しただけである。



第72図　J1～J3号土坑実測図

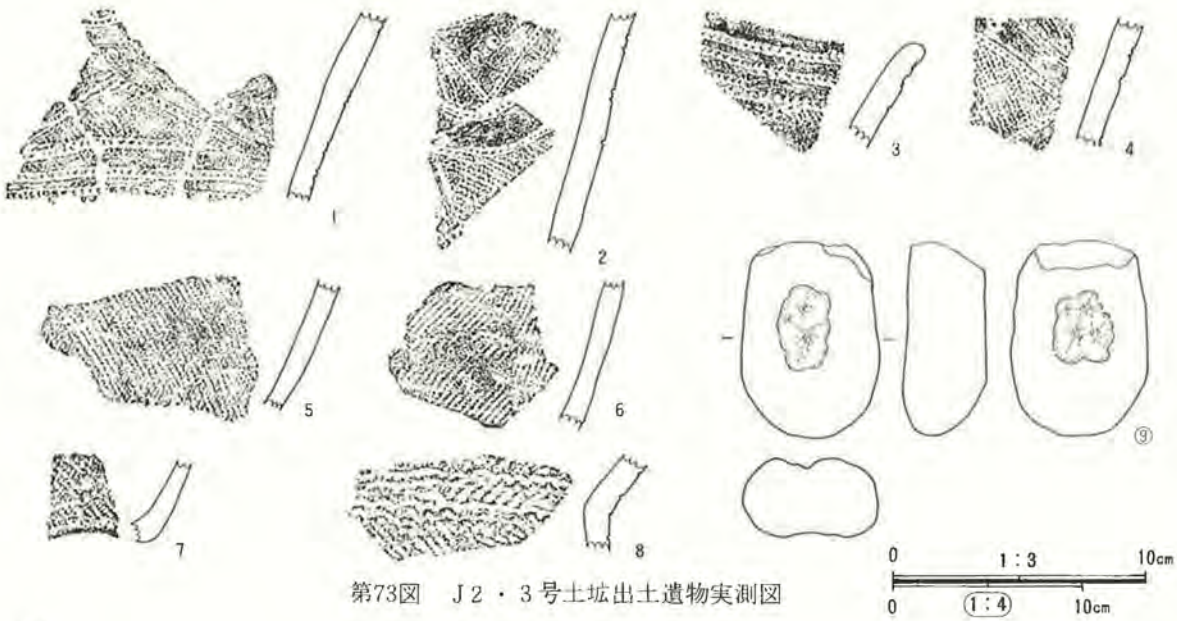
2号土坑出土土器

1～4は同一個体片である。円筒状の胴部から口縁部が外反する器形と思われる。口縁部は細い半截竹管状工具によって三角形等の区画文や曲線文が平行沈線で施文され、沈線内に連続爪形文が付される。区画外の地文は磨消され、磨消した部分（入り組み文？）に2個1対の竹管による円形刺突文が付される。地文は細かな原体で縄文ＬＲが付される。5も1～4と同一個体と思われる胴部破片である。胎土は砂粒を多量に含み、内面は丁寧に調整されている。色調は赤褐色を呈するが、口縁部は火を受けてにぶい褐色を呈する。

6は胴部片で結節を持った縄文ＲＬが施文される。胎土は砂粒、赤褐色粒を含み外面黒色、内面浅黄橙色を呈する。7は底部片で開いて立ち上がる。縄文ＬＲが施文される。胎土は砂粒、赤褐色粒を含み赤褐色を呈する。8は頸部片でコンパス文が2条横位に付される。地文はＲＬ、ＬＲが現状で認められる。胎土は多量に繊維を含みにぶい橙色を呈する。

3号土坑出土石器

端部を欠損しているが表裏ともに2個づつの凹痕を有する。石材質は安山岩である。



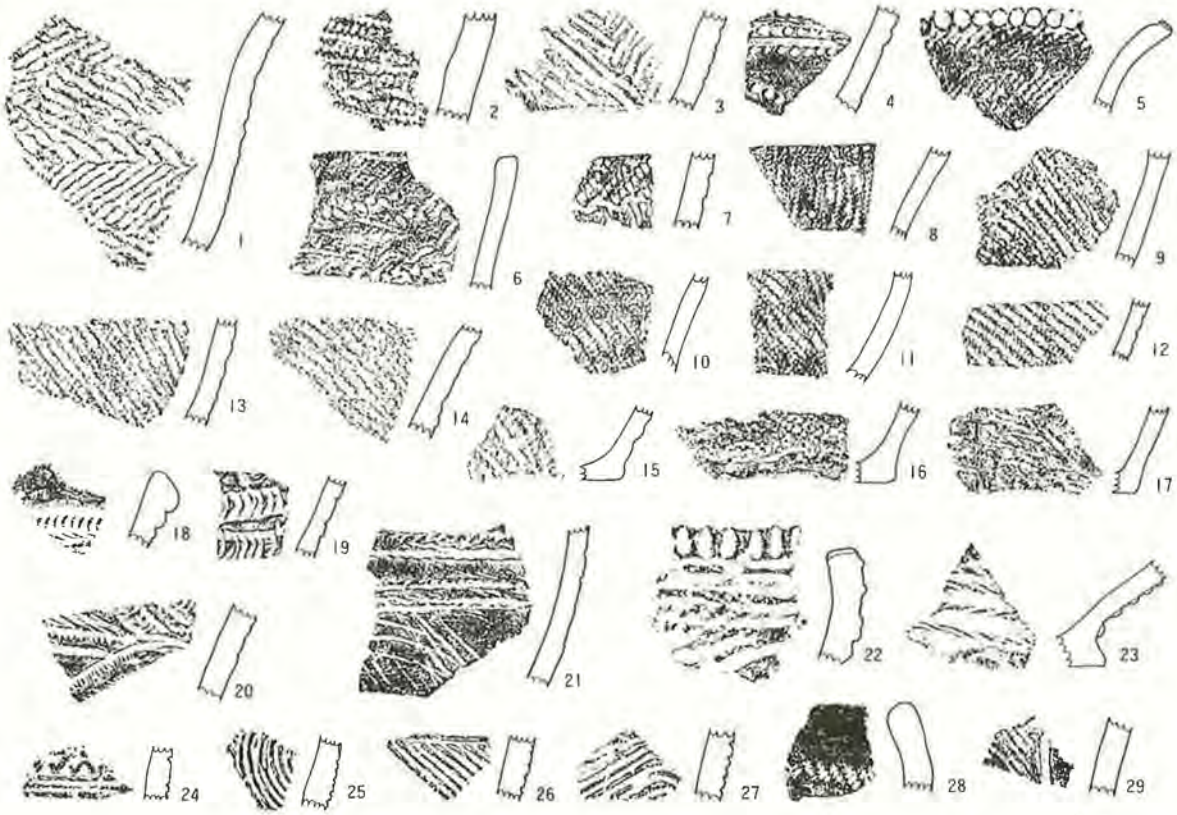
第73図　J2・3号土坑出土遺物実測図

遺構外出土遺物

1～4は胎土に繊維を含む土器である。1はLとRの無節縄文で羽状に施文する。2はRL縄文を施文する。3は半截竹管で交互に斜位の平行沈線を施文する。4は(平行)沈線と連続刺突文で施文する。胎土は繊維の他に砂粒、白色粒を含む。色調は1がにぶい黄橙色、2が橙色、3・4が黒褐色を呈する。

5・6は口縁部破片で、5は口唇部を竹管の外面で連続押圧している。内面は丁寧に磨かれている。6の口唇部は面取りされており、結束縄文が施文される。7は結節を持つ縄文RLが施文される。内面の磨きは丁寧で、一部暗文状に施文する。8～14は縄文LRが施文される。8だけ斜位施文で他は横位施文である。14は縄の末端？がみられる。多段の縄か？。15～17は底部破片で15は直前段合撚りか？。16は結節を持ったLRが施される。17は粗いLR縄文か。18～21は連続爪形文の施される土器である。18は小波状を呈する口縁部で、刻みを付した浮線文も施される。20の施文は雑な感がある。21は爪形の体をとっていないが、波状を意識して連続的に施文する。地文は単軸絡条体第1類による撚糸文と思われる。胎土はきめ細かく、内面の磨きは非常に丁寧である。22・23は浮線文を施す土器である。22は口縁部片で口唇部に竹管を用いた連続押圧を行なう。器壁は厚く、浮線も粗い。浮線上には縄文LR、地文にRLが施されている。23は底部片で一担立ち上がり大きく開く器形である。浮線には矢羽根状の刻みが付されている。胎土は5・9・14・22は粗砂を含み13は多量である。12・13・15は砂粒以外に片岩片を含む。6・17は赤褐色粗粒、14・20は石英粗粒、22は小礫を含む。16は砂粒、白色粒、褐色粒を含み、21は混和材少なく均質である。色調は5・7～10、12～14、22がにぶい橙色、15・23が橙色、18・21は浅黄橙で21には黒斑がある。11・17・20は赤褐色、19がにぶい赤褐色、6が黒褐色で16は灰白色を呈する。

24～27は平行沈線で施文される。24は三角形の削り取りが交互に連続する。25は渦もしくは円弧、26は斜



第74図　遺構外出土遺物実測図

0　1:3　10cm

位に施文される。27は比較的幅広で深く施文される。28は口縁部破片で口縁部は肥厚する。磨消によって微隆起帯を形成し、口縁部文様帯に区画文を配すると思われる。地文は口縁部ではＬＲ横位施文である。29は胴部片で磨消した懸垂帯を交互に配すると思われる。地文はＲＬ縦位施文である。胎土は25・26・28・29は粗砂を含み、26・28はさらに小礫も含む。24・27は砂粒で24は白色粒も多量に含む。色調は24・26・27がにぶい橙色、28が浅黄橙色、25が赤褐色、29がにぶい褐色を呈する。

(3) 古　墳　時　代

3号住居址（遺物観察表Ｐ71）

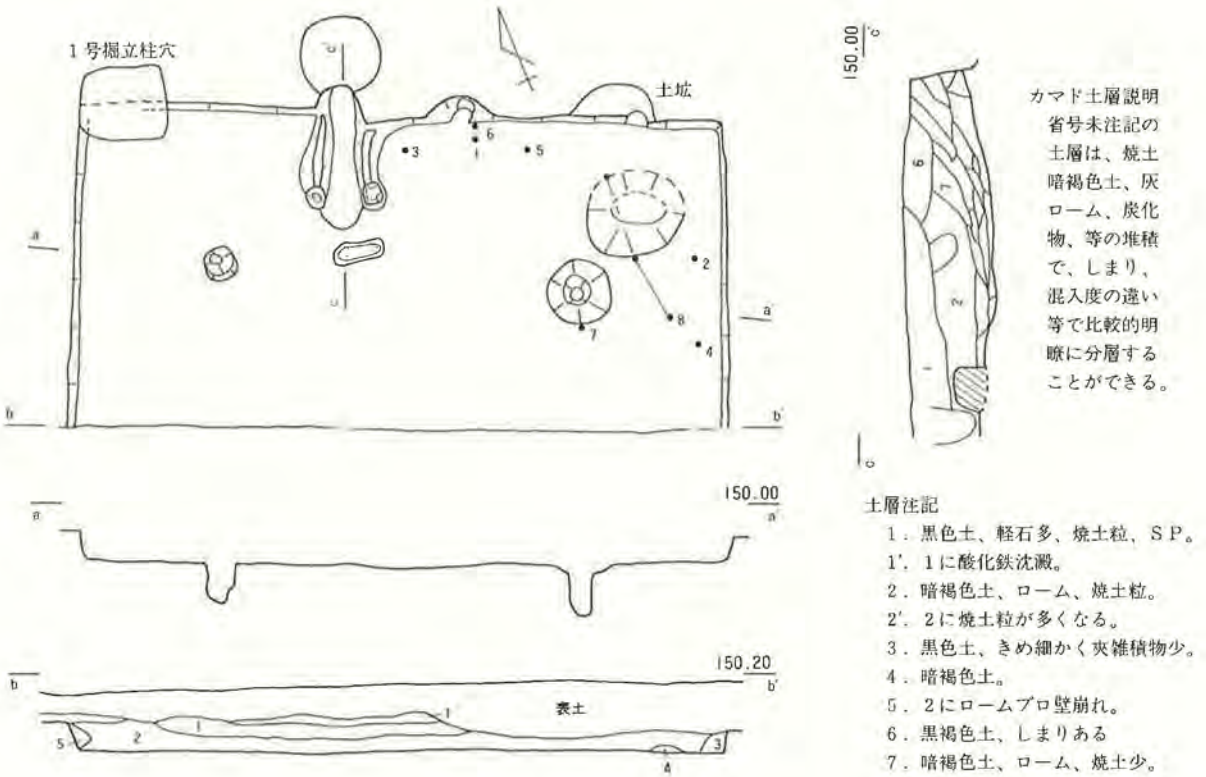
北区南西に位置する。南側半分程は未調査である。１号掘立と重複する。

東西6.9m、南北3.2m以上を測り、深さ約30cmである。壁の立ち上がりは直で、床面は軟弱である。

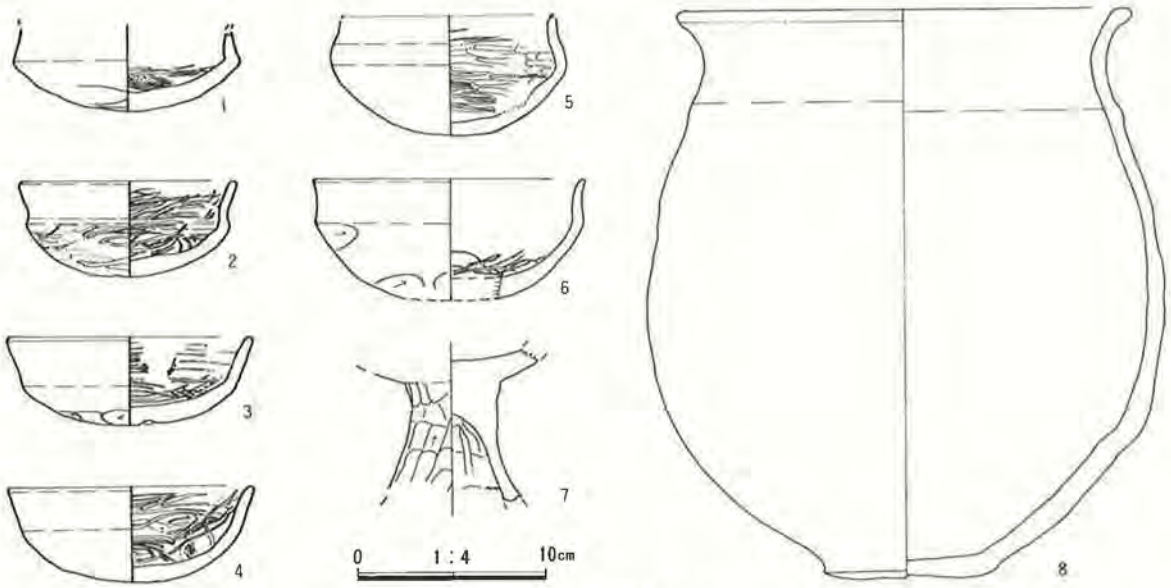
柱穴は北寄りの２本が検出されており、径30～35cm、深さ50～40cmを測る。また、北東隅に貯蔵穴が検出された。径約90cmで不整円形を呈するが、深さ25cmと浅い。

カマドは北壁西寄りに付設されている。燃焼部は壁内にあり長さ95cmの袖が残存している。焚口には人頭大の河原石が立てられ、前面に安山岩質の細長い礫が崩落していた。鳥居状の石組みで補強していたものと思われる。煙道部は掘立の柱穴に先端部を削平されているが、壁外へ伸び急角度で立ち上がると思われる。

なお、カマドの東側壁面に壁上から床面まで達するピットが穿たれており、内面が焼けていることからカマドの作り替えを行なった可能性もある。



第75図　３号住居址実測図



第76図　3号住居址出土遺物実測図

6号住居址（観察表P72）

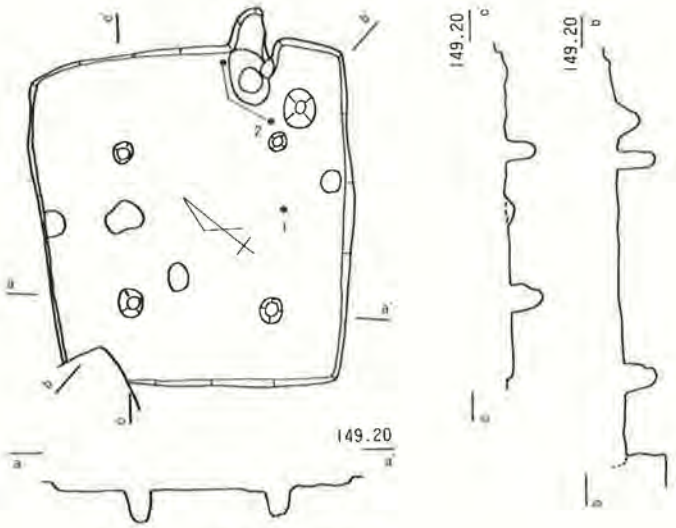
中区西端に位置する。西隅を部分的に削平され、木根等による攪乱も受けている。重複する遺構はない。

カマドの付設されている壁を東壁とすると、東西3.5m、南北3.3mを測り、ほぼ正方形状を呈する。深さは10cm前後と浅い。床は平坦でカマド前面と中央部は硬い面が残るが、攪乱の為に全体的には良好でない。

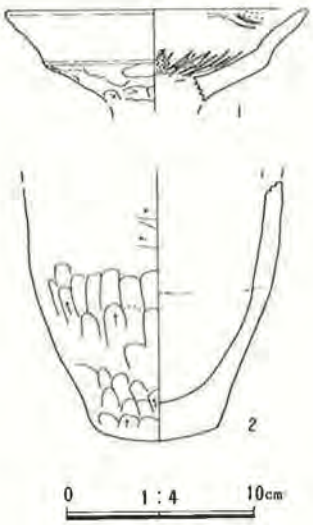
主柱穴は対角線上に4本検出された。径20～30cm、深さ30～40cmを測り、ほぼ円形を呈する。東南寄りに検出されたピットは径35cm、深さ25cmと浅いが貯蔵穴の可能性がある。

カマドは東壁のほぼ中央に付設されている。燃焼部は壁内に位置し、粘土で補強されていたものと思われるが、大半は崩落していた。焚口の両脇には河原石が残存する。煙道の立ち上がりはゆるやかで壁外に伸びているが、検出面から浅く、攪乱も受けている為に詳細は不明である。

遺物はカマド周辺から土師器の甕、南壁寄り主柱穴間から高坏が出土しただけである。



第77図　6号住居址実測図



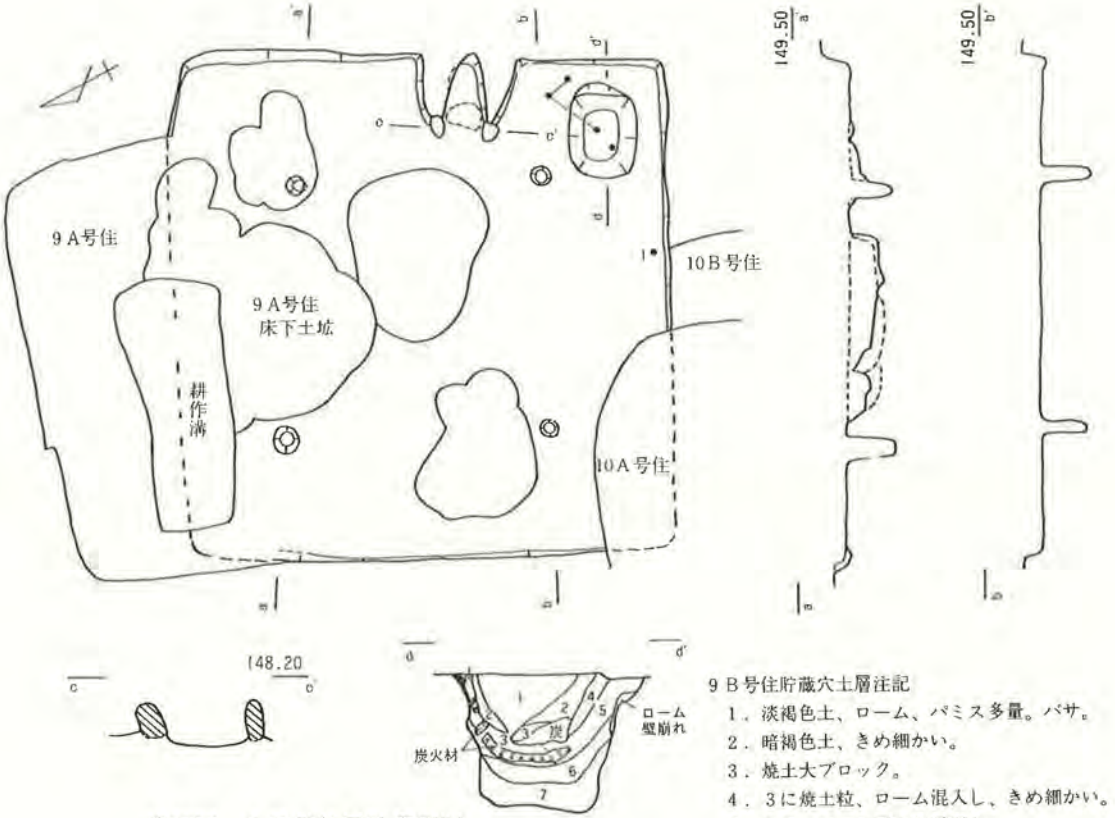
第78図　6号住居址出土遺物実測図

9Ｂ号住居址（観察表Ｐ72）

中区東寄りに位置する。９Ａ号住、10(Ａ・Ｂ)号住と重複する。９Ａ号住が上に乗る形で検出されたが、９Ａ号住の多数の床下土坑の為に攪乱されており、耕作溝によっても削平されている。

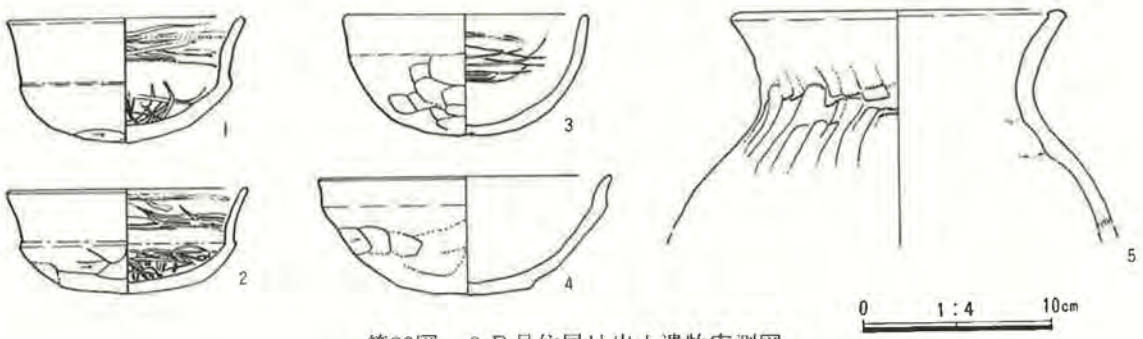
東西5.3m、南北5.2mを測り、ほぼ正方形状のプランを有する。深さは15cm前後と浅い。残存する床面は堅緻であり、対角線上の４カ所に主柱穴が検出されている。径は何れも20cm前後で深さも50cm前後を測る。南東隅に貯蔵穴が検出された。長径86cm×短径70cm、深さ70cmを測り隅丸長方形プランを呈する。

カマドは東壁に付設されており、わずかに南寄りである。燃焼部は壁内にあり、検出面では煙道部も壁内に位置する。粘土袖が良好に残存し、焚口の両脇には人頭大の河原石が立てられていた。煙道の立ち上がりは急で、袖内面から煙道にかけて良好に焼けており、長期間の使用を伺わせる。



第79図　９Ｂ号住居址実測図

９Ｂ号住貯蔵穴土層注記
1．淡褐色土、ローム、パミス多量。バサ。
2．暗褐色土、きめ細かい。
3．焼土大ブロック。
4．３に焼土粒、ローム混入し、きめ細かい。
5．≒４、ロームブロ少量混入。
6．≒５、ローム多量。
7．黄褐色ローム主体。



第80図　９Ｂ号住居址出土遺物実測図

15号住居址(遺物Ｐ68、観察表Ｐ72、73)

南区西端に位置する。重複する遺構はないが、東に位置する20号住が該期に属する可能性がある。

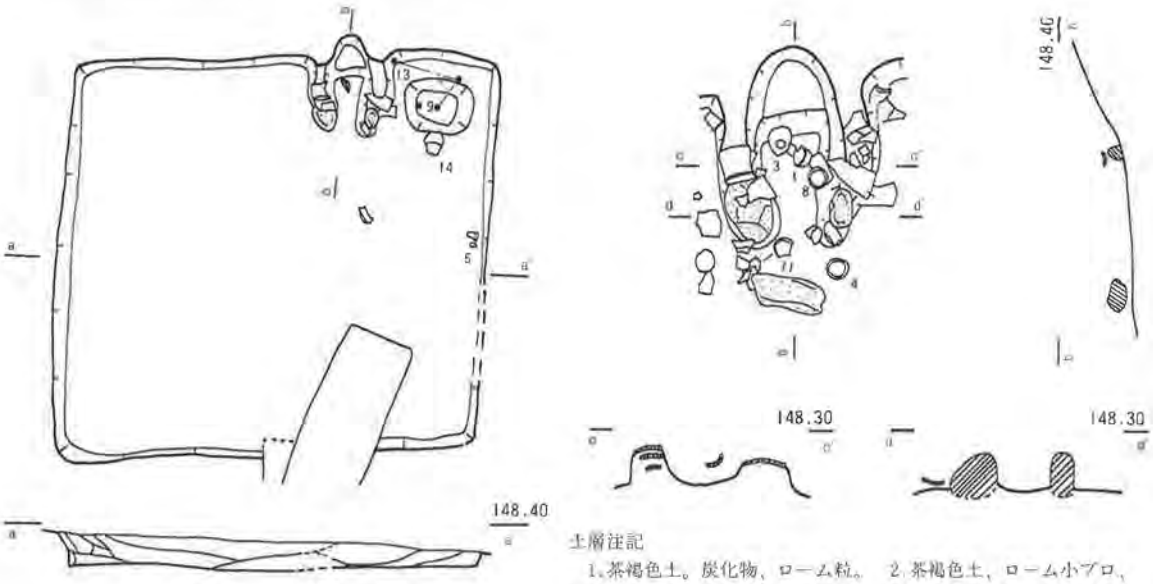
東西4.2m、南北4.5mを測り、わずか南北方向に長いゆがんだ方形状を呈する。壁高は北壁で33cmを測る。覆土中に多量のＦＡ火山灰の混入が認められる。床は地山ロームを床面としているが軟弱である。

南東隅に長辺72cm×短辺58cmを測り、隅丸方形状を呈する貯蔵穴が検出されている。深さは50cmを測り、カマド補強に用いられていたと思われるローム粘土、焼土、灰が多量に流入していた。

カマドは東壁南寄りに付設されており、燃焼部は壁内に位置する。煙道は急角度で立ち上がり、壁外へわずかに伸びている。焚口の両脇には人頭大の河原石が埋め込まれ、袖は粘土と甕の破片を用いて補強されていたが、上部は崩落していた。燃焼部には支脚石が立てられていた。

遺物は比較的多量に出土している。カマド燃焼部には底面から若干浮いた状態で土師器の坏、椀が、また貯蔵穴内及びカマド前面から南壁東半部にかけても土師器の坏、椀、甕等が出土している。

遺物の出土状態、残存状態から判断すると、住居の廃棄と同時に遺物も廃棄していつたものと思われ、生活状態を示すものではないと思われる。



土層注記
1.茶褐色土。炭化物、ローム粒。　2.茶褐色土、ローム小ブロ、軽石多量。　3.黒褐色土、ＦＡブロ、軽石多量、ボロボロしている。　4.茶褐色土、軽石多量。3よりしまりある。　5.褐色土、ローム多量、ＦＡブロ、炭化物。　6.黒褐色土と黒色土、ＦＡブロ、軽石。　7.黒褐色土。　8.黒褐色土と黒色土。　9.黒褐色土に黒色土ブロ。　10.茶褐色土。　11.茶褐色土と黒褐色土。　12.11にロームブロック。

第81図　15号住居址実測図、カマド実測図

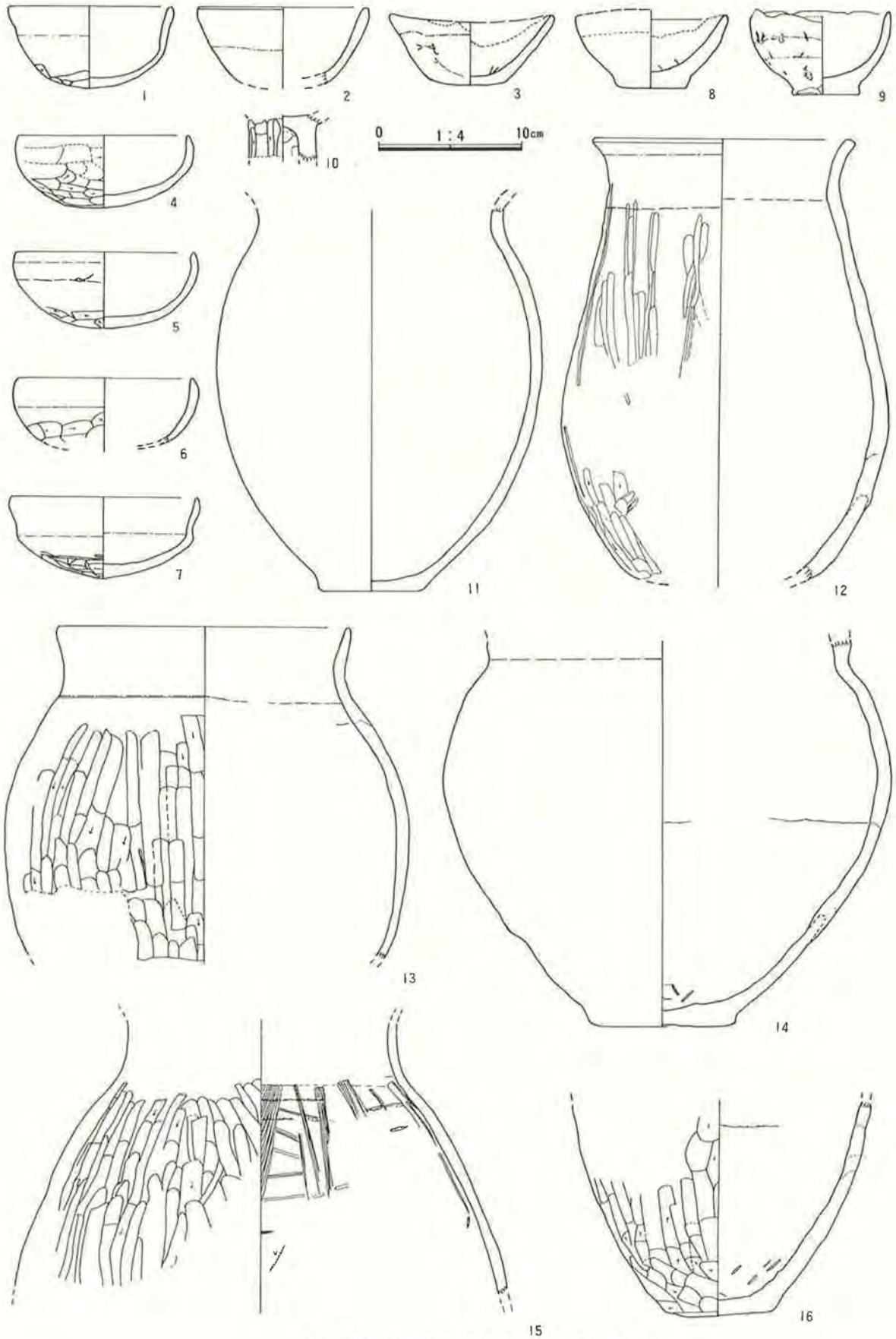
19Ｂ号住居址（観察表Ｐ73、74）

南区東寄りに位置する。19Ａ号住によって過半部を削平されている。18･25号住が近接する。

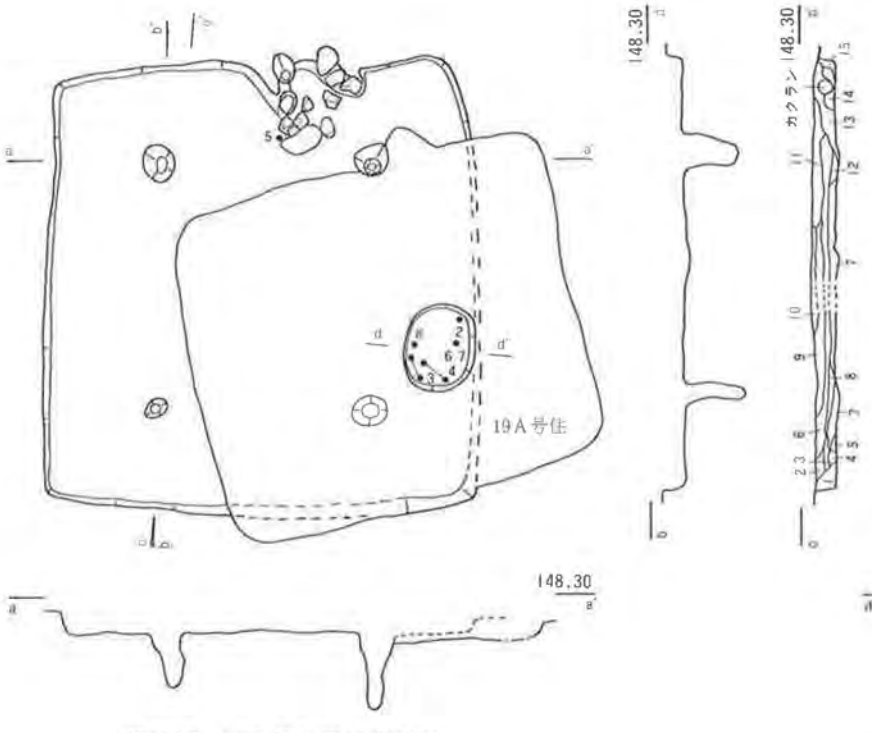
東西4.75m×南北4.4mを測りほぼ正方形状を呈すが、南壁が北壁より長く、歪みを持つ。深さは20cm前後を測る。壁の立ち上がりは直で、残存する床面、特にカマド周辺は非常に堅緻であった。覆土中にはＦＡ火山灰が認められ、19Ａ号住にも多量に流れ込んでいた。

19Ａ号住の床面下から検出されたものも含めて、対角線上の４カ所に主柱穴が検出されている。径20～35cmで深さ60～80cmを測るが、南西柱穴だけ32cmと浅い。

貯蔵穴は19Ａ号住の床下から検出された。19Ｂ号住の南壁に接して西寄りに位置しており、多数の遺物が出土している。長径１m、短径0.8mを測り、深さは19Ｂ号住の床面から65cmである。



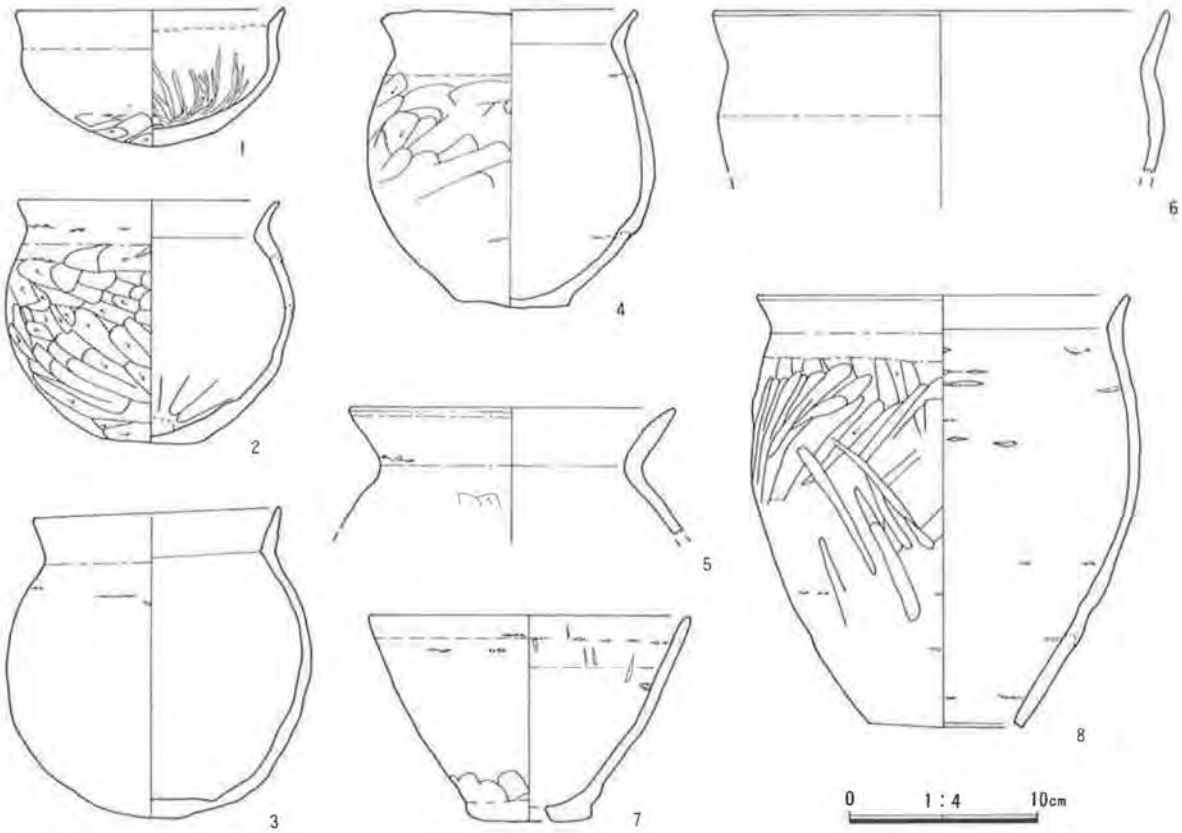
第82図　15号住居址出土遺物実測図



土層注記

1．褐色土に黄褐色ローム多量。黄色ロームブロック混入。
2．黒褐色土、ＳＰ粒。
3．　〃　　ＦＡブロ多量。
4．黒色土とにぶい黄褐色土。
5．黄褐色土、ローム多量。
6．黒褐色土と黒色土。
7．黄褐色土に黒色土、褐色土ローム、ローム小ブロ。
8．褐色土。
9．黒褐色土、ＳＰ粒。
10．褐色土、橙色粒、ＦＡブロ。
11．　〃　　ＦＡブロ多量。
12．黒色土に黒褐色土。≒7
13．にぶい黄褐色土、ＦＰ？
14．13に黒色土と黒褐色土。
15．ローム壁崩れ。

第83図　19Ｂ号住居址実測図



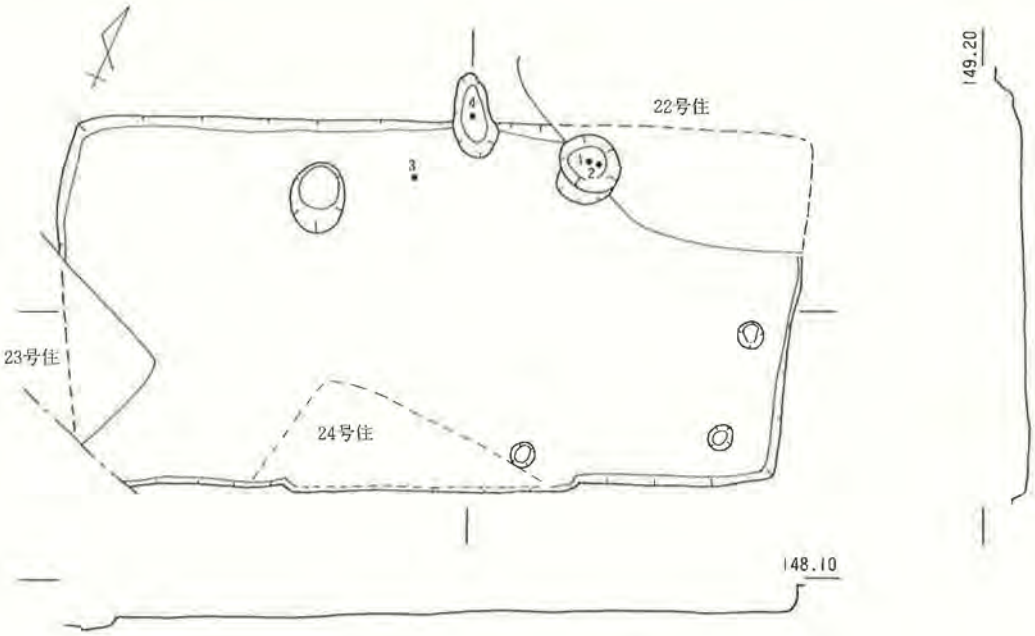
第84図　19Ｂ号住居址出土遺物実測図

カマドは東壁のほぼ中央に付設されていた。多数の礫を用いた石組みカマドであるが、表土剝ぎの際に削平してしまい詳細は不明である。燃焼部は壁内に位置し、焚口の両脇にも石を立てていたと思われる。補強粘土の大半は崩落していた。

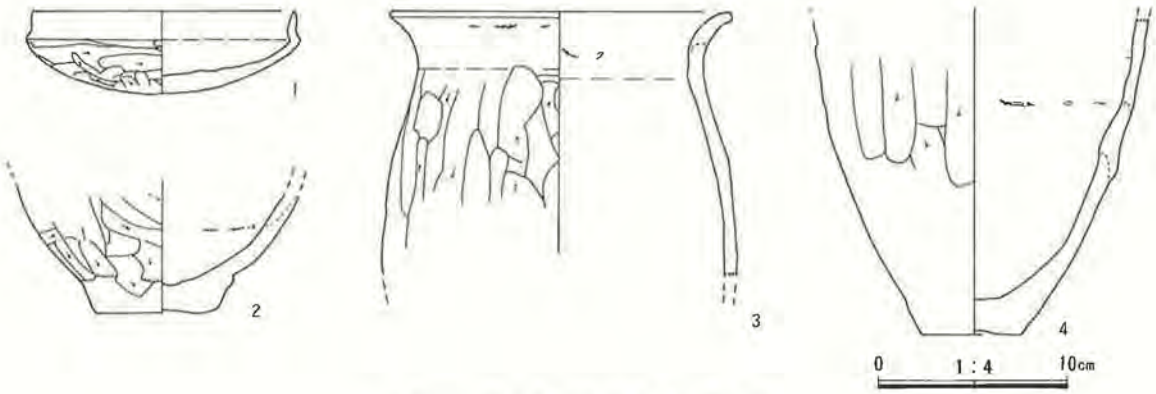
遺物は貯蔵穴から底面密着で土師器小型甕、甑、南側から落ち込む状態で小型甕、鉢型甑が出土している貯蔵穴以外ではカマド内から坏、カマド前面の床直で、甕の破片と少量であった。

25号住居址（観察表Ｐ74）

南区東南端に位置する。22･23号住と重複し、何れよりも古いと思われる。又、未調査の24号住とも重複しており25号住の方が新しい。重複する２～３軒の住居を想定して調査を行なったが、カマドは中央の１カ所だけであり壁の方向、床面レベルも同一であり、覆土にも明瞭な切り合い関係は認められなかったので１軒の住居と思われる。なお、南壁中央部にわずかな張り出しがあり、24号住との重複による崩落、もしくは拡張住居の可能性が考えられる。



第85図　25号住居址実測図



第86図　25号住居址出土遺物実測図

東西7.8m、南北3.85mを測る狭長な長方形住居である。壁はほぼ直に立ち上がり、残存壁高約20cmを測る。床は北から南へわずか傾斜しているが、ほぼ平坦で比較的硬かった。南、東壁沿いに小ピットが検出されたが、主柱穴は検出されなかった。貯蔵穴は北壁に接して東寄りに検出された。径約60cm、深さ70cmを測り不正円形を呈する。カマドの西側に検出されたピットは長径75×短径60cm、深さ25cmを測る。

カマドは北壁のほぼ中央に付設されている。燃焼部は一部壁外にかかり、煙道が壁外に伸びている。煙道の立ち上がりは比較的ゆるやかである。粘土袖等は検出されなかった。

古墳時代・竪穴住居址出土遺物観察表

番号	器種	出土位置 残存状態	法量(cm)	胎土・色調	器形・成・整形の特徴	備考
3号住居址						
1	坏 (土師器)	床直 口唇部欠損 3/5		砂粒含む。 浅い黄橙色	浅い体部から口縁部が内傾し、外反して立つ。 外面：口縁部ヨコナデ。体部上半ナデ、下半ヘラケズリ、後粗いミガキ。内面：口縁部ヨコナデ。体部ナデ後上半横、下半斜方向ミガキ。	内面黒色処理
2	坏 (土師器)	床直 口縁部一部欠損	口：11.5 高：5.0	砂粒含む。 にぶい黄橙色	体一口縁部の境に明瞭な段を持ち口縁部は外反して立つ。外面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ後ナデ後ミガキ。内面：口縁部ヨコナデ、体部ナデ後ミガキ。	内面黒色処理
3	坏 (土師器)	床直 1/2	口：13.6 高：4.6	砂粒含む。 浅い黄橙色。	口縁部は直線的に外傾する。 外面：口縁部ヨコナデ、体部上半ナデ、下半ヘラケズリ後粗いミガキ。内面：口縁部ヨコナデ、体部ナデ後主に横方向ミガキ。	内面黒色処理で一部外面口縁～体部も黒色化している。
4	坏 (土師器)	床直 1/2	口：13.0	粗砂含む。 にぶい黄橙色	口縁部と体部の境の稜は弱く、全体的に深い。 外面：磨耗しており不鮮明。内面：口縁部ヨコナデ、体部ナデ後ミガキ。	内面黒色処理であるが不完全、内面底部に砂粒脱痕
5	坏 (土師器)	床直 一部欠損 (口唇部磨耗)	口：(11.3) 高：(6.2)	粗砂含む。 浅黄橙色。	体部は深く上半で内傾する。口縁部は外反して立つ 外面：口縁部ヨコナデ、体部上半ナデ、下半ヘラケズリ後粗いミガキ。内面：口縁部ヨコナデ、体部ナデ後全面にミガキ（主に横方向）	内面黒色処理。 体部～底部内面にクレーター状剥落
6	坏 (土師器)	床直 1/3	口：14.4 高：6.3	砂粒、赤褐色粒、小礫含む。浅黄橙色。	深めの体部から口縁部が外反気味に立つ。 外面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ後上半ナデ、後下半も含め粗いミガキ。内面：口縁部ヨコナデ、体部ナデ後下半部ミガキ。	
7	高坏 (土師器)	床直 脚柱部		粗砂含む。 浅黄橙色。	外面：脚部ヘラケズリ、坏部ヘラケズリ後ナデ。 内面：脚部ナデ、坏部ナデ。	坏部内面黒色処理
8	甕 (土師器)	床直 口縁部1/2 他はほぼ完存	口：23.7 胴：27.0 底：9.2 高：28.8	砂粒、小礫 淡褐色	胴部は卵型を呈し、最大径はほぼ中位に位置する。口縁部はほぼ直に立ち上がり上半で外反する。 外面：口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ後ナデ後粗いミガキ、底部ヘラケズリ。内面：口縁部ヨコナデ、胴部ナデ、底部ナデ。	胴部外面に黒斑。二次焼成痕、割れた後で火熱を受けている。

番号	器種	出土位置 残存状態	法量(cm)	胎土・色調	器形・成・整形の特徴	備考
6号住居址						
1	高坏 (土師器)	床直 坏部½	口：16.0	砂粒含む。 橙色。	比較的厚手で大きく外開きする。 外面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ、内面：口縁部ヨコナデ後粗いミガキ、体部放射状暗文。	内面黒色処理
2	甕 (土師器)	床直 底部完存 胴部¼	底：6.5	砂粒含む。 暗赤褐色。	底部は厚く、外面は丸味を持つ。 外面：胴部ヘラケズリ、底部一定方向ヘラケズリ 内面：ナデ。	
9B号住居址						
1	坏 (土師器)	床上5cm 底部完存 口縁部½強	口：12.5 高：6.5	細砂粒。 にぶい褐色	口縁部は幅広く、直立気味に立ち上がり、上端部で外反する。外面：口縁部ヨコナデ、体部上半ナデ、下半部ヘラケズリ。内面：口縁部ヨコナデ後横方向ミガキ、体部ナデ後放射状等ミガキ。	内面黒色処理。 黒色処理は不完全 体部内面のミガキは荒れて不鮮明。
2	坏 (土師器)	カマド、貯蔵穴 一部欠損	口：12.6 高：5.5	砂粒、小礫 にぶい橙色	口縁部は直立気味に外反して立つ。外面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ後ミガキ。内面：ヨコナデ、ナデ後口縁部横ミガキ、体部弧状ミガキ	内面黒色処理 体部外面に黒斑 口縁部外面煤付着
3	埦 (土師器)	フク土 ¼	口：13.0 高：6.3	砂粒 にぶい橙色	全体的に丸味を持つ。 外面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ後ナデ。 内面：ナデ後粗いヘラミガキ（不鮮明）	内外面ともに煤が付着する。
4	鉢 (土師器)	貯蔵穴 ⅔	口：15.5 底：6.6 高：6.2	細砂粒 褐色	口縁部は外反ぎみにほぼ直立する。 外面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ後ナデ。底部ヘラケズリ。内面：口縁部、体部共ヨコナデ	体底部外面に黒斑 外面に煤付着。底部外面に木葉痕？
5	甕 (土師器)	貯蔵穴、床直 口縁部完存 胴部½	口：17.7	砂粒 にぶい橙色	肩部に張りを持ち、口縁部は中位から強く外傾する 外面：口縁部ヨコナデ、胴部縦方向ヘラナデ。 内面：口縁部ヨコナデ、胴部横方向ナデ。	
15号住居址(1)						
1	坏 (土師器)	カマド燃焼部 ほぼ完形	口：11.4 高：5.6	砂粒、小礫 黄橙色	底部は丸底で全体的に丸味を持つ。口縁下半部はわずかにくびれる。外面：口縁部ヨコナデ、体上部ナデ、体下部ヘラケズリ、内面：ヨコナデ。	内外ともに火熱を受けている。
2	埦 (土師器)	貯蔵穴、カマド ½弱	口：11.8	砂粒	器形は1と類似する。外面：口縁部ヨコナデ。 体部、内面：ヨコナデ。	内面黒色処理 タール状付着物
3	坏 (土師器)	カマド燃焼部 口縁部⅓欠損	口：11.4 底：5.0 高：4.8	砂粒 にぶい橙色	底部は小さな平底で体部が大きく開く。 外面：口縁部ヨコナデ、体部ナデ後下半部ミガキ底部ヘラケズリ後粗ミガキ、内面：ヨコナデ。	全体的にゆがんでいる。
4	坏 (土師器)	カマド焚口前面 床直。完形	口：12.2 高：5.0	白色、黒色粒 淡褐色	口縁部は内彎して立つ。外面：口縁部ヨコナデ体部ヘラケズリ。内面：口縁～体部ヨコナデ。	二次焼成
5	坏 (土師器)	南壁際床直 ⅔	口：12.7 高：5.2	砂粒、白色粒 明赤褐色	器形は6と類似する。外面：口縁部ヨコナデ、体上部ヘラケズリ後ナデ(ミガキ)、体下部ヘラケズリ、内面：ヨコナデ。	体下部二次焼成
6	坏 (土師器)	フク土 ⅓	口：11.8	砂粒、赤色鉱物 茶褐色	器形は5、7に類似するが口唇部は鋭い。外面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ、周縁ナデ。内面：ヨコナデ。	外面に黒色付着物
7	坏 (土師器)	カマド北袖際 口縁部½ 体部完存	口：13.0 高：5.6	砂粒、白色粒 黒色鉱物 褐色	口縁部は外反ぎみに立ち上がり上半が内彎する。 外面：口縁部ヨコナデ、体上半部ナデ、下半部ヘラケズリ、後粗いヘラミガキ。内面：口縁部ヨコナデ、体部ナデ。	口縁部外面に黒斑 口縁部約½の内外面煤ぼける。

番号	器種	出土位置 残存状態	法量(cm)	胎土・色調	器形・成・整形の特徴	備考
15号住居址(2)						
8	椀 (土師器)	カマド燃焼部 口唇部½欠損	口：10.6 底：5.4 高：5.0	砂粒 淡褐色、橙色	底部は突出した小さな平底。体部は丸味を持つ。 外面：口縁部ヨコナデ、体部ナデ、底部ナデ。 内面：全面ナデ。	内、外面共黒色粒状付着物
9	椀 (土師器)	貯蔵穴	口：9.7 底：4.7 高：5.8	砂粒、白色粒 赤色鉱物 にぶい橙色	器形は8と類似するが口唇部をわずか外方につまむ。 外面：口縁部ヨコナデ、体部ナデ、底部ナデ。 内面：口縁部ヨコナデ、体～底部ナデ。	体部外面に接合痕
10	高　坏 (土師器)	フク土 脚柱部		砂粒、白色粒 浅黄橙色	外面：ヘラケズリ。 内面：ヘラケズリ、坏部ナデ。	意識的に打ち欠いている。
11	甕 (土師器)	カマド周辺 口縁部欠損 ½	胴：22.5 底：7.2	砂粒、石英 にぶい橙色	底部は突出した小さな平底。胴部は卵型を呈する。 外面：頸部ヨコナデ、胴上半部横方向ナデ、胴下半部縦斜方向ナデ、底部一定方向ナデ。内面：頸部ヨコナデ、胴部ナデ。	底部に木葉痕
12	甕 (土師器)	カマド袖材 ½	口：18.2 胴：22.8	砂粒、白色粒 赤色鉱物 にぶい橙色	胴部は下半部に最大径を持ち上半は直線的にすぼまる。口縁部は外反し、口唇部は面取りされる。 外面：口縁部ヨコナデ、胴上半部ナデ後縦方向ヘラナデ、胴下半部縦ヘラケズリ(後ナデ)。内面：口縁部ヨコナデ、胴部縦方向ナデ。	胴上半部外面のヘラナデ(ミガキ？)痕は深い。
13	甕 (土師器)	貯蔵穴 口唇部⅔欠損 胴上半部½	口：19.3 胴：28.0	砂粒、赤色鉱物 礫少量 浅黄橙色	胴部は丸味を有する。口縁部は外反気味にほぼ直立。外面：口縁部ヨコナデ、胴部縦ヘラケズリ。 内面：口縁部ヨコナデ、胴部主に横方向ナデ。	体部外面に黒斑、接合痕
14	甕 (土師器)	貯蔵穴西縁床直。 底部完存 胴部½	胴：31.1 底：10.1	砂粒、白色粒 黒色鉱物多 淡褐色	底部は突出した平底。胴下半部は直線的に大きく開き上半部に最大径を持つ。外面：胴部ケズリ後ナデ、底部一定方向ヘラケズリ、内面：胴部ナデ。口縁部内外面共にヨコナデ。	体部外面黒斑 体部内面砂粒脱痕 接合痕残存
15	甕 (土師器)	カマド袖材 床直 ⅓		砂粒 にぶい橙色	胴部は肩部に張りがなく下方に大きく開く。口縁部下半はほぼ直立する。 外面：頸部ケズリ後ヨコナデ、胴部縦ヘラケズリ 内面：頸部ヨコナデ、胴部ケズリ後ナデ(ハケメ)	胴部内面に接合痕 胴部外面に黒斑
16	甕 (土師器)	カマド袖材 ⅓	底：7.4	砂粒 橙色	底部は突出した平底。外面：胴部ヘラケズリ。 底部一定方向ヘラケズリ、内面：ナデ。	胴部内面に接合痕
19B号住居址(1)						
1	坏 (土師器)	カマド ½	口：14.2 高：7.1	細砂粒 赤褐色	丸味を有する体部から口縁部が小さく外反する。内面に稜を持つ。外面：口縁部ヨコナデ、体部ナデ、底部ヘラケズリ。内面：口縁部ヨコナデ、体部ナデ後ミガキ（放射状暗文）	底部外面に黒斑 体部外面に煤付着
2	小型甕 (土師器)	貯蔵穴南壁際 上層 ほぼ完形	口：13.3 底：5.2 高：12.8	砂粒、小礫 赤色鉱物 褐色、黒褐色	底部は小さな平底。胴部は球形状を呈する。口縁部は外反し、上半で内彎する。外面：口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ、底部ヘラケズリ。内面：口縁部ヨコナデ、胴部上半横方向ナデ、下半縦ユビナデ後横方向ナデ。	胴部外面に黒斑。 外面全体的に煤ぼける。
3	小型甕 (土師器)	貯蔵穴底面 一部欠損	口：12.4 底：5.4 高：16.1	砂粒 にぶい褐色 黒褐色	底部はわずかに突出した小さな平底。口縁部は直立気味である。外面：口縁部ヨコナデ。胴部ナデ後粗いミガキ、底部一定方向ヘラケズリ。内面：口縁部ヨコナデ胴部、底部ともナデ。	胴部内面に接合痕 全体的に歪んでいる。

番号	器　種	出土位置 残存状態	法　量(cm)	胎土・色調	器形・成・整形の特徴	備　　考
19B号住居址(2)						
4	小型甕 (土師器)	貯蔵穴底面 一部欠損	口：13.6 底：6.0 高：16.4	砂粒 にぶい褐色 黒褐色	底部は突出した小さな平底。胴部はわずか縦長の球状を呈す。口縁部は外反する。外面：口縁部ヨコナデ、胴部上半斜ナデ（一部分刷毛状）下半ヘラケズリ後粗ナデ。底部ヘラケズリ。内面：口縁部ヨコナデ、胴、底部横方向ナデ。	内、外面ともに接合痕、黒色(煤？)付着物
5	甕 (土師器)	カマド前面床直 ⅓	口：17.2	砂粒、白色粒 にぶい赤褐色	口縁部は外傾する。外面：口縁部ヨコナデ、胴部ナデ、内面：口縁部ヨコナデ、胴部ナデ。	口縁部に火熱を受ける。
6	甕 (土師器)	貯蔵穴底面 ¼	口：24.0	砂粒、小礫 にぶい橙色	肩部に張りがなく、口縁部は内彎気味にわずかに外傾する。外面：口縁～頸部ヨコナデ、胴部ナデ後横ミガキ、内面：口縁部ヨコナデ、胴部ナデ後横ミガキ。	外面黒色（煤）付着物
7	甑 (土師器) 鉢　型	貯蔵穴南壁際 上層 ½	口：17.0 底：6.6 高：10.8	砂粒、赤色鉱物 赤褐色 黒褐色	底部は突出した平底。体部は直線的に開く。 外面：口縁部ヨコナデ、体部ケズリ後ナデ、体下部指オサエ後ナデ、底部ナデ。内面：口縁部ヨコナデ、体部ナデ後部分的に縦ミガキ。 孔は上下両方向からヘラ状工具により作出。	火熱を受けもろい。体部に大黒斑
8	甑 (土師器) 甕　型	貯蔵穴底面 ほぼ完形	口：19.6 底：8.1 高：22.6	砂粒 橙褐色	胴上半は卵型状で下半は直線的にすぼむ。口縁部は外反気味。外面：口縁部ヨコナデ。胴部ナデ後主に上半部を斜位ヘラナデ(刷毛状)。内面：口縁部ヨコナデ胴上半部横位ナデ、下半部ナデ後ミガキ。孔は外側からヘラ状工具により作出。	胴部２ケ所に大黒斑、小黒斑１。外面の片側に火熱を受けている。
25号住居址						
1	坏 (土師器)	貯蔵穴 ⅔	口：13.8 高：4.3	砂粒、石英 赤褐色粒 橙色	鋭い稜を経て口縁部がほぼ直立する。 外面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ。 内面：口縁部ヨコナデ、体部ヨコナデ、ナデ。	内外面に黒斑。体下半部内面にヘラ痕顕著
2	甕 (土師器)	貯蔵穴 底部完存	底：6.5	砂粒、粗砂 明赤褐色	底部は突出した平底。外面：胴部ヘラケズリ、底部周縁ナデ。内面：ヘラケズリ後ナデ。	底部外面に木葉痕
3	甕 (土師器)	カマド貯蔵穴 ½	口：18.0	粗砂、小礫、石英、黒色粒。 浅黄橙色。	口縁部は外反する。 外面：口縁部ヨコナデ、胴部縦方向ヘラケズリ。 内面：口縁部ヨコナデ、胴部横方向ナデ。	胴部外面に黒斑
4	甕 (土師器)	カマド、貯蔵穴 底部完存 胴部½	底：5.0	粗砂、小礫 石英、黒色粒 にぶい橙色	底部は小さな平底で、上げ底状を呈す。 外面：胴部縦方向ヘラケズリ、底部ナデ。 内面：ナデ。	胴部外面に黒斑 ３と同一個体と思われる。

(4)　奈良・平安時代

1、2号住居址（観察表Ｐ85、86）

北区の西南端に重複して検出された。遺構の深さや、カマド形態等から１号住の方が新しいと思われるが重複部分に明瞭な壁、床面が検出されず、遺物の時期も近接すると思われる為、新旧関係に不明確さを残す。

１号住は東西2.2m、南北2.8m前後を測る小形住居で、深さは北壁で15cmと浅い。壁は若干角度をもって立ち上がる。床はカマド前面を除いて軟弱である。

カマドは東壁の南寄りに付設されている。多数の礫を用いて燃焼部、煙道の補強を行なっていたが、後世の攪乱及び、表土剝ぎの際に削平したこともあり、残存状態は余り良好ではない。燃焼部は壁外に位置している。カマド前面には灰、炭化物が厚く堆積していた。

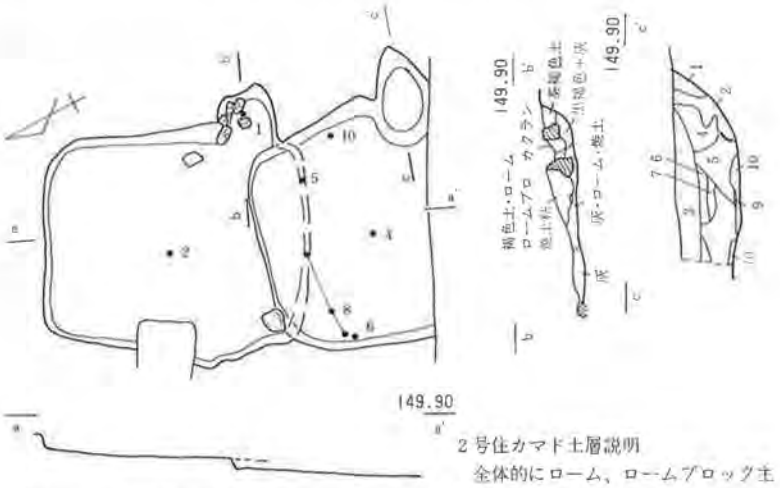
遺物はカマド覆土中から須恵器坏が、住居中央部床面から須恵器高台付埦が出土しただけである。

南西隅の床面上には平板な河原石が出土している。

2号住の南側は未調査である。東西2.2mを測り、南北は1.8m程を調査した。壁は若干角度をもって立ち上がり、壁高は検出面から30cm前後を測る。床は周縁部を除いて、比較的良好な床面を有する。

カマドは東壁に付設されている。燃焼部は壁内から壁外へ伸びる形態で、煙道部は急角度で立ち上がる。覆土中には多量のロームが堆積しており、ローム粘土を用いて補強していたものと思われるが、袖や天井部は残存していない。

遺物は羽釜、須恵器坏・高台付埦、灰釉陶器高台付埦、鉄製品などが出土しているが、破片ではあるものの灰釉陶器が10点出土している点が注目される。

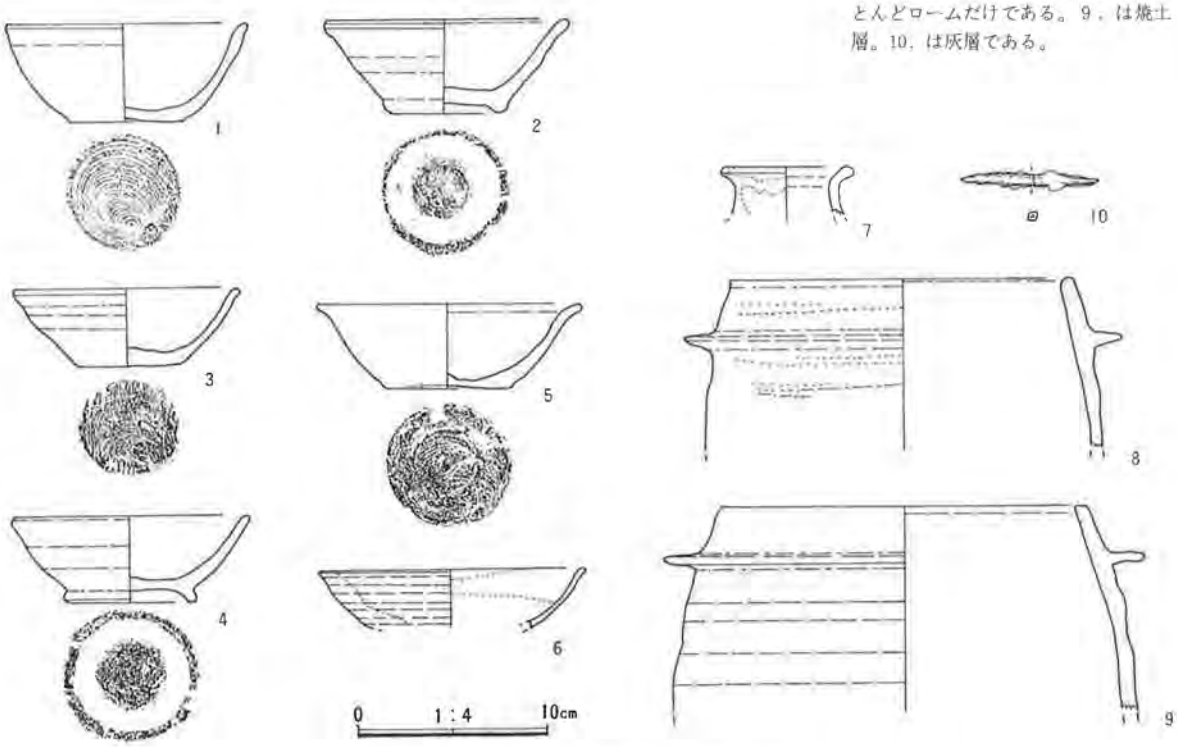


第87図　1・2号住居址実測図

2号住カマド土層説明

全体的にローム、ロームブロック主体の土層である。

1.は焼土。　2．は焼土ブロ。3．は暗褐色土。4．は黄色ロームで焼土ブロ。5．は灰を混入する。6．は暗褐色土。7．は焼土を含み、8．はほとんどロームだけである。9．は焼土層。10．は灰層である。



第88図　1・2号住居址出土遺物実測図

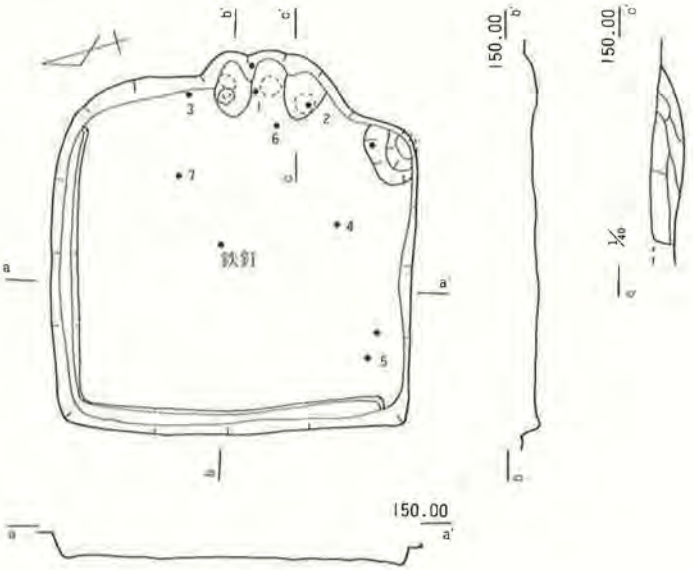
4号住居址（観察表P87）

北区西半部東寄りに位置する。2号掘立と重複し、4号住が新しい。東方に5号住が近接する。

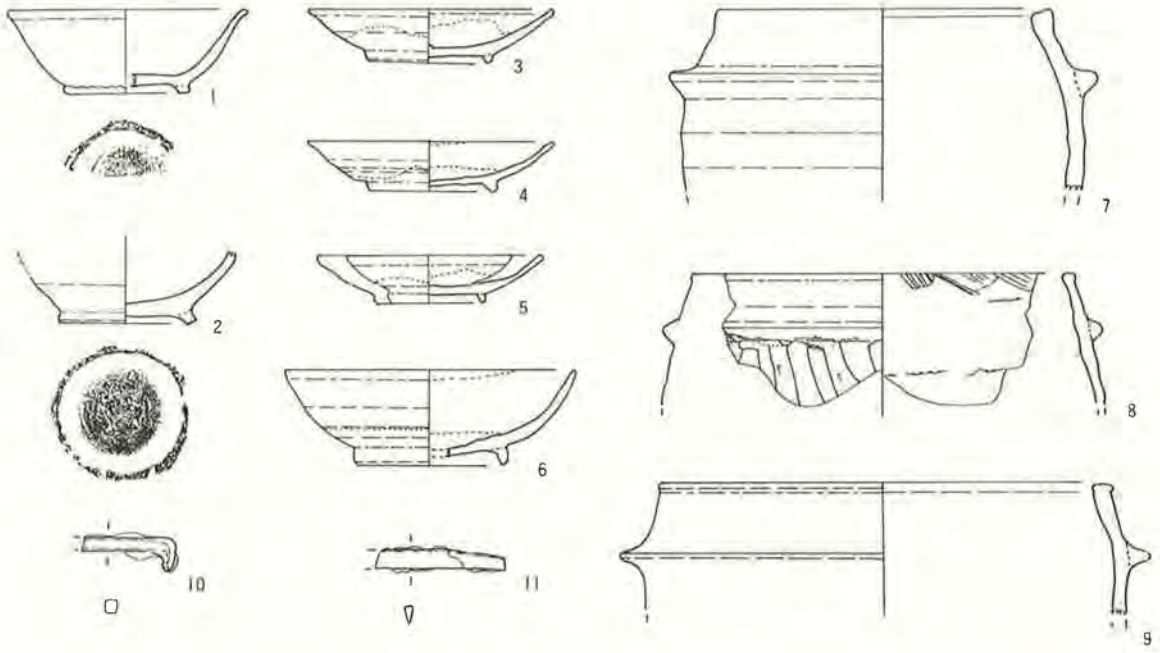
東西3.7m、南北3.85mを測り、ほぼ正方形プランを呈するが、北東隅だけは隅丸状となっている。壁高20cm前後と浅い為に不明瞭であるが、壁はなだらかに立ち上がる。床はほぼ平坦で良好に検出された。特にカマド前面は硬く、凸凹していた。北壁から西壁にかけて浅い壁周溝が検出されており、幅約10cm、深さ5cm前後を測る。南東隅には貯蔵穴状のピットが検出され、土器片が出土している。

カマドは東壁に付設されている。作り替えが行なわれたと思われ、3基が接する状態で検出された。新旧関係は判然としないが、北側の燃焼部に出土した礫が支脚とすれば、北側が新しい可能性がある。燃焼部は何れも壁内から壁外へ伸びる形態を有し、燃焼部底面には良好に焼土が検出されている。

遺物はカマド及び、カマド前面から南壁にかけての床面から出土している。器種は羽釜、須恵器高台付椀、灰釉陶器皿・高台付椀、刀子・鉄釘などであるが、灰釉陶器類が多く、残存状態も比較的良好なことが特筆される。



第89図　4号住居址実測図



第90図　4号住居址出土遺物実測図

0　1:4　10cm

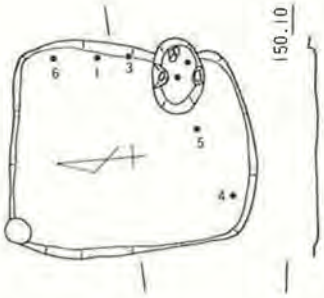
5号住居址（観察表P88）

北区西半部の北東隅に位置する。2号掘立と重複し、本址が新しい。

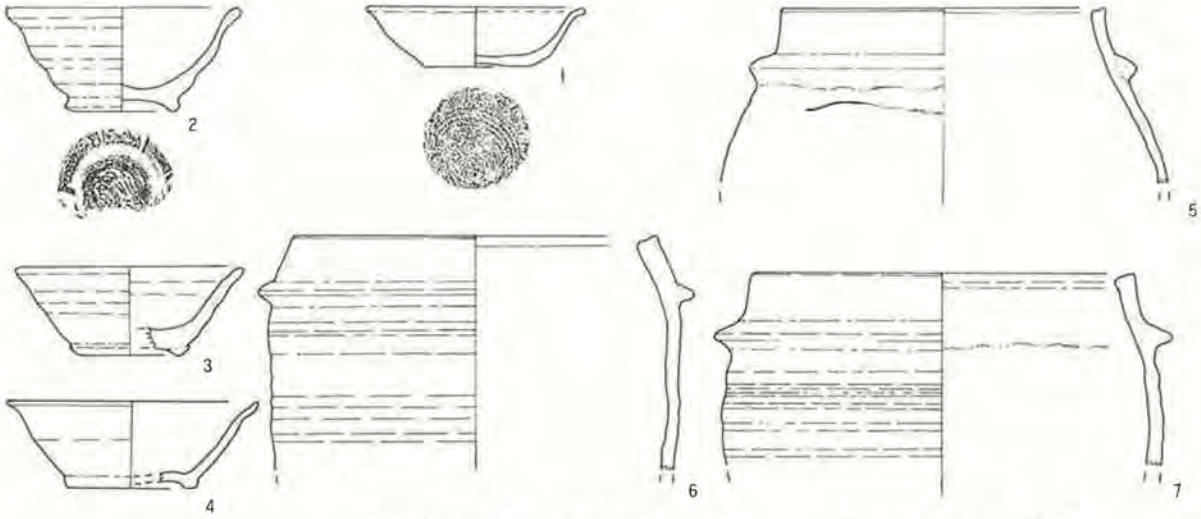
東西2.3m、南北2.6mの規模を有する小型住居で、深さ10cm前後と浅い。壁はなだらかに立ち上がり、床は平坦であるが軟弱である。

カマドは東壁南寄りに位置し、燃焼部は半分以上が壁内に位置する形態である。燃焼部は浅く掘り窪められており、小ピットが両脇に穿たれていた。奥寄りには支脚と思われる小礫が出土している。

遺物は東壁及び南壁沿いの床面とカマド周辺から出土している。器種は須恵器坏・高台付埦、羽釜などである。



第91図　5号住居址実測図



第92図　5号住居址出土遺物実測図

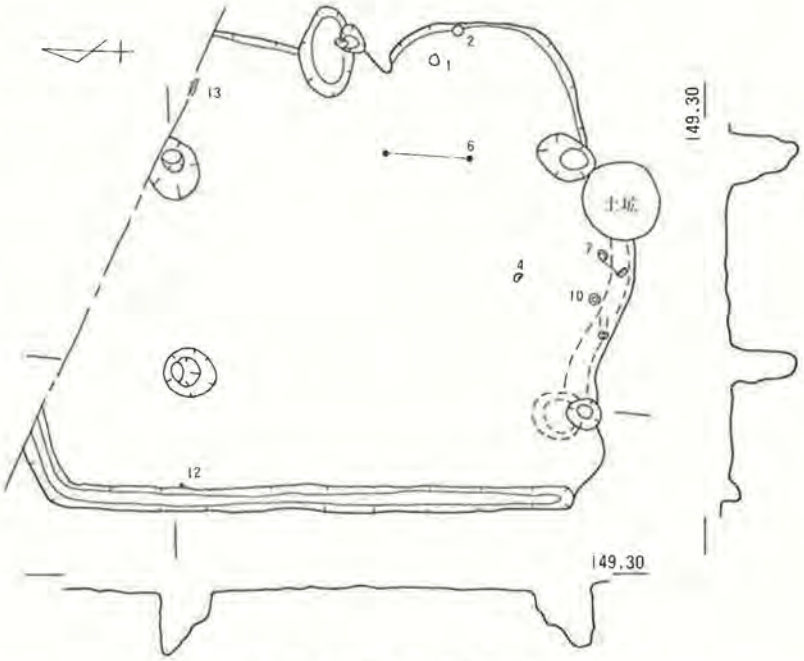
0　1:4　10cm

8号住居址（観察表P88・89）

中区中央北端に位置する。7号住と重複し、8号住が新しい。9A号住が2m東に近接する。南壁に2基の土坑が重複し、土坑が新しい。北端は未調査。

1軒の住居址とするには形状に不自然な点があり、南壁中央部内側に検出された楕円形の焼土、灰層がカマドの可能性もあるので2軒の重複を想定して調査したが、検出面から浅いこともあり明確にし得なかった。

東西5.15m、南北6m前後を測り、南北に長い隅丸長方形プランを呈すると思われる。深さ



第93図　8号住居址実測図

は西壁で約10cmと浅く、南、東壁もわずかに残存するだけである。床は平坦で比較的良好な床面が検出されたが、南東部分は壁に向かって傾斜しながら窪んでいる。北壁から西壁にかけて幅、深さともに10cm前後の壁周溝が検出されている。南壁にも周溝があると思われるが、他より浅く明瞭でない。

主柱穴は北壁側の２基は対角線上に位置すると思われるが、南側２基は南壁に接して検出されている。柱穴の掘り方は何れも径約50cm、深さ70cm前後を測り、南西柱穴の柱痕部はわずか南にずれて検出されている。

カマドは東壁のほぼ中央に付設され、燃焼部は壁内外にかかる状態で粘土で補強されていたと思われる。

遺物は南東部床面から土師器坏、南東柱穴中から土師器坏、須恵器坏、南壁直下床面から土師器坏、須恵器高台付埦、西壁直下床面から鉄鏃、北東柱穴と東壁間の覆土中から鉄製品が出土している。

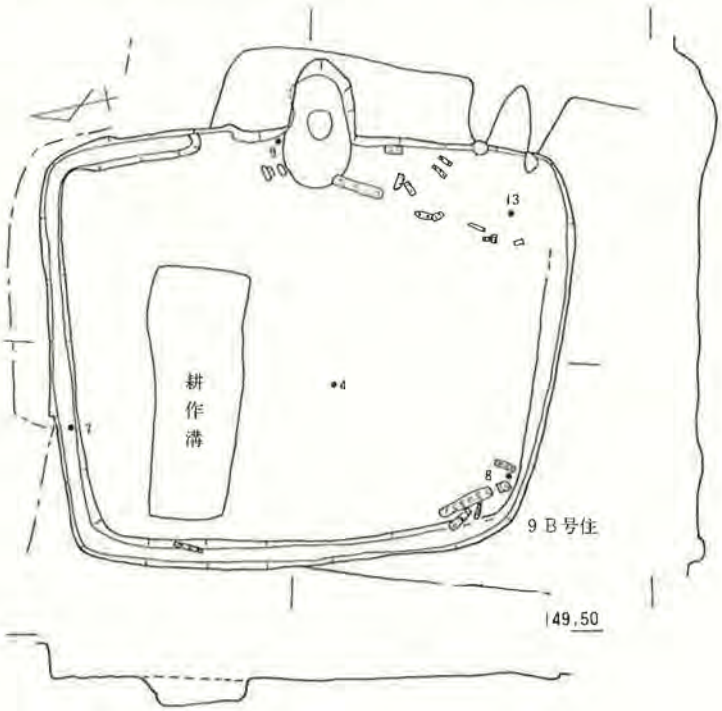
第94図　８号住居址出土遺物実測図

９Ａ号住居址（観察表Ｐ89･90）

中区東寄りに位置する。９Ｂ号住の上に乗る状態で検出された。

東西4.6m、南北5.3m前後を測るが西壁が東壁よりも約80cm短かく、台形状の隅丸長方形プランを呈する。

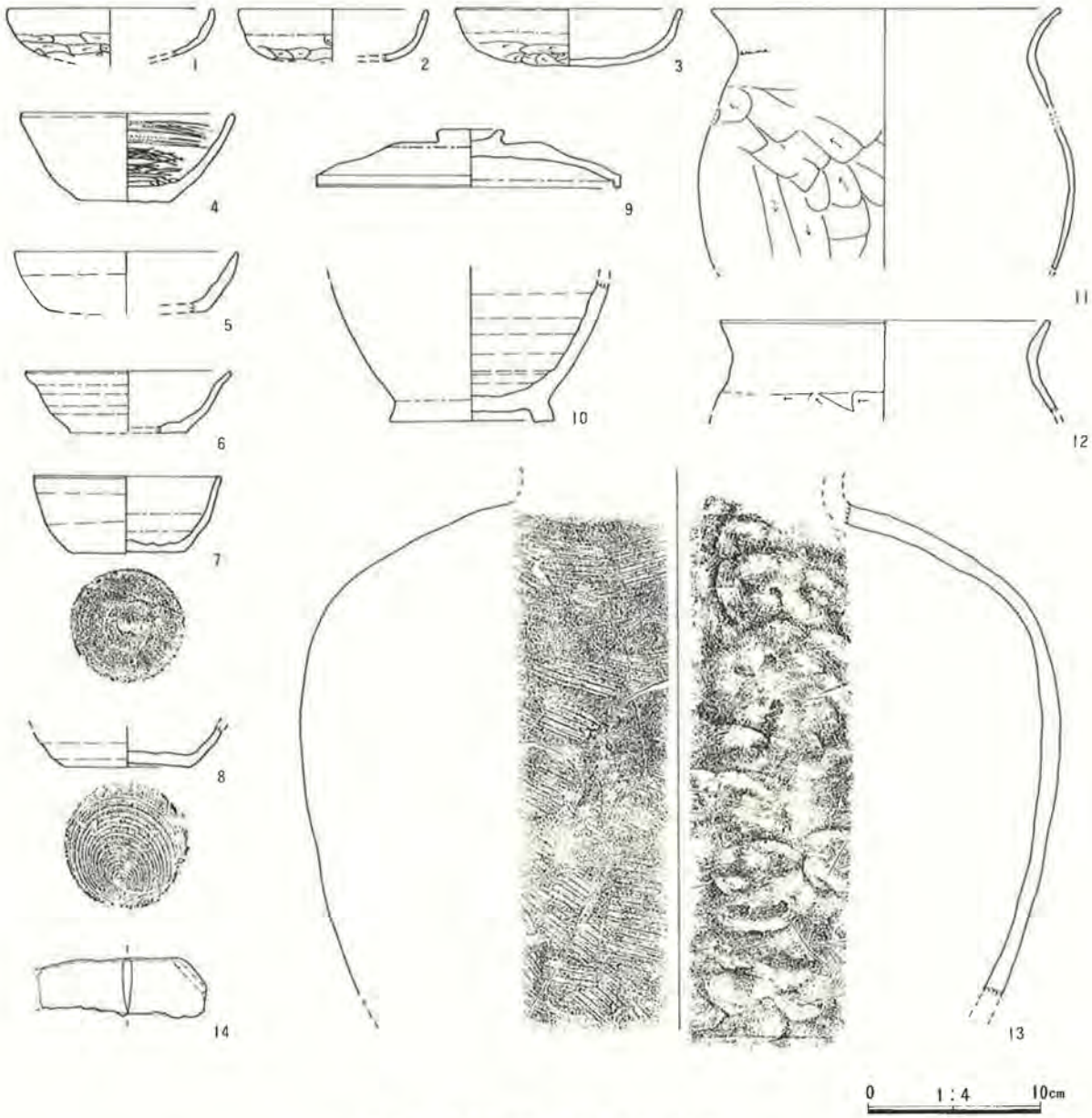
壁の立ち上がりは直で、北壁での深さ約30cmを測る。床は平坦で良好な床面が検出できた。カマド部分を除いて壁周溝が巡っているが、南壁から東壁にかけては浅く判然としない。幅15cm前後、深さ５cm前後を測り全体的に浅い。床一面を炭化物、炭化材が覆っており焼失家屋と思われる。



第95図　９Ａ号住居址実測図

カマドは東壁のほぼ中央に付設されている。燃焼部が壁内と壁外にほぼ半分づつ位置する形態で、壁を掘り込みローム粘土で厚く補強していたが、袖は残存しない。燃焼部は径140×70cmを測る比較的大型のカマドで、煙道は急角度で立ち上がる。主柱穴、貯蔵穴等の施設は検出されなかったが、炭化物、焼土等の入った床下土坑が多数重複して検出されており、生活状態の中で数次に恒って掘り加えていったことが推察される。なお、土坑内面全面にローム粘土を貼りつけて補強を行なっていたことが確認されている。（9Ｂ住参照）

遺物はカマド内及びカマド周辺から土師器甕・坏、須恵器蓋、南東部から須恵器大甕、北壁周溝上から須恵器坏、覆土中から鉄鎌等が出土している。



第96図　9Ａ号住居址出土遺物実測図

12号住居址（観察表Ｐ90）

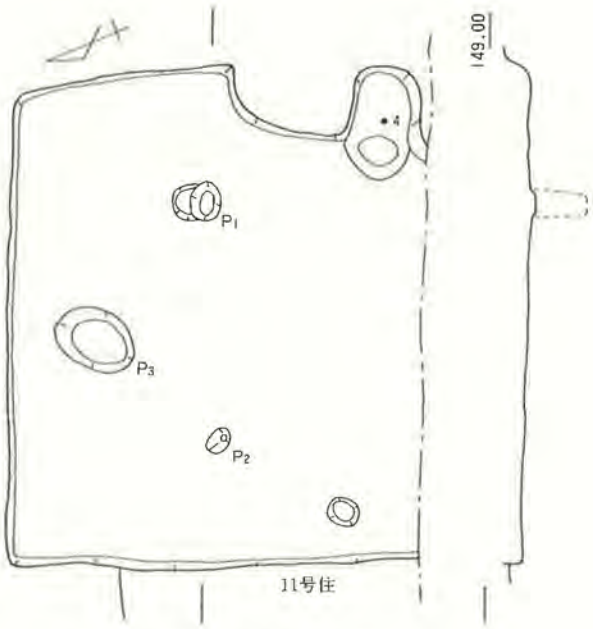
中区東端に位置する。南側は未調査である。11号住と重複するが、新旧関係は不明である。

東西4.5mを測り、南北は4.3mを調査した。東壁北側に長さ約2.4m、幅60cm程の張り出し部分を有する。

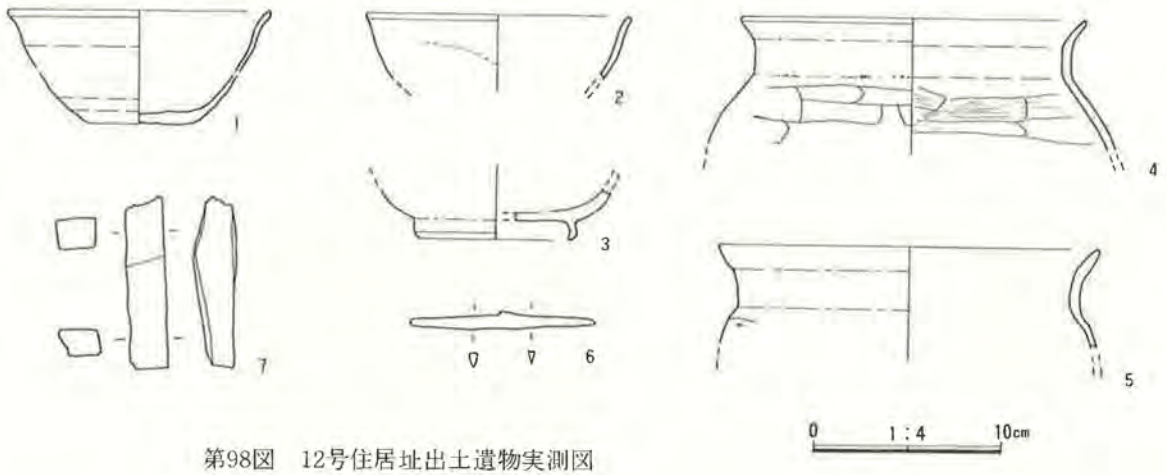
基本的には南北に若干長い長方形プランを呈すると思われる。深さは約20cm前後で浅い。床は比較的平坦であるが、床面は余り硬くない。床面の数カ所にピットが検出されている。P_1が径30×40cm、深さ65cm、P_2が径25cm、深さ50cmを測り主柱穴の可能性がある。P_3は径90×60cm、深さ25cmを測るが性格は判然としない。

カマドは東壁に付設され燃焼部の大半は壁外に位置する掘り方は方形で、燃焼部を浅く掘り窪めている。規模は120×80cmを測る。

遺物はカマドから土師器甕、覆土中から須恵器坏、灰釉陶器高台付椀、刀子、砥石等が出土しているが量的には少ない。



第97図　12号住居址実測図



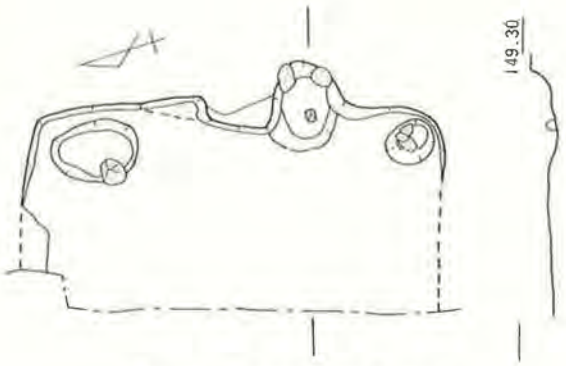
第98図　12号住居址出土遺物実測図

14号住居址（観察表P90・91）

南区西端に位置する。重複する遺構はないが、西半部は耕作等により削平されていた。

南北4.4mを測り、東西は1.6m程が残存する。深さは東壁で約20cmを測る。東壁の形状が不自然であるが、崩落によるものか、あるいは原状を停めるものか判然としない。床は若干西側へ傾斜しており軟弱であった。

南東隅に貯蔵穴が検出されている。径45×55cm、深さ45cmを測り、土器と礫が出土している。北東隅に壁から若干離れて位置する

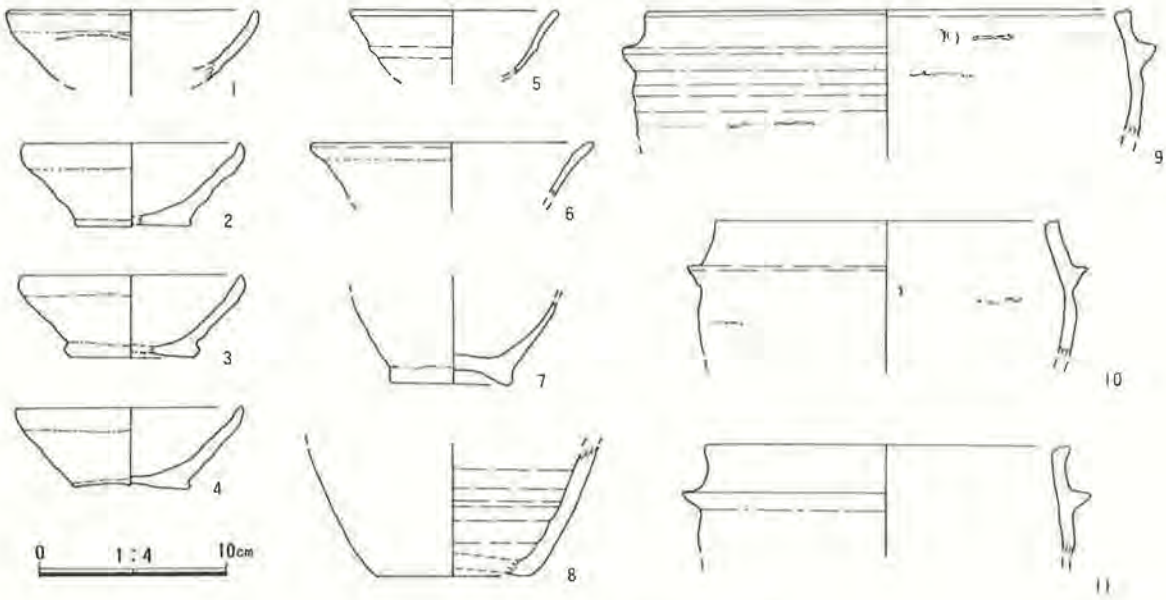


第99図　14号住居址実測図

ピットも貯蔵穴の可能性があるが、上面に薄い床状の堆積があり住居廃棄時点では機能していなかった可能性がある。規模は径80×65cm、深さ36cmを測り、底面は平坦で直に掘り込まれている。覆土上層に大小の礫、中位から土器片が出土している。

カマドは東壁南寄りに付設されている。半分強の部分が壁外に位置する形態である。煙道部は比較的なだらかに立ち上がり、両脇は円礫で補強されていた。燃焼部は浅く掘り窪められほぼ中央には支脚と思われる礫が出土している。

遺物はカマド及び周辺から土師器坏、羽釜、須恵器高台付埦が、貯蔵穴から土師器坏が出土している。



第100図　14号住居址出土遺物実測図

17号住居址（観察表P91）

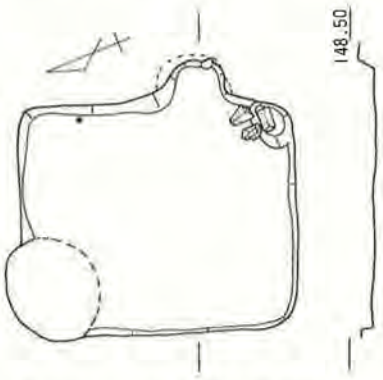
南区の中央部に位置する。古墳時代の21号住と重複し、平安時代の16号、18A号住と近接する。北西隅に土坑、覆土中に多数のピットの攪乱を受けている。

東西2.46m、南北2.9mを測り、わずか南北に長い長方形プランを呈する。壁の立ち上がりは南、西壁はほぼ直であるが、北、東壁は比較的なだらかに立ち上がる。壁高は約15cmを測る。床は平坦で良好に検出できたが、カマド前面を除くと余り硬くなかった。

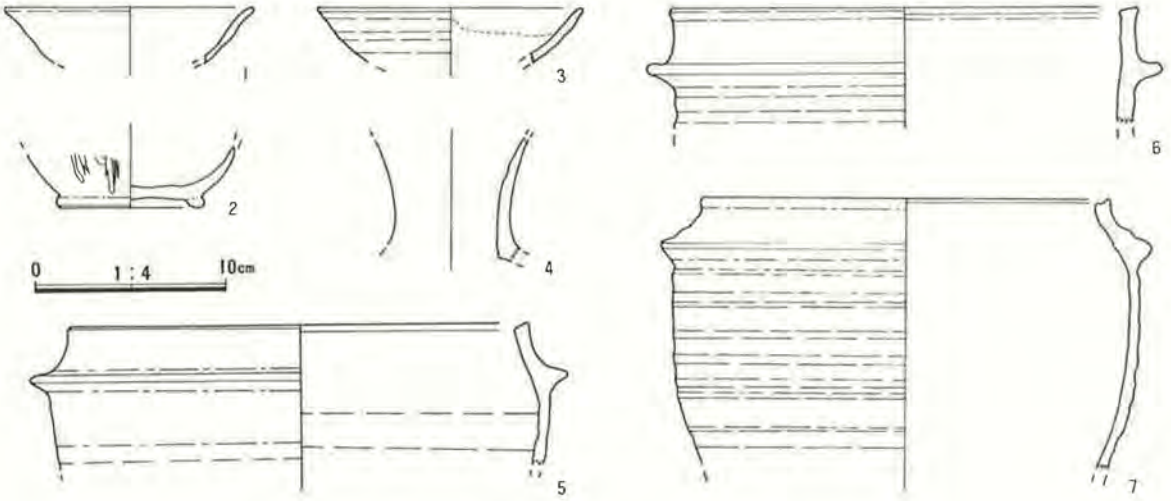
カマドは東壁南寄りに付設されている。燃焼部の大半が壁外に位置する形態で、燃焼部の壁面をローム粘土で補強しており内面は焼土化していた。煙道は急角度で立ち上がる。

南東隅に小ピットが検出され、貯蔵穴と思われる。径55×40cm、深さ20cmを測り、細長い角礫が3個上面に出土している。

遺物はカマド及びカマド周辺から羽釜、須恵器高台付埦、灰釉陶器高台付埦、瓶等が出土している。



第101図　17号住居址実測図



第102図　17号住居址出土遺物実測図

19A号住居址（観察表P91）

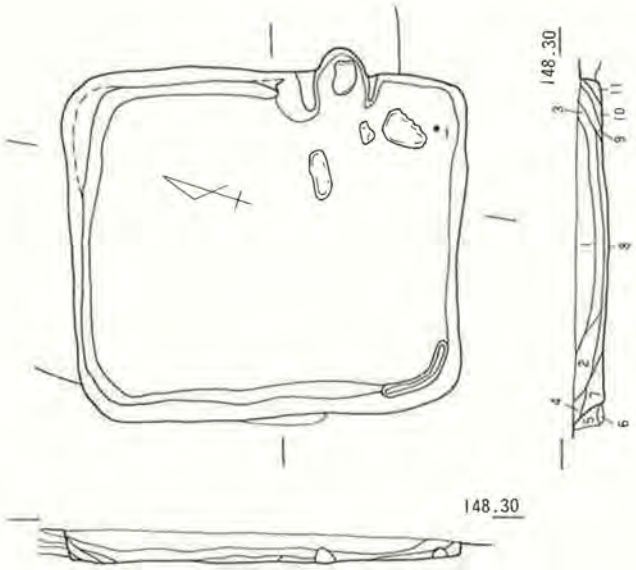
南区東寄りに位置する。19B号住と重複し、床面下まで削平する。

東西3.6m、南北4.1mを測り、わずか南北に長い隅丸方形状を呈する。壁は比較的角度をもって立ち上がり、壁高は北壁で約30cmを測る。床は平坦であるが、一部を除いて余り硬くない。カマドから南壁にかけての一部を除いて浅い壁周溝が検出されている。幅15cm、深さ5cm前後を測る。

カマドは東壁南寄りに付設されている。燃焼部の過半部が壁内に位置し、壁外にも伸びる形態で、粘土袖が残存する。燃焼部は多量のローム粘土が埋積しており、又中央に扁平な礫が出土していることから粘土と礫を用いて補強していたものと思われる。カマド前面に多数の大振りな礫が出土している。

南東隅に浅い円形の掘り込みがあるが浅く、貯蔵穴かどうか判然としない。

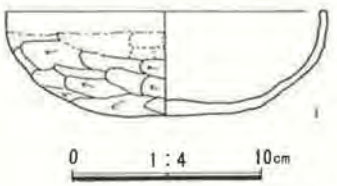
遺物は、浅い掘り込みの上面から土師器椀が1点出土しただけである。



第103図　19A号住居址実測図

土層注記

1．黒褐色土に黒色エブロ少。軽石(FA)、ロームブロ。
2．1と類似、黒色エブロ多。
3．1と類似、全体的に黒味増し、粘性を強める。
4．黒褐色土。
5．茶褐色土、S.P粘少量。夾雑物少ない。
6．褐色土に茶褐色土。ロームブロ少量。
（5・6：19B号住覆土）
7．黒褐色土と黒色土。S.P粘少量。
8．黒褐色土。粘性がい。
9．FAの流れ込み。
10．黒褐色土にローム。
11．茶褐色土、S.P粘少量。



第104図　19A号住居址出土遺物実測図

1号掘立柱建物址（観察表P91・92）

北区西半部西寄りに位置する。縄文時代の土坑、古墳時代の3号住と重複する。又、時期不明の土坑数基とも重複し土坑が新しい。2号掘立が東側に近接する。

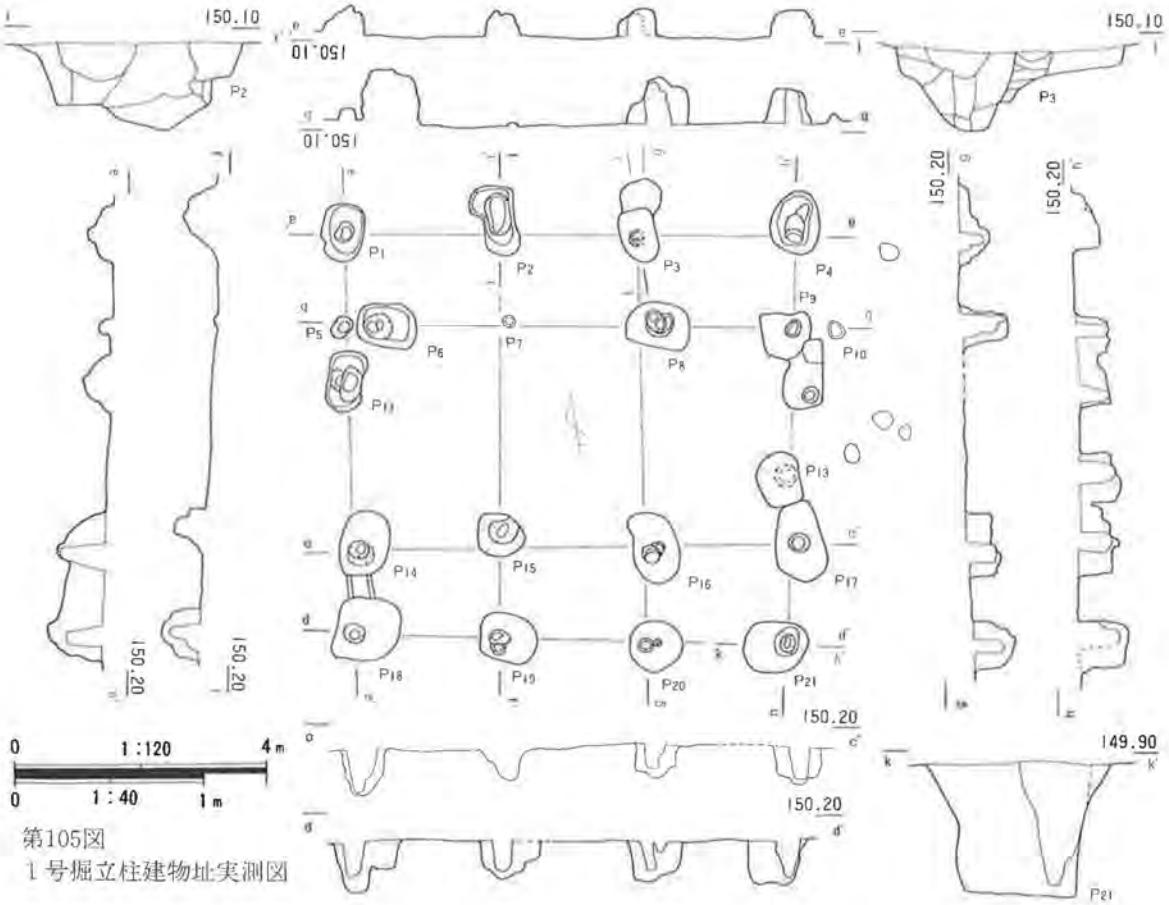
東西は北辺が7.3m、南辺が6.9m、南北は何れも6.4mを測り、桁行、梁行ともに3間の総柱建物と思われる。柱穴間の距離は、東西方向が2.4m前後、ほぼ8尺の等間隔であるが、南北方向は両端が1.4mで約5尺、中間が3.4m、約11.5尺を測り、変則的な配列となっている。

柱穴の多くには柱痕が検出されている。全ての柱穴について土層断面を確認した訳ではないが、土層の堆積はほぼ3類型に別れると思われる。①P_2型—黒褐色土を主体とし柱痕部が検出されない。②P_3型—黒褐色土を主体とするが柱痕部も明瞭に判別できる。③P_{21}型—柱痕部黒褐色土、掘り方ローム主体でしまっている。実測図中、掘り方で表記したものは①型。②型はP_3だけで、他は③型である。

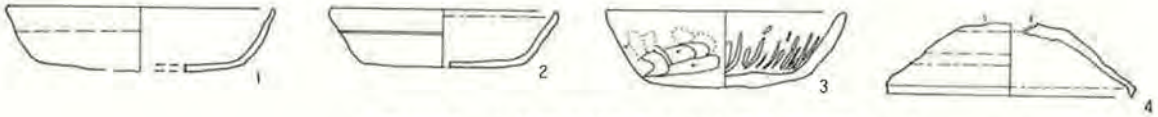
P_9とP_{12}は重複しており、P_{12}→P_9の新旧関係が確認されたので、P_{11}とP_{12}を棟持柱としてP_1〜P_4、P_{14}〜P_{17}を桁行とする2間×3間の総柱でない建物があり、それを建て替え、拡張して3間×3間の建物とした可能性が強いと思われる。P_6については建て替えの際に位置を掘り違えた為にP_5を掘り足したと考えた。

P_7には他の柱穴のような掘り方は検出されなかった。P_{10}は本遺構と関係するか不明である。P_{13}はP_{17}と重複するがわずかであり新旧関係は不明である。又、西辺に対応する柱穴がなく、性格も不明である。

遺物は各柱穴内から比較的多数の土器類が出土しており、大半は平安時代の前半期に属すると思われる。なお、P_{17}の掘り方覆土中位からほぼ完形の土師器坏が逆位で出土している。



第105図
1号掘立柱建物址実測図



第106図　1号掘立柱建物址出土遺物実測図　0　1：4　10cm

2号掘立柱建物址

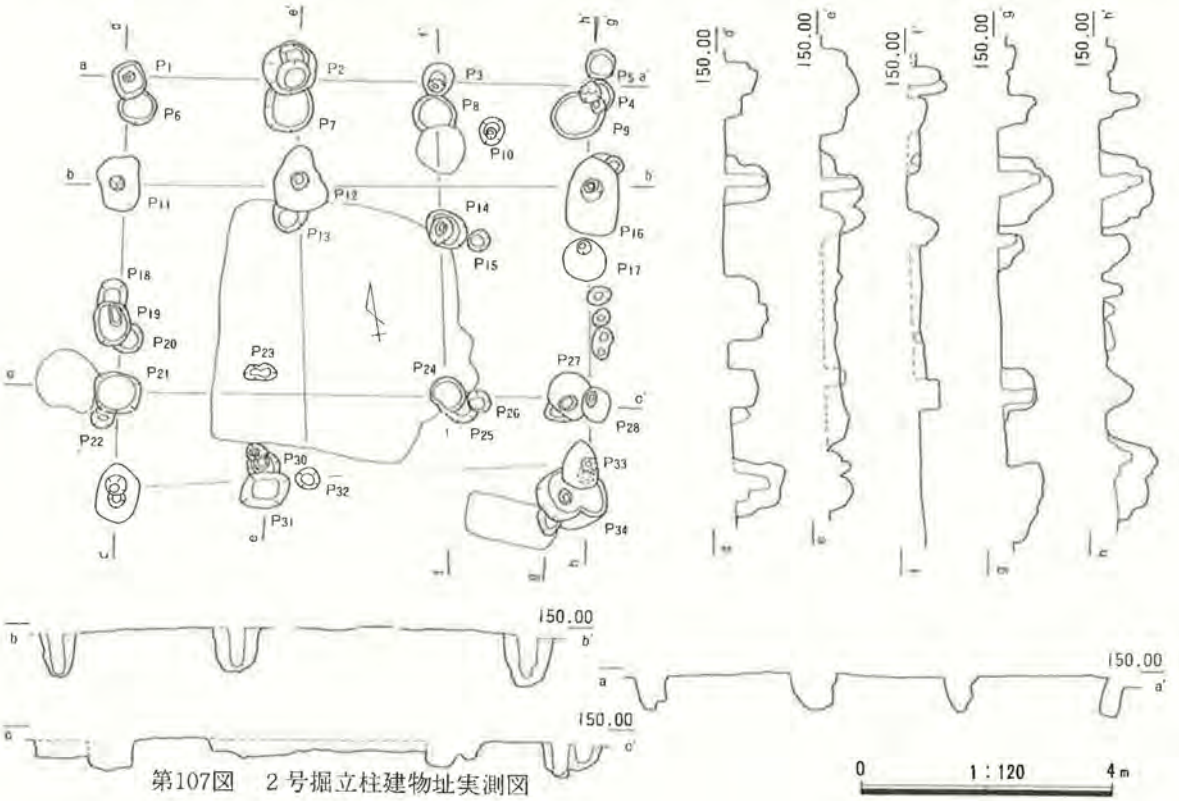
北区西半部東寄りに位置する。平安時代後期の4・5号住と重複しており、何れよりも古い。又、土坑とも重複しており、土坑の方が新しい。1号掘立が西方に近接する。

本遺構の柱穴の多くは重複しており、建て替えが考えられる。重複する柱穴の新旧関係はP_6→P_1、P_7→P_2 P_9→P_4、P_{13}→P_{12}、P_{27}→P_{28}、P_{34}→P_{33}であり他は不明である。柱穴の掘り方、規模は全体的には1号掘立と比して貧弱で、柱痕も不明瞭である。又、柱穴の配列にもズレが多い為、ここではある程度納得できる範囲で復元できた1例として説明したい。

建て替え後の建物はP_1～P_4を北辺、P_{29}～P_{33}を南辺とする3間×3間の建物で東辺にP_{16}、P_{28}が位置する。規模は東西7.4m、南北は西辺が6.4m、東辺が6.0mを測り歪んだ形状を呈している。柱間距離は多少のバラッキはあるものの東西方向は2.3～2.6mのほぼ等間隔であるが、南北方向は北から1.6m—3.2m—1.6～1.2mを測り1号掘立と同様に両端が短かい配列となっている。なお、西辺は4間となる可能性もある。

建て替え前の建物はP_6～P_9を北辺とし、P_{29}、P_{31}、P_{34}を南辺とする3間×3間の建物で東辺にP_{17}、P_{27}が位置する。規模は東西約7.4m、南北約6.0mを測り建て替え後の建物よりも整った形状を呈する。柱間距離は東西が2.4m前後の等間隔で、南北は西辺が北から1.2—3.2—1.4m、東辺が2.0—2.4—1.4と不規則な配列になる。東辺中央のピットの帰属は不明である。

遺物の出土は少量の土器破片だけであるが、遺構の時期は1号掘立と近接し、平安時代前半と思われる。



第107図　2号掘立柱建物址実測図

ピット、土坑

ピット、土坑については概要の項で簡単に説明してあるので、ここでは、比較的良好な遺物を出土したピット、土坑について説明し、併せて遺構外出土遺物も掲載したい。

P65

中区西半部中頃に位置する。径約40cm、深さ約45cmを測り、斜に掘り込まれている。覆土の中位に完形、半完形の須恵器坏(墨書)、土師器坏が3点重ねられた状態で出土した。なお、覆土は土器類の下層にはロームを主体とする褐色土が、上層には軽石を含む黒褐色土が堆積していた。

P67

P65の西方約2.5mに位置する。P65と同様に1点ではあるが須恵器坏が覆土上層から出土している。覆土の堆積も土器の上層と下層とでP65と同様の状態を示している。

P62～64

中区西半のピット、土坑群南端に位置する。土層の切り合い関係はP64→P62→P63の新旧関係が観察された。P64は軽石を含む黒褐色土が主体に堆積しており、P62は下層に灰層を挟む灰褐色・褐色土層、P63は黒色土・炭化物・焼土をブロック状に多量に含む黒褐色土が堆積している。P62から土師器甕、須恵器坏、P64から土師器甕の破片が出土している。

P68

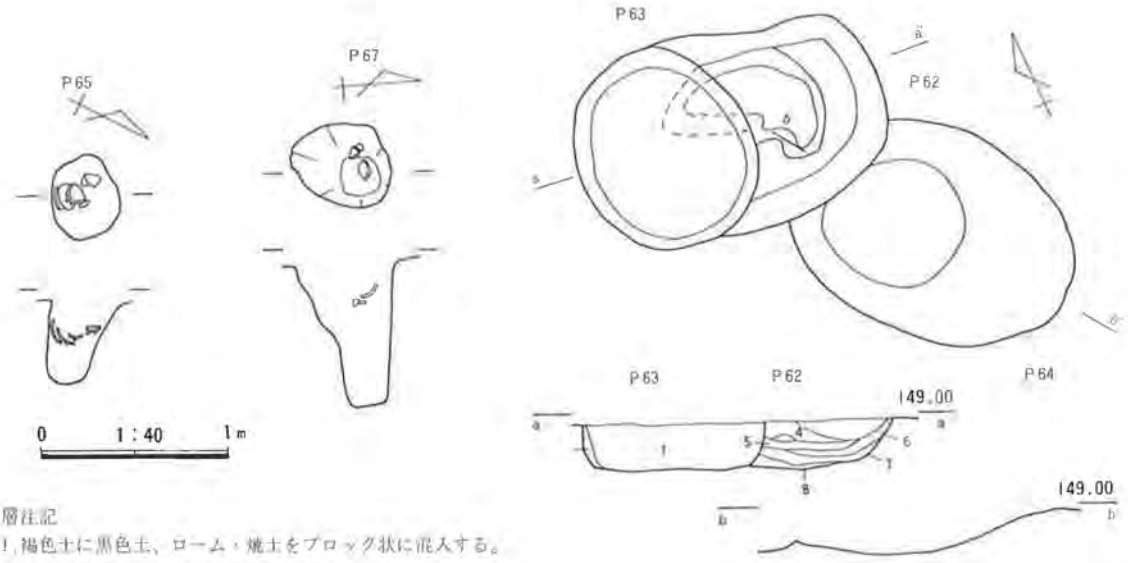
中区ピット、土坑群の中位に位置する。規模、形状ともにP65、P67と類似し、深さ50cmを測る。覆土上層から土師器(台付)小型甕、須恵器皿が出土している。

P93

南区西寄りに位置する。形状、規模ともP65、P67に類似し、覆土上層から須恵器高台付埦が出土した。

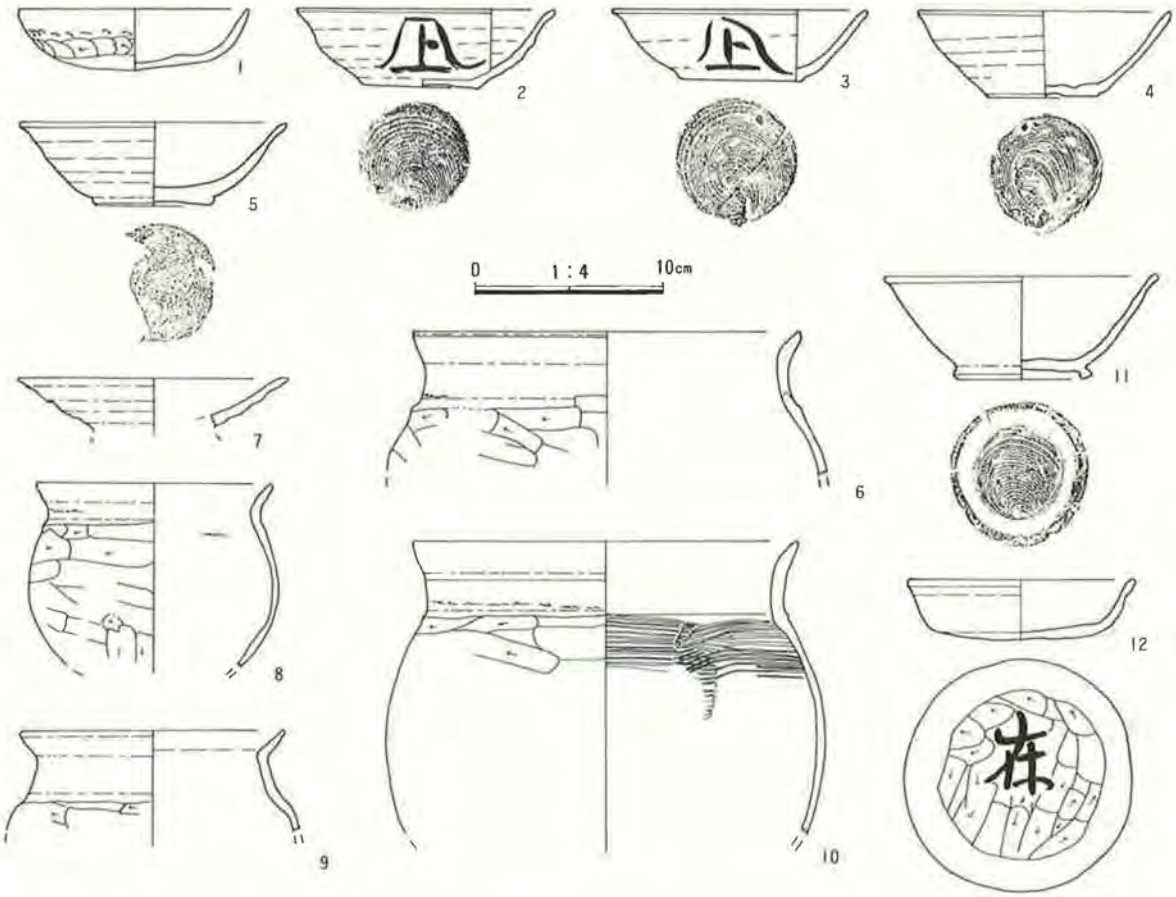
遺構外出土遺物

表土剝ぎの際の排土中から出土したもので、出土位置等不明である。土師器坏で墨書「在」と読める。



土層注記
1.褐色土に黒色土、ローム・焼土をブロック状に混入する。
2.ローム壁崩れ。　3.灰褐色土、灰混入。
4.3にローム。　5.褐色土に黒色土、ローム各ブロック状、炭。
6.5に灰。　7.灰白色灰層、粘性あり。　8.褐色土に炭化物。

第108図　土坑、ピット実測図



第109図　土坑、ピット遺構外出土遺物実測図

奈良・平安時代出土遺物観察表

番号	器種	出土位置 残存状態	法量(cm)	胎土・色調	器形・成・整形の特徴	備考
1、2号住居址(1)						
1	坏 (須恵器)	カマド ¾、底部完存	口：12.8 底：6.2 高：5.1	粗砂、白色粒多 黒色粒少。 灰色	小さな底部から外反して立ち上がり内彎する。口縁部は小さく外反する。右回転ロクロ成形、底部回転糸切り、他は回転ナデ。	還元炎焼成であるが比較的軟質。
2	高台付椀 (須恵器)	床直 口縁～体部½ 底部完存	口：12.8 底：6.4 高：4.9	粗砂、黒色粒 白色粒 灰白色	高台部は太く直立気味で、端部は部分的に外上がりで面取りされる。口縁部は外反する。 右回転ロクロ成形、底部は回転糸切りと思われるが調整により不明、付高台、内外面回転ナデ。	軟質、高台部黒斑全体的に歪みがあり、粗いつくりである。
3	坏 (須恵器)	フク土 口縁～体部½ 底部完存	口：12.0 底：5.3 高：4.1	砂粒 灰褐色	小さな底部から体部が内彎気味に開き口縁部がわずか外反する。右回転ロクロ成整形、底部回転糸切り。他は内外面回転ナデ。	内外ともに火を受けている。 やや軟質、酸化。
4	高台付椀 (須恵器)	床直 口縁～体部½ 底部完存	口：12.5 底：7.0 高：4.5	粗砂、小礫少白色粒、黒色粒灰色ー暗灰色	高台部はハの字に開く。体部は内彎気味に立ち上がる。右回転ロクロ成整形、底部は回転糸切りと思われるが調整の為不明瞭、後高台貼付。底部を含め内外面とも回転ナデ。	還元炎焼成であるが比較的軟質。

番号	器種	出土位置 残存状態	法量(cm)	胎土・色調	器形・成・整形の特徴	備考
1、2号住居址(2)						
5	高台付埦 (須恵器)	フク土 高台部欠損 口縁一部欠損	口：13.9 (底：6.8) 高：4.4	粗砂、小礫 白色粒、赤褐色粒。灰褐色	体部は内彎気味に開き、口縁部が外反する。 右回転ロクロ成整形、底部回転糸切り後高台貼付後周縁調整、他は内外面とも回転ナデ。	全体的に二次的に火熱を受ける。比較的硬質。
6	高台付埦 (灰釉陶器)	床直 ¼	口：14.0	緻密、黒色粒少 灰白色	内外面とも回転ナデ。 釉は漬け掛けと思われる。	施釉は雑。 釉色はオリーブ黄色
7	瓶 (灰釉陶器)	フク土 ⅓	口：7.0	緻密、黒色粒少 灰白色	口縁部は強く外反。内外とも回転ナデ。 釉は刷毛づけ、内面口縁部は厚い。外面剝落あり。	釉色はオリーブ黄色、部分的にルリ色。
8	羽釜 (須恵器)	床直、フク上 ⅙	口：(18.0)	粗砂黒色鉱物 石英、赤褐色粒 灰色	口唇部は面取りされ平坦、鍔は薄く長い鋭三角形状を呈し、わずかに下向き。外面回転ナデ、内面：口縁部ヨコナデ、胴部横方向ナデ。	還元炎焼成であるが比較的軟質。
9	羽釜 (土師質)	フク土 ⅙	口：(19.2)	粗砂、赤褐色粒 淡褐色	口唇部は面取りされ平坦、鍔は平板状で薄く下向きである。外面：口縁部ヨコナデ、他は回転ナデ、内面：全体横方向ナデ（浅い刷毛目状）	
10	鉄鏃？	床直	残存長3.7cm			
4号住居址(1)						
1	高台付埦 (須恵器)	カマド(中) ½	口：12.3 底：6.5	粗砂、白色粒 黒色粒	体部が内彎気味に立ち上がり口縁部で外反する。 高台は雑な作りで外開きする。端部は平坦である。 底部回転糸切り後高台貼付、他は回転ナデ。	還元炎焼成 比較的軟質。 底部、体部に黒斑
2	高台付埦 (須恵器)	カマド(南) 口縁部欠損	底：7.0	砂粒、金雲母 赤褐色粒 淡褐色	体部は内彎気味に立ち上がる。高台の作りは雑で外開きする。底部切り離し後高台貼付、切り離し技法不明、底部外面ナデ、他は回転ナデ。	右回転ロクロ成整形。 酸化炎焼成。
3	高台付皿 (灰釉陶器)	床直 ⅚	口：13.0 底：6.7 高：2.9	粗砂、黒色粒少量含む。緻密灰白色。	体部は内彎気味に開き、口縁部はわずかに外反する。貼付高台、断面は外側に丸味を持つ。 ロクロ水挽き整形、釉は漬け掛けと思われる。	釉はオリーブ灰色
4	高台付皿 (灰釉陶器)	床上5cm ⅗	口：13.0 底：6.9 高：2.6	小礫含む緻密 灰白色	体部は内彎気味に開き、口縁部はわずか外反する貼付高台、断面は外側に丸味を持つ。 ロクロ水挽き整形、釉は漬け掛けと思われる。	釉は明緑灰色。
5	高台付皿 (灰釉陶器)	床直 ⅓	口：(13.0) 底：(7.0) 高：(2.5)	小礫含む 緻密 灰白色	体部は内彎気味に開き、口縁部はわずか外反する。 貼付高台、断面は内外面とも丸味を持つ。 ロクロ水挽き整形、釉は漬け掛け。	釉はオリーブ灰色
6	高台付埦 (灰釉陶器)	床上5cm ¼	口：15.4 底：8.1 高：5.0	粗砂少量含む 緻密 灰色	体部～口縁部は内彎する。高台は断面三日月形に近い。ロクロ水挽き成形、釉は刷毛掛け。	釉は緑灰色
7	羽釜 (須恵器)	床上20cm ⅙	口：(17.4)	粗砂 灰色	鍔は断面三角形で若干上向き。 右回転ロクロ成整形、全体回転ナデ。	還元炎焼成 硬質
8	羽釜 (須恵器)	床直 ⅙	口：(20.2)	粗砂、石英 灰色	鍔は低く先端に丸味がある。薄手の作りである。 胴部外面縦ヘラケズリ、他は回転ナデ、左回転。	還元炎焼成 比較的軟質。
9	羽釜 (土師質)	カマド ⅙	口：(24.0)	粗砂、赤褐色粒 にぶい橙色	鍔の先端は丸味を帯びて薄く、下向きの三角形状を呈する。右回転ロクロ成整形、全面回転ナデ	酸化炎焼成。 焼成良好。

番号	器種	出土位置 残存状態	法量(cm)	胎土・色調	器形・成・整形の特徴	備考

4号住居址(2)

10	鉄釘	フク土	残存長4.3cm
11	刀子	フク土	残存長6.8cm

5号住居址

1	坏 (須恵器)	床直 一部欠損	口：11.4 底：5.3 高：3.2	粗砂、白色粒 石英、小礫 灰色	小さな底部から体部が内彎して立ち上がり、口縁部は比較的強めに外反する。右回転ロクロ成・整形、底部回転糸切り、他は回転ナデ。	体下半部～底部に黒斑。還元炎焼成軟質。
2	高台付埦 (須恵器)	カマド、床直 ½	口：12.4 底：6.0 高：5.4	粗砂 灰色	口縁部は肥厚し、外反する。高台端は外上がり。右回転ロクロ成整形、底部回転糸切り後付高台、他は回転ナデ。	還元炎焼成、軟質
3	高台付埦 (須恵器)	床直 ½	口：12.0 底：6.2 高：4.7	粗砂 外面大半黒色 一部灰色	体部は内彎気味に立ち上がり上半からゆるやかに外反する。高台端は強い外上がり。 右回転ロクロ成整形、回転糸切り後高台貼付。	還元炎焼成、軟質 高台貼付後の調整不良で高台剝落。
4	高台付埦 (須恵器)	床上5cm 体部一部欠損 底部¼	口：13.3 底：7.0 高：4.6	粗砂 灰褐色	器形は3と類似する。 右回転ロクロ成整形、回転糸切り後高台貼付。 高台周縁の調整は雑。	酸化？炎焼成、ごく軟質。
5	羽釜 (須恵器)	床上7cm ⅙	口：(17.0)	砂粒 灰色	胴部は丸味を帯びる。鍔は低く鈍三角形を呈する。薄手の作りである。左回転ロクロ成整形。 胴部外面ナデ、他は回転ナデ。	還元炎焼成、比較的軟質。胴部外面に接合痕残る。
6	羽釜 (土師質)	床上5cm ½	口：19.2	粗砂、赤褐色粒 褐色	鍔は先端丸味のある断面三角形を呈し、口縁部は肥厚する。右回転ロクロ成整形、全面回転ナデ	酸化炎焼成。
7	羽釜 (土師質)	床直 ⅙	口：(20.0)	砂粒、赤褐色粒 褐色	鍔は端部丸い断面三角形で、口縁部は比較的強めの内そぎ状を呈する。全面回転ナデ。	酸化炎焼成。

8号住居址(1)

1	坏 (土師器)	床直 ⅔	口：11.5 底：9.6 高：3.0	細砂粒、白色粒 黒色鉱物 にぶい橙色	底部は丸味を帯びた平底状で、体部と口縁部の境に弱い稜がある。外面：口縁部ヨコナデ、体部ナデ、底部ヘラケズリ、内面：ヨコナデ、ナデ。	
2	坏 (土師器)	床上5cm ほぼ完形	口：11.8 高：3.3	砂粒 にぶい橙色	1よりも底部は丸味があり、稜も不鮮明である。 外面：口縁部ヨコナデ、体部ナデ、底部一定方向ヘラケズリ、内面：ヨコナデ、ナデ。	底部中央に焼成後の穿孔？ 体部内外指頭圧痕
3	坏 (土師器)	床直 ⅓	口：11.7 底：9.0	砂粒 にぶい橙色	外面：口縁部ヨコナデ、体部ユビオサエ、ナデ。 底部一定方向ヘラケズリ、内面：ヨコナデ。	内外面に黒色付着物。
4	坏 (土師器)	床直 ¼	口：13.0 底：9.8	砂粒 橙色	外面：口縁部ヨコナデ、体部ユビオサエ、ナデ。 底部ヘラケズリ、内面：ヨコナデ、ナデ。	内面に黒色付着物多量。
5	坏 (土師器)	南東杜穴 一部欠損	口：12.7 底：9.2 高：3.8	白色粒、黒色粒 多 橙色	平底から体部が直線的に開く。外面：口縁部ココナデ、体部横ヘラケズリ、底部ヘラケズリ、内面：ナデ後体部縦ミガキ（暗文状、底部？）	胎土脆く、器表荒れておりミガキは不鮮明。
6	坏 (土師器)	床直 ½	口：13.0 底：9.3 高：4.1	砂粒 橙色	底部は若干丸味がある。体部は内彎気味に立ち上がる。外面：口縁部ヨコナデ、体部・底部ヘラケズリ、内面：ナデ後体部斜、底部累線状ミガキ（暗文）	

番号	器種	出土位置 残存状態	法量(cm)	胎土・色調	器形・成・整形の特徴	備考
8号住居址(2)						
7	坏 (土師器)	床上7cm 一部欠損	口：13.8 底：9.4 高：4.5	砂粒 橙色	1、2より若干大きい。外面：口縁部ヨコナデ。体部へラケズリ後ナデ？底部へラケズリ。内面：ナデ後体部斜、体下部～底部累線状ミガキ（暗文）	内面に黒色付着物
8	坏 (恵須器)	南東柱穴 ½	口：12.8 底：7.8 高：4.1	白色粒多、小礫少量。 灰赤色。	体部は直線的に立ち上がる。 右回転ロクロ成整形、底部へラ切り後ナデ？。 他は内外面回転ナデ。	還元炎焼成、硬質 器壁断面はにぶい赤橙色。
9	坏 (須恵器)	フク土 ½	口：12.4 底：7.6 高：3.7	粗砂、黒色粒 灰色	体部は直線的に立ち上がり外傾する。 右回転ロクロ成整形、底部切り離し技法不明。一定方向へラケズリ、他は内外面回転ナデ。	還元炎焼成、軟質
10	高台付椀 (須恵器)	床直 高台部欠損？ 他はほぼ完存	口：12.6 底：(6.9) 高：(3.8)	砂粒、小礫 灰褐色（外面） 淡褐色（内面）	体部は内彎気味に立ち上がる。 右回転ロクロ成整形。底部回転糸切り後高台貼付後剝落？、もしくは、強いナデにより擬高台状に成形。他は回転ナデ。	酸化炎焼成、軟質
11	高台付椀 (須恵器)	床上8cm 高台部完存	底：7.2	白色粒、黒色粒 灰色	高台断面三角形、右回転ロクロ成整形、回転糸切り後高台貼付、内外ともに回転ナデ。	還元炎焼成、硬質
12	鉄鏃	床	残存長6.5cm			
13	鉄製品	床上15cm	現状長18.8cm			
9A号住居址(1)						
1	坏 (土師器)	フク土 破片	口：(11.8)	細砂粒 明赤褐色	体部は浅めで口縁部は内彎気味に立ち上がる。 体部外面へラケズリ、他はヨコナデ。	
2	坏 (土師器)	フク土 破片	口：(10.8)	細砂粒 明赤褐色	体部は浅く、口縁部は外傾気味。体部外面へラケズリ、体部周縁ユビオサエ、ナデ、他はヨコナデ	内面黒色処理か？
3	坏 (土師器)	フク土 ½	口：13.0 高：3.3	細砂粒 にぶい褐色	底部は平底気味で口縁部は直線的。体部外面へラケズリ、体部周縁ナデ、他はヨコナデ。	
4	坏 (土師器)	床直 ⅔	口：12.4 底：4.8 高：5.1	砂粒、赤褐色粒 明褐色	小さな底部から体部が内彎して立ち上がる。 外面：口縁部ヨコナデ、体・底部ナデ？、内面：ナデ後口縁部～体部横ミガキ、底部一定方向ミガキ	内面黒色処理 内面にタール状付着物多量。
5	坏 (須恵器？)	フク土 ⅓	口：13.0	細砂粒 灰褐色	底部は平底状で、口縁部と体部の境に稜を持つ。 器表面荒れて整形技法不明。	酸化炎焼成、軟質
6	坏 (須恵器)	フク土 ¼	口：12.0	白色粒、黒色粒 灰色	口縁部わずかに外反。右回転ロクロ成整形、底部回転糸切り後周縁へラ調整、他は回転ナデ。	還元炎焼成、硬質
7	坏 (須恵器)	北壁周溝上 完形	口：10.8 底：6.6 高：5.4	砂粒 灰色	体部中位に稜を持つ。 底部回転へラ切り後ナデ、他は内外面回転ナデ。	内面に煤付着。 還元炎焼成、硬質
8	坏 (須恵器)	床直 底部完存	底：7.2	黒色粒多量 灰色	右回転ロクロ成整形、底部回転糸切り、他は回転ナデ。	還元炎焼成、硬質
9	蓋 (須恵器)	カマド燃焼部 ⅔	口：17.2 高：3.5 摘：3.85	黒色粒多量 灰色	端部は折り曲げられ、ほぼ直立する。 右回転ロクロ成整形、天井部外面回転へラケズリ切り離しは回転へラ切りか、他は回転ナデ。	還元炎焼成、硬質 黒色粒発泡。

番号	器種	出土位置 残存状態	法量(cm)	胎土・色調	器形・成・整形の特徴	備考
9 A号住居址(2)						
10	甕 (須恵器)	フク土 破片	底：(9.4)	白色粒、黒色粒 灰色	高台端部は幅広で平坦、底部切り離し技法不明 底部外面ナデ、高台端部ヘラ調整、他は回転ナデ	胴、高台部外面と底部内面に自然釉
11	甕 (土師器)	カマド ⅙	口：(20.0)	砂粒多量 黒褐色（外面） 明赤褐色(内面)	胴部中位に張りを持ち、口縁部は外反する。 外面：口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ。 内面：口縁部ヨコナデ、胴部ナデ。	器厚はごく薄い。
12	甕 (土師器)	フク土 ⅓	口：19.0	白色粒、小礫 灰色	口縁部は下半がわずか内傾し、上半で内彎気味に外傾する。肩部ヘラケズリ、他はヨコナデ。	
13	甕 (須恵器)	床直 ½	胴：44.0	白色粒 灰色	肩部に張りを持つ。 外面平行叩き目痕、内面弱い青海波状アテ痕。	
14	鉄　鎌	フク土	残存長9.7cm			
12号住居址						
1	埦 (灰釉陶器)	フク土	口：(14.0)	緻密、黒色粒少 灰白色	口縁端部つまみ出される。釉は透明で薄く施釉、刷毛掛け？。	
2	高台付埦 (灰釉陶器)	フク土 ¼	底：8.6	やや粗い 灰白色	高台断面三日月型、外面ほぼ全面施釉、内面は底部中央を除き施釉、刷毛掛け、磁器片？混入。	釉色はオリーブ灰色で厚く施釉。
3	埦 (須恵器)	床上5cm 底部完 体部⅙	口：13.9 底：5.5 高：6.0	粗砂 灰黄色	口縁部は外反する。 右回転ロクロ成整形、底部回転糸切り、他は回転ナデと思われる。器表面は磨耗しており砂粒露呈	酸化炎焼成、軟質
4	甕 (土師器)	カマド ¼	口：18.2	砂粒、白色粒 赤褐色粒、小礫 浅黄橙～橙色	口縁部下半はほぼ直立し、上半は外傾する。 外面：口縁部ヨコナデ、肩部横ヘラケズリ。 内面：口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ（刷毛状）	
5	刀　子	フク土	残存長9.8cm、柄の部分が刀身状なのは欠損によるものか。			
6	砥　石	フク土	残存長9.1cm、砥面は1面			
14号住居址(1)						
1	坏 (土師器)	貯蔵穴 ⅕	口：(13.4)	砂粒、白色粒 赤色	外面：口縁部ヨコナデ、体部ナデ。 内面：口縁部ヨコナデ、体部ヨコナデ、ナデ。	外面に接合痕
2	坏 (土師器)	貯蔵穴 破片	口：11.6 底：6.2 高 4.4	白色粒 赤褐色粒 暗赤褐色	底部は平底で体部が直線的に開き口縁部でわずかに内彎する。外面：口縁部ヨコナデ、体部ナデ底部ナデか未調整、内面：ヨコナデ。	同一個体と思われる破片が多数あるが接合しない。
3	坏 (土師器)	フク土 ¼	口：11.6 底：7.2 高：4.3	白色粒 赤褐色粒 赤褐色	器形、成整形とも2に類似。体部外面はほとんど未調整、底部外面ナデ。	
4	坏 (土師器)	貯蔵穴 底部完存 他は¼	口：12.0 底：6.3 高：4.3	粗砂、小礫 白色粒 赤褐色	器形は2、3に類似、底部は押し潰され外側にはみ出す。外面：口縁部ヨコナデ、体部粗い指ナデ底部未調整、内面：ヨコナデ。	内面は一部を除き黒色。底部外面粘土のヒビ割れ。
5	坏 (須恵器)	貯蔵穴 ⅔	口：11.0	砂粒 灰白色	口縁部は外反する。内外面回転ナデ。器壁薄く穴があき粘土を当てて補修、その部分はナデ。	体部内面黒色。酸化炎焼成？軟質

番号	器種	出土位置 残存状態	法量(cm)	胎土・色調	器形・成・整形の特徴	備考
14号住居址(2)						
6	椀 (須恵器?)	カマド 破片	口：15.0	砂粒、赤褐色粒 明赤褐色	口縁部肥厚しわずかに外反する。 内外ともに回転ナデ。	口唇直下に沈線。
7	高台付椀 (須恵器?)	カマド ほぼ完存	底：6.5	砂粒、赤褐色粒 明赤褐色	高台部外面ほぼ直立。体部下端～高台部は器壁厚くしっかりした作り。底部回転糸切り後付高台。	酸化炎焼成のわりには硬質。
8	羽釜 (土師質)	フク土 破片	口：(19.1)	砂粒、赤褐色粒 浅黄橙色	鍔は鋭三角形で上反りする。口唇部平坦でわずかに内傾気味。内外面回転ナデ。	酸化炎焼成、軟質
10	羽釜 (須恵器)	床直 1/6	口：(18.0)	粗砂少量 褐灰色	鍔は鋭三角形で上反り気味。口唇部平坦でわずかに内傾する。内外面回転ナデ。	還元炎焼成、比較的硬質。
9	羽釜 (土師質)	(床下土坑) 破片	(口：22.0)	砂粒、小礫 明赤褐色	鍔の先端は丸味のある鋭三角形で上反り気味、口唇部は中央が凹む。内外面回転ナデ。	酸化炎焼成、軟質
11	羽釜 (土師質)	カマド 1/2	底：8.0	粗砂少量 褐灰色	外面：胴部ヘラケズリ後ナデ？底部ナデ 内面：回転ナデ、右回転ロクロ成形。	酸化炎焼成、軟質
17号住居址						
1	椀？ (須恵器)	フク土 1/4	口：13.0	砂粒、白色粒 石英。灰色	口縁部は小さく外反する。 内外面回転ナデ。	還元炎焼成、軟質
2	高台付椀 (須恵器)	フク土 底部完存 体部一部	底：7.7	砂粒、白色粒 灰色（一部）全体的に黒色	高台端部は面取りされるが全体的に丸味を帯びる。右回転ロクロ成整形、回転糸切り後高台貼付。貼付後の調整は雑。	還元炎焼成、比較的硬質。 墨書土器文字不明
3	高台付椀？ (灰釉陶器)	フク土 1/3	口：14.0	緻密 灰白色	口縁部ごくわずかに外反気味。器厚はほぼ一定。施釉は漬け掛けか？	釉色オリーブ灰色
4	瓶？ (灰釉陶器)	フク土		粗い、黒色粒 灰白色	頸～口縁部は外反気味にわずか開く。 ほぼ全面に施釉、外面下端と内面上位は厚い。	釉色オリーブ灰色
5	羽釜 (土師質)	床直 破片	(口：24.0)	粗砂 にぶい褐色	全体的に薄手の作りで、口唇部は肥厚する。鍔は先端丸く三角形状を呈する。内外面回転ナデ。	酸化炎焼成、軟質
6	羽釜 (土師質)	カマド 1/6	口：(24.8)	砂粒、小礫少 橙色	鍔は先端丸く、扁平でわずか上向き。口唇部は平坦で中央がわずかに凹む。内外面回転ナデ。	酸化炎焼成、軟質だが堅緻
7	羽釜 (須恵器)	カマド 1/6	口：21.6	砂粒、白色粒多 小礫。灰色	鍔は先端丸く三角形状を呈す。口縁部は内傾する。口唇部外面突出し、中央が凹む。内外面回転ナデ	還元炎焼成、軟質 断面黒色。
19A号住居址						
1	椀 (土師器)	床直(貯蔵穴？) 一部欠損	口：17.3 高：5.5	砂粒 橙色	底部中央平坦で体部は内彎し、口縁部はほぼ直立 外面；口縁部ヨコナデ、底部中央一定方向、体部ヘラケズリ、体部周縁ナデ、内面：ヨコナデ、ナデ	
1号掘立柱建物址(1)						
1	坏 (土師器)	P5 破片	口：(14.0) 底：(10.8)	砂粒 橙色	平底から体部が内彎気味に立ち上がり、口縁部わずか外反。外面：底部ヘラケズリ、体部ナデ、口縁部ヨコナデ、内面：ヨコナデ。	体部外面に粘土のヒビ割れ。
2	坏 (土師器)	P14 破片	口：(12.0) 底：(8.6) 高：(3.0)	砂粒 橙色	平底から体部が内彎して立ち上がり中位で外反、口縁部は内彎して立つ。外面：口縁部ヨコナデ、体部ナデ、底部ヘラケズリ、内面：ヨコナデ。	体部外面に粘土のヒビ割れ。

番号	器種	出土位置 残存状態	法量(cm)	胎土・色調	器形・成・整形の特徴	備考
1号掘柱建物址(2)						
3	坏 (土師器)	P 9 ⅔	口：12.6 底： 高： 3.9	砂粒、白色粒 小礫 にぶい橙色	平底から体部が内彎気味に立ち上がる。外面：口縁部ヨコナデ、体上部指頭圧痕、下部ヘラケズリ底部ヘラケズリ、内面：体部縦ミガキ（暗文）	底部も磨かれるが不鮮明 内面に黒色付着物
4	蓋 (須恵器)	P15 破片	口：(13.2)	砂粒、小礫 灰色	天井部高い。端部は折り曲げられ外反して立つ。天井部外面中位ヘラケズリ、他は回転ナデ。	還元炎焼成、軟質 右回転糸切り。
ピット・土坑出土遺物						
1	坏 (土師器)	P65 完形	口：12.0 高： 3.0 (高：8.8)	粗砂 橙色	ヘラケズリにより底部、体部、口縁部の境に弱い稜が形成される。外面：口縁部ヨコナデ、後下位に刻み列、体部・底部ヘラケズリ。内面ヨコナデ	刻み列はヘラ先で施文か？
2	坏 (須恵器)	P65 完形	口：13.7 底： 6.3 高： 4.2	粗砂、小礫 灰色	小さな底部から体部が内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。右回転ロクロ成整形、底部回転糸切り。他は内外回転ナデ、ナデ痕強い。	墨書土器「凡」 還元炎焼成、軟質 過半部黒斑。
3	坏 (須恵器)	P65 一部欠損	口：13.5 底： 6.5 高： 3.7	粗砂 灰色	体部は内彎して開き口縁部は外反する。 右回転ロクロ成整形、底部回転糸切り、他は内外回転ナデ、ナデ痕は弱い。	墨書土器「凡」 還元炎焼成、軟質 一部黒斑。
4	坏 (須恵器)	P67 ⅔	口：13.3 底： 6.2 高： 4.6	粗砂 灰白色	体部はごくわずか内彎気味に開く。 右回転ロクロ成整形、底部回転糸切り、他は内外回転ナデ。	内面に黒斑。
5	坏 (須恵器)	P62 ⅓	口：14.0 底： 6.3 高： 4.4	粗砂、石英粒 白色粒 褐灰色	体部は内彎して立ち上がり、口縁部は強く外反。右回転ロクロ成整形。底部回転糸切り。他は内外面とも回転ナデ。	内面黒色(いぶし？) 外面に黒斑。
6	甕 (土師器)	P62 ¼	口：20.3	細砂粒 にぶい橙色	口縁下半部はほぼ直立し、上半部は外傾する。口唇直下外面に沈線。外面：口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ。内面：口縁部ヨコナデ、胴部ナデ	
7	高台付皿 (須恵器)	P68 ¼	口：14.0	粗砂、黒色粒 灰色	右回転ロクロ成整形。 内、外面とも回転ナデ。	
8	小型甕 (台付) (土師器)	P68 ⅓	口：12.3	砂粒	体部は丸味を持つ。口縁下半はほぼ直立し上半は外傾する。外面：口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ、内面：口縁部ヨコナデ、胴部横方向ナデ。	外面に煤付着。
9	小型甕 (土師器)	P68 ¼	口：13.8	砂粒	口縁部は内傾し、上端で内彎気味に強く外傾する 内面：口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ。 内面：口縁部ヨコナデ、胴部横方向ナデ。	内外面に黒色付着物。
10	甕 (土師器)	P64 ¼	口：20.1	細砂粒 にぶい橙色	胴部は丸味を持ち、口縁部はほぼ直立し、上半部はわずかに外傾する。外面：口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ。内面：口縁部ヨコナデ、胴部ナデ	胴部内面のナデは上端が刷毛状。
11	高台付埦 (須恵器)	P93	口：14.6 底： 7.4 高： 5.4	粗砂、黒色粒 灰白色	体部は内彎して立ち上がり口縁部はわずかに外反右回転ロクロ成整形、底部回転糸切り後高台貼付後高台周縁調整。内、外面回転ナデ。	高台接合部にヒビ割れ。
12	坏 (土師器)	遺構外 完形	口：12.0 (底：8.8) 高： 3.1	砂粒含む。 にぶい橙色	外面：口縁部ヨコナデ、体部ナデ、底部ヘラケズリ、内面：ヨコナデ、ナデ。体部ユビオサエ	墨書土器「在」

Ⅳ 田 中 遺 跡

1　遺跡の立地

田中遺跡は、岩之下遺跡と同じ台地上に乗り、細ヵ沢川に面した東端部に位置する。調査地の東側は細ヵ沢川に向かって急激に落ち込み、比高差約４ｍを計る段丘状地形を呈している。

遺跡の範囲はこの台地の東端にそって広がっており、特に調査地の北～北東方向は既知の遺跡として濃密な遺物の散布が認められている。遺跡地の現状は桑畑となっており東側は細ヵ沢川に沿って水田として利用されている。

遺跡の西方400mには昭和58年度に調査を行った田中田遺跡がある。今年度調査を行った寄居遺跡は南西に隣接し、調査地間の距離で250mある。岩之下遺跡は南西約700mに位置している。

2　発掘調査の方法

試掘調査により縄文時代を中心とする遺跡であることが分かっていたので、ローム面までを重機によって表土剝ぎを行ったが、ローム上面に多数の礫石の出土を見て表土剝ぎを浅くし、以後手掘による遺構の検出に切り替えた。

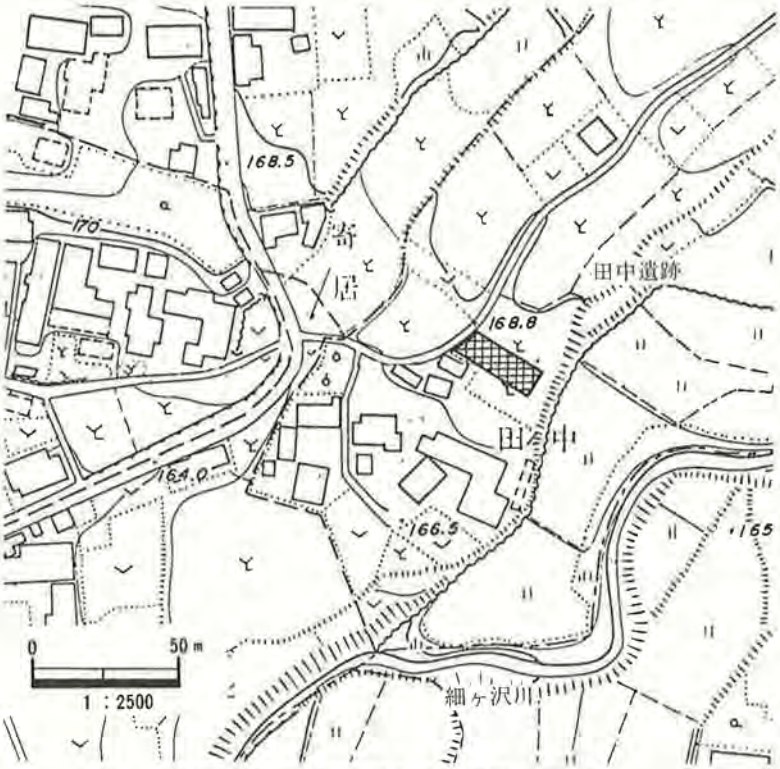
図面は、道路の南側基本杭に沿って10mメッシュを組み、さらに５ｍごとに調査用の杭を設定して平板による実測を行った。

3　基本土層

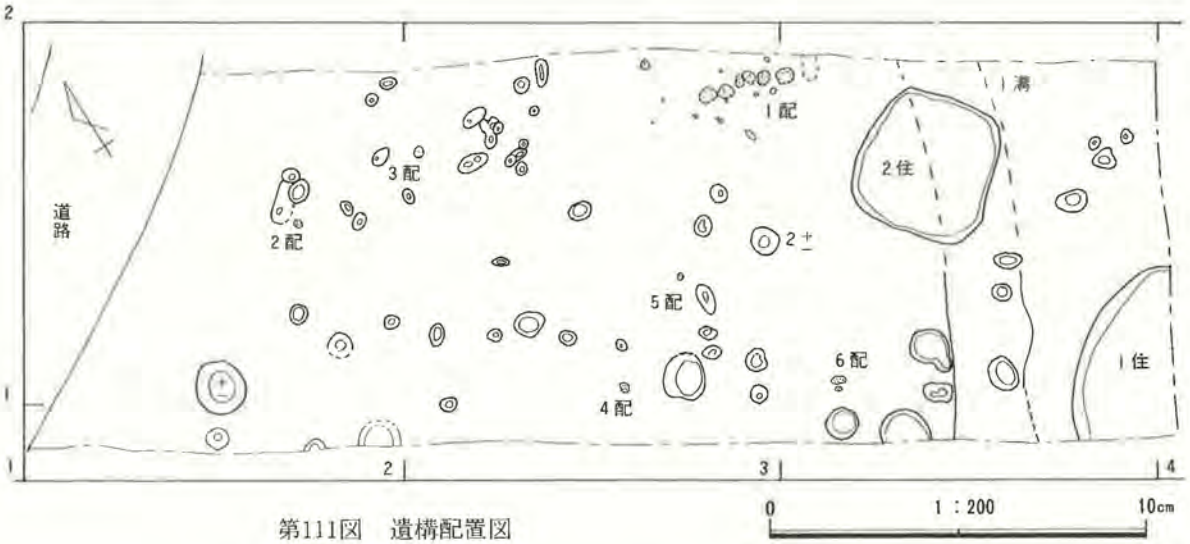
田中遺跡は、細ヵ沢川に向かって傾斜する台地の東南端に位置する為、ローム層までの厚さが30cm～１ｍと大きく異なっている。

ここでは、調査地南側ほぼ中央部の土層を基本土層として説明したい。

Ⅰ　暗褐色土。表土。
Ⅱ　暗褐色。ＦＰ含む。
Ⅲ　暗褐色に黄色パミスをわずかに含む。
Ⅳ　褐色土と暗褐色土を斑状に混える。
Ⅴ　褐色土。（ローム漸移層）
Ⅵ　明褐色土。（ローム層）



第110図　調査の範囲と遺跡周辺の現況図



第111図　遺構配置図

4　検出された遺構と遺物

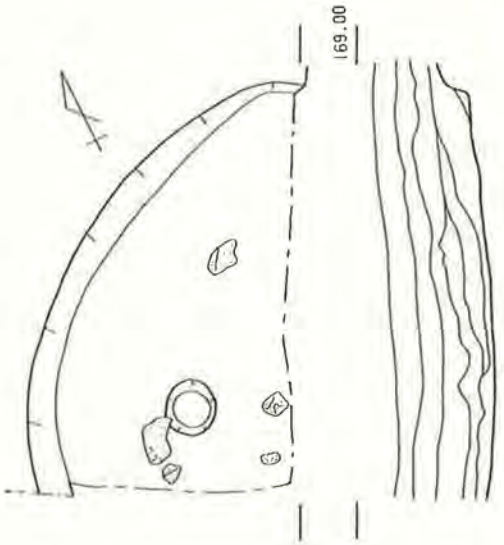
(1)　概　　要

田中遺跡で検出された遺構は、縄文時代の竪穴住居跡と土坑のほかに、時期不明確な配石遺構、ピット、溝？がある。このうち配石遺構とピットの多くは縄文時代に属すると思われる。溝の時期は比較的新しいと思われる。遺物は縄文時代前期を主体とするが、早期、中期のものも出土している。

(2)　竪 穴 住 居 跡

1号住居址

調査区東南端に位置する。2号住居址が北約4mに近接する。北西の一部分の調査であり、形状、規模などは不明であるが、不正円形か隅丸方形状を呈すると思われる。壁は比較的直に立ち上がり、検出面からの深さは約50cmを測る。床面は軟弱で、壁溝、炉などは検出されなかった。壁から1mほどの床面に、径50cm、深さ40cmほどのピットが検出され、主柱穴の可能性がある。遺物は、全て覆土中からの出土で、土器片、石器を合わせて20数点が出土しただけである。なお、ピットの西側に床直で長さ50cm、幅25cmほどの平板な石が出土しており、台石、工作石などの用途が考えられる。遺構の時期は遺物の残りがわるく、判然としないが、覆土中出土の土器片が縄文時代前期を主体とすることから該期に属すると思われる。



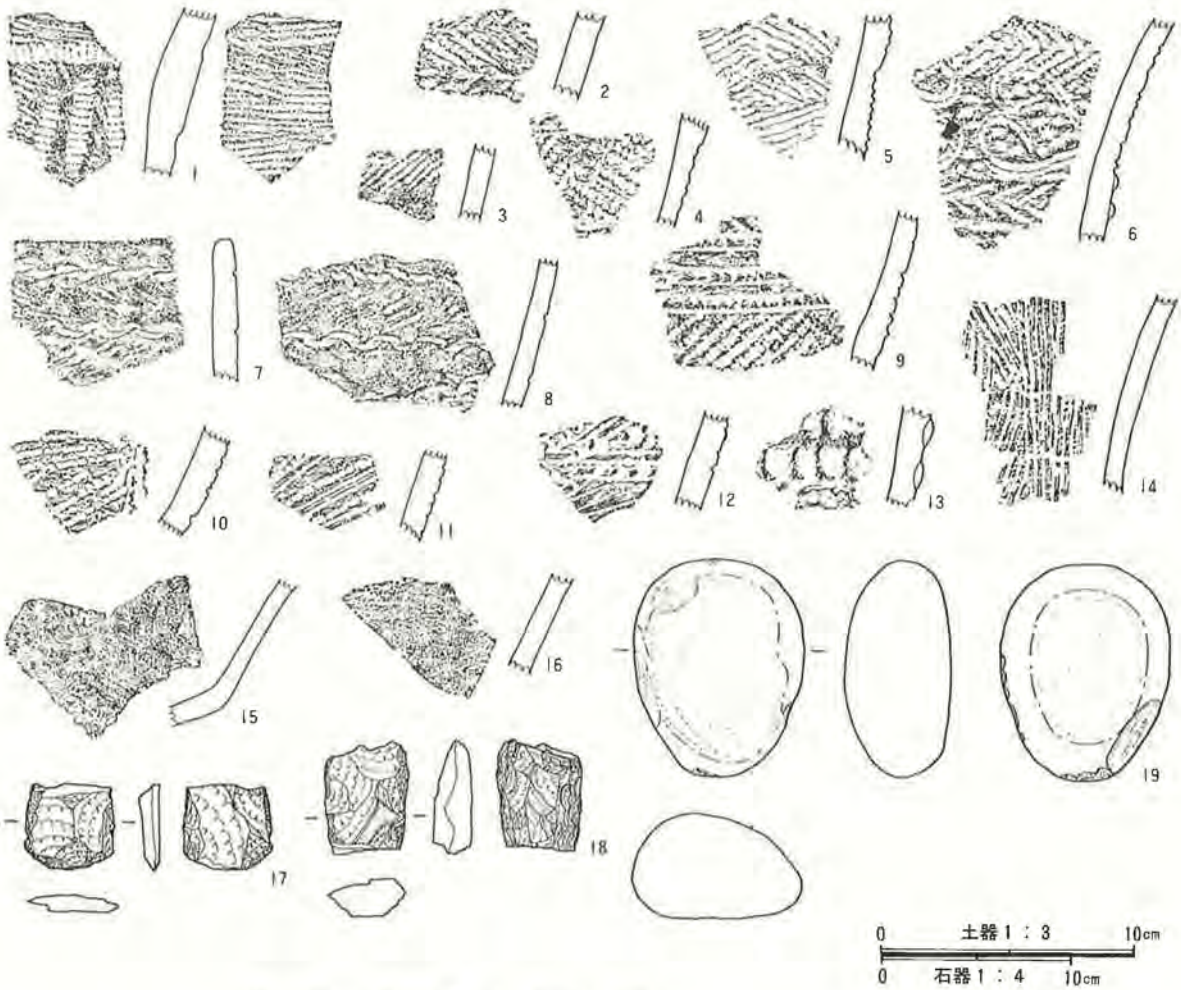
第112図　1号住居址実測図

1号住居址出土遺物

1は表裏に条痕を施文する土器で、さらに表側に絡縄体圧痕文で横位、縦位に施文する。厚手の土器である。2はＲＬ－ＬＲ縄文を羽状に施文する。3はＬＲ縄文を施文する。4はＲＬ－ＬＲの羽状縄文上に横位の浅い平行沈線を施文する。5は無節Ｌを横位、縦位に施文する。6は頸部に微隆起帯を2条巡らせ、その間を矢羽根状に短沈線で施文する。微隆起帯直下には2段の円形竹管による連続刺突文を配す。微隆起帯の上段には縄文による押圧痕で平行沈線状にハート型文様を施文し、隙間に円形刺突文を配する。7・8は同一個体である。原体Ｌの結節縄文で、2種の異なった結び方で施文していると思われる。口唇部は面取りしている。9は平行沈線と爪形文を横位に巡らす。地文は縄文ＬＲである。10は刺突文を連続的に平行施文する。11は平行沈線と平行沈線に沿う連続刺突文が施文される。12は平行沈線内に爪形文を施文する。13は凹凸文である。14は縦位の集合沈線を施文する。15・16は無文である。

胎土　1は砂粒を多量に含み、繊維も少量含む。2は繊維と砂粒、3は粗砂、4は繊維と粗砂、5は砂粒、繊維のほかに赤褐色粒を含む。6は多量の繊維と粗砂を含む。7・8は粗砂多量、9～11は繊維と砂粒、12は繊維と粗砂、13は砂粒、14は粗砂多量、15は粗砂、16は砂粒と石英粒を含む。

色調　1は外面黒褐色で、内面にぶい橙色を呈す。2はにぶい褐色、3・7・8・12・16はにぶい赤褐色、4・6・11・13・15はにぶい橙色、5は暗赤褐色、9は橙色、10・14はにぶい黄橙色を呈す。



第113図　1号住居址出土遺物実測図

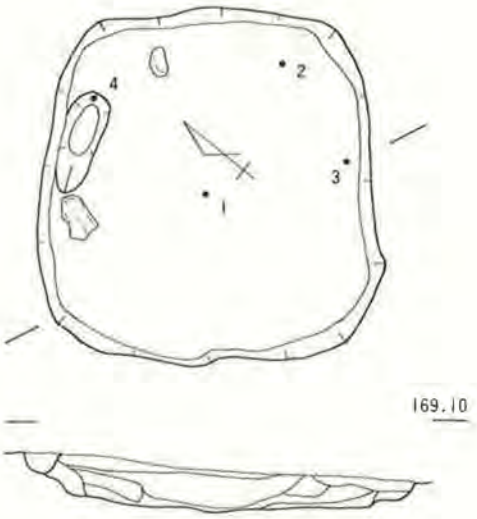
2号住居址

調査地の東半部に位置し、1号住居址が南4mに近接する。北約2mに1号配石遺構が近接する。

一辺約3.6mの隅丸方形状を呈する。壁は比較的角度をもって立ち上がり、残存壁高約30cmを測る。比較的明確な床面が認められたが、柱穴、炉址などは検出できなかった。北壁直下に長さ120cm、幅40cm、深さ20cmほどの溝状の施設が検出されたが、性格は判然としない。南隅部1m四方ほどの部分は床が非常に堅くしまっていた。

遺物は、半完形の浅鉢や、深鉢の大片がほぼ床直の状態で出土しており、覆土中からも土器片、石器などが出土している。又、溝状施設の西側に接して長さ50cm、幅25cmほどの平板な石が出土している。

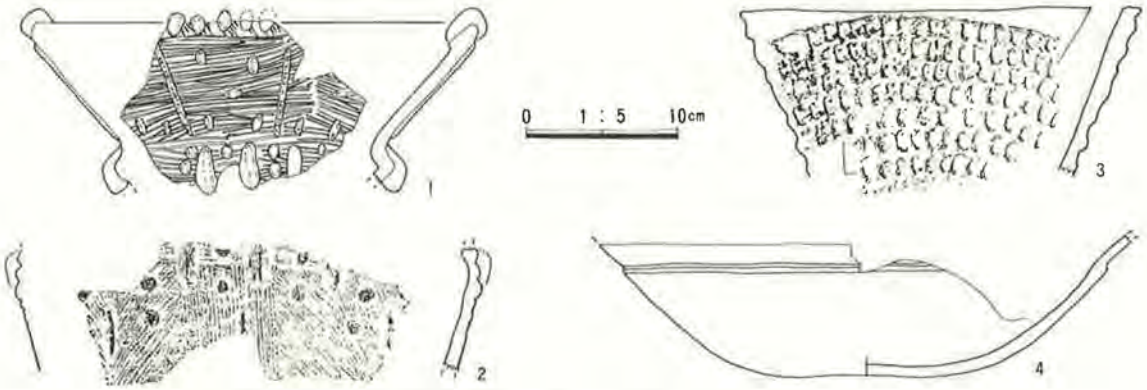
遺構の時期は、諸磯C式期に属するとおもわれる。



第114図　2号住居址実測図

2号住居址出土遺物

1は口縁部が大きく開く深鉢の口縁部で、頸部に段を持つ。施文は横位の集合沈線上にボタン状、棒状、耳たぶ状の貼付文が付される。2も集合沈線と貼付文で施文される。3は器面全体に凹凸文を施文する。4は浅鉢で、口縁部を欠損している。地文は無文で、外面は非常に丁寧に磨かれているが、内面と底部外面は磨滅している。5は表裏に条痕を施文する土器である。6・7は同一個体で浅い擦痕の上に平行沈線を施文する。8・9も同一個体で、平行沈線と連続刺突文を施文する。10はＬＲ縄文を施文する。11はＲＬを大小2種の原体を用いて施文している。12の施文は浅く不明瞭である。13はＬＲを縦横位に施文し羽状にしている。14は集合沈線上に縦位に細い粘土帯を貼付し、その上を連続刺突している。15は無文上に短沈線(刺突？)を施している。16は無文である。8・9・10・11は繊維、砂粒を含み、8・9はさらに赤褐色粒も含む。他は砂粒を含むが6・7は赤褐色粒、5は黒色鉱物も含む。1・3は黒褐色、2は赤褐色、4は橙色を呈する。5は外面浅い黄橙色で、内面黒色である。6・7・16はにぶい赤褐色、8・9はにぶい黄橙色、10・11はにぶい橙色、14は外面にぶい橙色で、内面赤褐色を呈す。

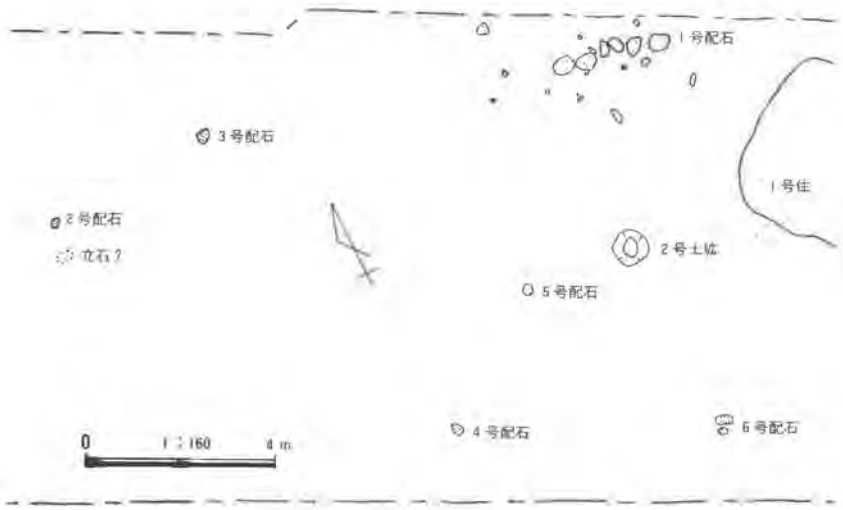


第115図　2号住居址出土遺物実測図(1)

第116図　2号住居址出土遺物実測図(2)

(3) 配 石 遺 構

調査区域のほぼ全域に広がっており、区域外にも伸びていると思われる。表土面から浅く、又、重機によって表土剝ぎをおこなったためもあり、どの程度原状をとどめるかは不明である。個々の配石の規模は1号配石を除いて1～3個程度と小規模である。1号配石の東南部からは配石遺構は検出されていないが、調査区



第117図　配石遺構実測図

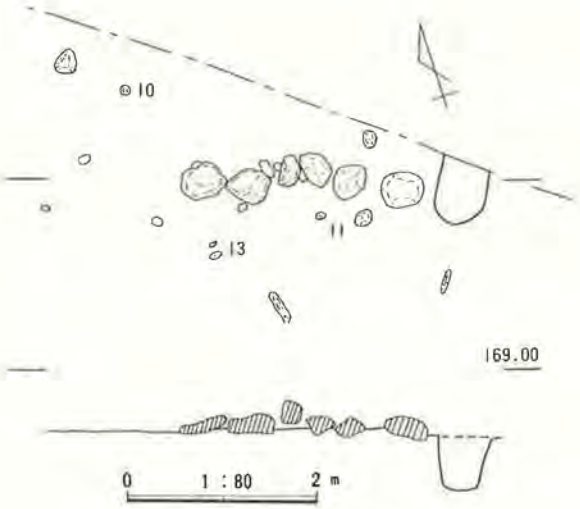
内では、1号配石を中心として他の配石が周囲に巡らされているような様相が伺える。尚、試掘調査の際に、2号配石の南側から長さ50cmほどの扁平な立石？が出土した。

1号配石遺構は調査区東寄りの北端に位置し、径40～50cmの河原石が8個、ほぼ東西に直線的に並んでいた。尚、西側の2個は表土剝ぎの際に動かしてしまったので、挿図には記載していない。

他の2～6号配石は、何れも人頭大以下の河原石である。

各配石の下には明瞭な掘込みは認められず、遺構の性格は判然としない。

配石遺構に帰属すると明確に判断できる遺物は少ないが、周辺からは遺構と同一レベルで多数の遺物が出土している。



第118図　1号配石遺構実測図

尚、配石遺構周辺には多数の小ピットが検出されているが、特に規則性などは看取できず、配石遺構との関係、性格などについては不明である。

配石遺構周辺出土遺物

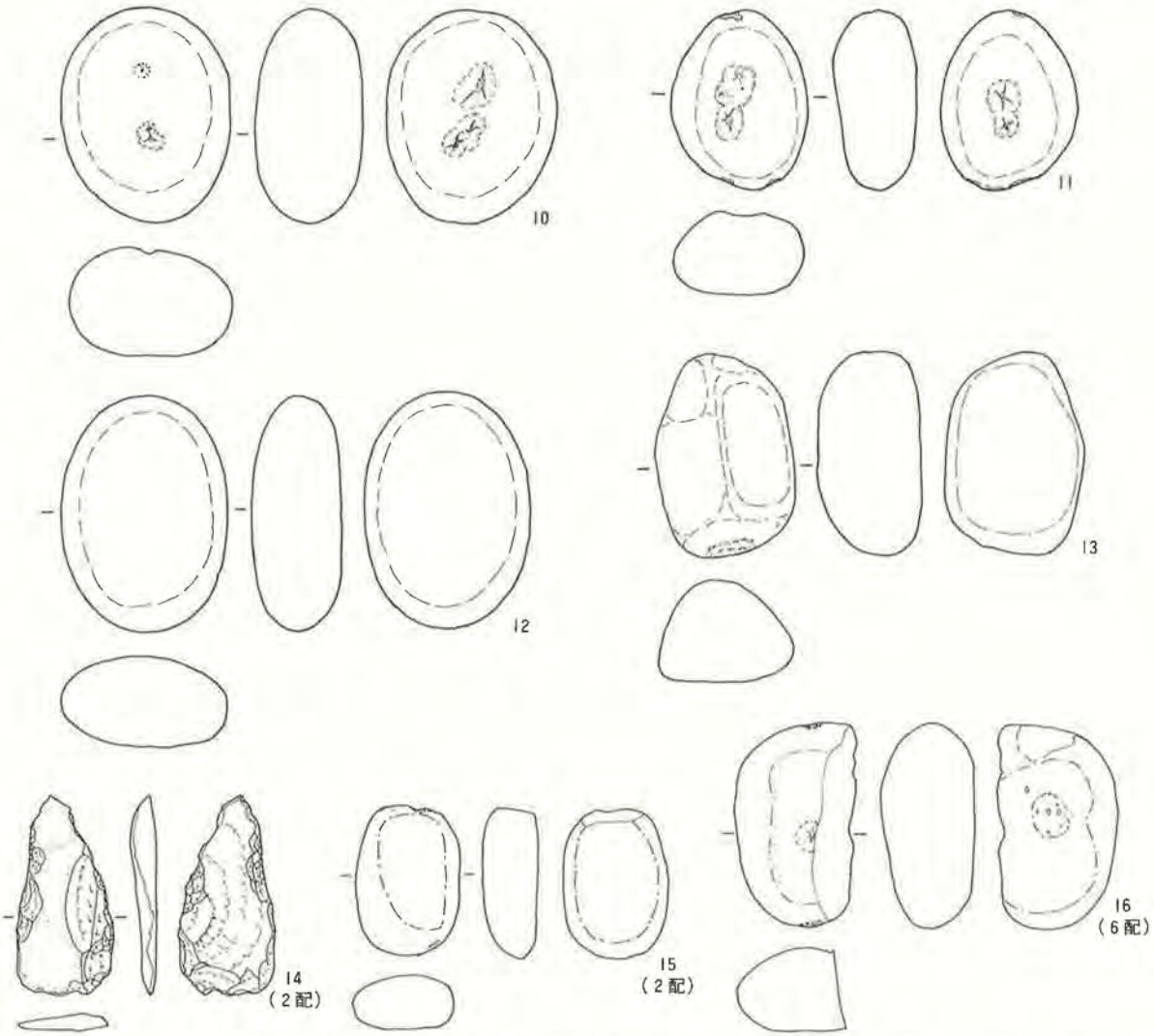
1は表裏に条痕文を施文する土器である。2・3はＲＬ－ＬＲ縄文を羽状に施文する。4も羽状に施文する。原体は附加条と思われる。5も附加条と思われる。6は結節沈線と平行沈線を横位に巡らせ縦位の平行沈線で結び、交差部に円文を配する。7は頸部に細い隆帯を巡らせ、隆帯上を棒状工具で斜位に連続押圧し、隆帯直下にも連続刺突する。地文はＲＬ－ＬＲ縄文を羽状に施文すると思われる。8は口唇下に平行した縦位の連続刺突を施し、横位にも一条巡らせる。9は底部で、上げ底を呈し、縄文ＲＬが付される。

胎土　1は砂粒のほかに繊維も少量含む。4は繊維と赤褐色粒で、他は繊維、砂粒の何れも含む。

色調　1・4・5にはにぶい橙色、2はにぶい黄橙色、3・7・8はにぶい褐色、6・9はにぶい赤褐色を呈する。

石器10～13は1号配石周辺出土である。13は若干の摩擦痕があり、焼けている。14・15は2号配石に近接して出土した。15は焼けている。16は6号配石直下の出土で、焼けている。14はけつ岩、他は安山岩である。

第119図　配石遺構周辺出土遺物実測図(1)



第120図　配石遺構周辺出土遺物実測図(2)

0　1：4　10cm

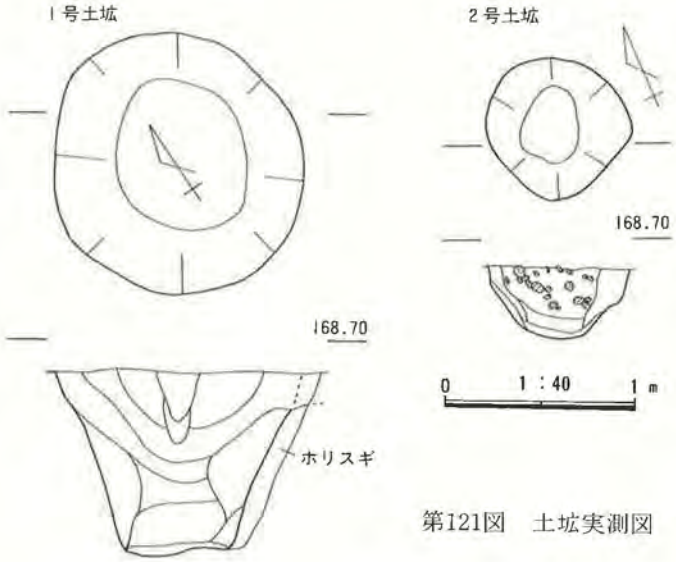
(4)　土　　坑

1号土坑

調査区の西南端部に検出された。径140cm、深さ110cmを測り、上～下層に散在して多数の土器片が出土している。

2号土坑

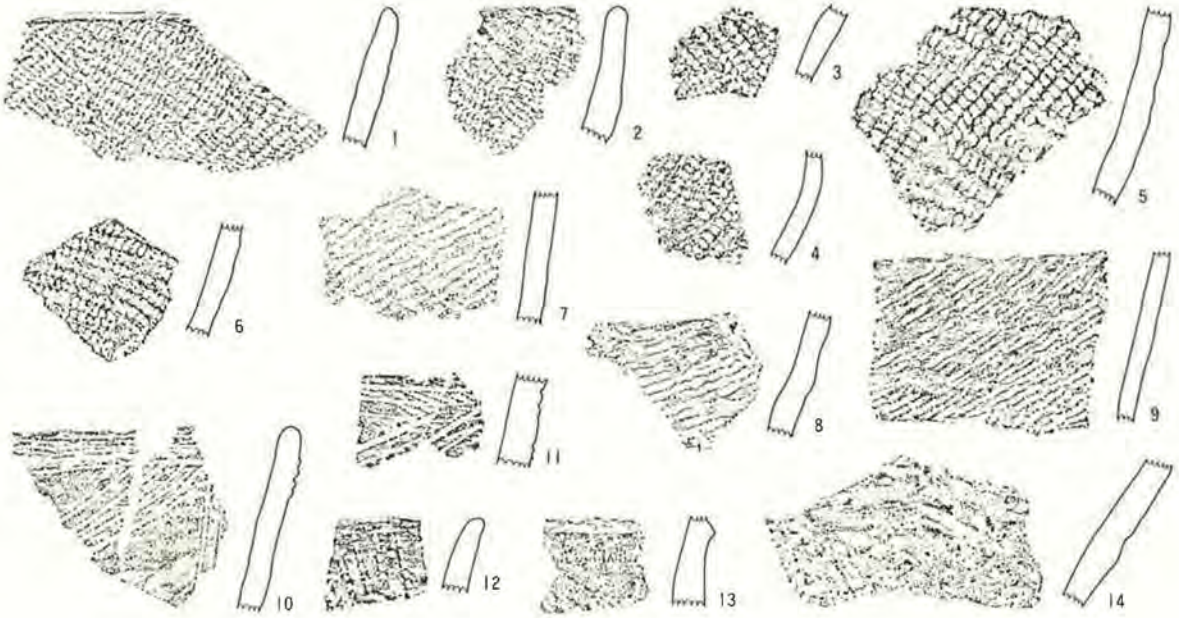
調査区の中央部東寄に検出された。径90cm、深さ40cmほどで、擂鉢状を呈する。中～上層に多量の小礫が出土しているが、特に火熱を受けたような痕は認められなかった。



第121図　土坑実測図

1号土坑出土遺物

1・5はＲＬ－ＬＲ縄文を羽状に施文する。2はＬＲを縦位、横位に施文し羽状を作り出す。3は多縄ＲＬ、4は附加縄ＲＬ、6はＲＬ縄文、7・8・9は無節Ｌを地文とする。10・11は平行沈線を施文するが、11はＲＬが地文の可能性もある。12は連続刺突文を縦位、横位に施文する。13は横位の隆帯直下にキザミ状の連続刺突を施す。14は無文で荒いナデ痕が認められる。胎土は13をのぞいて全てに繊維が認められる。2・4・5・8・9・12・13・14は粗砂を含み、9・13・14は多量である。5・14は赤褐色粒も含む。色調は1・10・14は橙色、2・12は黒褐色、3はにぶい橙色、4・7はにぶい褐色、5・8・9はにぶい赤褐色、6は褐色、11は黄橙色、13は赤褐色を呈する。



第122図　1号土坑出土遺物実測図

(5)　その他（1号溝）

調査区の東半部に時期、性格ともに判然としない遺構が検出されている。

上端幅6m、下端幅5m程で、底面は平坦である。底面の両端にそって浅い溝が掘られている。北側の掘り込みはロームに達していない。

遺構につくと思われる遺物が無いため判断材料に欠けるが、比較的新しい時期の溝、もしくは道路跡と思われる。

第123図　1号溝実測図

V　寄　居　遺　跡

1　遺跡の立地

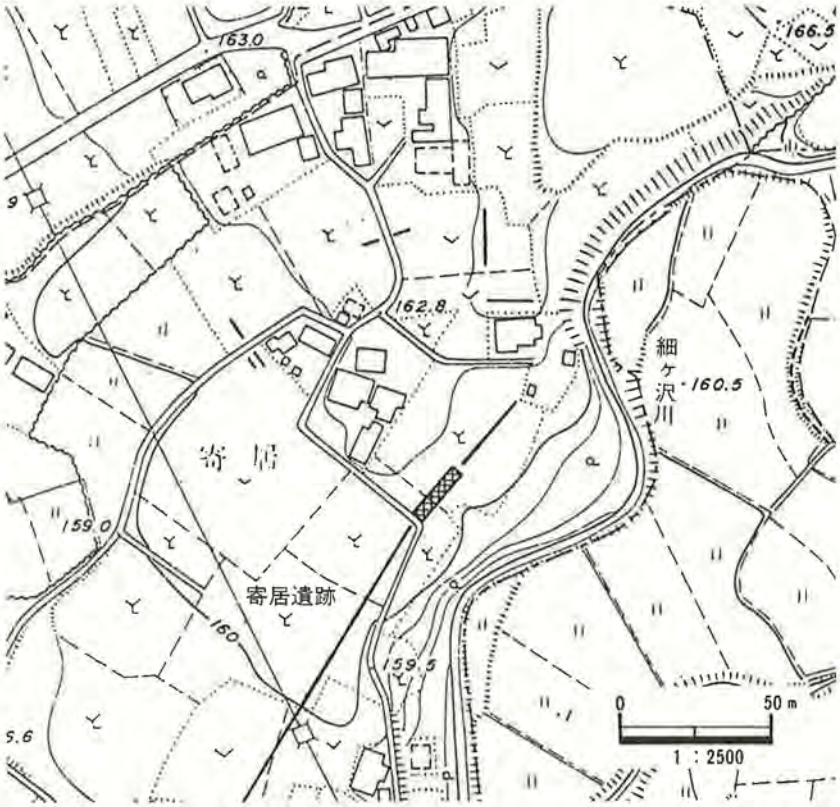
寄居遺跡は、細ケ沢川と法華沢川に狭まれた大地の東端部に細ケ沢川に面して位置している。細ケ沢川は蛇行をくりかえしながら南西下しており、調査地の東側は径約50m東方へ張り出している。遺跡の西方は沢状低地となっており、やはり南西へ伸びている。寄居遺跡は、この沢状低地と細ケ沢川に狭まれた低台地の付け根部分に位置している。台地部分の現状は概ね桑園であり、低地部分は水田として利用されている。

2　発掘調査の方法

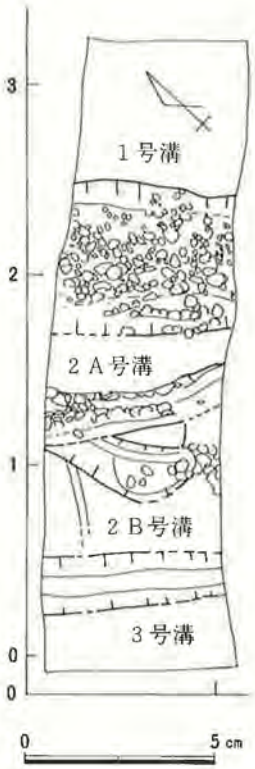
道路敷きの基本杭にそって1m西方に長軸をとり、5mメッシュを組んで調査用杭を設定した。表土剝ぎは重機を用いて行い、以後は手掘りによって調査を行った。比較的平坦地であり、削平が少ないため、石積み溝の掘り方調査は行わず、調査後に埋め戻した。

3　基本土層

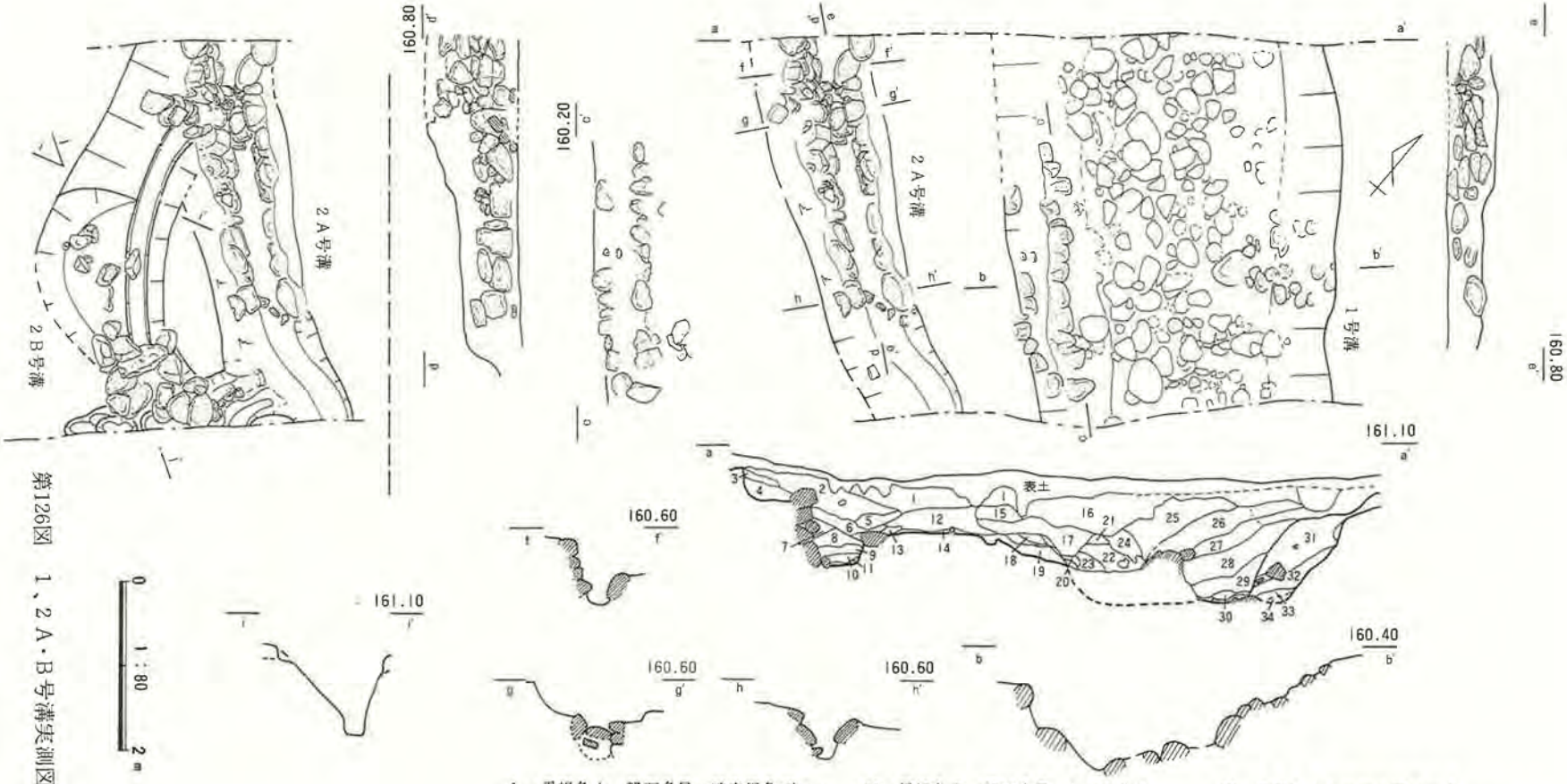
調査地の周辺では、約30～40cmの表土層下にすぐロームが現れるが、低台地の南西にいくにしたがって暫時間層を挟むようになる。又、低台地の付け根部分では2m以上掘り下げてもロームが検出されず、西方の低地から岩之下遺跡西方の沢状低地へと連続する細ケ沢川の旧流路の可能性が考えられる。



第124図　調査の範囲と遺跡周辺の現況図



第125図　遺構配置図



第126図　1、2A・B号溝実測図

1．黒褐色土　軽石多量、暗赤褐色ブロック含む。
2．黒褐色土　ローム粒、軽石少量、しまりない。
3．黒色土　ローム含む。
4．黒色土　ローム、褐色土、粘質。
5．2に砂粒・暗褐色ブロック含む。
6．灰黒褐色粘質土　砂粒・パミス含む。
7．黒褐色土　しまりない。
8．黒褐色粘質土　パミス含む。
9．8に暗赤褐色ブロック含む。
10．黒褐色土　砂粒多量。
11．10にパミス・暗赤褐色ブロック含む。
12．黒褐色土　軽石多量、しまりある。
13．≒6
14．12に砂粒。
15．≒12
16．黒褐色土に黒色土ブロック、ロームブロ少量。
17．ロームブロックに黒色ブロ。
18．黒褐色土・黒色土が層状に堆積。粘性強くしまっている。
19．黒色土に茶褐色ロームブロック。
20．ロームブロックに黒褐色土。
21．黒褐色土にローム。
22．黒褐色土と砂の互層。
23．黒褐色土とロームブロック。
24．黒褐色土にロームブロック・黒色土ブロック（少量）軽石。
25．ローム・ロームブロック主体、黒褐色土・黒色土含む。
26．≒24
27．≒26ローム・ロームブロック多量。
28．26に暗褐色土ブロック。
29．黒褐色土にローム・ロームブロック・黒色土。
30．砂層。
31．黒褐色土にローム粒・鉄錆粒。
32．灰褐色土・黒褐色土・浅黄色ローム含む。

4　検出された遺構と遺物

(1)　概　　要

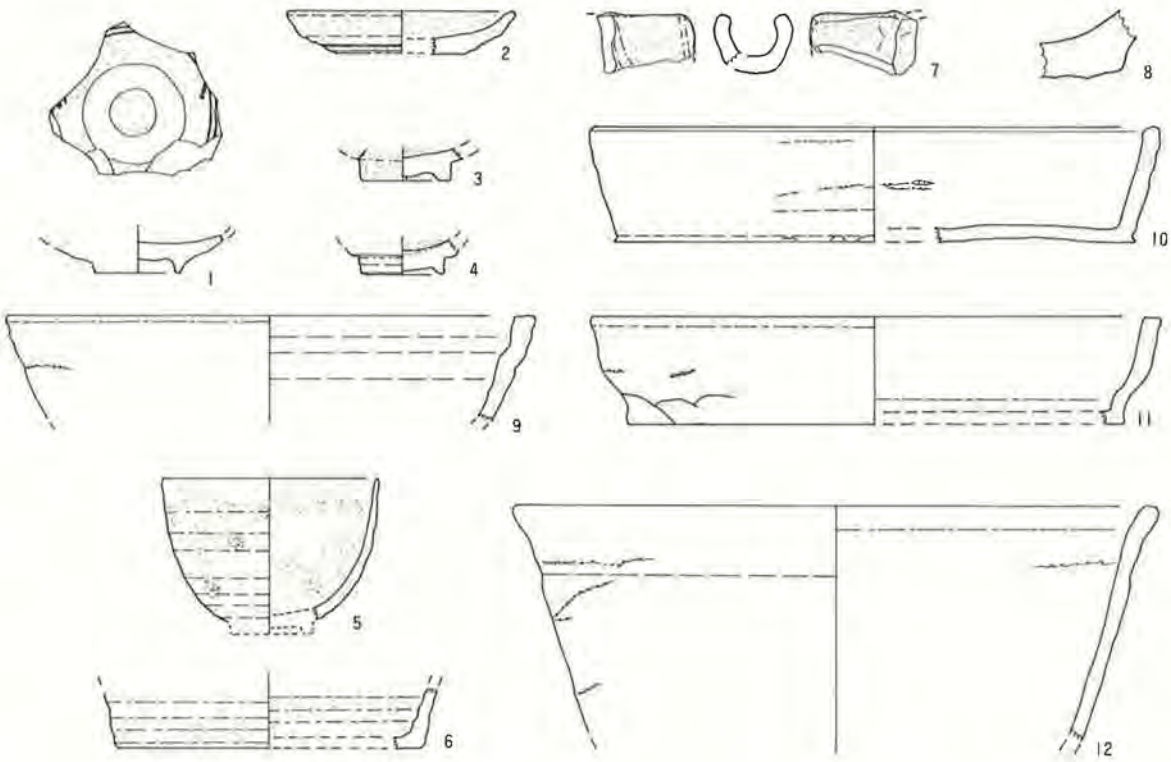
寄居遺跡で検出された遺構は、中近世の溝址が４条であるが、その内の２条は石積みされており、陶磁器類、石臼、砥石などが出土している。遺構外出土遺物は主に縄文時代の土器片で、他に数点の土師器、須恵器が出土しており、遺跡内には該期に属する遺構も存在するものと思われる。

(2)　溝　　址

１、２Ａ・Ｂ号溝

１、２Ａ号溝は、調査地のほぼ中央を北西から南東に向かって横走する溝址である。１、２Ａ・Ｂ号溝上は現在でも地割りで画されており、１号溝の東端は、径５ｍ程の窪地として細ヶ沢川に面している。

１号溝は、南西方向へ約60cm程の掘り替えを行っている。新溝の上端幅約３ｍ、下端幅約２ｍで、深さは検出面から約1.4mを測る。南西側面には２段の石積みが残存しているが、原状で何段に積まれていたかは不明である。溝底部には多量の礫石が崩落していた。北東側面にも石積みされていた可能性があるが、南西側面のようには土を突き固めておらず、原状を停める石があるかどうか確認できなかった。遺物は、陶磁器類(皿、



第127図　１号溝出土遺物実測図

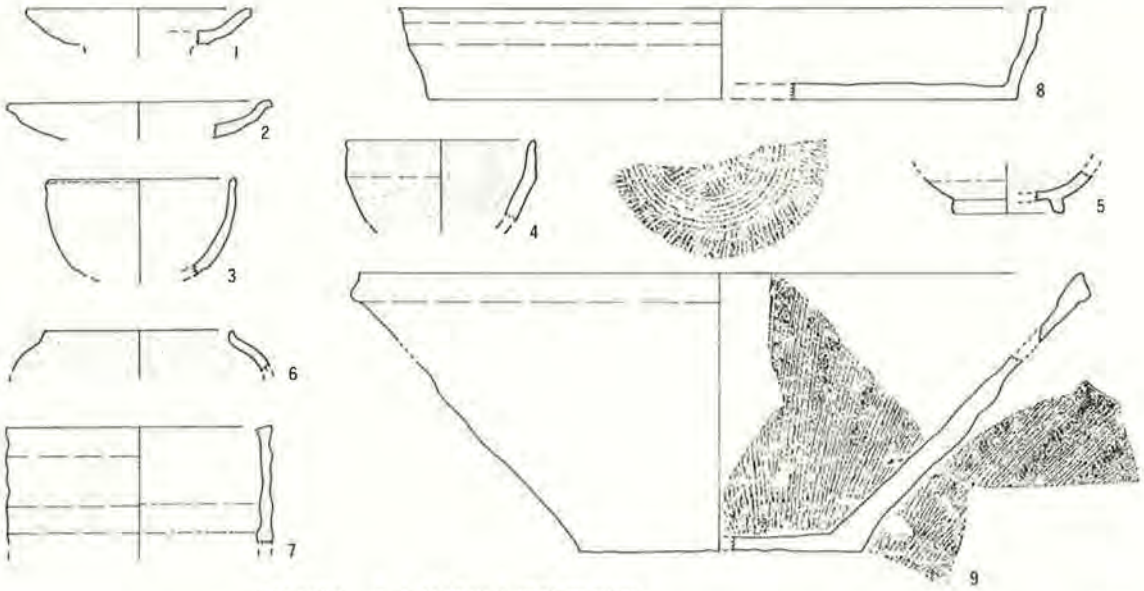
0　1：4　10cm

碗、片口、筒物、内耳土器)、石臼、砥石が覆土低位から出土している。

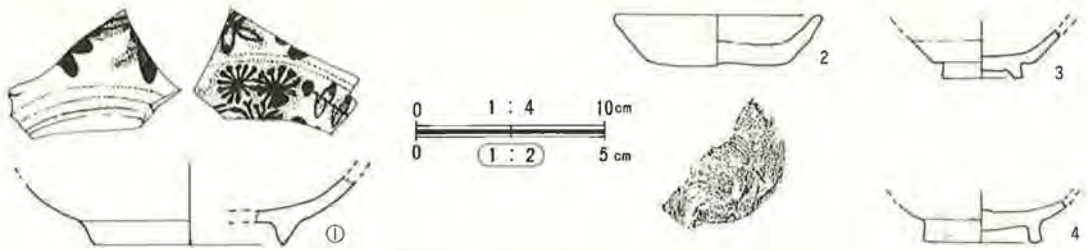
２Ａ号溝も石積みされているが、南東端では石積みが無くなり、深さを減じて、１号溝側へ寄って行くような様相を見せる。石積みの内法は約30cmと狭く、最も高い所で約90cmの高さを測る。１号溝との間は地山よりも掘り下げて、平坦なテラス状を呈しており、この中段からの深さは約40cmである。２Ｂ号溝との分岐部分には流路を塞ぐような形で、大小の礫が積み重なっているが、意図的に塞いだものか、単に崩落したものかの判断はつかなかった。遺物は、石積みに使われていた石臼の他、陶器類（皿、碗、茶壺、香炉、摺鉢、内耳土器)、砥石が出土している。

２Ｂ号溝は、２Ａ号溝と重複する素掘りの溝で、形状等に違いはあるものの規模が同様であり、掘り替えの可能性がある。調査区内では、北から南へ向かい、急激に東へ向きを変えている。東端部には多量の礫石が雑然と積み重なって出土しており、流路を塞いだ可能性がある。断面形は箱薬研状を呈するが、東側は急角度で立ち上がっている。上端幅約１m、下端幅約20cm、深さ約90cmを測る。屈曲部の先端は径約1.5mの半円形状に掘り込まれており、底面はほぼ平坦である。覆土の下半部は黒褐色土主体で自然堆積と思われるが、上半部はローム粘質土を主体として人為的に埋め込まれ、硬く突き固められていた。

各溝の新旧関係は、２Ｂ溝→２Ａ溝は明確であるが、１号溝と２Ａ号溝の新旧関係は判然としない。新旧



第128図　２Ａ号溝出土遺物実測図



第129図　出土遺構不明遺物実測図

何れの溝と相応するかは不明であるが、テラス状の中段の存在から同時に存在した可能性も考えられる。

中・近世出土遺物観察表

番号	器種	出土位置 残存状態	法量	胎土・色調	特徴	備考
1号溝						
1	磁器 皿、染付	フク土 体部下半～底部	底：4.6	白色 硬質 釉は青味がかる。	見込蛇目となり、釉掻落あり。白磁釉、呉須は山呉須。くらわんか皿。	伊万里系 18C前半
2	陶器 皿	フク土 ⅓	口：12.0 底：6.8 高：2.2	灰白色 軟質 白色	釉は志野釉を全面に施す。 貫入を生ずる。	美濃焼 17C
3	陶器 碗	フク土 底部完存	底：4.8	灰白色 軟質	釉は暗褐色の鉄釉。 底部外面にも施釉。	美濃焼 17・18C
4	陶器 碗	フク土 底部完存	底：4.4	夾雑鉱物多い。にぶい黄橙色。比較的硬質。	釉は暗褐色の鉄釉、外面は露胎。釉は厚い。	不詳 17・18C
5	陶器 碗	フク土 体～口縁部⅙	口：(11.4)	灰白色。 軟質。 釉は黒褐色。	天目形碗。飴釉。 内外面に施釉。	不詳 17・18C
6	陶器 筒物	フク土 破片	底：(16.0)	夾雑鉱物含む。灰白色。軟質	釉は鉄錆色の鉄釉。 体部は下端～底部は露胎。	美濃 17・18C
7	陶器 片口	フク土 片口破片		灰色。 比較的硬質 釉はオリーブ色	飴釉。 内、外面に施釉。 片口先端は肥厚する。	不詳 18C
8	軟質陶器 内耳盤形	フク土 破片	口：(34.0) 底：(31.0) 高：4.8	細砂。断面灰黄色 中央部黒色。軟質。 暗褐色	体部外面下方に指などによる押圧痕あり。底面にちぢれ痕あり、それらを除いた個所は横撫。	在地 17・18C
9	陶器 焼締擂鉢	底部 ⅕	口：(38.0) 底：14.8 高：(14.5)	夾雑鉱物多い。 硬質。にぶい黄橙～にぶい赤褐色。	見込に円圏をなす卸目、体部に7条を一単位とした卸目あり。口縁部は断面形、三角を呈す。	常滑 17・18C
2号溝						
1	陶器 皿	フク土 ⅕	口：(12.0)	灰色 硬質 釉はオリーブ色	灰釉で施釉、外面下半に露胎あり。	瀬戸 16・17C
2	陶器 皿	フク土 ⅙	口：(14.2)	黒色。 比較的硬質。 釉は黄緑色。	灰釉を施釉、外面下半に露胎あり。 釉は白味がかる。	瀬戸・美濃 16・17C
3	陶器 碗	フク土 ¼	口：(10.2)	灰色 軟質	暗黒褐色の鉄釉を施し、露胎は酸化する。 釉は厚く施釉される。	瀬戸 17・18C
4	陶器 碗	フク土 破片	口：(10.1)	灰白色 軟質 釉は黒褐色。	内外面に施釉	美濃 17・18C

番号	器種	出土位置 残存状態	法量	胎土・色調	特徴	備考
5	陶器 碗	フク土 ¼	底：　6.0	灰白色 軟質 釉は暗褐、黒褐色。	鉄釉。外面で下半に露胎あり。	美濃 17・18C
6	陶器 茶入	フク土 破片		灰白色 軟質 釉は暗褐色。	内外面に施釉。飴釉。	美濃 17・18C
7	陶器 香炉	フク土 ¼	口：14.0	灰白色 軟質 釉は黒褐色	轆轤目が内、外に発達する。外面および内面口縁直下に施釉。内面露胎となり、酸化気味。	瀬戸 17・18C
8	陶器 焼締鉢	フク土 破片		白色鉱物多い。 灰色。硬質。 にぶい赤褐色。	内面に擦痕あり。底面に砂付着。全体に酸化気味の色調を呈す。	常滑 17・18C
9	軟質陶器 内耳盤形	フク土 破片		細砂、赤褐色粒。 灰色。軟質	底面にちぢれ痕あり。立上り下部に爪形の押圧痕あり。上方は内、外ともに横撫。体部に紐作痕あり。	在地 17・18C
10	軟質陶器 内耳盤形	フク土低位 破片	口：(30.2) 底：(27.6) 高：(6.0)	細砂、赤褐色粒。 灰白色。軟質、黒褐色	底部に接する個所が微妙に残る。体部立上り上方および内面に横撫、外面下方に指などによる押圧痕あり。	在地 17・18C
11	軟質陶器 内耳盤形	フク土低位 破片	口：(30.2) 底：(26.2) 高：(5.7)	細砂、赤褐色粒。 にぶい赤褐～灰色。灰褐色～黒褐色。	底部、わずかに遺存。体部立上り上方および内面に横撫、外面下方に指などによる押圧痕あり。体部上半と下半との間にゆるやかな段差あり。	在地 17・18C
12	軟質陶器 内耳鍋	フク土低位 ⅛	口：(34.2)	細砂、赤褐色粒。 灰白色。軟質、褐灰～黒褐色。	体部外面に紐作痕、指などによる押圧痕あり。内面および外面口縁部周辺に横撫あり。体部と口縁部の間が屈曲し、ゆるやかな段差あり。	在地 17C後～18C前半

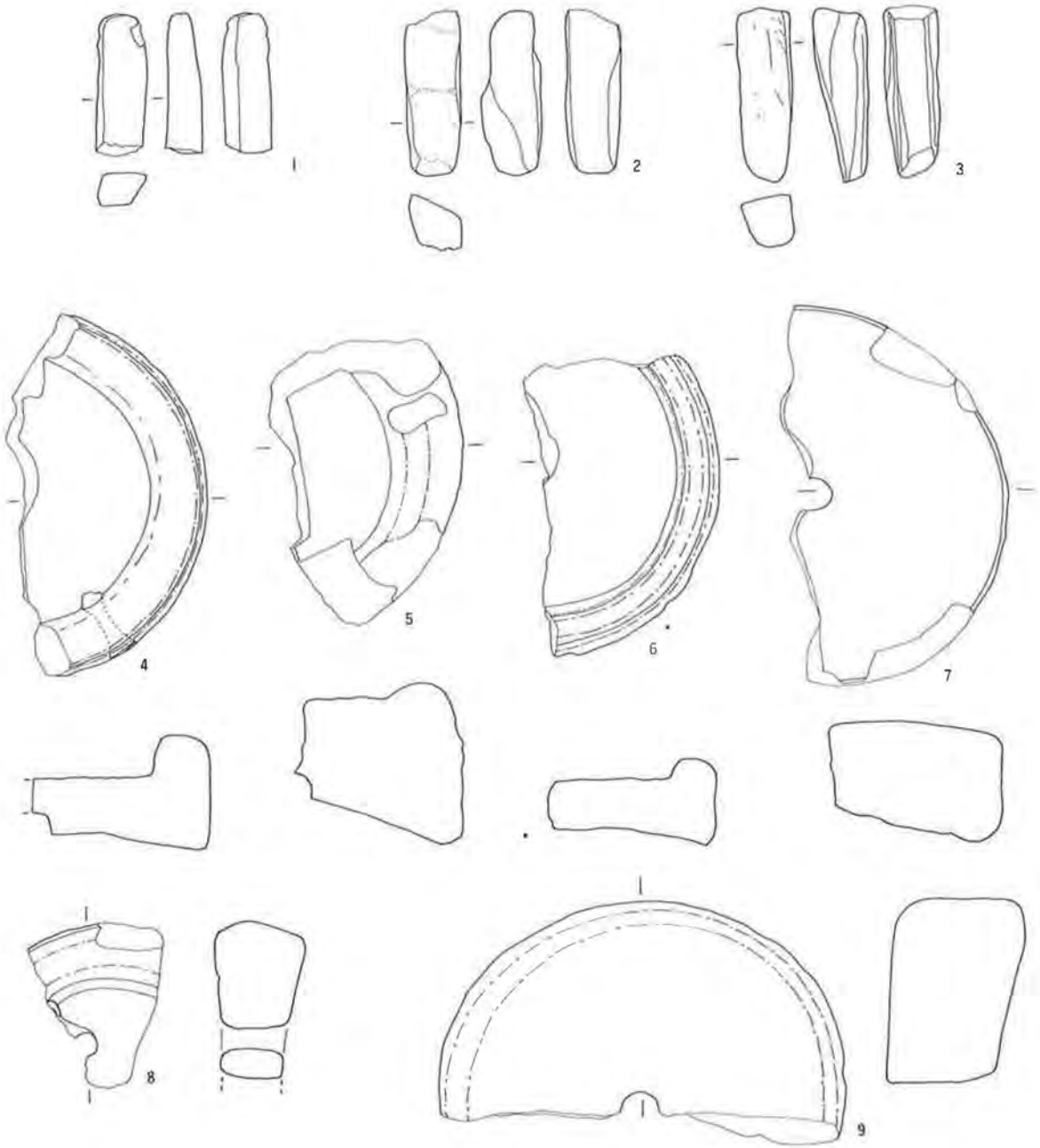
遺構外出土遺物（出土遺構不明）

1	磁器 皿 染付	⅙	底：(5.1)	白色 硬質 釉は青味帯びる。	内・外面に白磁釉を施し、内面に草花文、二重圏線、外面に草文と二重圏線を呉須で描く。染付は淡く沈んだ青色。高台に砂付着。釉は生掛。	景徳鎮窯系 16C後半
2	土師質土器 皿	½	口：11.0 底：7.2 高：2.7	細砂粒。 軟質 にぶい橙色	底面に糸切りあり。左回転ロクロ成整形。器種は厚い。体部中位外面に弱い稜あり。	在地 13Cか18・19C
3	陶器 碗	½	底：4.3	夾雑鉱物少量。 灰色。軟質 釉は暗黒褐色	天目下半露胎となる。轆轤右回り。 鉄釉を施釉。	瀬戸、美濃 16・17C
4	陶器 碗	底部完存	底：6.4	淡黄白色。 軟質 釉は暗褐色	釉は飴釉で高台内面にも薄く施釉。	美濃 18C

1、2A号溝出土石製品

砥石1・2と石臼4～7は1号溝出土遺物である。何れも底部の礫石に混った状態で出土している。

砥石3と石臼8・9は2A号溝出土遺物である。8は流路中の石群に混って出土した。9は石積みの東端部に構築材として使われていた。



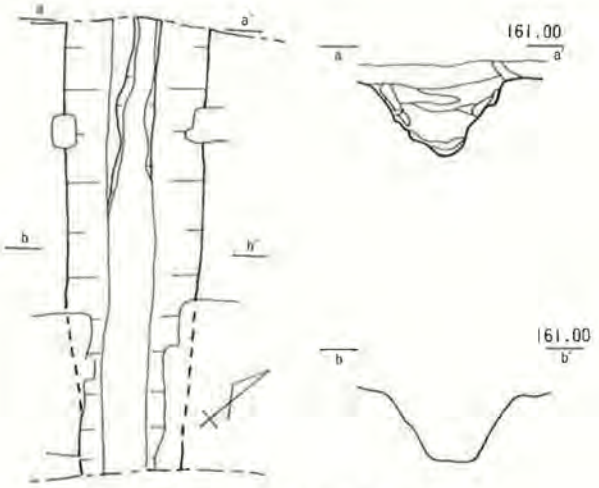
第130図　1、2A号溝出土砥石、石臼実測図

0（砥石）1：4　10cm
0（石臼）1：6　20cm

3 号 溝

調査区南端に位置する。走行は１号溝とほぼ同じである。重複する遺構はないが、東半部は攪乱が激しい。

上端幅約1.6m、下端幅約50cmで深さ約70cmを測る。断面形は逆台形状を呈する。底面には弱い流水痕が認められる。覆土は軽石を含む黒褐色土で遺物は出土していない。

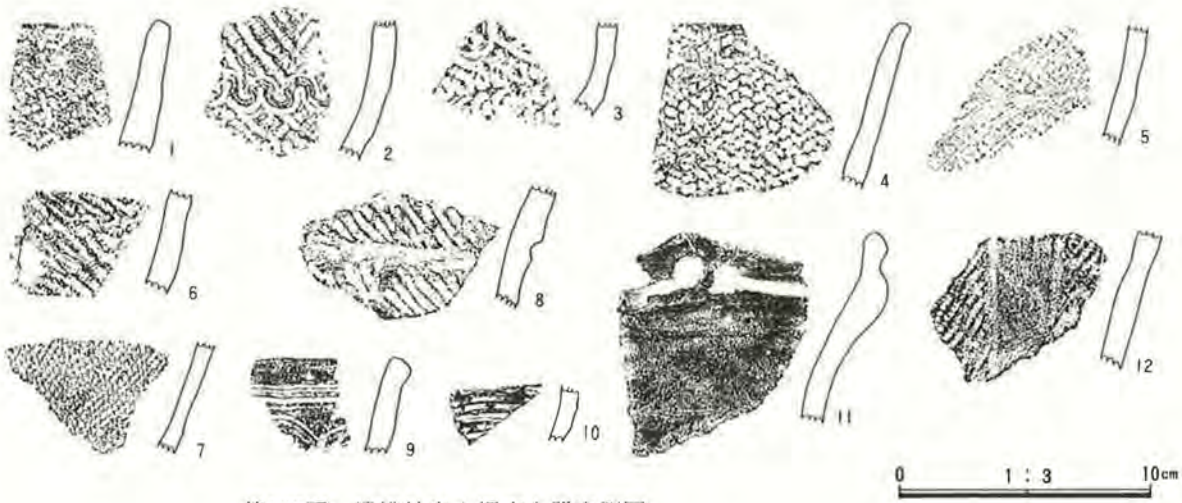


第131図　３号溝実測図

(3)　遺構外出土遺物（縄文）

掲載したものは縄文土器片だけであるが、このほかに奈良、平安時代の土師器、須恵器片も出土している。

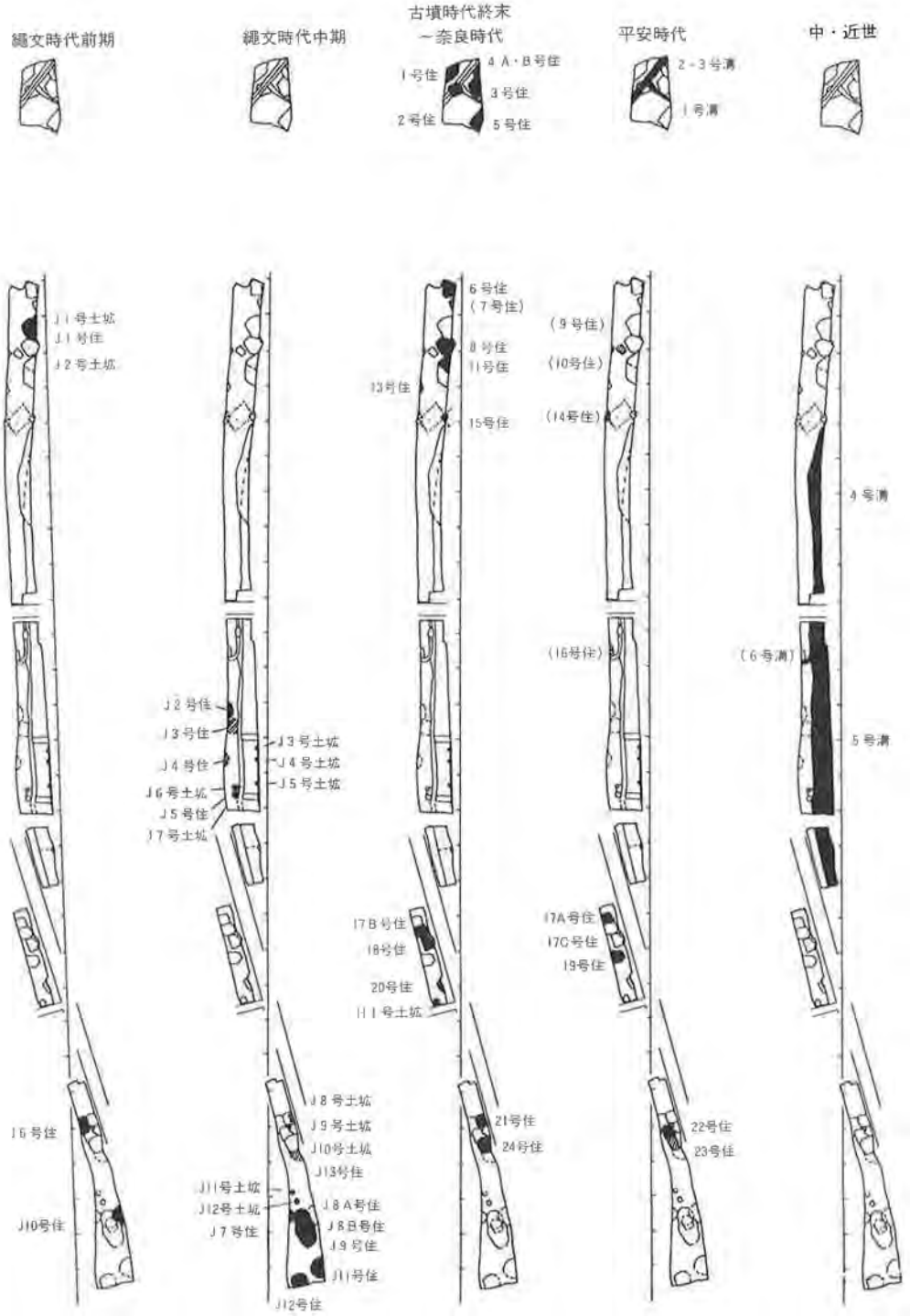
１は口縁部片で原体不明である。２はＲＬ－ＬＲ羽状縄文上にコンパス文を施す。３はループ縄文にコンパス文を付す。４は口縁部片で組み紐を施文している。５は附加縄第２種で羽状に施文するか？　６はＬＲ縄文を縦に施す。７は多縄ＲＬか？内面に丁寧なミガキが施される。８は無節Ｒで微隆起状に段を形成している。９は口縁部片で口縁部が肥厚し沈線で施文する。10は太い沈線を平行施文する。11は小波状を呈する深鉢の波頂部片で、口縁部直下に１条の太い沈線を巡らせる。波頂部直下には円文が陰刻されている。地文は無文で内外ともに丁寧なミガキが施される。12は胴部片でＬＲ縄文を縦位に施文し、無文の懸垂帯を配する。１～６、８は胎土に繊維を含む。多少、細粗の差はあれ全ての土器片が砂粒を含む。12は粗砂を含み、10は白色粒、11は黒色鉱物を含む。１はにぶい褐色、２・３・５・７・11・12はにぶい橙色、４はにぶい黄橙色、６は褐色、８・10はにぶい赤褐色、９は淡黄色を呈する。



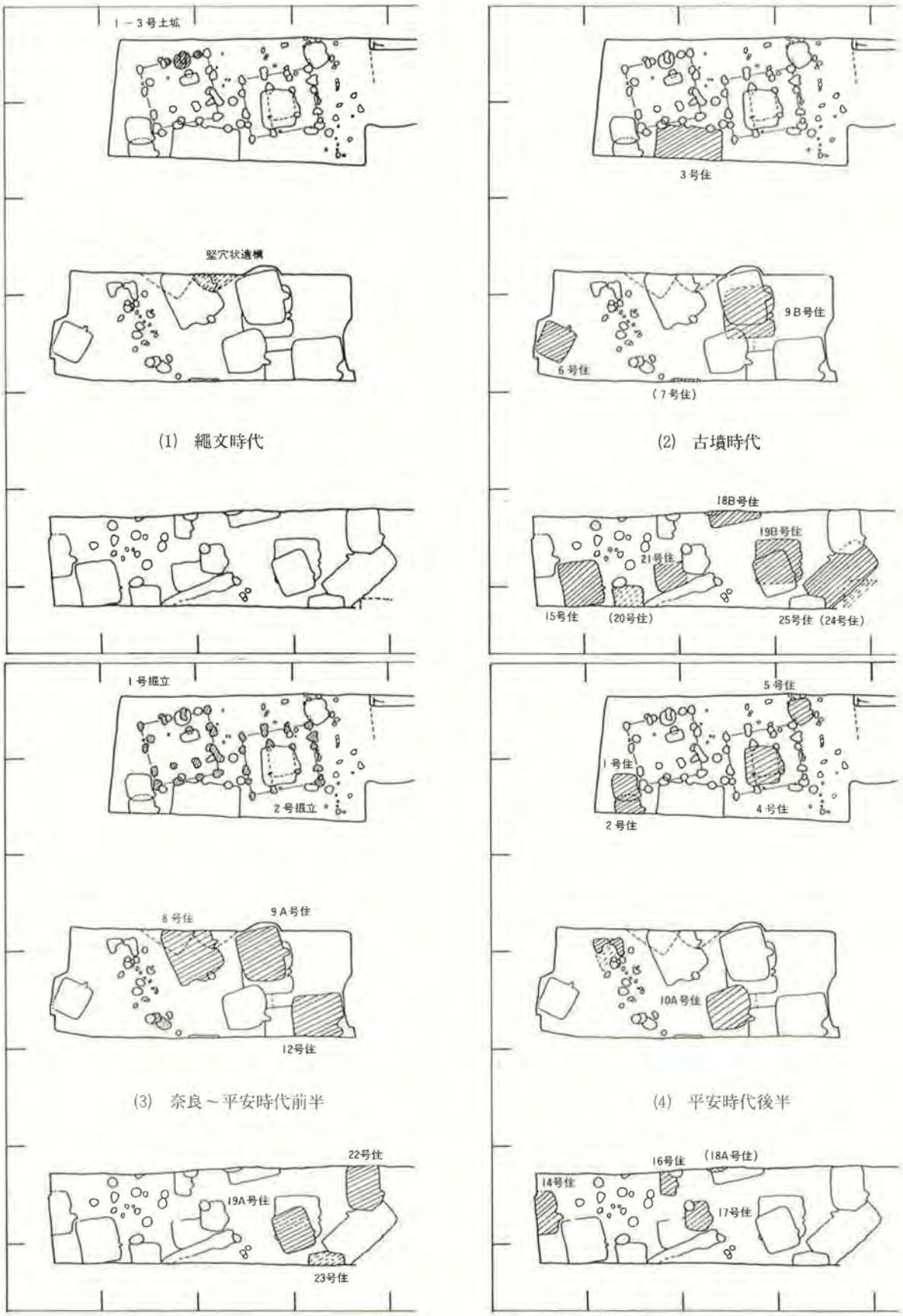
第132図　遺構外出土縄文土器実測図

Ⅵ　まとめにかえて

本来ならば発掘調査の成果のまとめや問題点について記述するべきであるが、十分な整理を行う時間的な余裕がなく、又、紙数も尽きたので、最後に向吹張遺跡と岩之下遺跡の遺構変遷図を掲載してまとめに替えたい。



第133図　向吹張遺跡遺構変遷図



第134図 岩元下遺跡遺構変遷図

写 真 図 版

1．A区全景（北から）

2．B区全景（北から）

4．C・D区全景（南から）

3．B区北半部（南から）

5．E区全景（北から）

6．F区全景（北から）

7．F区南半部(縄文時代遺構群)

１．Ｊ１号住居址全景（西から）

２．同左遺物出土状態（西から）

３．Ｊ６号住居址全景（西から）

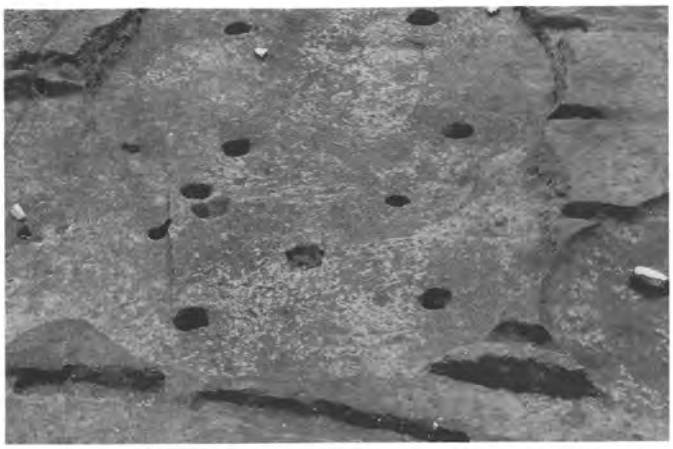
４．同左礫出土状態（北から）

５．Ｊ10号住居址全景（北から）

６．同左炉（北から）

７．Ｊ７号住居址全景（西から）

８．Ｊ12号住居址全景（北から）



1．J8A・B号住居址全景（北から）

2．J9号住居址全景（北西から）

3．J8A・B、J9号住居址遺物出土状態

4．J8A号住遺物出土状態（南から）

5．同4．（東から）

6．同左（東から）

7．J8A号住居址炉（南から）

8．J9号住居址炉（北から）

１．Ｊ11号住居址（西から）

２．同左炉（南から）

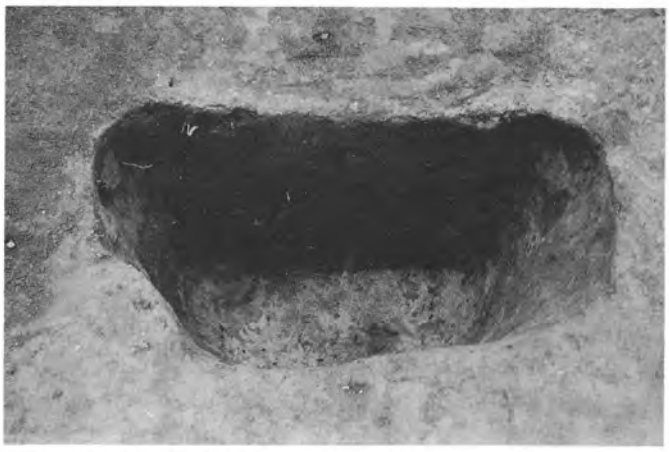
３．Ｊ13号住居址炉（南から）

４．同左土層断面（北から）

５．Ｊ２号土坑（北から）

６．Ｊ10号土坑（西から）

７．Ｊ５号土坑（北から）



８．Ｊ11号土坑（南から）

1．1号住居址（北から）

2．2号住居址（西から）

3．8号住居址（西から）

4．11号住居址（西から）

5．13号住居址（東から）

6．同上遺物近接（北から）

7．14号住居址（東から）

8．15号住居址（西から）

1．17C号住居址（西から）

2．同左遺物出土状態（南から）

3．17B号住居址（西から）

4．同左遺物出土状態（西から）

5．18号住居址（西から）

6．19号住居址（東から）

7．21号住居址（西から）

8．同左遺物出土状態（南から）

1．22号住居址（西から）

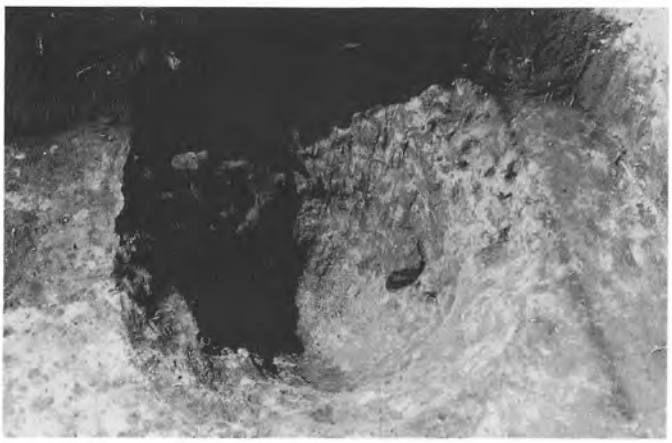
2．同左カマド（西から）

3．同上遺物出土状態（西から）

4．23号住居址（西から）

5．24号住居址（西から）

6．1号掘立柱建物址（西から）



7．1号土坑（北から）

8．B区ピット（南から）

１．２・３号溝（東から）

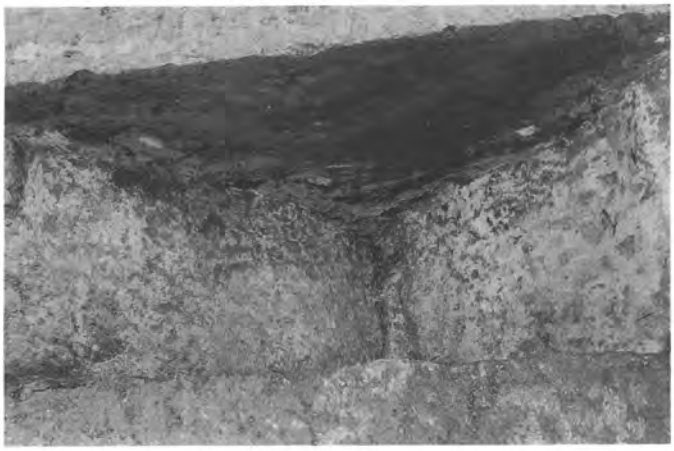
２．３号溝円礫出土状態（西から）

３．４号溝

４．５号溝覆土上層ローム堆積状態（西から）

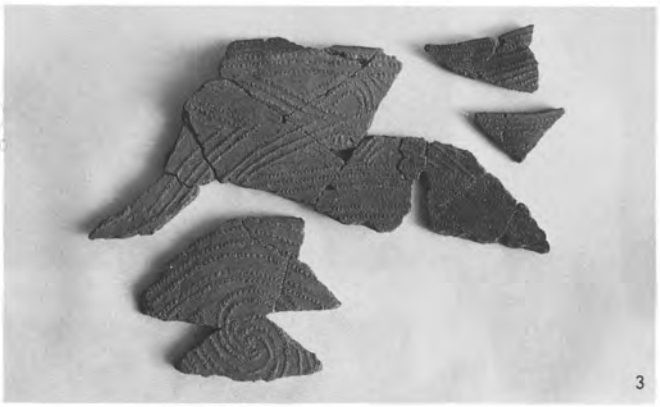
５．５号溝北トレンチ土層堆積状態（南から）

６．同左南トレンチ土層堆積状態（南から）



７．同上（南から）

８．同上（南から）



J 6 号住居址出土遺物

J 10号住居址出土遺物

J 10、J 7、J 12、J 8 A号住居址出土遺物

J8A住-9

J8A住-4

J8A住-11　J8A住-10

J8A住-8

J8B住-1

J9住-1

J8A住

J8A住

J8B住

J8B・J9住混

J8B・J9住混

J8A・B、J9号住居址出土遺物

J 11住、J 12住、J 2土、J 5土、J 10土出土遺物、及び遺構出土石器

2住-2

2住-1

8住-2

8住-3

17b住-2

18住-1

17C住-1

17b住-3

18住-3

22住-1

22住-2

22住-3

23・24住-4

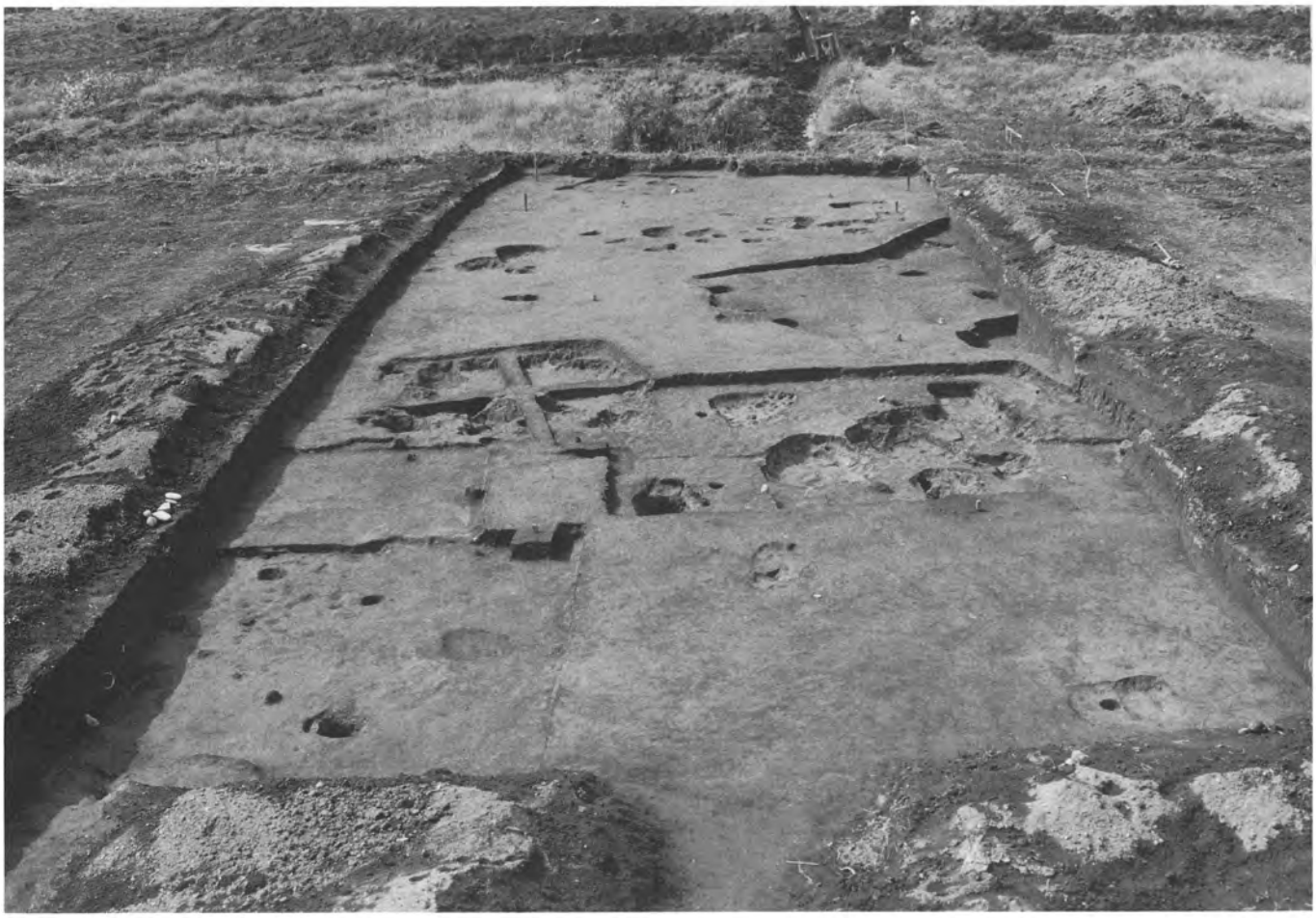
23・24住-2

E区遺構外

E区遺構外

奈良・平安時代、中・近世出土遺物

１．北区西半部（東から）



２．中区全景（東から）

1．南区全景

2．J 2号土坑

3．J 3号土坑

4．3号住居址（西から）

5．同左遺物出土状態（西から）

1．6号住居址（南から）

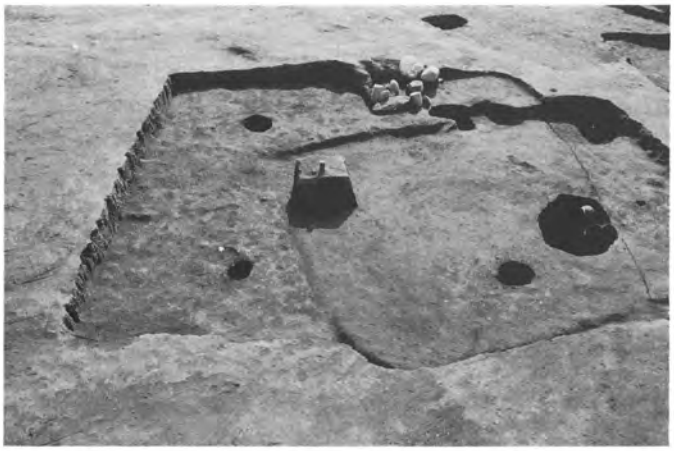
2．9Ｂ号住居址（南から）

3．15号住居址（西から）

4．9Ｂ号住居址貯蔵穴（東から）

5．同上カマド（西から）

6．同左（西から）



7．19Ｂ号住居址（西から）

8．同左貯蔵穴（南から）

1．21号住居址(手前)（西から）

2．25号住居址（東から）

3．1・2号住居址（西から）

4．1号住居址カマド（西から）

5．4号住居址（西から）

6．同左カマド遺物出土状態（西から）

7．5号住居址（西から）

8．同左遺物出土状態（西から）

1．8号住居址（北から）

2．同左遺物近接（東から）

3．同上遺物出土状態（西から）

4．同左（北から）

5．9Ａ号住居址（西から）

6．同左遺物近接（西から）

7．10Ａ号住居址（西から）

8．11･12号住居址（西から）

1．14号住居址（東から）

2．同左カマド（西から）

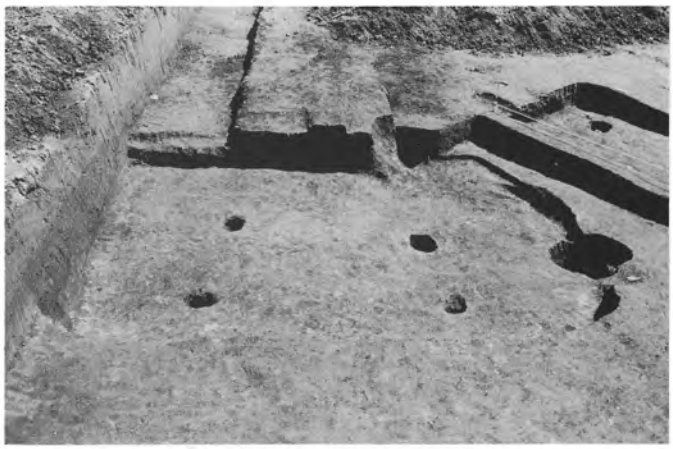
3．16号住居址（西から）

4．17号住居址（北から）

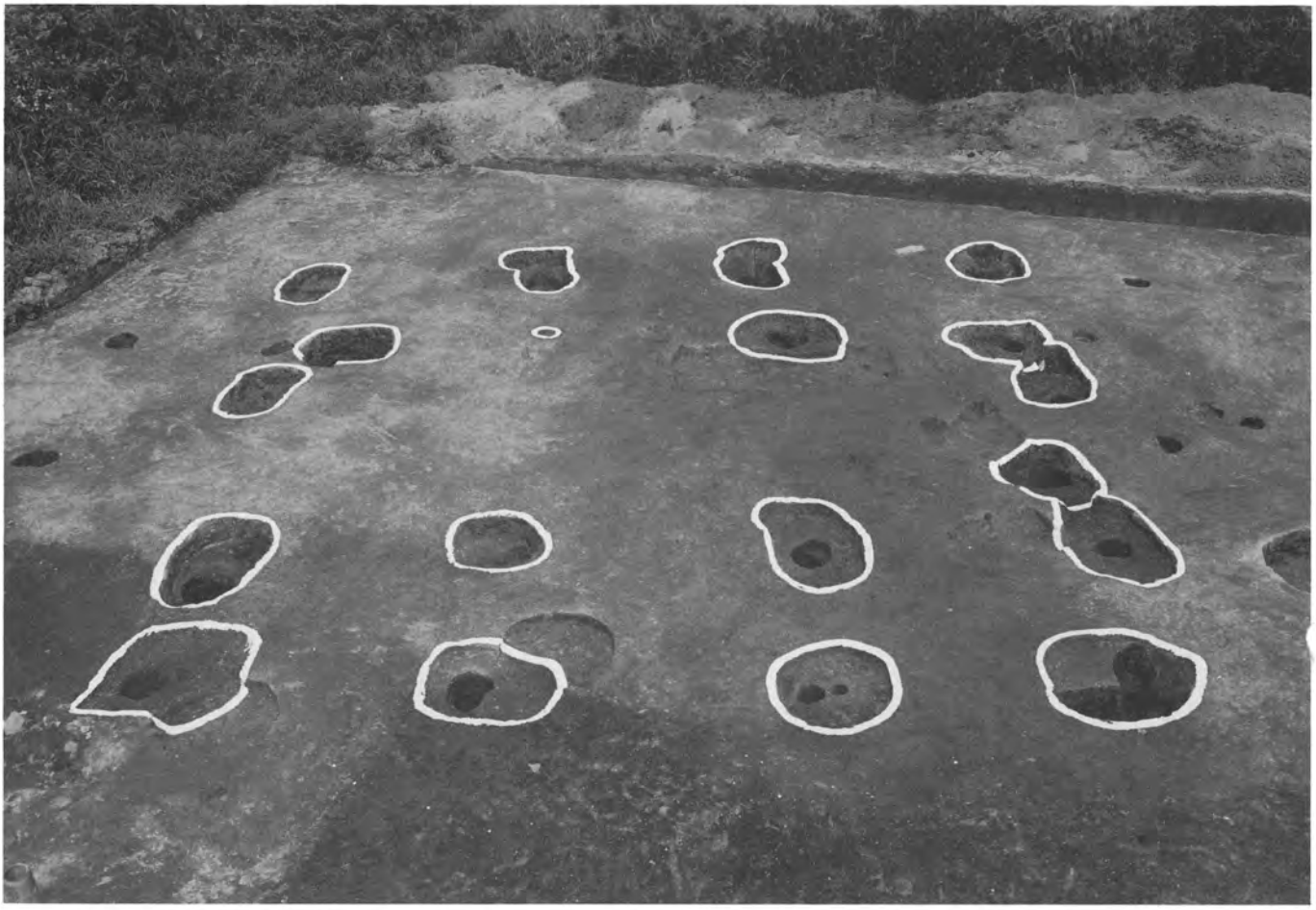
5．19A号住居址（西から）

6．20号住居址（北から）

7．22号住居址（北から）



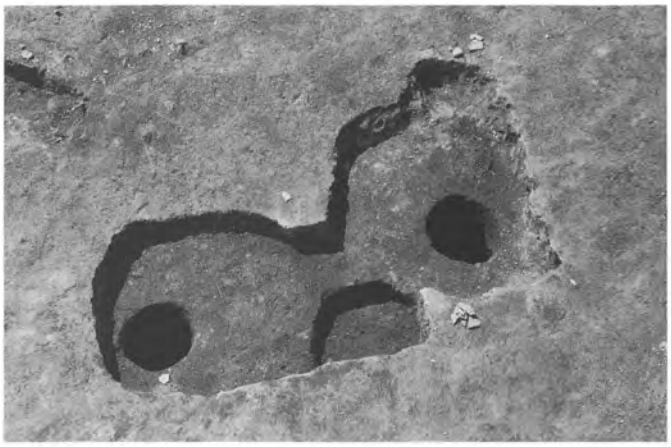
8．23号住居址（西から）



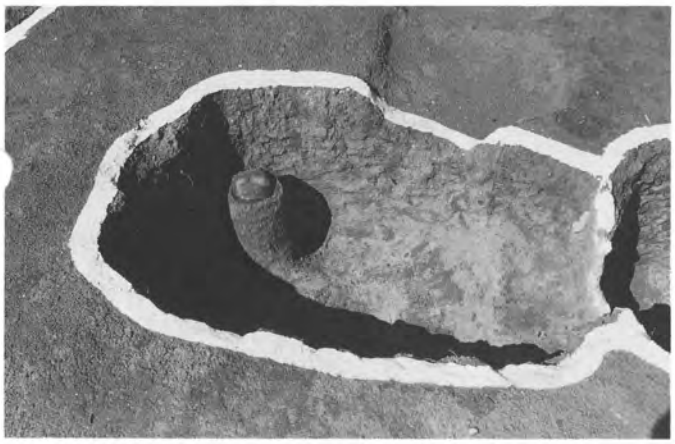
1．1号掘立柱建物址（南から）

2．2号掘立柱建物址（南から）

1．1号掘立柱穴掘方（南から）



2．同左 P_9、P_{12}



3．同上 P_{17}遺物出土状態

4．土坑（P62～P64）（南から）

5．ピット（P65）遺物出土状態（北から）

6．ピット（P67）遺物出土状態（北から）

7．北区東半部（隠れ谷）土層（南から）

8．作業風景

3住-1

3住-2

3住-5

3住-4

3住-8

9B住-5

9B住-1

9B住-2

9B住-4

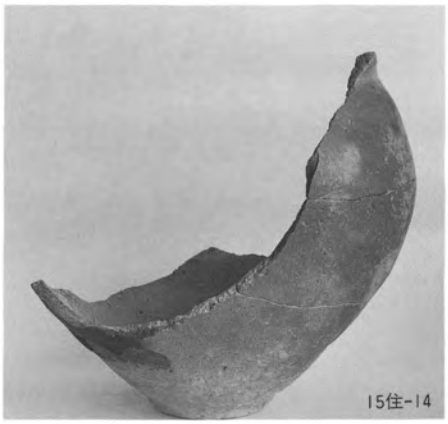
15住-1

15住-7

15住-5

15住-3

15住-13


15住-14

15住-4

3、9B、15号住居址出土遺物

15住-8

15住-9

19B住-2

19B住-4

1.2住-2

15住-11

19B住-3

19B住-7

1.2住-1

1.2住-4

15住-12

19B住-1

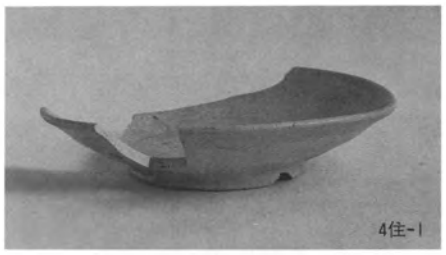
19B住-8

1.2住-3

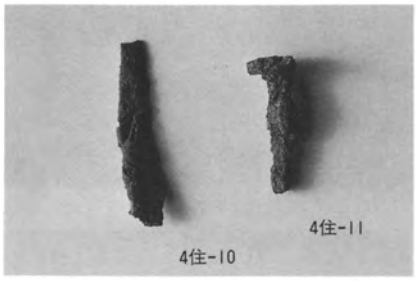
1.2住-5

15、19B、1・2号住居址出土遺物

4住-5


4住-1

4住-2


4住-11
4住-10

5住-1

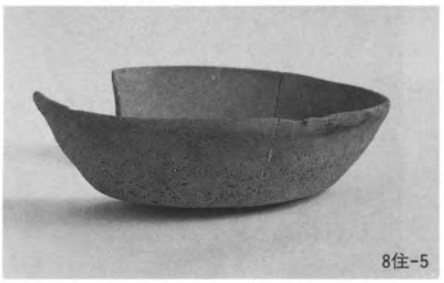
5住-3

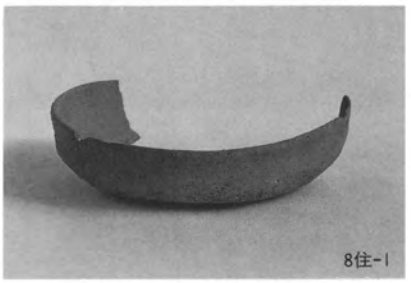
5住-2

5住-6

5住-7

5住-4

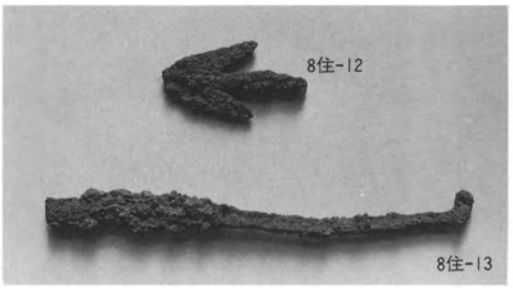

8住-5


8住-1

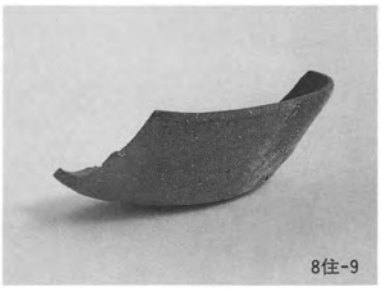
8住-10

8住-7

8住-2


8住-12
8住-13

8住-6


8住-9

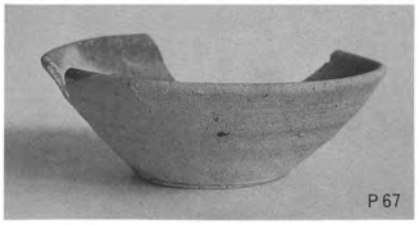
4・5・8号住居址出土遺物

9住-9

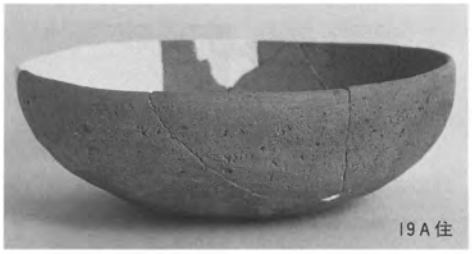
9住-7

16住
9住-14

P65

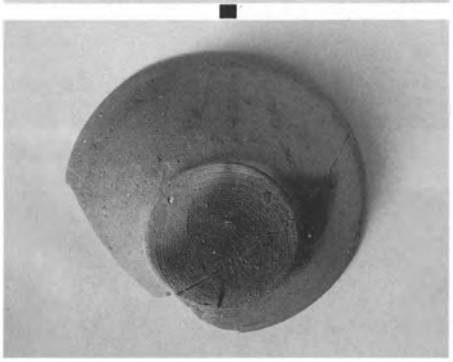

P67

9住-13


19A住

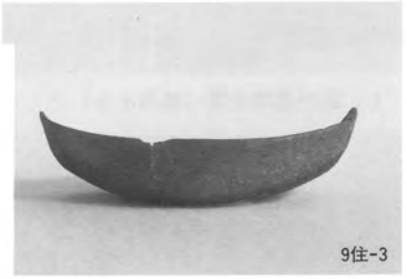
14住-7

P65



P93

9住-4


9住-3

14住-4

P65

遺構外

9、14、16、19A号住居址、ピット、遺構外出土遺物

1．田中遺跡全景（北西から）

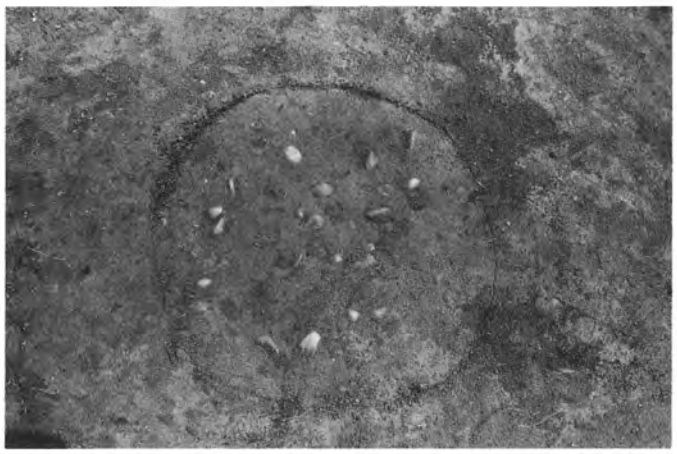
2．1号住居址（北から）

3．2号住居址（北から）

4．同左遺物出土状態（南から）

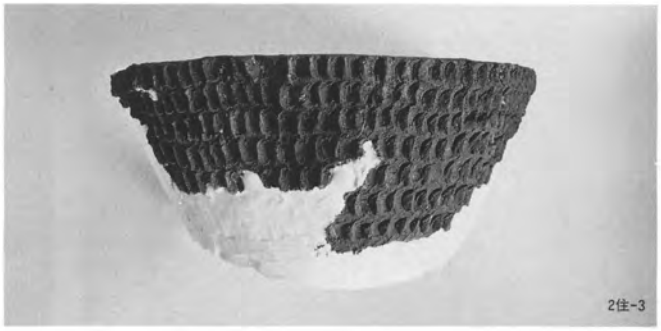
5．1号配石遺構（南から）

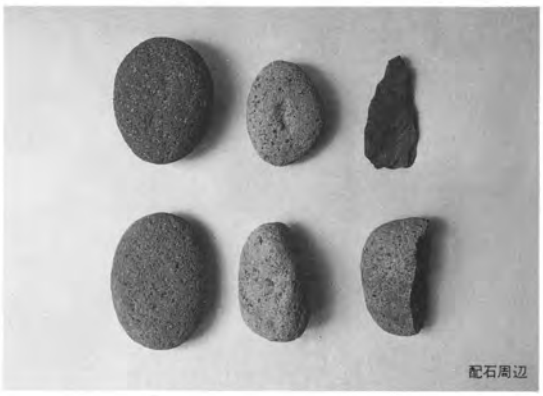
6．6号配石遺構（西から）



7．2号土坑(集石)検出状況（北から）

8．1号土坑セクション





田中遺跡出土遺物

1．寄居遺跡全景（北東から）

2．1号溝（北西から）

3．1号溝石積（東から）

4．1号溝石臼出土状況

5．2A・B号溝（北西から）

6．2A・B号溝石積（北東から）

7．2A・B号溝石積（南東から）

8．3号溝（北から）

1．1号溝出土土器（内面）

2．左同（外面）

3．2A号溝出土土器

4．左同

5．1号溝出土石臼(上臼上面)

6．左同(上臼下面)

7．1・2A号溝出土石臼(下臼上面)

8．左同（下臼下面）

正誤表

		誤	正
例言			
5．調査組織		主事	主任
Ⅱ　向吹張遺跡			
P１２	遺構配置図	Ｊｒ住	Ｊ１住
P５３		１７ｂ号住居址	１７Ｂ号

Ⅲ　岩之下遺跡

ページ	誤	正
P６６	３号住居址（遺物観察表P７１）	P７３
P６７	６号住居址（遺物観察表P７２）	P７４
P６８	９Ｂ号住居址（遺物観察表P７２）	P７４
P６９	１５号住居址（遺物P６８、 観察表P７２、７３）	P７０ P７４・７５
P６９	19B号住居址（観察表P７３、７４）	P７５・７６
P７２	２５号住居址（観察表P７４）	P７６
P７６	1、2号住居址（観察表P８５、８６）	P８８・８９
P７８	４号住居址（ 観察表P８７）	P８９・９０
P７９	５号住居址（観察表P８８）	P９０
P７９	８号住居址（観察表P８８・８９）	P９０・９１
P８０	9A号住居址（観察表P８９・９０）	P９１・９２
P８１	１２号住居址（観察表P９０）	P９２
P８２	14号住居址（観察表P９０・９１）	P９２・９３
P８３	１７号住居址（観察表P９１）	P９３
P８４	１９Ａ号住居址（観察表P９１）	P９３
P８５	１号掘立柱建物址（観察表P91・92）	P９３・９４
P８７	ピット・土壙 ――――	（観察表P94）

Ⅵ　まとめにかえて

P１１６	岩元下遺跡遺構変遷図	岩之下遺跡

富士見遺跡群　昭和60・61年度県営圃場整備事業富士見地区に係わる埋蔵文化財発掘調査報告書

向吹張遺跡　岩之下遺跡
田中遺跡　寄居遺跡

昭和62年3月24日印刷
昭和62年3月25日発行

編集・発行／群馬県富士見村教育委員会
勢多郡富士見村大字田島866－1
電話（0272）88－6111

印刷／朝日印刷工業株式会社